
緋弾のアリア UNITY

出川 戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア UNITY

【Nコード】

N9197X

【作者名】

出川 戦

【あらすじ】

今回が初投稿になります、出川 戦です。どうぞよろしく願います。

あらすじは以下の通りです。

主人公、朱葉響哉は、東京武偵高付属中学を受験。しかし不合格となる。

そしてその3年後。響哉は東京武偵高強襲科の入学試験に挑んだ。

そこで彼の前に立ち塞がったのは、1人の学生服を着た試験官だった。

これは、物語のプロローグの、さらにそのプロローグ。長いストーリーの序章の序章が、始まる！

そして今。その運命づけられた序章が遂に廻り始めた！！

プロローグのプロローグの、さらにそのプロローグ（前書き）

はじめまして！出川 戦です！今回が初投稿になります。誤字や意味不明な箇所も多々あると思いますが、どうか温かい目で見てください。

プロローグのプロローグの、さらにそのプロローグ

今日、俺は高校の入試に行く。だが、希望する高校はただの高校じゃない。『武偵高』だ。

武偵高とは、武偵を養成する総合教育機関だ。

そして武偵は、凶悪化する犯罪に対抗して近年新設された国家資格で、その資格を持ち武偵免許を持つ者は武装を許可され、逮捕権を有するなど、警察のソレに準ずる活動ができる。

ただし、警察と決定的に違うのは、武偵は金で雇われて動くことで、武偵法で許されている範囲ならどんな仕事でもこなす。簡単に言えば『便利屋』だ。

そんな武偵は、よく見ず知らずの人から恨みを買ったりする。その活動から偏見を受けることも少なくない。

さらに、俺が今日受けようとしている学科は強襲科だ。アサルト

生存率は97.1%、つまり、100人に3人くらいは死んでいる学科なのだ。それは訓練中の事故死、クエスト任務の最中での殉学など、さまざまだ。ゆえに強襲科は、『明日無き学科』と呼ばれている。

俺は危険な武偵という職業の中でも、最も危険なその学科を受けようとしている。

それには理由がある。だが、その理由はまた次の機会にするとしよう。

まずは、目の前の入試。3年前は不合格だったが、今の俺なら大丈夫だ。あの時とは、決定的に違うのだから。

プロローグのプロローグの、さらにそのプロローグ（後書き）

主人公の説明をしておきます。

朱葉響哉

身長178cm、体重74?。ただし、体脂肪率は1桁。

東京武偵高強襲科のSランク武偵。だが彼は3年前、東京武偵高付属中学を幼馴染と共に受験し、彼1人が不合格となった。

その後、先に進んでしまった幼馴染に追いつくべく、東京武偵局鑑識科の父親に稽古をつけてもらい今に至る。

キンジ同様、人を惹きつけるカリスマ性のようなモノがあり、面倒な事は最小限に抑えたがるタイプ。

最近は深夜アニメに凝っていて、ライトノベルなんかも好き。

こんなカンジですかね。ちょっとした能力というか技術も持ち合わせていますが、それは次か、その次の話で明らかになります。

EXAMINATION 1（前書き）

緋弾のアリア UNITY 第2話です。

緋アリアを言っているわりにアリアが出てくるのが当分先なのですが、そこはご容赦ください。

さて、今回は響哉の入試の話です。響哉は無事合格できるのか・・・
・・・？

EXAMINATION 1

バスに揺られてやってきたのはレインボーブリッジの南に浮かぶ、東西500m、南北約2kmの人口浮島メガフロートの東京武偵高だ。当たり前だがここが試験会場だ。

俺は招集時間の15分前に到着したのだが、俺が来た時にはすでに百人近くの受験生が集まっていた。

筋骨隆々のゴリラみたいなヤツやヒョロすぎてこっちが心配するよくなヤツもいた。だが、そんなヤツらはどうでもよかった。

なぜなら、俺は今、3年前よりもはるかに緊張しているからだ。さらに、この場の空気が俺の精神を潰しにくる。

全員が、なんと言うか殺伐としているのだ。心臓が弱いヤツなら、今頃救急車で運ばれているだろう。

この中にも、世間一般で『天才』と呼ばれる者も何人かいるのだろう。その天才たちと競っていけるのか、俺はすでに、この空気に呑まれかけていた。

俺の番が来た。

強襲科の試験は、敷地内にある廃ビルに20人ほどの受験生を武装させて放り込み、その中で拘束し合うという一昔前ならPTAや教育委員会とかで大問題になるようなものだ。まあ、今ならそんなことはないが。

言ってみれば『実戦』だ。『実技』じゃないのがミソだな。

あと、廃ビルの中には試験官が何人が紛れ込んでるらしい。面倒くさいことこの上ない。

受験生に渡された銃は、『グロック17』だ。

軽口径で反動も小さく、装填数も17+1とそれなりに多い。武偵を志す者ならこれくらいは扱えなければならない代物だ。

ビルの一角に連れてこられ、ついに試験が始まった。緊張で汗ばんだ手でグロックを強く握りながら、俺は足音を殺して動き出した。

・・・・・・・・コン・・・・・・・・

微かに、物音が聞こえた。この先の階段からだ。俺の体に緊張が走る。

一度深呼吸してから、壁に背を向けながら歩き出す。

そして、角から飛び出し銃口を正面に向けた。

だが、俺の目の前には誰もいない．．．．ように見える。

だが、上に登る階段に積まれた瓦礫の山がある。多分あそこに隠れて不意打ちを仕掛けるつもりだろう。

だが、バレてしまつては不意打ちもクソもない。

「ツチ。向こうを捜すか．．．．」

わざと聞こえるように大きな舌打ちをし、これから向かう先を教えてやった。

俺は角の柱の陰に隠れ、息を殺してソイツを待ち構えた。緊張で口の中が乾ききつている。

ザリ．．．．ザッザッザ．．．．

砂を踏み分ける音が聞こえる。どうやらノコノコやってきたようだ。

「動くな！」

角を曲がつてきた瞬間、さっきのヤツの頭に銃口を向ける。彼は両手を頭に付き、銃を捨て大人しく捕まった。

これで、まず１人だ。あと１８人と試験官がいる。まだまだ先は長いな。

一つ深呼吸し、また俺は廃ビル内を散策し始めた。

すると、銃声が聞こえたのでそこに向かって早足で向かった。

そこに着く頃には戦闘は終わったらしく、勝った受験生が負けた受験生を捕まえようと意気揚々と縄を持って無防備な背中を俺に晒していた。

俺はグロックを構え、先程の勝者の後頭部に銃口をつきつけた。

「浮かれているところ申し訳ないが、銃を捨てて大人しくしてくれないか？」

ちよつと調子に乗ってきた俺の言葉にさっきまでの勝者は敗者へと移り変わり、三日天下どころか三分天下にもならず御縄を頂戴となった。さっきコイツに敗けた受験生はどうやら足に銃弾が掠めたようで、血が出ていたので一応応急処置はしておいた。衛生的に悪そうだからな、このビル。

その後そいつも拘束して俺は計3人を捕まえた事となった。気がつけば緊張は無くなり周りがよく見えるようになっていた。

そこからは、ちよつとした無双だった。

すぐに他の受験生16名の内13名を、奇襲や罠などで捕縛した（残り3名は誰かに捕まっていた）。そして、抜き打ちで潜り込んでいた教員も4名捕まえた。

正直、この試験は俺に有利すぎる。

俺は中学時代、武偵の父さんからある技術を教えてもらっている。技術と言えるのかは正直微妙だが。

それは、『観察』だ。周りをまんべんなく見渡し、そこから少しでも不自然な点などを見つけ、それに焦点を合わせるといって技術だ。父さんは昔は警視庁鑑識課で今は鑑識科^{レミア}なので、そこで磨き上げたモノなのだろう。

だが、俺はそれに加えてもう1つ付け足され、強化されている。

それが、『直観』。

去年までは『観察』で視た情報からしかできなかったのだが、今では『ただ視界に入るだけで』僅かな違和感を五感全てを使って文字通り『感じる』のだ。その的中率は、ほぼ100%だ。

そして、その感じた違和感から無意識に情報が頭に入ってくる。ちよつとした『未来予知』のようなモノだ。

だが、それもアバウトなものではない。『ここに誰がいる』程度の事しか解らないが、それだけ解れば十分だった。

この能力？を、俺は『第六感』と呼んでいる。漫画みたいな便利能力じゃないのがたまに傷だ。

だが、そのお陰で多くの受験生と試験官を無力化できた。この勢いで最後の1人も拘束したい。

そう考えている時だった。

カツ・・・カツ・・・カツ

足音が、俺のいる階に響いた。

誰かがこっちに向かって歩いてきているのだろう。それは間違いなく、最後の試験官。

すぐさま角に隠れてグロックの残弾を確認する。

よし！弾は全部入ってる。

足音がしなくなった。どこかに隠れているのか、それとも去ったのか。

確認のためにナイフを出してそれを鏡の代わりにし、様子を窺^{うかが}おうとした時だった。

タァン！ キイイン

銃声と、ナイフが弾かれた音。さっきのヤツは、拳銃で俺が僅かに出したナイフを撃つたのだ。

どんだけ高い技術を持ってるんだよアイツ・・・・・・・・・・。

だが、一瞬だがヤツの姿がナイフに映った。

着ていた服は、多分武偵高の制服。長髪だった。顔はよく見えなかった。

なんで学生が試験官をやってたんだよ。他のは教師だったのに。

ヤツの事は学生教官と呼ばうと決めた時だった。

……ゾクッ！

身体に寒気が走った。

それは、学生教官の視線と、殺気によるモノだった。ただ見られただけでここまで怖いものなのか！？

だが、そんな恐怖は長くは続かなかった。すぐに身体は慣れ、寒気は消えていた。

第六感が、逃げると告げてくる。だが、俺は逃げない。逃げたら負けになるから。

俺は、負けられない。負けてなんか、いられない！

柱の陰から飛び出し、グロックの9ミリパラベラムを4発撃つ。

これは牽制で、相手の動きを視るためのモノなのだが、学生教官は思いもつかなかった行動で俺の弾を避けた。

ターン キーイン

さっきのナイフの時と似た音が響く。俺は目の前の光景が理解できなかった。
だが、第六感がソレを教えてくれた。

学生教官は、俺の撃った『銃弾を撃った』のだ………！

T O B E C O N T I N U E D

EXAMINATION 1（後書き）

連続投稿です。

かなり長めに書いたつもりですが、思ったより短いですね。驚きました。

ところで、響哉と戦っている学生教官ですが、実は原作でかなり重要なキャラだったりします。もうお分かりだと思いますが。

実は彼、原作時間ではまだ20歳なんですよね。なので多分本当はいないんだろうとは思いますが、東京武偵高の生徒さんになってもらいました。そこは二次創作だからということをお願いします。彼の正体は次で明らかにします。

EXAMINATION 2 (前書き)

多分これで入試の話は終わりです。そして、学生教官の正体が明らかになり！

では、本編どうぞ。

EXAMINATION 2

可能なのだろうか。

銃弾を、拳銃で撃った銃弾で弾くという芸当が。

だが、信じなければならない。

目の前で、実際に起きた現象なのだから………！

俺はすぐさま瓦礫の山の陰に隠れ、学生教官の様子を窺う。だが、彼は隠れようとしなかった。

一度、バレないように銃口を隠しながら発砲してみた。だが、さっきと同じように彼の銃弾によって弾かれてしまう。

さっきのは多分、当たりそうだったのが1発だけだったからそれだ

け狙って撃ったのだろう。器用すぎるだろ。

あの銃は、コルト・ピースメーカーだ。今では博物館にでも飾つてあるような骨董品だが、アレで俺の銃弾を弾いているのは間違いない。現に銃口はこちらに向いている。

・・・・・・これでは埒が明かない。

こうなったら、アルカタで勝負を着けるべきか・・・・？
いや、彼は俺よりももっと厳しい訓練を積んでいる。いくら第六感があつても、身体がソレに追いつかず、反撃を受けてしまえば元も子もない。

事実、彼の格闘センスは未知数だが、俺より高いことは間違いないと考えて行動したほうがいいだろう。『武偵憲章7条 悲観論で備え、楽観論で行動せよ』の前半だ。

「いつまで隠れているつもりだ？」

学生教官が、不意に言葉を発した。まさか、戦闘中に話しかけられるなんて思ってもみなかった。

「そっちが出てこないなら、こっちから行くぞ・・・・・・！」

威圧的な低音でそう言った後、学生教官はダツと床を蹴るように走りだした。

さっきまであった俺と彼の距離は、およそ12m。それが、一瞬で

縮まり気がついたら俺の横まで来ていた。ものすごい瞬発力だ。

ピースメーカーの銃口を向けられる前に、俺は背面跳びのように後ろに跳び退く。

ダアン　ダアン！

学生教官の2発の銃声が響く。だが、その銃弾は空を切り、壁にめり込んだ。

ピースメーカーの反動の隙を衝くような形で、俺はグロックで学生教官の肘と肩を撃とうとする。

ここに当たれば痛みで銃を手放し、先の戦闘でこっちが有利になる。

だが彼はあたかもそれを読んでいたかのように身体を捻り、銃弾2発をかわす。そんなのアリかよ。

彼は右手のピースメーカーを腰のホルスターに入れながら、左手をポケットの中につっ込んだ。なにか武器を取り出すのだろう。第六感が警告してくる。

避けなければ………！

「詰めが甘い………！」

彼が取り出したのはバタフライ・ナイフだった。シャキンという金属音を出し、その緋色の刃をむき出しにする。

ソレによる攻撃が右肩にくると解っていた俺は、ナイフが突き出される瞬間に身体を左に倒す。

容赦の欠片も無い突きが、俺の肩があつた場所を通った。当たって

たらどうする気だったんだ、この教官・・・・・・・・。

学生教官はその端正な顔を驚愕の色に染め、見開いた目で俺を見ていた。

「これで終わりだ・・・・・・・・！」

グロックを彼の左肩に押し当て、トリガーを引こうとした。まあ、この人も俺の肩狙ってきたしいいよな？

ダアン！ パリン！

俺は容赦無くトリガーを引いた。だが、彼の肩には銃弾は当たらず、窓ガラスを貫通してあさつての方向に飛んで行った。

彼は、俺がトリガーを引く直前にグロックを殴り、射線を無理やりずらしたのだ！

俺はこれ以上この体位は危険だと判断し、腹に爪先で思いつき蹴りを喰らわせ、立ち上がって銃口を向けた。この間、僅か0.8秒。訓練のたまものだ。

「・・・・・・・・まさか、あの突きをかわすとは・・・・・・・・！」

学生教官の口元が歪んだ。なにがそんなに楽しいのか、俺には解らん。

「アンタこそ、あの一瞬で俺の拳銃から逃れるなんて、化け物か？」
そう言う俺の息は荒い。だが、向こうは平然としている。これが、格の違いってヤツか？

「化け物はないだろう。俺はお前と同じ、人間だ。今くらいの回避

は、鍛えられた人間なら造作もないことだ」

どこか嫌味なように彼は言った。だが、彼の言う通りだ。俺程度のヤツなんて、一瞬で殺してしまうこともできるヤツなんて、世界中探したら何百万何千万もいるだろう。

彼は、その内の1人にすぎないのだ。きつと。

「……………これからお前に見せる技は、『鍛えられた人間』が編み出した、究極の銃技だ。だが、それは決して視ることのできない銃技でもある。まさか、こんな入学試験でコレを使うことになろうとは思わなかった」

「……………？どういうことだ」

俺の言葉を聞き流し、学生教官はバタフライ・ナイフを収め、ポケットの中に入れた。

彼は、棒立ちしていた。まるで、『撃ってください』と言わんばかりに。

普通ならソレを挑発行為ととるだろう。だが、第六感警告してきた。彼は、『危険だ』と。

何かが来る。そう思うと身体は自然と硬直する。だが、ここからすぐに逃げなければいけなかった。

この、立ち位置から。

僅かに、学生教官の爪先が動いた。俺はその瞬間になってからようやく飛び退くことができた。
だが……………

ダン！

学生教官の真ん前に、カメラのフラッシュのようなモノが光り、銃声が聞こえた。そして、俺の腕に金属バットで殴られたような痛みが襲った。

「ぐあ！？」

間違いない。俺は今、撃たれた。

もし防弾アーマーが無かったら俺の腕は骨折しているだろう。今でもそう思えるほど痛い。

左手で撃たれた右腕を抑えながら、俺は彼を睨みつけた。俺の息はさらに荒くなっている。

「……………まさか、『不可視の銃弾^{インレシブル}』が視えたのか……………!?」
彼はさっきよりも目に見えて驚いていた。目は大きく見開き、その視線は真っすぐ俺に向けられている。

「視えてませんよ。『不可視』って自分でも言ってるじゃないですか」

荒い息のまま、俺は口元を歪めた。きっと今の俺の顔は悪役みたいになっているんだろうな。

「……………フツ。これは面白いヤツと会えた。たまにはこんな

仕事もやってみるものだな」

そう言いながら、彼は銃弾を中に投げ、ソレを取り出したピースメーカーの弾倉に入れた。

たしか、テレビで似たようなのを見たことがある。

あれはクイックリロードというテクニクだ。実際に見たのは初めてだ。元々リボルバーを使う武偵が少ないからというのもあるが。

だが彼はせっかく装填したピースメーカーをまたホルスターに入れてしまう。また『不可視の銃弾』^{インビジブル}が来るのだらう。

俺の推理はどうやらか的中したらしい。彼はまたさっきと同じような姿勢をとっている。多分、アレが構えなのだろう。

爪先が僅かに動いた。コレは不可視の銃弾の予備動作だ！^{インビジブル}

今度はさっきよりも早く反応でき、放たれた3発の銃弾は俺に当た
ることはなかった。

ソレを避けながら、俺はグロックで学生教官を狙い撃つ。だが、俺
の銃弾は不可視の銃弾により弾かれてしまった。^{インビジブル}

アレとコレは併用できるのかよ……。

さっき撃った銃弾は2発。始めに3発撃ったから向こうにはもう弾
は1発しか残っていない。

俺は3発の銃弾を続けて撃ち込む。

ダァン キキキイン

銃声とフラッシュは1回。だが、銃弾が弾かれた音は3回した。

う、ウソだろ……！！？

……野郎、1発の銃弾で3発の銃弾を弾きやがった！

始めに俺が撃った弾を弾き、その弾かれた弾で2発目を弾き、さらにその銃弾で最後に撃った銃弾を弾いたのか？自分で言ってるわけがわからなくなるぞ。

学生教官はクイックリロードで弾倉に弾を込めた。これで俺は残り4発。向こうは6発になってしまった。
マガジンの交換なんてやらせてくれる隙もないし、普通に撃ってもアイツには届かない。

なら、普通にやらなければいい。

ダッ！

俺はその場から駆け出し、学生教官の懐に潜り込もうとする。
被弾は覚悟していたが、彼はなぜか撃ってこなかった。

だが、今の俺にはそんな事どうだって構わない。

俺はまず1発、避けられることを前提で9ミリパラベラム弾を撃つ。案の定、彼はそれを避け、こっちに銃口を向けてくる。

だが、その距離は手を伸ばせば届く距離まで縮まった。

ガツツ ダァン！

彼の銃を持つ手を殴り、射線を逸らす。

俺がさつきやられたことを、そのまま返してやった。

右膝蹴りを鳩尾^{みぞおち}に喰らわせ、空中で身体を捻り、左足で回し蹴りする。

だが、その左足を当身の要領で掴まれてしまい、俺は投げ飛ばされた。

一体どんな筋肉してるんだ、コイツは………！

壁に強く背中を打ちつけて、俺は前のめりに倒れてしまった。すぐさま起き上がるうとするが、額に熱い物が当てられているのを感じた。

目の前には、学生教官が立っていた。その手に握られているピースメーカーの銃口は、俺の額に押しつけられている。

「………参りました」

俺は、そう言うしかなかった。

完敗だ。彼はほとんど息を切らしていない。その点俺はどうだ。持てる力のほぼ全てをぶつけたような感じだぞ。圧倒的すぎる。

学生教官はピースメーカーをホルスターに入れ、戦闘態勢を解除した。

「…………俺って、不合格ですか？」

「なんで、そう思うんだ？」

学生教官はケータイで誰かとメールしている。試験の結果を報告しているのだろうか。

「最後の近接戦。俺の実力じゃアンタには絶対に及ばないことは誰が見ても明らかだった。それでも無理して接近戦に持ち込んだのは、明らかな判断ミスです」

アレは、俺が勝負を焦ったからやってしまった行為だ。無理せず、撤退しておくのが正解だったと思う。それをつまらない意地を張って絶対に勝てない勝負に自分から持ち込んだのだ。実戦なら死んでもおかしくない。

「…………あのなあ、コレは入試だ。受験生の力量を測るのが目的なんだ。確かにお前の判断は間違っていたのかもしれない。だが、そのお陰で近接戦の強さが分かった。安心しろ。お前は合格だ」

その言葉を聞いた時、体から力が抜けて、俺は膝をついてしまった。

「俺が…………合格…………？」

「当たり前だ。お前を落としたら、今年の強襲科は超少数になってしまう。ランクは、そうだな…………俺の見立てだと、Sランクだな。最低でもAはある」

Sランク・・・強襲科のSランクは、たしか特殊部隊1個中隊と同等の戦力として評価されるんだよな。どうにも実感がわかない。

「あと、お前の名前は何だ？」

パンパンと制服についた埃を払いながら、学生教官は聞いてきた。

「俺は・・・・・・・・・・あかはきようぢ朱葉響哉」

「響哉か・・・・・・・・。覚えた。俺は遠山金一だ。入学式の日にもまた会おう」

そう言って学生教官・・・・・・・・金一さんはどこかへ行ってしまった。

俺も、彼の事は3日間は覚えていてやろう。

T O B E C O N T I N U E D

EXAMINATION 2 (後書き)

金一さんはローマ武偵高の留学から帰ってきたときに、聖書なんかの一説を口ずさむ人ですが、作者は聖書なんて読んだことはおろか触ったことすらありませんのでそこら辺は省略させてもらいます。この話では、金一さんは現在高3。キンジは中3となっております。響哉は今現在は中学生ですが、次の話から高1になります。高1つて今から思えば天国でしたよホント。

さて、これで入試は終わったので次からはいよいよ武偵高での生活が始まります。響哉は一体どんな銃を使うんでしょうね。相部屋の人の名前を考えないと。

戦兄弟（前書き）

4話目です。

ようやく武偵高の話です。

戦兄弟

4月の上旬、俺は武偵高の入学式に出席していた。

つまり、合格したのだ。武偵高に。それも、あのとき金一さんが言ったように、Sランクで。

3日以上経ってもあの人の名前を覚えていた自分の記憶力にも驚いたが、やはりその衝撃は大きかった。

そして今、俺はその武偵高の防弾制服に身を包み、爺さんの形見の自動式拳銃『ブレン・テン』を携え、火薬の臭いからして本来は射撃訓練か戦闘訓練をしているのであろうこの体育館にいる。

正直、今ここに立っている事が嬉しいと思える。ここがゴールなのではないか。もう俺は十分満たされたのではないかとつついっ考えるてしまう。

だが、それは違う。

今いるここはスタートでしかない。つまり、俺はそのスタート地点にやって来ただけにすぎないのだ。

自惚れてはいけない。そんなヤツから死んでいくのだ。武偵とい職業は。

入学式と武偵高の説明会が終って外に出ると、目の前に広がっていたのは桜並木だった。

日本で多く見られる種類のソメイヨシノは、日露戦争時代に日本が『この桜の花の様に美しく散ってこい』という意を込めて日本中に埋めまくったそうだ。このソメイヨシノのDNAを辿ると、1本の原種に行き着くらしい。つまり、全部クローンのような物なのだ。ちなみにこのソメイヨシノ、枯れる時は日本中の全ての木が枯れる。中2の時先生が言っていた。

そんな至極どうでもいいいうんちくを思い出してしまい、若干気分が萎えた俺の前にいたのは、入試の時に闘った学生教官こと遠山金一先輩だった。

「こんな所で会うとは、奇遇だな」

金一さんは桜の木を見上げながらそう言った。桜はもう散り始めており、花びらが宙をひらひらと舞っている。アイドルと偽って一般人にアンケートしても全く疑われそうにない整った顔立ちをしている金一さんがその中にいると、映画か写真集の撮影のようには見えなくなる。

「さっきまでそこで1年の説明会があったんですから、当然じゃないですか。何か用ですか……」

この人がここにいるのは、ここに何か用があったのか俺か他の生徒に用があったかのどちらかだ。

実力的にSランクの彼が、春の陽気に誘われてこんな場所に来るわけがない。

「……本当、お前は容量がいい。その通り、俺はお前に用があつて来た」

金一さんは一度言葉を止めた。

その時、強い風が吹き、桜吹雪が舞い散った。

「……響哉。俺の、『^{アミコ}戦弟』になれ！」

……突然何を言い出すんだこの人。

「え〜と……なんで、俺なんですか？」

「お前と入試で闘った時、俺は思ったんだ。コイツは、絶対に強くなるとな」

「………？つまり、自分の手で俺を鍛えたい、って事ですか？」

もしそうならこの人どんな神経してんだよ。現実になんな人がいるなんて信じたくないぞ。

「まあ、半分はそうだな。もう半分はお前にやってもらいたい事があるからなんだが……」

「要するに、俺を強くして後で自分の面倒事を俺に押し付けるって言いたいんですね。だったらそんなのお断りですよ」

俺は金一さんの横を通り、さっさとこの場から去ろうとしたのだが・
・
・
・
・

「そうではない」

チャキッ

どうやら拳銃ピースメーカーを向けられているようだ。冷たい汗が背中を流れる。

「安心しろ。悪いようにはしないさ」

「銃口向けられて安心できるヤツなんて世界中どこ捜してもいませんよ」

俺は頭の横に手を置きながらそう言った。どんな画だよ、コレ。

つてか、これって脅迫じゃねえの？

「もう一度訊くが……俺の戦弟になるか？」

「拒否したら？」

「さア？」

金一さんはフツと一度笑ってからそう言った。お願いだからそんな恐怖心を煽るようなやり方をしないでくれ。めっさ怖い。

「……わかりましたよ。なりますよ。先輩の戦弟に」

俺は嫌々というカンジに金一さんの誘いを承諾した。断ったらどうなるかわかったモンじゃないからな。

「……実を言うと、俺はこの人に関わると面倒事に巻き込まれるような気がしていた。これは、別に第六感でも何でもなし。」

本当にただの『勘』だ。

だが、俺はその不確定な勘がまさか当たっているとは、この時は微塵も思っていなかった。

戦兄弟（後書き）

はい、という訳でめでたく響哉が金一さんの戦弟になりました！

コレが物語にどう影響していくのかはさておき、響哉の持っている『ブレン・テン』についての簡単な説明をしたいと思います。

ブレン・テンとは、1983年にアメリカのドーナウス & amp; ディクソン社が開発・販売していた自動拳銃です。ブレン・テンの「テン」は10mmの口径を指しているんですね。使っている銃弾は『10mmオート』という9mmパラベラム弾より高い威力を持ち、.45ACP弾より小さい弾丸です。当たった時の衝撃は、なんと.357マグナム弾と同等というのですから凄いですね。

銃本体は、CZ75をベースに作られていて、コンバット・シューティングの第一人者である、ジェフ・クーバーが開発に参加しています。

ですが、マガジンケースの生産が販売に間に合わなかったこと、理想的なスペックを追い求めた結果これといって特徴がなく魅力の乏しい銃になってしまった等の理由によってその売上はあまり良くありませんでした。よって、この銃は僅か3年しか生産されなかったのです。

ですが、銃弾の初速は410m/sと他の拳銃と比べると速く、銃としての性能は高いものでした。

ウィキとかを参考にまとめ上げました。間違っている所があれば指摘してくれると助かります。

只者では無い（前書き）

どうも。ブレン・テンの説明で燃え尽きかけた作者です。
今回からちよくちよく時間が跳びますがご容赦ください。

では、本編どうぞ！

只者では無い

武偵高の上下関係は、まさに軍隊のソレに近い。^{クエスト}任務の時に作戦を迅速に遂行するためにそういう風になっている。

本来なら1年は2年3年のパシリにも等しい雑用（空薬莢をひたすら拾い続けるなど）を延々と繰り返していかなければならないのだが、俺の場合は少し違う。

今からだともう1週間も前になる。^{アサルト}強襲科の体育館に、訓練目的で初めて来た時だった。

先輩達に「空薬莢を拾っておけ」と命令され、俺もそれを当たり前だと思つて拾い始めようとした時だった。

金一さんがどこから現れ、「コイツは俺の^{アミコ}徒弟だ。そんな雑用《ゴミ拾い》をやらせておく時間は無い」と言つてその先輩達を一蹴した。その日からルームメイトの3人には羨ましがられ、面倒な事になった。

そして今俺はどういう訳か武偵高のハズレにある、レインボーブリッジに向けられた巨大看板の裏（通称、看板裏）で金一さんに拳銃で撃たれまくっている。

なぜこうなったかというと、遡ること1時間前……。

「お前は射撃を撃つ前から避けられる。その能力をもっと昇華すべきだ」

と言われ、その訓練としてピースメーカーに追われている。1時間も。

あんだけ撃つてよく残弾が減らないなと思うと、彼の足元にはそれなりの大きさの箱に銃弾が溢れるほどに入っていた。よくあんなに持ってきたもんだな。

そう言う俺も今まで1発も当たって無い限り、どうかしてるんだろうけど……。

入試の日から今日まで『第六感』について新しく分かった事がある。

それは、『戦闘経験を積むにつれてその精度が上がっていく』という事だ。

現に、今では相手の視線から『どこを攻撃してくるか』が読める。

入試の時と比べると目覚ましい進歩だ。

ムリに理論づけるならば、極限の集中力を維持し続ける事でその平均値が上昇し、第六感の精度もソレに比例して伸びていくということだろう。これはあくまでもただの仮説だが。

実際のところどうなのかは俺にも分からないし、分からなくていい。ただ結果的に強くなっているのだから。難しい事を考えて立ち止まるよりは、ソレを投げ捨てて前に歩き出した方がいい。

俺には、立ち止まる暇など無いのだから……………。

それから数時間後。空は茜色に染まり、カラスがカアカアと鳴きながら飛び回るさまを見上げながら、俺は地面に大の字で倒れ込んでいた。

始めは全部避けていたのだが終盤になると段々と疲れが溜まってきて、何発も銃弾を当たってしまった。身体のアちこちが痛い。

「今日はここまでだ。明日も昼休みが終わったらここに来い」

そう言っただけ金一さんはさっさと帰っていった。俺をここに放置する気がよあの人……。

俺はしばらく夕焼け空とカラスを見上げながら、動けるまで回復するのを待っていた。

こうして夕焼け空を寝ながら見上げると、昔を思い出す。

ただ、あの時と違うのは、横に『彼女』がない事だ。

俺が武偵になるきっかけを作った人であり、俺が強さを求めて父さんに頭を下げた理由でもある、『彼女』……………。

「……………なんで、逝っちゃったんだろうな。お前が……………」

俺は、思わず口に出していた。だが周りには誰もおらず、さっきまで空を飛びまわっていたカラスも、どこかへ消えていた。

俺の呟きは、沈みかけた太陽が照らす看板裏に溶け込んでいった。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D

只者では無い（後書き）

響哉が最後に呟いていた『彼女』ですが、今回の小説のメインヒロインになる予定でしたが変更しました。

しばらくは名前は出しません。他の小説と違う所を作りたいですからね。

人間関係には気をつけた方がいい（前書き）

どうも。タイトルは本文とあまり関係はありません。

今回は響哉の同居人の3人が登場します。まあ少しだけですけれど。それから、原作でも表紙を飾った事のあるあの人が登場します！

人間関係には気をつけた方がいい

俺が武偵高に来てから早1カ月。長いようでものすごく短かったと思う。

その短い間に微妙にヒビの入っていた同居人との友好関係を再構築できた俺はきつと大物なのだという事にしておく。

現在、俺は食堂で強襲科寮の同居人である榊原龍、八雲戒、御園春樹の3人と共に昼飯を食べている。

俺と春樹はサンドイッチ。戒はハンバーガー。龍はBLTサンドと見事にパン系で統一されている。日本人の米離れは本当だったと信じざるを得ないな。

「響哉、今日から民間からの依頼受けれるんだろ。すぐに行くのか？」

龍がその大きな口でBLTサンドを頬張りながらそう言う。リスかよお前は。

「口に食いモン入れながら喋んな」
俺はケータイを取り出し、昨日金一さんから届いたメールを3人に見せる。

そのメールの内容は、至極簡単。

『明日からお前も民間の依頼を受けられる。よって、お前を俺の行

く依頼に同行させる。待ち合わせ場所は後で連絡する』たったこれだけだった。

「くっそ。いいよな響哉は。Sランクだし戦兄アミコがいて」

「本当だな。俺達はまだ簡単な依頼しか受けられないのによ」

龍と戒が愚痴をこぼしているが、俺はそれを華麗にスルーしてケータイをしまつ。

「でも、それだけ危険が伴うんだから一概に羨ましいとは言えないね」

おお！ナイスフォローだ春樹！もつと言ってやれ！

「だったら、1日でも早く死んでくれ」

「日じゃなくて秒だろ」

……また始まったよ。死ね死ね団強襲科の悪い癖が。

俺や金一さん、春樹はそうでもないが、強襲科のヤツらはまるで挨拶のように死ね死ね言うてくる。もう聞き飽きたんだよ、そのネタは。

「一体お前らは1日に何回死ね死ね言ったら気が済むんだ。たまには死ね以外言えないのか？」

「じゃあくたばれで」

「そういう事を言ってるんじゃないよー！」

まったく、これだからこの2人は……。テレビのリモコン

の争奪戦もこの2人だけがやってるし、おまけにその時に絶対と言
つていいほど拳銃を抜きやがるからリビングにはパテで埋めた弾痕
がいくつも残ってやがる。おまけにこの前そのテレビをぶっ壊して
しまったのだから鬱陶しいこと山のごとしだ。

「ま、まあまあ・・・響哉君も落ち着いて」

ホント、春樹くらいしかまともなヤツはいないよ。いや、この学校
でまともなヤツを捜すのがそもそも間違いないのか。

昼飯を食べ終わった後、俺は3人と別れてモノレールの駅に向かう。
そのホームが、金一さんに指定された待ち合わせ場所なのだ。

約束の時間の30分も前に着いてしまった俺は、ホームの椅子に座
って時間が経つのを待っていた。

・・・コケン・・・コケン・・・

どうやら最近の金一さんによる無理な訓練の疲れが溜まってきてい
るのだろう。猛烈な睡魔が俺を襲ってきた。

俺はその睡魔に勝てず、意識を手放してしまった。

「……や……きよ……や………響哉！」

誰かが、俺の名前を呼んでいた。

「っは！」

俺はどうやら転寝うたたねしてしまったらしい。すぐに胸のホルスターのブ

レン・テンを確認する。寝てる間に盗られていたら大変だ。

・・・・・・・・よし。拳銃は大丈夫だ。

「響哉、武偵がそんな無防備に寝ちゃダメよ。武器を盗られたりしたら大変なのよ」

「す、すいません」

正論だ。魔が指してつていうのもありうる。凶器を持つ者はそれだけの義務があるのだ。武偵法9条も同じ。拳銃や刀剣を扱う者は、それ相応の責任を負わなければならない。

「次からは、気をつけてね」

・・・・・・・・ところで、さっきから気にはなってたんだが・・・・・・・・
・・・誰、この人。

長い茶髪の三つ編み、薔薇色の唇に碧眼。目が覚めるような美人。そして着ている服は武偵高の制服。こんな娘、武偵高にいたっけ・・・・・・・・？

なぜか、このタイミングで第六感がある人物の名前を引っ張り出してきた。

だが俺はそれを真っ向から全否定した。というか、信じたくなかつ

た。

目の前にいる娘は、俺が今まで見た中でもっとも綺麗でカワイイ、まさに絶世の美女だ。今まで俺が見てきた女子が、極端に言うところのアイコンに見えるくらいなの。

だからこそ、信じたくない。受け入れたら、俺の今までの大して長くも無い人生を呪いたくなってしまう。

「こらっ！返事は？」

「……………あの、あなたはもしかして、その……………」

今日ほど、第六感が間違いであってほしいと思った事は未来永劫ないであろう。

だが、現実はいつだって残酷なものだ。何かの漫画でそんな言葉を

見た気がする。

「遠山、金一さんですか………?」

「うん」

目の前の娘はこくりと頷いた。

俺は、今日この日……

神はいないのか、もしくは死んだんだと確信した。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.
.
.

人間関係には気をつけた方がいい（後書き）

かなりやらかした感があります。

原作の10巻の最後に、キンジがカナに「兄さん」と呼んでも返事しないと書かれています。今回の響哉のコレは向かい合って「あなたは……」と尋ねているのでカナにも自分に問いかけているというのがわかったという事で答えられたとしておきます。文章力が無いのが恨めしい……。

龍、戒、春樹のプロフィールも機会があれば載せたいと思います。

HSSは男のロマン（前書き）

今回は金一さんは出ません。カナが出ます。

それから、同居人3人の内榊原龍のプロフィールを掲載しておきます。

榊原龍

東京武偵高1年D組。強襲科Bランク。

身長174cm、体重78kg。体脂肪率は1桁。

射撃よりも近接戦の方が得意で、剣道4段。徒手格闘も強い。

祖父が剣道場を開いており、小さい頃から剣道をやっていたが武偵に強い憧れを持ち、東京武偵高に入学する。

一見細身だが実は筋骨隆々で、単純な力押しなら響哉では手も足も出ない。

使用している拳銃は、日本警察でも採用されている『H&K P2000』。

他の2人もその内書いておきます。

HSSは男のロマン

中学の時、俺の家の3軒隣に住んでいた大学院生の人が、こんな事を言っていた。

「オカマとかオネエってイケメンなヤツが多くない？」

その時俺は、「そんなバカな」と笑っていた。オカマと言われて想像していたのが双子の兄弟の方ではなくラクダの方だったからだ。

だが、俺は今日この日、その戯言が真実であつたと認めざるを得なかった。

「この姿の時は、私の事は『カナ』って呼んでね」

「……はい」

現在俺と金一さん……いや、カナはモノレールに乗っている。

平日の真昼間という時間なので、乗客は少ない。

金一さんは、誰が見てもイケメンだと思うだろう。そして、今俺の目の前にいるカナも、10人いれば10人がカワイイと言うだろう。

だが、1つ解らない。それは……

「なんで、女装してるんですか？」

これは、絶対に訊かなければならない事だとその時俺は思った。

「人前で女装してるなんて言わないで。

うーん……話せば長くなるんだけど、いいわ。戦兄弟^{ファミコ}同士

で隠し事は無しよ。教えてあげる」

……どうでもいいけど、なんで声も口調も女性のソレにな
ってるんだ？特に声はどうやって変えてんだろう。

「響哉は、『サヴァン・シンドローム』って知ってる？」

「……………サヴァン・シンドローム。たしか、脳の一部が損傷したりすることで、他の部分の活動がその損傷した部分を補うために活発になり、結果として一部の能力が飛躍的に上昇する症状の事だったか。高速で暗算ができたり見た物を一瞬で憶えたりするなんてのがあったな。」

昔見たテレビでそんなことを言っていた気がする。

「多少は」

「私達遠山一族は、ソレを血……………つまり、DNAとして先祖代々受け継いできているの。私はその事を『ヒステリア・サヴァン・シンドローム』、通称『HSS』と呼称しているわ」

「ちょっと待って下さい。そのHSSっていうのと、あなたが女装しているのはどういう関係があるんですか？」

するとカナは「しーっ！」と周りをキョロキョロと気にし始めた。どうやら自分が女装していると周りに知られたくないらしい。

「……………そんなに大きな声で言っただつもりはないのだが。」

幸いな事に、この車両には他の乗客は1人しかおらず、その1人も

ぐっすり眠っていたので大丈夫だろう。

カナはほうつと心底安心したように胸をなで下ろし、「人前でそういう事は言わないで！」とお叱りを受けた。だったら始めから女装そんなカッコしなけりゃいいのに……。

「それは、今から話すわ。HSSは、その能力を発動するのに条件があるのよ」

「……条件？」

「そうよ。血中のβエンドルフィンが一定以上になる……つまり、性的興奮状態に陥ると、常人の約30倍の量の神経伝達物質を媒介し、大脳、小脳、脊髄といった中枢神経系の活動を劇的に増進させるの。その状態になると、理論的思考力、判断力、反射神経などあらゆる能力が……」

「ちょ、ちよつと待った！」

これ以上は俺の脳がパンクしかねない。一気にどれだけ難しい事をペラペラ言ってくるんだこの人。

「つまり、さっきの話をまとめると……遠山一族にはHSSと呼ばれる遺伝的体質があり、性的興奮を味わう事でその状態になり、いろんな能力が飛躍的に上昇する、と？」

「まあ大体そんなカンジね。正確には30倍くらいに上昇するんだけど」

おいおい……つまり、この人が女装してるのはそのHSSになるからで、その状態だと普段の30倍、つまり俺が入試の時に

闘ったあの金一さんよりも、今の金一さん、つまりカナは30倍強いのかよ……！どんなチート能力だ。ナルトの影分身の術や悟空の界王拳や超サイヤ人並に卑怯だ。普通に考えて同じ訓練をしても常人の30倍のペースでそれが実るんだから。

……ちよつとからかつてみたくなってきた。

「でも、なんでそんな変態の極地みたいなDNAが存在するんですかねえ？」

「……たしかに普通じゃないとは思っけど、そのDNAを持つてる当人の前では言わないでほしいわ……」

ヘンサザゾンドルーム

「HSS（笑）」

「それ以上は言わないでね」

カナは腰のホルスターから拳銃を……って危ねえ！！
ピースメーカー

「すみません悪ふざけが過ぎました！」

第六感が危険を察知し、俺は即座に席から跳んで空中で土下座の姿勢を作り、そのまま着地して床に額を付ける。この1カ月で編み出した俺の必殺技、『フライング・土下座』だ。全くもって要らんモンを作らされてしまった。コレも生存本能の成せる業か。

カナはさっきの事を許してくれたらしい。ただ「今度言ったら八チの巢になるよ」って言っていたので俺はこれ以上HSS類でこの人をからかうのはよそうと心に決めた。

「ところで、今日の依頼^{クエスト}ってなんなんですか？」

今回の依頼は金一さんが持ってきたのだが、俺はその内容について全く聞かされていない。よって、これからどこに何をしに行くのか全く知らないままついてきたのだ。

「あー、まだ言ってなかったわね。でも、もうちょっとで着くから。現場に行けば解るはずよ」

「・・・・・・？」

その時、俺はカナの言っていた言葉の意味がわからなかった。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.
.
.

HSSは男のロマン（後書き）

今回はHSS、もといヒステリアモードについての説明でした。

やっぱり、響哉には遠山家の秘伝を教えておかないといういろいろ都合が悪いことがあるんですよ。主に作者なのですが（笑）。

任務の方は、また次回という事になりましたがきちんと考えてあります。問題はそれをどう文章にすべきかですが……………。

それと、気が付けばお気に入り登録が1件ありました。とても嬉しいです。

次話もできるだけ早く投稿するつもりです。

「非道過ぎる」(前書き)

最近前書きで書くことが少なくなってきました……。今回は八雲戒のプロフィールを載せたいと思います。

八雲戒

身長180cm、体重73kg。

東京武偵高1年A組 強襲科Cランク

任務や訓練以外ではいつも伊達眼鏡を掛けている、俗に言う『チヤラ男』。台場辺りでナンパして彼女を作ったりしているが、最高で2ヶ月しか持たない。最短記録は4日間。

根はいいヤツなので同じクラスの生徒からの評判はいい。

使用拳銃はトカレフTT-33。

「非道過ぎる」

女装した金一さんことカナに連れられてやってきた場所は、なんと俺の父さんが昔務めていた職場、警視庁だった。

「カナ、なんで俺をこんな場所に連れて来たんだ……？」
さっき来る途中、私の時はタメ語でいいと言われたので俺の言葉遣いは龍達に使うソレと同じだ。

「今回の事件現場なのよ、警視庁は」

「どういうことだ？」

ここは、大昔から日本の安全と平和を護ってきた警察の、総本山なんだぞ。そんな所で事件だなんて、にわかには信じられない。

「ついてきて」

カナに言われるがまま、俺は警視庁の中に入っていく。ここに入るのは久しぶりだ。まだ武偵制度が日本で認められてなかった頃、当時ここの鑑識だった父さんに着替えを持ってよく母さんと来たもの

だ。今から思うと懐かしい。

警視庁には鑑識がない。全員、東京武偵局やら武偵庁やらに引き抜かれていった。

犯罪が凶悪化する中、ただの鑑識にさえ帯銃を余儀なくさせてしまえばそれはもう警察では無い。武偵となる。

武偵高にも鑑識科ケンシカがあるように、今や鑑識と言ったら武偵になってきている。

だが、警視庁で起こった事件となると、本来なら武偵庁や東京武偵局の鑑識が駆り出されるのではないだろうか。そもそも、俺も金一さんも鑑識ではないのだからいいのだろうか。

エレベーターに乗って、上の階へ行く。しばらくしてエレベーターが止まり、その分厚い鉄の扉が開かれた時、俺は絶句した。

「な・・・・・・・・なんだよ、これ・・・・・・・・」

寒気がした。吐気も催した。なにより、呼吸をしなくなかった。

なぜなら、俺の眼前に広がっていたのは……

・ ・ ・ ・ ・ 人の血によつて真つ赤に染められた床。
そして大量の血が飛び散つた壁と天井だつた。

脳内でまず過つた言葉が、『地獄絵図』。次に、『血の海』。

辺り一面真っ赤に染められた通路は、非常線を張られたただけでそこには俺とカナ以外誰もいなかった。

カナは鞆からファイルを取り出し、ソレに書かれている文章を読み上げ始めた。

「昨夜、警視庁に何者かが侵入し、たまたまそこに居合わせた刑事3名を殺害。犯人は逃走し現在行方不明。報道規制が敷かれて電波には乗らなかつたけど、警視庁の関係者と武装検事、一部の武偵には情報が渡っているわ」

カナは淡々と読み上げた後、ファイルに付いていた写真を俺に渡した。

「……………!？」

俺は、驚く事しかできなかった。

その写真に写っていたのは、バラバラに飛び散った肉片と、下半身、そして遠くに転がっている……人の、頭だった。

それが、3つずつ。この人達はさっきカナの言っていた、『3人の被害者』だろう。

「……非道過ぎる……」

俺は、父さんの影響と武偵を目指す事も相まって、凄惨な現場も写真でだが何度か見たことがある。

だが、今回のこれは肉眼で見たという事を差し引いても、あまりにも衝撃的すぎる。

「殺害された刑事3人の遺体の共通点は、全員胴体が無い…….
と言うより、飛び散っていたこと。それと、その飛び散った肉片が凍っていたことよ」

カナの話で、俺はある武器を連想する。

「ガスナイフ、ですか…….?」

俺は口を手で押さえながら言った。

「おそらく、その通りよ」

…….ガスナイフ。

対猛獣用の近接武器で、ナイフの柄の部分に内蔵された超低温のガスを先端から放出し、細胞を瞬間冷却してガス圧で爆散させる凶悪な武器だ。

「一体、どこであんな獲物を……………」

「犯人に関しての情報は一切無いわ。……………そろそろ、行きましょう」

カナも、この光景は衝撃的だっただろう。現に顔色も少し悪くなっている。

休憩室で休んでいる時、俺は今日どうして金一さんがカナの姿で警視庁に来たのかが分かった。

カナは、すれ違う警官から声をかけられているのだ。それも昔から知っているように、ごく自然に。

つまり、『顔が利く』ということなのだろう。
だからあっさりと現場に入れてもらえたのだ。

「で、何で俺を連れてきたのかをまだ聞いてないんですけど」
休憩室の椅子に腰かけ、まだ一口も口を付けていないコーヒを飲む。

「……やはり、不味い。アレを見た後だと、やはり口に入れる物全てが不味く感じる。」

「アレをやった犯人が、あなたがこれから戦っていく敵になるかもしれないの。だから、ここに連れて来たの」
「……俺がこれから戦っていく、敵？」

「カナ。それはどういうことなんだ？」
俺はなるべく平静を装おうとしたが、その声は微妙に震えていたと自分でも解った。

「答えは、近いうちにわかるわ。さっきの事件の話に戻すけど、3

人の死亡推定時刻の少し前に、警視庁のコンピューターからあるデータが持ち出されていたの」

「ある、データ・・・？」

「そう。そのデータは、日本の武偵、武装検事、公安0課の個人情報よ」

この場合の個人情報とは、一般人の個人情報より、さらに秘匿性が高い情報の事を指す。

名前、住所はもちろん、その人のランク、戦闘能力、経歴などの武偵などにとっては外部に知られたくない情報なのだ。

それが、盗まれた。

犯人が欲しかったのは、情報。その情報をどこかの組織にでも売り払うのだろうか。あまり大きな金にはならなさそうだが、1つの組織だけでなく複数の組織に売ったら、かなり大きな額になるのかもしれないが。俺にはそんな事は分からないが。

だが、俺には解っていたことがある。

カナが、金一さんが、今回の事件について何か決定的な証拠、それが確信があると言う事を、俺は第六感から読み取っていた。

しかし、カナは話そうとはしなかった。隠し事は無しと言ったばかりなのに、だ。

つまり、『何か俺に言えない事情があった』のではないか。

だったら待とう。俺に話してくれるその日を。

今の弱い俺には、それしか選択肢は無いのだから……。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.
.
.
.

「非道過ぎる」(後書き)

ガスナイフの元ネタは、アイシールド21の村田先生が2009年にジャンプで掲載させた『BLUST!』の敵キャラです。

この事件の犯人はオリジナルなんですけど、まだオリ敵は出す予定です。それも、チートじみた。名前を考えるのが大変です。

あと、鑑識の話ですが、原作にはそのような描写は一切ありません。完全に作者の妄想です。

世の中は諦めが肝心と言う人もいるが、やっぱり諦めたらそこで試合終了だと思

この小説のサブタイが、なぜか銀魂のソレのようになってきている気がします。

ところで、さつき気が付いたのですがこの小説の感想が送られてきていました。昨日気付かなかった自分が恥ずかしい……。地味にお気に入り登録件数も2件に増えていたので、作者は嬉しくてちよつと涙目です。冗談ではなく。

それと、響哉の同居人3人目の春樹のプロフィールを掲載しておきます。本編で使えるかどうかは正直微妙ですが……。

御園春樹

東京武偵高1年A組 強襲科Bランク

身長163cm 体重48?

響哉たちと比べると小柄で、中学生のような見た目。一部の女子に熱狂的な人気がある。

誰にでも人当たりが良いので誰とでも友達になれる、ある意味強襲科にもつとも必要とされる能力を備えている。

真っ向から勝負を仕掛けるのではなく、相手の不意を突いたり閃光手榴弾や煙幕などの道具を使って相手の動きを阻害してから強襲する攻撃が得意。良く周りから「顔に似合わない」と言われるが、本人は全く気にしていない。

Bランクなのは、直接闘うと身長や筋力の差でどうしても劣勢になってしまうから。入試の時も罫を仕掛ける前に他の受験生とはち合わせてしまい、手酷くやられてしまった。

実はその時、響哉に介抱してもらったのだが当人は気絶していて憶えていない。響哉にいたっては介抱したこと自体忘れかけている。

使用武器は『SIG SAUER Pro SP2009』のマニ

ユアルセーフティ追加モデル。

これで同居人3人の説明は終わりました。他の2人は前と、その前の前書きに載せてあります。

今回は金一さんやカナ、同居人は出てきません。しかしあのチョイキャラが出てきます。原作10巻を読んでない人にも分かるように説明はありますが、何気にこれから先けっこう出てきそうです。

世の中は諦めが肝心と言う人もいるが、やっぱり諦めたらそこで試合終了だと思

あれから、まあいろいろカナから事件の説明を受けた俺は、結構早い時間に学園島に帰ってきた。

帰る時まで金一さんがカナの姿だったので、「なんか恥ずかしいからそのトイレで着替えてくれ」と言ったら、「それだけは勘弁して」と両手で俺の肩を掴みながら俯いて言った。過去にトラウマでもあるのだろう。ハチの巣にされるのはご免なのでそつとしておいてやろう。

それと今、俺は思う事が一つある。それは……………

「げっ……………!」

今日が、厄日だという事だ。

「ほぼ初対面の女性に対しての第一声がソレだなんて、失礼じゃないの？」

もうカナとは別れた。いや、恋愛関係的な別れたじゃない。俺はゲイじゃない。単にあの人は寮に戻って、俺は強襲科の体育館に射撃訓練でしようと思って別れたのだが、面倒だからと一般校区を通る近道を使ったのが間違いだった。

目の前にいる外人みたいな美人の名は、時任ときとうジュリア。俺と同じクラスで、席が俺の列の一番後ろなのでプリントなんかの提出物を集める時に「プリントは？」、「やってない」のやり取りをほぼ確実にしてしまうので名前も顔も憶えている。

少し俺の知っている彼女について説明をしておこう。

彼女はロシア人とのハーフで、所属は超能力捜査研究科。通称、『SSR』。SSRの説明は今回は省略だ。偏差値40ちょっとのこの武偵高《バカの吹き溜まり》で全国偏差値65を記録。生徒会の副会長を務め、卒業したら旧ソ連からあると言われるモスクワ大学の超心理学科に進学する事がすでに決まっている、まさに天才と呼ぶに相応しい人なのだ。

だが、彼女は『ある能力』によって孤立している。

スキャンメトリ
脳波計と呼ばれる超能力だ。
ステルス

彼女は、周囲に居る人の脳波を読み取ることができる超能力を持っているのだそうだ。

で、その読み取った情報で当人が怪我しそうな事があればそれを伝

えるのが彼女のルールなんだとさ。自己紹介の時に言っていた。だが、彼女に頭の中を覗いてもらった人は自分の秘密が暴露されて赤面してギャアギャア騒ぐので、彼女はこうして見事になった1カ月で周囲から孤立してしまっていた。空気読めよ。

正直、超能力なんて俺は信じちゃいない。そんなオカルトが通用するのは、少年漫画の世界だけで十分だ。

だが現実にはそんな超能力を大真面目に研究するSSRがここ東京武偵高にも設置され、『超偵』などと言う新しい単語まで生まれた。一昔前の人が聞いたら腹を抱えて笑いだすか絶句するかのどちらかだぞ。俺は絶対笑えないと思うが。

顔とスタイルが良いのと、触れれば切れるような伶俐な雰囲気から、一部の男子に人気があるが、俺はそっち系じゃないのでよくわからない。

「一応、言っておくけど……私は対象に触れないと脳波を読むことはできないの。だから、触らなければ何も読めやしないわ」

「おかしいな。口に出した覚えは無いんだけど」

「読心術くらい使えるわよ」

そう言う時任は無表情だ。ちょっと背中に冷たい物を感じる。

もうお前、尋問科^{タギュラ}行けよ。こんなピンポイントで言い当てられるんなら脳波計使わなくてもSランク間違いなしだろ。

「あなた、私のクラスの朱葉響哉よね？」

「そうだけど。何か俺に用があんのか？」

「ーか俺、何しにここ来たんだっけ。あ、射撃訓練しに強襲科に行く近道を通ったんだっけ。」

「本当は男なんかとは1秒でも長く話していたくないのだけど、この先に行くのはやめておいた方がいいわ。今向こうに……」

「……今、しれつと最低な事言っただぞ。どこのIS^{女尊男卑の}世界から来た女だコイツ。」

「あー！うっせえ！お前が俺の頭の中覗けようが何だろうが知ったこっちゃねえけどな！俺は！自分の行く道くらい自分で決める！誰がお前の指図なんか受けるか！」

時任の目の前に立ち、人差指を目頭の辺りに当たらないように指して俺は言い放った。

時任は、面喰らったような顔になってその薄青い目を見開いて俺の指先を見ていた。

「じゃあな」

俺はさっき時任が行かない方が良いと言っていた方に、真っ直ぐに歩きだした。

うん。やっぱ、人の忠告は素直に受け取っておくべきだった。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

俺は今、左右を校舎の壁に遮られた、一本道のようになっている場所に居るのだが・・・・・・・・。

なんで、あの3人がこんな場所で揃ってんだ・・・・・・・・！

俺の目の前にいるのは、人間バンカーバスターというんでもないあだ名を持つ、我らが強襲科の鬼教官にして一番の問題児、蘭豹。その蘭豹と親友のはずなのだが、どうやら煙草が無いらしくドス黒いオーラを滲ませている尋問科の綴。

背後に立ったというだけの理由で毎年数名の生徒を手刀で骨折させている、狙撃科スナイプのリアルゴルゴ、南郷。

この狂った武偵高の中でも間違いなく狂っているランキングベスト5に入っている3人が、揃って睨み合っているのだ。

いや、あと1人いる・・・・・・・・第六感がこんなどうでもいい場面

で更なる進化を遂げてきた。

3人の強烈な気配の中に、もう4人目の気配を感じる。

だが、3人の他には誰もいない（鳥や虫なんかもない）。となると、いるのは誰もその姿を見たことが無い諜報科レザドのチャン・ウーか。よくもまあここまでの面子が揃ったもんだよ。

それも、蘭豹は酒飲んで酔っ払ってて、綴はあの妙な煙草を切らしていて、俺の今いる位置は丁度南郷の背後で、このまま行ったら間違ひなく逝くことになるだろう。

普段の俺なら引き返す。だが、時任にカツコつけてあんな事言っちゃった後だし、今更引き下がれない。かといってこのままここでじっとしていられるかと訊かれれば、まず無理だろう。アイツら、変なカンには妙に鋭いし。

これで救護科アンビュラスの矢常呂も居たら、東京武偵高のビッグ5が集結する事になるな。

俺が心の中で現実逃避を始めた時だった。

その矢常呂が、何やら沸騰しているかのようにブクブク言わせている緑と紫の液体を大きめのビーカーに入れて4人の殺伐とした空気の中に入っていきやがった。ビッグ5、集結しやがった。

ってか、お前は何なんだよ！なんで普通に参加してんの！？なんでお前から始めから5人でしたよみたいなカンジでいんの！？

・・・そんな事を校舎の陰から覗いて考えていた時だった。

『ギンツ！！』×5

・・・やつちまった・・・。。。

「うおおおおお！！！」

こうなりやケクソだ！先手必勝とばかりに俺は5人のクレイジーティーチャー達に単身で跳び出し、胸のホルスターからブレン・テンを取り出した。

武偵憲章5条、行動に疾くあれ。先手必勝を旨とすべし。だ！

「ぎゃあああああ！！！！！」

俺の悲痛な断末魔が、学園島に響き渡った。

・ 次
・ に俺が意識を取り戻した時、
・ 目に映ったのは知らない天井と
・ ・ ・

「
．．．．．時任
．．．．．
．．．．．
？」

俺の寝ているベッドの横に座っている、
．．．．．
時任ジュリアだった．．．．．

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.
.
.
.

世の中は諦めが肝心と言う人もいるが、やっぱり諦めたらそこで試合終了だと思

以前、響哉の幼馴染をメインヒロインにすると書きましたが、流れる的に時任さんになりそうです。ごめんなさい。でも、近いうちに出ときはします。

時任さんは、原作では脳波計によって他人から避けられる『孤独な天才』みたいなキャラだったので、『もし仲間がいたら』という完全な作者の妄想から登場させてもらいました。この小説での彼女のプロフィールも、そのうち載せておきます。

ちなみに、なぜあんな場所にビッグ5（完全に遊戯王のパクリ。原作にはそのような事は書かれていません）が居たのかと言うと、昨日の夜に初めの4人で麻雀を徹夜でやっていて、「今日はどうする？」という話を睡眠不足の状態でしていたからです。矢常呂先生は4人に頼まれて、同じく寝ないで作った眠気覚まし（イチゴ風味とメロン風味）を持って来ただけだったりします。
……って、かなりムリがありますね。

響哉は南郷の後ろに立っていたので、まず南郷にボコられ、酔っていた蘭豹がそれに参加。綴も煙草が切れてイライラしていたので参加。チャン・ウーと矢常呂は世間話や響哉が何秒奮闘するか賭けていました（結果は2人の予想を遥かに超える10秒。チャン先生は3秒、矢常呂先生は5秒でした）。

まあ、武偵高の教師3人を相手にするのは自殺行為に等しいという事で……………。

最後はエヴァみたいな終り方になってしまいましたが、作者は微妙にしかエヴァを知りません。アニメは全話見たハズなんですけどね。旧劇場版も。ネットですが。

地味に響哉がハーレム状態になっていきそうですが、多分なるんでしょうね。あくまで「地味に」ですが。

「またな」（前書き）

最近、クラスで風邪が流行りだしてきました。

そろそろストーブを引っ張り出していきたいのですが、最近ではパソコンのバッテリーの熱で暖をとっています。足の上に置くと暖かいんですよこれが。

夏は地獄ですが、冬は快適！のはずです。ただ単にバッテリーがおかしいだけなんですけど。

「またな」

普通の学校なら今俺が居る部屋は保健室と言うのだから、残念ながら武偵高にそんな部屋は無い。代わりにあるのは救護科だ。アシヒュラス

そのベッドの上で俺が目覚めたという事は、俺はあの5人に酷くやられたのだろう。実際には3人だが。

だが、なんで時任^{ときとう}は俺の横にいるんだ？

あの5人が俺をここまで運んでくれるとは、太陽が西から昇ろうが、北半球と南半球が入れ替わろうが、彗星が地球に直撃しようが信じられない。

ということとは、だ。

「まさか、お前が俺をここまで運んで来たのか……?」
まさか、とは思うがな。

「その通りよ」

「……そんな、まさか……『まさか』が起きやがった……!!」

あの時任が！クソ教師共にボツコボコにされて気絶していた何とも
可哀想な俺を！わざわざこんな所にまでおぶってきただとオ！？

「今日は人類が滅亡するかもしれないな」

「確かに、今日10月28日は人類が絶滅する日とマヤ文明の予言、
NASAの太陽フレアの予測からそう言われています」

「……まだ5月だぞ」

時任のわけのわからん話はともかく。

「お前が、俺を運んできてくれたのか……?」
俺が訊くと時任はコクンと無言で頷き、そのまま俺の顔をじっと見ていた。

つか、普通に美人過ぎる時任に見つめられると、健全なる男子高
校生の俺は無性に恥ずかしいのだが……。

「……な、なんでそんな事したんだよ」

俺は恥ずかしくなって、時任にそっぽを向くように窓の外の夕焼けを……って、俺どれだけ気絶してたんだよ。

「……怒ってる?」

「いや、なにを」

俺はつい、あまりにも弱々しい声でそう言った時任の方を見てしまった。

俺の目に映っていた時任の姿は、さっきまでの刃物のような雰囲気は消え、俯いていた。

「なにつて……私、あなたをここに運んでくる時、あなたに『触れた』のよ。あなたの思考を、勝手に覗いたのよ」

「……あー、そういうことか。つまり、勝手に俺の頭の中覗きこんだから、それに罪悪感を感じているってことか。」

「そんなの、不可抗力だろ。っていうか、あの馬鹿教師共クレイジーチャーズにボコられて気絶してた俺をここまで運んでくれたんだ。感謝する覚えはあっても怒る理由はねえよ」

「で、でも……」

「でももへつたくれもねえよ。残念ながら、俺にはお前が何考えてるかなんて分かりっこねえけど、俺は、お前に助けてもらったんだから感謝してる。これは本当だ。証拠に……」

俺は、時任の手をとり、その掌を俺の頭にむりやり押し付けた。

「……………！や、やめ……………」

「他人^{ヒト}の考えてる事が解るんだろ？ だったら言葉なんぞよりもっと正確に教えてやる。これが、俺の正直な気持ちだ」

よく、漫画に『言葉は不完全なもの』と書かれる事がある。実際、俺も自分の気持ちを言葉で相手に伝えるなんて器用な事はできないだから、もっと確実に、正確に伝えてやる。そうすればコイツもいつもの時任に戻って、このなんか変な感じも収まるはずだ。ひいては俺が早くここから帰れることにも繋がる。

……………でも、なんか時任の手が心なしか熱い気がするな。気のせいだろうか。顔も若干赤いし、風邪か？ うつされたらかなわんな

20秒くらい経っただろうか。時任は急に俺から手を離し、さっきまで頭に当てていた右手を胸の前で左手で隠すように握っていた。どうした突然。

「……………お、お、お……………」

「『お』？」

本当にどうしたんだ時任のヤツ。さっきまであった俺の時任のイメージがガラガラと音を立てて崩れていくんだが。

「お前の思考が、読めない……。一体、どうしたというのだ……？」

ボソツと時任が呟いた言葉は、あまりにも小さすぎて俺には全く聞こえなかった。

「おい、時任。さっきからどうしたんだよ」

「う、うるさい！お前には、か、関係無い！……。どういうことだ。コイツに触ると、頭が真っ白になる……。まさか」

なんか最後の方をぼそぼそ呟いていたが、サササツと扉の前まで移動し、その場でしゃがんで読唇術をされないように口元を隠していて俺には全く聞こえなかった。めちゃくちゃ速かったな、今の動き。

「これが……。そうなのか？」

「なにがそうなんだよ」

俺がベッドから出てなにやら独り言を言い続けている時任の横から外に出ようとすると、

「きゃあー！！？」

……。悲鳴を上げてビクツとしてその場でちょっと跳んだ。

「何やってんだよ………」

「う、うるさい！そこだけ！」

時任は俺を突き飛ばし、さっきまで俺が開けようとしていた扉をこれでもかというくらいの勢いで開けた。扉壊す気かよ。

そのまま帰るのかと思いきや、時任は急にこっちを振り向いた。

「またな。響哉」

時任はそれだけ言って部屋から飛び出して言った。

1人取り残された俺は、扉の修理申請をしなければと思い、教務科に書類を提出しに行った帰り、

「……そういやさっき時任のヤツ、俺のこと名前で呼んでなかったか？」

あと、やっぱり顔が少し赤かった気がする。やっぱり風邪か？

気づけば時刻はもう6時半を過ぎていた。武偵高に吹く5月の海風は、まだ肌寒いものだった。

T O B E C O N T I N U E D

「またな」（後書き）

やっぱり恋愛描写って難しいですね。書いててよく分からなくなってきました。恋愛経験でもあればもっとマシな文が書けるんでしょうけどね。

狙撃科の志波さん（前書き）

気がついたら11話。けど物語はまだ1カ月くらいしか経過してませんね。このペースだと原作の話が始まるのはいつになる事やら・・。

タイトル通り、今回は原作7巻で一瞬出てきた志波亘子さんの登場です。誰も待っていない上に存在すら微妙なキャラが2人続けて登場と言つのも盛り上がり欠けると思いますが、そこは温かい目で見てください。

狙撃科の志波さん

アドシールドという行事があるのを、俺はすっかり忘れていた。

5月の終りに行われるこの行事は、武偵高の国際競技会である。まあ、インターハイのようなものだ。行われる競技は主に強襲科やスナイプ狙撃科による銃を使った競技しかないのだが。

だが、その祭の最後の締めである生徒による有志バンドの演奏とチアは一般にもウケが良いので毎年やっている。俺も何度か見たことがあるが、競技はやっぱり一般人にはわかりにくいものだった。

ちなみに、このアドシールドで優秀な成績を残すと賞状と共にメダルがもらえる。そのメダルを持っていると、どこの武偵大学にも推薦で進学でき、武偵局には無条件でキャリア入局。民間の武偵企業だって一流から超一流まで選びたい放題。まさに人生バラ色だ。

金一さんが参加したら優勝は間違いないのだが、「面倒だからパス」だそう。代表の誘いは来たそうだが、断ったそう。勿体ないか？

ちなみに俺には拳銃射撃競技の代表補欠に選ばれた。俺の場合は断る理由も無かったので引き受けたが、補欠なので出番は無いだろう。

「響哉は競技の特訓はしなくていいの？」

そう言っただけでさっきまで寝ていた俺の隣にやってきたのは、SSRの期待の星、時任ジュリアだった。

ジュリア アンビュラス
コイツはあの看護科の物損事件以来、やたらと俺に声をかけてくるようになった。そして挙句には「お前の事を響哉と呼ぶからお前も私の事をジュリアと呼んで」と言っただけだった。「なんでだ？」と訊くと「なんでもいいでしょ！」としか返してこない上に苗字で呼ぶと一々ソレを注意してくるので仕方なく俺も名前で呼ぶことにした。本当に女はよく分かった。

あと、俺とツルみ始めてから、ジュリアは周囲からも少しではあるが態度が軟化された。今では同性の友達も数人いる。

「俺は補欠だから、出番なんてどうせ回ってこねえよ。お前こそ、チアの練習しなくていいのか？」

「これからやるわ」

ジュリアはアドシアードの最後にやるチアのメンバーに入っている。顔もスタイルもハーフだけあってかなり高ポイントなので、多くの男子生徒は喜んでいたが……。

「ていうか、なんでお前は急にチアをやりたいなんて言い出したんだ？みんな喜んでるからいいけどさ」

教科書をロッカーに押し込んだ後、他の半分くらいのかるゝい鞆を担ぎながら訊くと、ジュリアはそっぽを向いてしまった。

「……あ、あなたに見てほしかったからなど……言えるわけがないでしょ」

最初の方が聞こえなかったが、どうやら言いたくない事らしいのでこれ以上は聞かないでおこう。俺は空気の読める男だからな。

学食で、俺はどういう訳かジュリアと2人で昼飯を食っている。龍達同居人3人は、有志バンドの練習を見に行くとかで一緒じゃない。俺としてはいてほしいのだが……。

冷やかしと思われるのも嫌なので一緒に行くかと誘われた時は断ったが、これは行った方が良かったな。

「そつえば、響哉は私達のクラスからアドシールドに代表として出場する女子の事って知ってる？」

突然ジュリアがボルシチを食べていた手を止め、そんな事を訊いて

きた。

「ん？いや、知らん。最近いろいろあったからなア」

主に、ジュリアの事と・・・・・・・・・・警視庁の殺人事件の事。

あの事件に関しては、カナから「これ以上関わるのはまだやめておきなさい」と警告され、詳しい事は何も知らされていない。そして、金一さんはその事件の調査のために学校を休むことが多くなった。俺も手伝おうとしたが、「まだ関わるなど言っただはずだ」と叱られてしまった。

だが、『まだ』と言っただのだ。つまり、『これから』知る事になるであろう事件なのだ。そしてその犯人は未だ逃走中。またこれから同一犯による惨劇が繰り替えされる可能性は、十分にある。

次起こった時、俺は金一さんと共に事件に関わっていきけるのだろうか。それとも、前と同じように置いていかれるのだろうか。

やっぱり、実力が足りないんだろうな。刑事3人をあんな風に惨殺する輩が相手となると、経験も必要になってくるだろうし。

「響哉、私の話を聞いていたの？」

ああ、そういやジュリアの事すっかり忘れてた。

「いや、まったく」

俺はラーメンをふうふうと冷ましてから食べた。うん、美味い。

「そこまでくると怒りを乗り越して呆れるわ……」

「そりゃどうも」

「褒めてない！せっかくクラスメイトが代表に選抜されたんだから、応援してあげましようよ」

「べつにいいけどよお」

どうでもいいけどジュリアよ。ボルシチ冷めてないか？

ジュリアにむりやり連れられて来たのは狙撃科棟の地下……狙撃レーンがある場所にやってきた。

そこでは日夜狙撃科の生徒たちが肉眼では豆粒みたくに見えるにバスバスと狙撃銃で撃ちまくっている。その中に、見覚えのある女子生徒が1人、いた。

志波だ。匍匐^{ほふくじようたい}状態でライフルを構え、狙いを的に絞っている。

ていうかお前、代表入りしてたのか。全然知らなかった。

使っているライフルは、イギリス軍に採用されている『L118A1』。高い命中精度を誇るいいライフルだ。

何発か撃った後、ヘッドフォンを外して飲み物を飲んでいた。どうやら休憩に入ったようだ。

「よう、志波」

「あ、響哉君とジュリアじゃないですか。最近よく2人でいますよね」

「成り行きでな。で、どうなんだ？調子の方は」

志波は「まーぼちぼちですね」と言つて、ブルーベリーの錠剤を2粒呑み込んだ。

そついや狙撃科では視力向上のためにブルーベリーを育ててるんだつたな。まさかそれで作つたんじゃあるまいな。

「響哉、あなた斗子と仲が良かったの」

「お前、コイツの席知らないのか？俺の右隣だぞ」

「そついえばそうだったわね」

武偵高のクラスの席は、何ヶ月かに1回のくじ引きによって決まるよつて、出席番号順なら左の前の方になる俺の席は若干ど真ん中の右後ろ寄りの微妙な所にいる。

その微妙な俺の席の右隣にいるのが、何を隠そうこの志波なのだ。

ちなみに初めて話したきつかけは、志波の落とした消しゴムを偶然起きていた俺が拾つてやったことという古い漫画じみた事だというのは、事實は小説より奇なりとはよく言つたものだ。

「斗子、応援に来てあげたわ」

相変わらずの上から目線の言い草で、ジュリアが一步前に出た。

「応援に来たヤツの言い方じゃねえだろ。志波、がんばれよ。クラ

スの皆も応援してっからよ」

ジュリアの下手すぎる言い方では、志波の機嫌を悪くしかねないの
でなんとかフォローを入れておいてやる。

「フフツ。2人共、ありがとう」

ふう。どうやら機嫌を悪くしたわけじゃなさそうだ。

その後、ジュリアを1人で残しておくわけにはいかなかったので俺も志
波の訓練の様子を見ていて、結局夕方まで狙撃科に居座っていた。

・・・その帰りのこと。

「結局、ずっと狙撃科にいちまったな」

「いいじゃない。たまには他の学科の訓練を見学するのも」

まあ、それはその通りだから俺は何とも言えないんだけど。

「・・・大丈夫よね？」

女子にしては低い声を、さらに不安そうにしたジュリアの声がまだ
冷える空気を震わせた。

「志波の事か？俺達が決める事じゃないだろ。でもま、あの調子な
ら問題ないと思うぜ」

正直、俺にはそんな事は微塵も解りはしない。でも、このままジュ

リアが不安そうにしているのは見たくなかった。

アドシールド当日、俺は狙撃競技の競技会場である狙撃科地下の狙撃レーンに来ていた。クラスのヤツらも結構いる。

だが、志波の姿はそこにはなかった。

俺はジュリアが志波を呼びに行ったのもうそろそろ出てくるだろうと思っていた。

そんな時、ジュリアから電話がかかってきた。周りには人が多かったので、人気の少ない廊下の隅に行って通話ボタンを押すと、ジュリアがひどく焦った様子でとんでもない事を伝えてきた。

『響哉、大変だ！ ㊦子が・・・・㊦子がどこにもいないんだ！』

俺はジュリアの言っている事が、一瞬理解できなかった。

TO BE CONTINUED.....

狙撃科の志波さん（後書き）

アドシールドⅡ誘拐のフラグという方程式ができ上がっていく感じがしますね。そんな事はないんですが。

響哉の唐変木ぶりは、ISの織斑一夏を参考にしています。あくまで参考であって、フラグを極端に乱立させることは控えるつもりです。早く8巻出ないかな。

この小説における時任さんのプロフィールを掲載させておきます。

時任ジュリア

東京武偵高2年A組 超能力捜査研究科Aランク

身長172センチ 能力-脳波計

ロシア人とのハーフ。ファンクラブができるほどの美貌と、高い偏差値を誇るまさに才色兼備の天才。

原作では友人関係は皆無となっているが、本作では響哉と出会った事によりまだ少しだけであるが友達がいる。狙撃科の志波妹子もその1人。ひそかに響哉に恋心を抱いている。

使用拳銃はマカロフ。

こんなところでしょうか。志波さんのプロフィールもそのうち掲載すると思います。

教師の優しさを知る時は、なにも卒業した後だけじゃない（前書き）

火曜からテストがあるので更新ペースが落ちると思います。申し訳
ありません。

今回は短いです。

教師の優しさを知る時は、なにも卒業した後だけじゃない

『響哉、大変だ！ 亘子が…… 亘子がどこにもいないんだ！』

いつもの冷静そのもののジュリアの声は、今はひどく焦っていた。その事実が、今の状態の異常さを物語っていた。

「ジュリア！ 落ち着け！ 状況を説明しろ！」

しかし、落ち着けと言う俺自身も、落ち着いてなどはいなかった。

ジュリアが志波を捜しに行った時間と今のジュリアの焦りようから、控室をはじめトイレや他に志波が行きそうな場所を一通り捜して、それから俺に電話をかけてきたんだろう。このやり取りから第六感がそう告げてきた。なんだか最近便利能力になってきてるな。

いや、そんな事は今はどうだっていい。問題は、志波が今どこにいるかだ。

『亘子呼びに控室に行ったら居なかったから、他に亘子が行きそうな場所を捜したんだけど…… そのどこにも、亘子はいなかったの。それで、どうしたらいいか分からなくなって……』

『

・・・俺に電話してきたってことか。本当に第六感の仮説通りだったよ。

「ジュリアはもう一回、志波のヤツが行きそうな場所を捜してくれ。俺は南郷に志波の順番を後にしてもらえるよう頼んでくる」

俺は一度電話を切って、南郷のケータイに電話をかける。何かあった時にとプリントに書かれていた番号を登録しておいてよかった。

『・・・誰だ』

南郷の野太い声が聞こえた。

「強襲科1年の朱葉です。狙撃競技代表の志波が行方不明になりました。順番を後ろの方に・・・」

『それはできない』

俺が最後まで言う前に、南郷は低い声でそう言った。

『朱葉、よく聞け。アドシールドでは稀に、競技開始直前に代表選手がどこかに隠れてしまう事がある。大衆の目の前で狙撃するとう、本来なれない事をするに抵抗と重圧を感じるのだろう。だが、そうなった場合は補欠の選手を出場させることになっている。30分以内に志波が現れなかった場合、志波の代わりに補欠の選手を出場させる』

「・・・なっ!？」

南郷の言葉に、俺は我が耳を疑った。志波が狙撃競技の練習スナイピングをしている時、南郷も近くにいた。コイツは基本無表情だが、あの時はちよっと誇らしげな顔をしているようにも見えた。少なくとも、俺に

は。

だが、どうやらそれは俺の見間違いだったようだ……………。

『朱葉。今回のような場合は、誘拐、もしくは監禁のケースもごく稀にだがある。よってケースD7を発令する』

ケースD……………。

それは、アドシールド期間中に、武偵校内で何らかの事件があった事を表す符丁だ。

だが、D7とは、『事件であるかはどうか不明で、連絡は一部のみに渡る。なお、保護対象者の安全を確保するため、みだりに騒ぎたててはならない。武偵高側は当初の予定通りアドシールドを継続し、事件は極秘裏に解決せよ』というものだ。

おそらく、これが南郷個人でできる事の限界なのだろう。

『見つけ次第、連絡を入れる』

南郷のその言葉を最後に、電話は切れた。

……………口ではああ言いながらも、生徒のことにも心配してんじゃないか。

だが、現実ほとんど最悪だ。

志波の順番は変わらなかったし、搜索も極秘裏となるとその規模はあまりにも小さい。

「ちくしょう。応援くらい、やらせろよ……！」

俺は、誰に言うでもなく、そう呟いた。

志波がいなくなった事を周知メールで知った狙撃科の応援団は、全員がひどく慌てていた。

いや、全員ではない。その中で1人だけ、僅かにではあるが笑みを零す生徒の姿があった。

その生徒は、今年のアドシアードの狙撃競技に、補欠として選ばれた3年生だった。

（1年の分際で、1年の分際で………！）
その生徒は、まるで呪うかのように心の中で呟き続けた。

………まるで、亡霊のように――。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.
.
.
.

教師の優しさを知る時は、なにも卒業した後だけじゃない（後書き）

ラストに出てきた3年生、当たり前のようですが原作では出てきません。おまけにこのような事件も原作ではありません。完全にオリジナルです。アドシードという事もあって、なにか事件を書きたいなと考えた挙句、志波さんには監禁されることになりました。でも、なんかありそうですね。補欠に選ばれた人が代表を出れないようにして自分が出るっていう。大体は振り返ちにされそうですけど。

そんなカンジでまだ続きます。次回で解決するとは思いますが。テスト勉強もあるので、今日明日は1つか2つ程度しか更新できそうにありませんが、応援よろしく願います。

「なんでお前がここに……」（前書き）

タイトルの意味は、最後まで読むと分かります。ちなみに4人しかキャラは出てきません。響哉とジユリアと志波さんと……あとは秘密です。

ちなみに、響哉の第六感の現在の能力をまとめておきます。

視覚だけでなく聴覚でも発動できるようになり、今まで見たり聞いたりした情報の中から矛盾を見つけられる。気配で相手の存在を把握できるようになったが、曖昧な為実用性は薄い。

戦闘では相手の動きさえ見ればどこを攻撃してくるか察知できる。そして決定的なのが僅かな重心の移動からのタイミングで攻撃してくるかが解る。ただし、まだ体がソレに追いつけていない。

また拳銃の角度から射線を読むことも可能。最近の射撃訓練によって身体より先に脳が覚えた。

遠山金一との訓練の成果かその戦闘能力は非常に高い水準に達していて、教務科だけでなく武偵局、武偵庁も目を付けている。超人ランクにも100位圏内に入っている。しかし本人はそんな事は全く知らない。

勉強に使えばとんでもない効果を発揮するのだが、一般の授業はほとんど寝ているためか点数は赤点スレスレ。偏差値は校内で40に届かない。

こんなところでしょうか。ちょっと強すぎた気もしないではないですが、まあ超能力者や妖怪なんかと闘うにはこれくらい必要という事をお願いします。

「なんでお前がここに……………」

ケースD7が発令されたという周知メールが来る前から、俺は狙撃科棟を飛び出して志波を捜しまわった。

ジュリアが志波が行きそうな場所を捜しているので、俺は志波を隠しそうな場所を捜していた。

つまり、^{ひとけ}人氣が少なくて、物を隠す場所が多い場所。

これだけ搜索範囲を限定すれば、ひょっとしたら見つかるかもしれない。

いや、そうじゃない。見つけるんだ。絶対に。

俺はまず、第2グラウンドの体育倉庫に向かった。だが、そこには誰も居なかった。

次に、車両科^{ロシ}の倉庫の中を調べた。だが、そこにも志波はいなかった。

残り時間は……あと、15分……。

この他に体育倉庫や用具入れは、まだ4つ以上ある。狙撃科のヤツらや龍達にも搜してもらっているが、まだ連絡は入ってきていない。

となると、学園島にはもう、志波はいないのかもしれない。

……いや。まだ搜していない場所が、残っている。

それは、俺の足の下。つまり地下。

『ジャンクション地下倉庫』だ――。

武偵高には、3大危険地域と呼ばれる、生徒は滅多な事が無い限り近寄りたくない地域エリアがある。
鬼の巣窟こと教務科マスターズ。地獄の1丁目である強襲科アサルト。そして、もう1つが……。俺が今から行こうとしている火薬貯蔵庫、地下倉庫。

幸い、この車両科の立体駐車場には地下倉庫直通のエレベーターとハシゴがある。

だが、この先は合計7階層にもなる巨大な地下空間だ。エレベーターで行った先に志波がいるかどうかなんてわからない。

俺はエレベーターを使わず、ハシゴを使う事を決意する。

マンホールの様になっているハシゴ用の扉は、浸水時の隔壁の役割も果たしており、パスワード認証、カードキー、非接触ICコンタクトレスを使って扉を開け、俺はすっかり錆びついたハシゴを滑るように降りて行った。

降り立った地下1階はボイラー室で、志波が隠れられるようなスペースは無かった。

俺はそこをスルーし、同じように扉を開け、地下2階へと降りた。

「志波ー！いるんなら返事しろー！」

しかし、志波の返事は無かった。気絶させられているのかもしれないが、生憎捜しまわれる時間は無い。俺は地下3階へと降りて行った。扉を開けんのが面倒くせえ。

だが、地下3階、4階、5階にも、はたまた地下6階にも志波はいなかった。

「ってことは、あそこしかねえか……」

このただっ広い地下空間の最下層。3大危険区域、地下倉庫の指す、本当の危険区域。

地下7階……火薬庫だ。

俺はブレン・テンの安全装置セーフティを確認し、志波を捜しに行く。

「志波ー！いるかー！？」

俺がフロア全体に響くくらい大声でそう叫んだ時、

「ンー！ンー！ー！！」

志波の声が、確かに聞こえた。

俺はその志波の叫びを頼りに、火薬庫の中を駆け回った。DANG
ERやらKEEP OUTやらの警告が、赤い非常灯に照らされて
いる。恐ろしい光景だよ。

そんな火薬庫の隅に、大きめの棚でカモフラージュされていた志波
を見つけた。

志波は口をガムテープで塞がれていて、手足を縛られて動けなくな
れていた。

「ちょっと我慢しろよ」

俺は志波の口に貼られていたガムテープを一気に引き剥がした。

「志波、急いでここから出るぞ。あと5分しかない」

志波の手足に巻きつけられたロープを俺はナイフで切り裂いた。

そして志波の手を持ってエレベーターの前に向かった。

「あ……ありが、とう……」

志波は弱っているのか、その声に力は無かった。

「礼を言うのはまだだ。これから狙撃科棟まで間に合うかどうか……
……。それに、お前ライフルはどうしたんだよ」

今の志波は、何も武器を持っていない。丸腰だ。

「犯人に盗られちゃったみたい……。でも、狙撃科にある銃で
出場するから大丈夫よ」

「お前、それじゃあ……」

たとえば間に合っても、出場できても……。結果なんて、目に
見えてるじゃないか！

今日のために、念入りに整備してきたはずだろう。なにより中学時
代から使っていた自分の相棒だって言っていたくらいだ。いくらA
ランクといっても、今更他の銃なんて使っては本来の力の1割も発
揮できないだろう。

……。そんなのって、ねエだろ……。！

ガンッ

俺は、エレベーターの分厚い扉を殴っていた。

自分のことじゃない。しかし怒りが沸いてくる。理不尽すぎる現実

に、無性に腹が立つ。

手の痛みが伝わってきた時、エレベーターが到着した。

その扉が開いた時、俺は自分の目を疑った。

——幻覚じゃないか？目の錯覚じゃないか？

しかし、目の前にいた『彼女』は間違いなく本物で、現実にそこにいた。

「………なんで、お前がここにいるんだ
——!?」

エレベーターの中に乗っていたのは、俺の幼馴染だった。

2年前に、死んでしまったハズの。

TO BE CONTINUED.....

「なんでお前がここに……」（後書き）

志波さんがあつという間に見つかってしまったのと、まさかの幼馴染登場。しかし『彼女』は幽霊ではありません。金一さんと同じように、死んでいると思わせて実は生きてましたという事です。

本編で書けるかどうか分からないのでここに『彼女』と響哉の関係を書いておきます。

『彼女』は響哉と共に東京武偵高付属中学を受験し、合格しました。ですがその１年後、響哉に『彼女』は任務中に死亡したという報告が入ります。響哉は強い武偵となって『彼女』の後を継ぐために、父親に懇願して強くなったんです。

響哉も『彼女』も都内に住んでいましたが、『彼女』は少し距離のある武偵高付属中の寮に入ったこと、響哉がケータイを持っていなかった為に中学の時は全く連絡を取り合っていませんでした。

他にも細かい設定があるんですが、キリが無いのでこれくらいにしておきます。

アドシアードの話は次回かその次で終わります。その後はカナも出して派手にいきましょうかね。

「またすぐに会えそうだし」（前書き）

気がついたらお気に入り登録とポイントが上がってました。感涙です。

タイトルに統一性がないのはやっぱりまずいですかね。普通のだったり、台詞だったり、銀魂みたいだったり。今回は台詞ですね。とくに手直しは加えませんが。

「またすぐに会えそうだし」

「……なんで、お前がここにいるんだ……!!」

エレベーターに乗っていた『彼女』は、クスツと笑って俺を見ていた。

「そんなコワイ顔しないで。その……志波さん、だった？
コレ、あなたの銃でしょ」

そう言つて、『彼女』は志波にL118A1を渡した。

「あ、これ、私の銃です。ありがとうございます！」

志波はL118A1を受け取り、体の前で両手で抱え込んで礼を言った。大切な銃だというのが目に見えて分かる。ぎゅううつという音が聞こえそうなくらい力を込めているからな。

「早く行きなさい。外にバイクがあるから、ソレを使えば今からでもまだ間に合うわ」

『彼女』はそう言つてエレベーターから出て、志波を半ば強引にエレベーターの中に入れた。

「あの！あなたと響哉君は……!!？」

「……俺達は、後から行く。先に行つててくれ。応援には、

駆けつける」

エレベーターの扉が閉まり、火薬庫には俺と『彼女』だけが残った。

「3年ぶりね、響哉」

『彼女』のよく透き通る高い声が、非常灯に照らされた地下倉庫に響く。

「……3年経っても、外見も、雰囲気も変わっても……俺には解るぞ」

——
彩香^{さいか}………」

『彼女』……彩香はフツツと笑みを零した。

「あの志波さんの先輩、どうなるのかしら。理不尽で自分勝手な理由で後輩を夜襲して監禁したりして、武偵3倍刑で再起不能になっちゃうまで痛めつけられるのかな？それともウワサの体罰フルコースっていつのを受ける事になるのかしら？ねえ、響哉はどっちだと思う？」

綺麗な笑顔のまま、彩香は背筋がぞつとするような事を言ってきた。

「……さあな。俺には分かんねえよ。……お前が、変わっちゃった理由もな」

昔の彩香は、3年前の彩香は、力無き人を守りたくて、この世にはびこる悪を失くしたくて……。そんな子供じみた、でも紛れもない純粋な正義から武偵になった。

だが、そんな昔の彩香は今は見える影もない。この3年間で、彼女は変わってしまった。身も、心も。

「変わったんじゃないくて、成長したんだよ。辛い、辛い、現実を知って……」

「……それを『成長』と言えるとは、俺には思えないな」

彩香は、終始笑顔のままだった。赤い光に照らされて、その整った顔立ちを見ると逆に恐怖心が生まれてくる。

「響哉は知らないだけ。だから、教えてあげる。2年前、何があったのかを」

彩香は、そう言って語り始めた……

同時刻、志波は地下から脱出し、車両科の立体駐車場^{ロジ}に出ていた。
そこには、2人の見知らぬ女性がバイクの横に立っていた。

ショートヘアの女性は身長が高く、柔らかそうな物腰をしている。

もう1人の長髪の少女は、どういう訳か頭以外をトレンチコートで身体を足まで隠していた。

「やあ、君が志波斗子さんだね。話は聞いているから、コレを使っ
て行くといい」

背の高い女はそう言っただけで横にあつたバイクを指差した。

「あ、さっきの人の知り合いの方ですか？ありがとうございます
！これで競技に出場できます！！」

「お礼なんていいから。さあ、早くしないと時間に間に合いません
よ」

「あ、そうですね！このお礼は後で必ず返します！」

志波は2人に頭を下げ、バイクに乗ってその場を後にした。

「ヒナ、さっきから一言も喋らなかつたけど、具合でも悪いの？」

「・・・別に。アヤメがずっと喋りっぱなしだったから話しかけ
るタイミングを失くしただけ。それに・・・アヤメは何か
やってないとすぐに人を殺し始めるから」

「あら、わかってるじゃない」

アヤメと呼ばれた女は、ヒナと呼んだ少女にニコツと笑いかけた。

「やれやれ……顔はイイのに中身がコレじゃあ、いい相手なんて見つからないよ」

「本当にマセてるわね。ヒナの方こそ、その身体でお嫁に行けるの？」

アヤメがニヤけながらそう言うと、ヒナは、バツとその大きなコートを払い……

ドガシャアアン！

アヤメの後ろにあった車を、その機械腕マシンアームによる掌打で叩き飛ばした

！

「相変わらず、子供ねえ」

ヒナによって壊された車は殴られた所が大きく凹み、焦げついていた。

「大きなお世話だ」

ヒナはまたコートでその大きな機械腕を隠した。

「あらあら・・・あんまり騒がないようにって言うておいたのに。仕方ないわね」

駐車場の奥から、高い声が聞こえた。

「これは、アヤメがからかうからで・・・」

「おいヒナ！やったのはお前だろ！・・・彩香さん、もういいんですか？3年ぶりに合う幼馴染なんでしょう？」

「ええ。でも、今の彼にはちょっと刺激が強すぎちゃったみたい」
それに・・・と続けながら、彩香は外へと出ていった。

「またすぐに、会えそうだし」

同日夜、台場のクラブ・エステーラでA組による打上げが行われた。

「惜しかったな、忬子。もうちょっとで金メダルだったのに」

喧し過ぎる店内で、時任ジュリアと志波忬子は並んでジュースを飲んでいた。

八雲戒が一発芸でドン引きされているが、この2人はそんな事を全く気にせずにいる。

「それにしても、許せないな。あの先輩。代表に選ばれなかったのは自分の実力が無かったからだなのに、それを周りのせいにして……！」

志波は、競技に間に合った。その時にやたら張り切って準備していた3年生がいたのだが、志波が来た時にボ口を出して南郷に連れて行かれた。なんとも後味の悪い話である。

「それにしても、あの人たち誰だったんだろう。響哉君の知り合いだったみたいだけど……」

「ああ。例の3人ね。幟子のライフルを探し出してバイクまで用意してくれたなんて、いい人って現実にいるものね」

「そういえば響哉君、応援には来てくれたみたいだけど、演奏の時はいなかったよね？」

「そうね。まったく、私のチアの姿をそんなに見たくなかったの？」

「それは違うと思うよ……………」

ジュリアはコップに入ったジュースを一気飲みしてはあと息をついた。

（響哉、幟子の応援の時も上の空だったし……何かあったのかな……………？）

クラスメート達が騒ぐ中、ジュリアは1人、響哉の異変に勘付いていた。

同時刻、強襲科第2男子寮のとある1室……。

響哉は、打ち上げに行かずに寮に戻っていた。明かりも点けずにテレビの電源を入れ、しかしその目は虚ろで、テレビなど見てはいない。

「……俺のせいだ……俺が……あのとき……」
自分以外誰もいない部屋で、響哉は呪文のようにぶつぶつと呟き、眠れない夜を過ごした。

翌日、響哉は学校を休んだ。ジュリアや龍をはじめ多くのクラスメ

イトが心配したが、今の響哉には誰の声も届かなかった。

T O B E C O N T I N U E D

「またすぐに会えそうだし」（後書き）

響哉が壊れてしまいました。果たして響哉は復帰できるのでしょうか？早くオリキャラを出したいし、カナと一緒に大立ち回りをさせたいのですが、もうちょっと先になりそうですね。

次回は過去編になります。彩香が響哉に話した2年前ですね。視点は3人称になると思います。今回のラストみたいに。

アヤメのイメージは、めだかボックスの宗像形と志布志飛沫を足したようなカンジになります。「人をすぐに殺したがる」というヒナのセリフから分かった人も多いと思います。

ヒナの方は、なんとハヤテのごとく！の桂ヒナギク（幼少期）です。あくまで外見的なイメージで、性格と身体は作者の思いつきですが。彩香の方は・・・これまためだかボックスの安心院なじみです。名前は・hackノLinkの天城彩花をもしりました。

3人のプロフィールもネタバレにならない程度ですが掲載しておきたいと思います。

あと、8話で書いた鑑識の話ですが、原作にはそのような描写はありません。完全に作者の妄想です。後書きに書き忘れていました。大変申し訳ありません。

過去編って突然入ると別の話に見える事がある（前書き）

タイトル通り、過去編です。テスト前に何やってんでしょぅね・・・

視点は3人称で、ほとんど彩香しか出てきません。

過去編って突然入ると別の話に見える事がある

2年前のこと。

夜の港に、2人の武偵の姿があつた。

いや、正確にはまだ武偵ではない。その内の1人、彼女……。秋山彩香は東京武偵高付属中に所属している、武偵候補生だ。その手には、まだ真新しいグロック19が握られている。

「秋山、緊張するな。いくら初めての依頼クエストだからって、そんなに緊張する事はないんだぞ。ホントなら、こんなボロ倉庫に警備なんて必要無いんだし」

彩花より歳が上の、慣れているような雰囲気を持ったもう1人の男子がケータイでメールを打ちながら言った。

「そうですけど、私、1年の頃から成績悪いし……。初めての依頼で失敗するわけにはいかないんです!」

「ふーん……ま、変な問題だけは起こすなよ」

彩香は、武偵高付属中の入学試験の時一緒に受験していた幼馴染の朱葉響哉のためにも、立派な武偵とならなければと思っていた。風の噂によれば、響哉は頑張って身体を鍛えているらしい。

だから、響哉が武偵になった時、そのそばにいて助けてあげられるようになる事が彼女の目標だった。

だが、現実とは残酷なものだ。

彩香は確かに入試に合格した。しかしそれは、合格ラインギリギリだった。入学した後も、女子という事も差し引いても格闘は人並み以下。射撃は9mmパラベラム弾の反動ですらブレる。まさに『おちこぼれ』だった。

しかし武偵になる夢は捨てきれず、弱いながらも必死に周りに喰らいついていった。

正義のため、非力な人を守るため、そして何より、かけ替えの無い幼馴染のために――。

そんな彼女が2年になって少し経ったある日、教官から民間の依頼を受けても良いと言われた。

本来なら1年の冬にはその許しが出るのだが、彩香の場合は力量の低さから遅れに遅れてしまった。

それに、受けても良いとは言われたがその依頼はどれも危険度の低い、というより皆無の、簡単なものばかりだった。

だが、今の彩香にはそれはどうでもいい事だった。

少しずつ、少しずつ成長している事が実感できるようで、自分も同期でもっと危険な依頼をいくつもこなしていると有名な男子生徒のようになれると信じていたからだ。

彩香が倉庫の警備をするために入口の辺りから裏に回ると、大型のトラックが倉庫に入っていた。

「・・・・・・・・」

彩香は、好奇心で裏口から倉庫内に入り込んだ。解錠は武偵の基本、スニーキングもまた然りだ。

そこには、さつき入っていたトラックと、4人の男がいた。その4人の内2人は依頼主^{クライアント}なので、彩香はきっと依頼主の知り合いなのかと思った。

「おい！さつさと運ぶぞ！」

男の1人がそう言うのと、他の3人は「へいッ！」と大きな声で返事をし、倉庫内の積み荷をトラックに積み入れ始めた。

その光景をなんとなく見ていると・・・・・・・・

ゴトツ

男達は重ねてあった積み荷の上の方を落としてしまい、その中身が出てきてしまった。

「何やってんだー！」

「すみませんッ！」

男はすぐにその出てきたモノを積み荷の箱に片付け始めた。

彩香はなにやってんだか……と呆れるようにその光景を眺めていた。

「仕方ない。手伝ってあげよう」

彩香は見えていられなくなり、4人の方に歩き出した。

「すいませーん、手伝いまー……す？」

4人は、彩香を見た瞬間凍りついた。ある者は焦り、ある者は恐怖した。

彩香は、そんな4人の視線を一身に浴び、目を逸らす形で4人の足元に落ちていたモノを見た。

「……え？」

彩香が見たのは、——合成麻薬《MDMA》だった。

バン！

次の瞬間、彩香は男の1人によって、撃たれた。

「キヤアア！」

防弾制服のため致命傷ではないが、その衝撃は13歳の身体には痛すぎる物だった。

「クソ！なんでこんなところに武偵が……！オイッ！トラツクを出す準備をしろ！」

彩香に発砲した男は、他の3人にそう伝えた。

「コイツはどうしやす？」

「殺^{消す}すに決まってる」

バァン バァン！

男のS&W M360Jの銃口から、2発の銃弾が放たれた。

それを彩香はモロに受けてしまった。未だに何が起こっているのか解らない彩香は、回避も何もせずになだやられるだけだった。

それから酷かった。

男の拳銃弾が尽きた後、鉄パイプで男4人がかりで彩香を殴り、痛めつけていたのだ。

男達も混乱していたのだろう。その行為は無為そのものだった。
この場合だと彩香のグロック19を奪い、頭を撃ち抜くのが彼らにとっての最善だろう。しかしそれをやらなかったのは、捕まる事への恐怖からだというのが容易に想像できる。

しかし、彩香はそうはいかなかった。身体を丸め、男達の鉄パイプの連打が止むのをじっとこらえていた。その小さな体は青いアザがいくつもでき、頭からは血が流れている。

彩香が、その意識を深い闇に投げだそうとした時……………

ファンファンファン———！

パトカーのサイレンの音が、倉庫の中に聞こえてきた。

「ヤベエ！ズラかるぞ！」

男たちはトラックに乗り込み、倉庫を出ていった。

だが、このパトカーは偶然近くを通ったというだけで、彩香が倉庫の中で死にかけている事など、もう1人の男子すら知る由はなかった。

「……………し……………らせ……………な、きゃ……………」

最後の力を振り絞り、倉庫の外に出ようと彩香は這いずって外に出た。

しかし、そこには誰もいない。男子生徒はこの時、倉庫の近くにはいなかった。彩香を捜しに裏の方に行っていたのだ。

「……だ……れ、か……」

「——随分と、辛そうだね」

今にも力尽きそうな彩香の前に、さっきの4人とは違う、歳は20代ほどで180近い長身。整った顔立ちとそれに似合うオールバックの髪型。そしてなにより、只者ではない風格が漂っていた。

「力無き正義は無に等しい——。そう、思わないかい？」
男は彩香に囁いた。しかし、彩香にはその囁きに答えられるほどの力は、もう残ってはいなかった。

「私についてくるといい。君ならば、どこまでも強くなれる。この世の悪を挫き、か弱き者も護り、なにより大切な人を助けられるようになるために……」私に、ついてきなさい」

今、死の淵に立たされている彩香に、その言葉はまるで魔法のように力を与えた。

さっきまで喋る事もままならなかったのに、彩香はボロボロの身体で立ち上がり、しっかりとした口調で言い放った。

「あなたに、ついていきます！そして、強くなってみせます！」

いったい、何が彼女をこうまでさせたのか。さっきまで瀕死だった彼女のどこにそんな余力が残っていたのか。その答えはきっと、永久に解らないのだろう――。

その後、男子生徒によって倉庫内から彩香の血液が発見され、しばらくして今回の依頼主が麻薬密売組織だった事が明らかになった。彩香は倉庫の中で麻薬をトラックに運んでいた光景を偶然発見し、返り討ちにあつたものと断定。遺体は発見されなかったが彼女の血が海に続いていたことから密売組織の人間に海に投げられたとして処理された。

結果、彼女はその任務中に起こった異常事態に勇敢に立ち向かったと称され、東京武偵高付属中学殉学者名簿にその名を刻むこととなった。

そして、現在・・・・・・・・・・。アドシアードの翌日。

朱葉響哉は学校を休み、1人広い寮の部屋に籠っていた。

彼は、彩香が変わってしまった事を自分の責任だと感じていた。

『あの時俺も合格していたら、彩香は変わらずに済んだ』と。

2年前にも彼は同じような事を考えていた。

『自分が隣にいたら』、『あの時一緒に合格していたら』、『自分がもっと、強かったら』と。

だからこそ彼は強さを求めた。あの時感じた不甲斐無さを、もう二度と繰り返さない為に。

しかし、父親に鍛えられ、あの時とは比べ物にならない強さを身につけたと思っていたのに、待っていたのは2年前と何も変わらない不甲斐無さだけだった。

人に過去は変えられない。しかし過去を恨む事はできる。響哉は過去の自分を、殺したい程に憎んでいた。

そして、彼女が昨日最後に言った言葉を思い返した。

「響哉……あなたも、『イ・ウー』においてよ」

過去に別れた2人は、それぞれの人生の歯車を狂わせる――。

――まるで呪い合つかのようだ。

TO BE CONTINUED.....

過去編って突然入ると別の話に見える事がある（後書き）

短くまとめられそうになかったので、彩香のいなくなった理由は過去編という事にしました。

彩香はイ・ウーに入学した後、アヤメやヒナと知り合って行動を共にし始めます。ちなみに2年前の彩香のランクはEでした。

ですが、イ・ウーで教育された彩香は、すでにジーサード並の戦闘力を誇っています。ジーサードがどれだけ強いのかは不明ですが・・・とにかく強いという事で。

正直、こんなに早く彩香達を出す予定はありませんでした。ですが、何かに付けて登場させたかったので予定を繰り上げて登場させてもらいました。監禁事件もあっさりしすぎちゃいましたしね。

そういえばその監禁事件の犯人こと先輩ですが、彩香の予想通り体罰フルコースを御馳走になりました。本編では書けないだろうと思うのでここに載せておきます。

とっつぁんは本当は天才なんだそうだ（前書き）

今回はオリジナルキャラの登場と、響哉復帰のきっかけのお話です。
まあ新キャラの方はタイトルからすぐに想像できそうですが……
……。他の小説で同じような人が出ていたら教えて下さい。

それでは本編どうぞ。

とっつぁんは本当は天才なんだそうだ

アドシアードから1カ月経った6月下旬、俺は今まで通り普通に学校に通っていた。

一般教科はいつものように熟睡し、専門科目も民間の依頼もそつ無くこなしていた。

ただ、1つ変わった事がある。

それは、何をやっても何も感じなくなってしまったという事だ。

今までだと、金一さんに撃たれたら「何この人鬼畜!？」とか考えていたのに。射撃訓練で思った所に銃弾が当たって嬉しいと感じていたのに。今はそんな感情は、微塵も浮き上がってこない。そしてなにより、依頼を終えた時のあの達成感が無くなってしまった。

武偵なんて、もう辞めたい。でも、他に行くあてが無いから辞められない。だから、せめて鈍らないように最低限の訓練はする。この1ヵ月、俺はそうやって過ごした。

そして、今日も俺はそんな宙ぶらりんな考えを持って、俺はいつものように強襲科の黒い体育館に入っていた。

あの時の俺は、自分のことで精一杯で、他人にかまっていられる余裕なんてなかった。

だから、射撃訓練場に来た時は周りに目もくれず、ただひたすらに訓練に打ち込んだ。

今は、適当に的に当てたら、後ろに下がって他のヤツが撃っているのを眺めているだけ。そんな無為な事を、1カ月も続けてきた。

最近、金一さんが例の事件の調査で学校を休んでいるのもあって、俺にどうこう言うヤツはほとんどいなかった。

そんな時、俺の目の前のレーンに、大柄の男子生徒が訓練を始めた。

使っているのは、『コルト・ガバメント A1』か……。日本人には反動がでかい・45ACP弾を使っているが、あの図体なら問題ないだろう。

他にも射撃訓練をやっている生徒が大勢いるのと、白兵戦の訓練も近くでやっているため、銃声と剣戟の音が体育館の中に響いている。

そんな中、大柄の男はその年季の入ったガバメントで射撃を開始した。

撃った銃弾は合計7発。ちょうど1弾倉分の数だ。

しかし、的には弾痕が1つしか着いてない。それを見た3年と思われる男子生徒2人が、隣のヤツと指差して笑っていた。

「おい、オマエ！いくらガバメントだからって7発も撃って1発しか当たanneエのかよ！？下手くそにも程があんぞ！ヒヤハハハ！」
しかし大柄の男は、一瞬彼らの方をただけで、まるで何事もなかったかのように弾倉を取り替えた。

「……テメエ、調子乗ってんじゃねエぞ——！！」
3年の1人が、大柄の男に殴りかかった。

……以前の俺なら、横槍に入ってこの騒動を鎮めていたかもしれない。

だが、今の俺には、どうしてもよく思えてしまう。どうせ他人事だ。それに——

——アイツには、どうせ傷1つ負わせることはできないの
だろうから。

大柄の男は3年の拳を掴み、捻って関節を極めた。そして次の瞬間にはポキッと小気味の良い音がしてその先輩の肩が脱臼した。

「ぎゃああああ!!?」

「このヤロ……ブゴはあ!!?」

もう1人の3年も、世紀末救世主伝説に出てきた雑魚のような声をあげて顔面を殴られた。

3年2人を、一撃。

今思い出したのだが、アイツは俺と同じ1年だ。名前はたしか……
・・・銭形、平士。かの有名な銭形平次の子孫だ。

ただ、この男……周りに合わせるとか、全くしない。先輩だろうがなんだろうが、自分の邪魔をしたりするヤツには容赦しない。それゆえに、過去に何度も先輩と揉め事を起こしている問題児だ。

ちなみに、格闘センスだけでなく射撃の腕も超一流だ。的に弾痕が1つしか無かったのは、7発全ての銃弾を寸分の狂いなく同じ個所に撃ち込んだから。知りたくもなかったが目に入ってしまったために第六感が教えてくれたよ。

「おうおう！なんつうザマだア！？3年が2人もよオ！」
「…………この声は…………！」

俺の視界に入ってきたのは人間バンカーバスター、蘭豹だった。最悪だ。よりもよってこんなタイミングで…………。

「まったく、1年相手に下負けしとんなや！こん中で銭形コイツと闘ヤれるよ
うなヤツはおらへんのかア！？」

蘭豹はドウツとその手のM500を天井に発砲した。パラパラと天井の欠片が落ちてきたが、どうやって修理する気なのだろうか。

「…………まったく、この根性しょう無し共が！おい朱葉！お前しやう来んかい
！」

もう一回ドウツ！俺の頭上に50マグナム弾がめり込んだ。

「……………何で俺が…………」

「ええからさつさとせえ！今度はその脳天ブチ抜くぞ！」
「…………蘭豹なら、本気でやりかねんな。」

そんなこんなで俺は今、スケートリンクみたいな強襲科の闘技場コロッセオに、銭形と相対している。さすがの銭形も蘭豹に逆らうようなマネはしないらしい。

「やれえええ！ぶつ殺せエエエ！」

ギャラリーの汚いヤジに俺は溜息をつくしかないが、そのヤジを言っていたのが蘭豹だった事に気づき、さらに俺は溜息をついた。さつさとクビになってしまえばいいのに。

「はじめえ！」

ドウツと本日3度目になるM500の銃声が合図となり、俺と銭形は何の話し合いもなされないままに戦闘開始となった。

なんで、よりもよってコイツなんだ……。

コイツは・・・銭形は3年前、中学の入試でいきなり俺を戦闘不能にしたヤツなのによオ・・・。

T O B E C O N T I N U E D

とつつあんは本当は天才なんだそうだ（後書き）

ちなみにこの銭形平士、とつつあんの直系の御子息ではありません。とつつあんの弟の子供です。つまり、甥っ子ですね。

射撃、格闘技、逮捕術などさまざまな訓練を刑事を引退したとつつあんから小さい頃から伝授してもらっています。よって、めっさ強いんです。味方でカナと並ぶチートキャラになるはずです。

ライバルであると同時に主人公がもっとも気を許す仲間が欲しいと思ったので、頑張りました。リュパン（ルパン）の子孫もいるんだから、とつつあんもいるだろうということ。

細かい設定はそのうち載せておきます。

殴り合いで友情が生まれるなんてうまい話はそうは無い（前書き）

はい。タイトル通り、そういう話です。最後までベッタベタの展開ですが、楽しく読んでもらえると嬉しいです。

気になる銭形の実力ですが、カナには当たり前ですが及びません。ただ敵と闘う時はカナ並の活躍をするというだけです。

殴り合いで友情が生まれるなんてうまい話はそうは無い

始めに動いたのは銭形だった。

いや、正確には俺が後から動いたと言うべきか。俺の基本は相手の動きを第六感で先読みしてからのカウンターだからな。

銭形はガバメントで俺の右膝を狙っている。視線、銃口の向きでそれくらいなら解る。

わざと負けてやっても良いのだが、それだと蘭豹にボコボコにされるのでそれなりの力を出して勝負しなければいけない。

なので、俺は右脚を引いてヤツのガバメントの射線から外れ、右手でブレン・テンを抜きそれを左手に持ちかえて銭形の右膝を撃つ。

しかし、銃を持ちかえた事により生じたタイムラグによって銭形は俺が撃ってくる事を察知し、回避行動をとって再度ガバメントで撃ってきた。狙いは俺の拳銃^{ブレン・テン}。しかし俺にはソレが解っているので銭形の銃弾を前転するように回避し、回避している間に銃を右手に持ちかえて銭形の方に向けた。

だが、銭形は俺が避ける事を読んでいた。

撃った瞬間に凄まじいスピードで駆け出し、左手で防弾制服の中から十手を引き抜き、ソレで俺の頭部に無駄の無い動きで殴りかかるうとしてきた。

「——っく！」

俺は左手でガード姿勢をとり、十手から頭部を守ろうとする。

同時に、ブレン・テンの銃口を銭形に向け、この茶番を終わらせようとしたのだが……………、

「……………考える事は、同じだったな」

銭形も、右手のガバメントを俺に向けていた。

俺達は、そのまま黙って硬直していた。

……………と思いきや、不意に銭形が喋り始めた。

「ああ、思い出した。お前、昔俺に負けたヤツだろ」

「・・・・・・・・だったら？」

「昔より強くなってたし、何か雰囲気も違ってたから思い出すのに時間がかかった」

「・・・・・・・・何が言いてエ！」

「バァン！」

俺は、ほぼ無意識に引き金を引いていた。

だが銭形はサツとその銃弾を避け、十手で俺の銃を弾き飛ばした。

「おい・・・・・・・・この程度なのか？」

銭形は、まるで玩具に飽きた子供のような眼差しで俺を見ていた。

「本気出せよ。本気出さねえで決着^{ケリ}着けちまったら、勝っても負けても後味が悪い」

「んだとテメエ・・・・・・・・！」

ああ・・・・・・・・俺は今、自分でも引くくらい酷い顔をしているに違いない。銭形が言っている事は・・・・・・・・正しい。本気で勝負をしないのは、相手にとって最大の侮辱だ。

……でも、今の俺には、そんな事はどうだってよく思える――

――はず、だった。他人から何を言われようが、何とも思わなかったのに……。

「さっきから見てりや、辛気臭い面^{ツラ}しやがってよオ。見てるこつちまでイライラしてくんだよ」

なのに、コイツに説教されると……何故だか無性に腹が立つ！

「……さっきから黙って聞いてりや、好き勝手言いやがって……いいぜ！本気で相手してやんよ！後悔すんなよ、このボケエ！」

——ああ、俺よ。他人^{ヒト}に、こんなに大声で叫

んだのは、いつたい何年ぶりだ？

「そつだ！お前の本気を、見せてみやがれエ！」

——ここまで心の内を曝け出したのは、いつ以来だ？

ダァン　ダァン！

銭形のガバメントが火を吹く。しかし、俺はその銃弾を紙一重で避けながら駆ける。

そして十手による殴打を喰らいながらも、お返しと言わんばかりに顔面にパンチを浴びせる。

だが銭形もソレに耐え、十手を捨てて素手で俺の顔を殴る。

第六感でくることは解っていた。しかし、俺はあえてソレを受けた。そして、今度は鳩尾を思いつきり殴った。

銭形はその腫れた顔を苦痛に歪ませるが、すぐにその歪みは悦びのそれに変わった。

「——さっきの礼だ！」

ボゴォ！

銭形の拳が俺の腹にめり込んだ。

そこからは、ただの殴り合いだった。

お互い拳銃を捨て、その他の武器も使わず、ただ己の拳だけで闘った。

まあ実際は、単に俺が銃やその他の武器を持っていなかった事に銭形のヤツが合わせただけで、大昔の少年漫画みたいに『お前、やるな』『お前もな』というようなものではない。最後は結局蘭豹に「飽きた！」と一蹴され、2人共気絶させられた。周りからは「ええ………」という雰囲気、蘭豹KY説が浮上した。

・ んで、今俺は全身打撲で武偵病院に入院しているのだが……

「おい！これは俺の見舞い品だ！お前が喰うな！」

「うるさい！怪我人は大人しくしてろ！」

「お前だつて怪我人だろーがア！」

幸か不幸か……不幸の方で。なんと銭形と同室になってしまった。
4人部屋に2人で。おまけにベッドは隣同士。誰の陰謀だ？

銭形、^{コイツ}ジュリアが持ってきた俺の見舞い（主にフルーツの詰め合わせとか）を盗み食いしてきやがる。とんでもないヤツだ全く。

「病院では静かにしろ!!」

そして、病院で絶対に1人はいるような超怖い看護師に怒鳴られ続ける毎日。なんで部屋一緒なんだよ。

そんな俺と銭形の入院生活も、もうあと数日で終りを迎える。銭形より後に退院するなんてまっぴらご免だったが、一緒に退院すると医者から聞いたはお互い吐気がした。

で、今銭形は昼寝していて、俺は窓の外を眺めている。蝉の鳴き声がもう夏だという事を告げてくる。そういえば、もう7月だったな。1カ月前に彩香と会ってから、まるで止まっていた時間が動き始めるように、俺は外の景色を見た。あれからは外を眺めている事が多かった。だが、見てはいなかった。1カ月ぶりに見た外の景色は、もう完全に夏のモノだった。

コンコン

「響哉、入ってもいい?」

ジュリアだ。毎日毎日よく来るよなお前。生徒会とか大丈夫なのか?

だが、1つ言わせてもらおう。入ってから入室許可を求めるな！

「銭形は寝てるの？」

ジュリアは俺のベッドの横にあるイスに腰掛けた。

「ああ。久しぶりの平穩だよ」

「・・・よかった」

「？銭形が寝てるのが、そんなに良かったのか？確かにこのバカは煩いが・・・」

俺がそう言つとジュリアはフツツと笑い、

「『煩いが・・・』なに？」

「・・・なんでもない！」

俺は恥ずかしくなつて、視線をジュリアから窓の外に向けた。

もう7月だというのに今日は涼しい。クーラーを使わなくても爽やかな風が舞い込んでくる。白いカーテンとレースがその風になびくのと、志波がなぜか持ってきた風鈴の音が、一層涼しさを際立たせる。

「前までの響哉は、なんと云うか、辛そうだった。まるで生きているのに、死んでいるようだった」

「・・・」

ジュリアの話に、俺はただ黙っていた。

「正直、あんな響哉の姿は見ていられなかった。強襲科でも変なウツサが立って、あの時の響哉は、もう戻ってこないんじゃないかとさえ思えて……。でも、見舞いに来た時銭形とバカ騒ぎしてるのを見て、やっと響哉が戻ってきたって思えたわ」

「……。悪かったな。心配かけて」
俺は、ジュリアの方に向き直って謝った。

そっぴや、龍達もアドシード以来、何かと気にかけてくれたな。帰ったらちゃんと礼を言って謝るところ。

「にしても、コイツのお陰っていうのが気に食わないな」

「あはは……。」

「なんかコイツにだと、感情を優先するっつーか、曝け出すっつーか……。アツくなっちまうんだよなあ」

普通、武器持たないまま拳銃と十手持ってるヤツに挑んだりするはずないし、飛んでくるって解ってるパンチを避けなかったりなんてしねえしな。

向こうも向こうだ。自分の方だけが武器を持っている有利な状況を、わざわざ相手と五分にするなんて常識では考えられない。

「……。なんにしても、響哉が帰ってきて、よかった。

おかえり、響哉」

「ただいま……って、言えはいいのか？」

俺がそう言つと、ジュリアは少し俯き、しばらくしてから

「最後のは余計だよ」

その外人ばい顔を笑顔にしながら、そう言った。

—
GO
FOR
THE
NEXT!

殴り合いで友情が生まれるなんてうまい話はそうは無い（後書き）

今回で一旦の区切りということで、原作でお馴染みのアレを使わせていただきました。

次回からは復活した響哉が周り（カナとか）に埋もれかけながらも地味に頑張っていく話が続くと思います。（笑）

それと、銭形のプロフィールを載せておきます。

ぜにがたへいし
銭形平士

東京武偵高1年C組 強襲科Sランク

身長184センチ 体重78？

7代目銭形平次。とつつあんこと銭形幸一の甥でもある。

柔道をはじめとする数多の格闘技の有段者で、射撃センスは非常に高い。さらに変装術も得意で、銭形家に伝わる由緒正しい十手と、幸一氏が考案した『銭形流逮捕術』を使いこなす事から、中学時代より『天武』という2つ名で呼ばれている。

戦闘に対する儀は重んじているが、日常では礼儀が全くなっておらず、上下関係が厳しい武偵高ではよく面倒事を起こす。ある意味武偵に必要な能力が欠如しているともいえる。

響哉に対しては何故か理論的な判断ができず、感情を優先させてしまう。

中学入試の時、響哉を一瞬で戦闘不能に追いやったが、その時からすでに意識していたと考えられる。

鋭い目付きをしているが、顔は父親には似ずに母親に似ていてかなり整っている。しかしあまりにもずばらな性格のため女子にはあまり人気が無い。

使用拳銃はコルト・ガバメントA1モデル。その他十手と縄の付い

たニッケル手錠。小銭を投げたりはしない。

銭形の2つ名は、ランパンのココの『万武』と『天賦の才』を掛け合せて作りました。

新章突入とか言ってもやってる事は前と同じ（前書き）

今回は久しぶりに金一さん登場。さらにオリキャラや響哉の新しい銃も登場します。

新章突入とか言ってもやってる事は前と同じ

8月14日、気温は39度という冗談じゃないくらい暑い気温が続く中、俺はエアコンが利いた快適な寮で、新しいテレビが設置されたので録画しておいた深夜アニメを観ていた。

彩香の件は……まあ、なんとか割り切れた。俺が単純なだけかもしれないが、人っていうのは大声で叫んだり暴れまわったりすると気分が晴れる生き物だ。

だから、気分が晴れた俺は、もう深く考えないことにした。バカが考えたところで物事は何も好転しない。むしろ周りは無意味に心配させるだけだ。先月のことでよく分かった。

リビングのテーブルにかき氷を置き、他の3人は民間からの依頼で校外に出ているため1人しかいない寮でテレビを観ていると、バタソツとドアを叩き開けて外の熱気と共に入ってきたのは、女装癖のある俺の戦兄こと遠山金一その人だった。
アミコ

「久しぶりですね、金一さん。一体何日学校休んだんですか？」

停止ボタンを押してアニメを観るのを一旦中止し、冷蔵庫から缶ジュースを取り出して金一さんに渡した。

「すまん。・・・例の警視庁での殺人事件の調査が、予想以上に長引いたのだな。結局、捜査は打ち切りとなってしまうたのてこうして戻ってきたのだ。これ以上の調査は、捜査員にも危険が及ぶ可能性が高くなった。これでは、14名の被害者が浮かばれない」
金一さんはプシュツとプルタグを開け、ごくごくとジュースを飲んだ。

「14名・・・？あれから、11人も殺されたんですか！？」

「・・・響哉。人の趣味にどうこう言える立場ではないが、アニメだけでなくニュースも観たらどうだ？」

金一さんは缶を置いて呆れたような目で俺を見ていた。

「観ますよ！ニュースくらい！この前までテレビがブツ壊れてたんですよ！強襲科アサルトじゃよくある話でしょう！」

強襲科の生徒は、何かにつけて銃を取り出す。リモコンの争奪戦でも、だ。その流れ弾がテレビに当たって本末転倒になってしまう事はよくあること・・・と、事務の先生が言っていた。

「・・・4月の頭から、奇妙な殺人が続いていてな。手口がお前が見た時と同様、ガスナイフで上半身を粉々にされて、死体の周囲は血の海だ」

「・・・」

金一さん、ワザとなのか？俺が今食っているかき氷は、いちごシロップがかけられてるんだぞ。

「現場が都内の公園付近に集中していたため、公園周辺に警官を配備し、市民には外出を控えるようにと呼び掛けていたのだが・・・被害は11名に及んだ。そして、警視庁が武偵庁と提携し過去にない程の捜査体制を敷いた直後に起こったのが、あの事件だったというわけだ」

「ちょっと待って下さい。そんな凶悪犯をなんで野放しにしておくんですか!？」

金一さんは目を瞑り、言いにくそうに言葉を紡ぎ出した。

「・・・上は、自分が殺されるのが怖いんだろう。儀の精神の欠片もないヤツらだ」

なんとなく、想像はできていた。だが、実際に聞くと本当に呆れる。そんなに我が身が愛おしいならさっさと退職しやがれ税金泥棒共が。俺はかき氷を持ってキッチンに行き、

「・・・そういや、金一さんはなんで今日ここに来たんスか？」

かき氷をシンクに流しながら金一さんに訊いた。

「うむ。来週、少し手伝ってもらいたい依頼があるのだが、俺と共に受けてくれるか？」

へえ、珍しい話もあるもんだ。あの金一さんに手伝ってほしい依頼があるなんて。今夜は雪でも降るかもしれないな。

「いいんですか、俺なんかで。もっと強い生徒もたくさんいるですよ」

「謙遜するな。俺はお前の力を高く評価している。それだけだ」

「はあ……………」

「決まりだな。依頼の詳細は追ってメールする」

そう言つて金一さんは寮を出ていった。熱気がまた部屋に入る。

気づけば時刻は夕方6時過ぎだった。俺は一通りアニメを観た後、防弾制服に着替えて（もちろん帯銃して）寮を出た。

俺はバスに乗つて武偵高の装備科棟アムドの地下にやってきた。

前にも一度来た事があるが、ここは本当に剣呑な場所だよ。1階はセキュリティがしっかりしてたのに階段を下りると……………無数の銃器が入れたラックがこれでもかと言うほどに廊下に並んでいる。盗まれても絶対気づかれんだろう。こんな不良品を盗もうなんて考えるバカがいらないだけで。

俺はそのB203作業室の前に立って、扉をノックした。

『はい。どうぞ』

中から女性の声が聞こえた。俺はドアを開けて部屋の中に入った。

その部屋の壁は棚によって完全に覆われているが、きちんと整理整頓されていて非常に綺麗な空間になっている。

その空間の一番奥に、イスに座って何かを弄っている女性の姿があった。

「柊先輩。頼んでいたモノ、出来ていますか？」

その女性——柊先輩は、座ったまま180度ターンして俺の方を向いた。

「あら？私は頼まれた仕事の期限を過ぎた事が無いのは朱葉君も知ってるでしょ？」

「そうでしたね」

この柊先輩、装備科のAランク武偵なのだが、今まで一度も依頼された仕事の期限を過ぎた事が無い事で有名な先輩だ。おまけに仕事も丁寧なので、普通に考えればSランクにもなれる武偵なのだが……この人、依頼主を選ぶ。

その人選があまりにも厳しいため、武偵校内では両手で数えられる程度しか依頼を引き受けてもらえない。引き受けるのは『将来性がありそうな人物』だけらしい。俺は彼女のお眼鏡に掛かったという

事だ。金一さんの紹介というのも大きいハズだ。

で、俺が一体何を先輩に依頼したのかというと……

「はい、コレ。『H & a m p ; K P 4 6 』。言われたとおり引き金の引き具合でフルオートと3点バーストができるようにしておいたわ。これが弾倉^{マガジン}ね」

さすがは金一さんお墨付きの柊先輩だ。いい仕事をする。

俺は1ヶ月前、銭形にブレン・テンを弾かれた時、もう一丁銃があればと思った。ナイフは持っているが、あんまり使わないし。

で、思い切って彼女に注文と改造を依頼したのだが……

「なんで、2丁あるんですか……?」

柊先輩から渡された拳銃《H & a m p ; K P 4 6》は、どういうわけか2丁だった。予備弾倉も2つ。もちろん、取り寄せと改造を依頼したのは1丁だけだ。

「ほら、響哉君って遠山君の紹介だし、これからお世話になる顧客だもの。サービスしないと」

「これは果たしてサービスと言えるんですか？通販じゃないんですから」

自分で言っておいてアレなんだが、実は柊さんから買うのは半分通販みたいなものだ。

彼女の父親は武偵を専門に取り扱う武器商人だ。故に、世界各国の銃器メーカーとパイプを持っている。その独自の流通経路（もちろん合法）により、購買とかで注文するより安くなるのだ。彼女の取り分と彼女の父親の取り分を差し引いてもまだこっちのが安い。

「半分嫌がらせでしょう？こんなの」

H & a m p ; K P 4 6 は、銃弾を装填しなくてもその重量が843gもある。それが2つ。合計で銃本体だけで1686gもある。おまけに弾倉には20発もの4.6x30mm弾を詰めるので相当重くなる。具体的に言うなら大体3gの弾丸が20発入っている弾倉が4つあるので合計240g。よって、今俺の手に乗っかっている合計質量は1926g。約2kgだ。片手で持つには重すぎる。

「仕方ないでしょ。ちよつと前にコレを注文したお客が殉職しちゃったんだから」

「そんな遺品みたいなモノを押し付けしないで下さい！」

「まあまあ……お代はいいから。あ、転売とかしちゃダメよ。改造銃だから」

「当たり前でしょう……」

「……で、結局俺はH&Amp;K P46を結果的に通常の半分の値段で2丁買った。2kgの重りを一緒に貰った腰のホルスターに入れ、重くなった身体で家路についた。」

「一度に3丁も使えねえっの……」

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.
.

新章突入とか言ってもやってる事は前と同じ（後書き）

なんともまあ締まらない主人公で。

今回初登場した柊さんのプロフィールを載せておきます。

柊咲夜

東京武偵高3年B組 装備科Aランク

身長164cm

東京武偵高付属中学出身。几帳面な性格で、作業室は綺麗に整理整頓されている。柊には改造された拳銃、機関銃、ライフル、RPG等が置いてある。

中学時代から仕事は遅れた事が無いのが売り。父の職業は武偵専門の武器商人で世界中の銃器メーカーとパイプで繋がっている。そのラインを利用する事で通常より安い値段で銃を売っている。改造も得意。

しかし客を選ぶタイプの人で、彼女が認めた武偵は東京武偵高では10人に満たない。

平賀文のように法外な金額を請求する事は無いが、その仕事は正確で、どんな無理難題も2つ返事で承諾してくれる。

使用拳銃はその時次第。趣味で装備科のヘリコプターを改造しているが、彼女自信は使う気が無い。

こんなキャラを出して、平賀さんの出番が無くなってしまうのではないかと思います。まあキンジは平賀さんのお得意様にする気ですが。

次回は久しぶりにカナが登場します。きっとHSS無双になると思

います。が響哉は・・・まあ頑張ります。きっと。

物理の $\sin$ と $\cos$ は金魚すくいでもその真価を発揮するモノ（前書き）

前回の最後の方に、 $H \& \Delta m p ; K \quad P 46$ を1丁で計算してしまい、さらに銃弾の重さの単位を間違っで計算してしまいました。お恥ずかしい。訂正しておきましたのでよかったですら確認してください。また間違っていたら教えてもらえばその日の夜には直しておきます。まことに申し訳ありません。

今回はカナの初バトルになりますが、やってる事は無双なので楽と言えば楽ですね。

物理の $\sin$ と $\cos$ は金魚すくいでもその真価を発揮するモノ

俺がいちごシロップのかき氷を食べられなくなって一週間が経った。

俺はこの一週間の間、久しぶりに金一さんの拳銃ヒースメーカーによる洗礼を受け、さらには成績が大変悪かったので校長室に呼び出され、赤い食べ物を食べると血の味がするようになったりといろんな外的圧力に見舞われていた。病院で診てもらったら「ストレスですね」と医者に言われた。それくらい俺にもわかるわ。

まあしばらくは通院して、徐々に治していかなきゃならんそうだが、ところでリアルに血を見てもアレほどでない限りなんとも無いんだが、なんで食い物限定で嫌悪感を感じるんだ？

それはともかく、俺はいつぞやの警視庁の時とは違い、夜遅くなの

でバスが無いためにわざわざ歩いて強襲科棟アサルトとくに来ていた。
なんでも、今回はC装備で行くんだそうだ。

C装備とは、武偵が俗に言う『出入り』の時に着込む、攻撃的な装備だ。ツイストケブラー T N K 製の防弾ベスト。強化プラスチック製の面フェイスガードあて付きヘルメット。武偵高の校章が入った無線のインカム。さらにはフィンガーレスグローブ。体中にきつく締められたベルトには、拳銃のホルスターに予備の弾倉マガジンが4本。ほとんどS A T が着るアレと同じ装備を、武偵高はいくつも保有している。個人で持つてる物好きもいるくらいだ。

で、ソレを装備して俺は強襲科から車両科ロジまで歩いて向かった。指定された集合場所は強襲科こうしではなく、車両科あっちだ。

車両科の軽車両用駐車場であくびをしながら金一さんを待っていると、誰かが俺の方に歩いてきた。

「……やっぱり、そのカッコなんですか」

「そこはツツコまないでくれる？」

俺の方に歩いてきたのは金一さんではなくカナだった。いや、実際は同じ人なだけで。気分が大切なんだそうだ。相部屋の人はどう思っているのだろうか。こんな夜中に女装して外に出ていく姿を見たら、勘違いをするのは避けられないだろう。

「そついや、なんでカナ《お前》はC装備じゃないんだ？俺《他人》には着て来いってメールで言ってたクセによ」

あと、俺はカナと喋る時はタメ語だ。前にそうしろってカナに言われた。始めは通常の金一さんにもタメ語で話しかけてしまい、地面にめり込むくらい土下座した事があるのは今はどうでもいい話だ。

「いいのよ私は。前にも説明したでしょ？私の状態だと、胴体視力^{HSS}も30倍になるのよ。飛んでくる銃弾すら、私には見えるわ」

「……さいですか」

もう、なんでもいいや。この人には常識が通用しないのは拳銃で一方的に撃たれた時からわかってた事だ。

車両科に呼び出したのは、そこにある防弾仕様の車で目的地に行くためだったようだ。

運転はカナがしたのだが……何と云うか、めちゃくちゃ柔らかい運転だったな。カーブでも全然揺れなかったぞ。

そんな運転まで完璧なカナに連れてこられたのは、横浜の港だった。ただし、日本の貿易の重要拠点である横浜港ではなく、そこから少し離れた……違法なクスリや拳銃などの密輸が相次ぐ、武偵達の間で『裏港』^{ウラコウ}と呼ばれる、非公式の港だ。

この裏港は、全国各地に点在する上に日に日に新しい場所が開港するので警察もその全ての所在を把握できていない。見つかったいな裏港はその地区の凶悪な武装ヤクザが牛耳るので危険なため、警察や武偵が発見してもしくはらくは野放しにしておくしかない、危険な地帯だ。

武装ヤクザとはその名の通り、銃火器や防弾アーマーを着たヤクザグループの事だ。コレは新規参入した組織が多い。古参のヤクザは、その多くが近年合法化されたカジノを表立って経営していて、多額の利益を上げている。その勢力は政治業界にまで及んでいるが、こちらから喧嘩を吹っ掛けない限り特に何もしてこないし、元々政治家は税金を自分の所持金ポケットマネーと思い込んでいるから、？でも誰でもどうせやる事は同じだ。何もしなくてもいい。

問題は武装ヤクザだ。武器を持って浮かれているのが多いので、よく問題を起こす。公務員の仕事を増やすのは大概がコレだ。

で、今回の依頼クエストの内容なんだが……『横浜の裏港で日本有数の麻薬密売組織が、大量の麻薬を密輸するという情報が入ってきたので、現場を抑えて全員現行犯逮捕せよ』という、危険極まりないモノだ。もちろん、依頼主は警察『税金ドロボー』だ。例の連続殺人事件の後処理がまだ終わってないらしく、金一さんのところに回ってきたらしい。

遺言、書いとけばよかったかな……？

車を港から離れた駐車場に停め、歩いて裏港まで向かう。
そこは倉庫とコンテナで囲まれていて、パツと見では人がいるのか
分からないようになっていた。

コンテナの陰に隠れながら、俺とカナは様子を見ていた。見張りはい
いたが、全員カナが斃した。見つけた瞬間に不可視の銃弾で銃を弾
いて、何が起ったか解らない相手に肘打……。容赦ねエ。

しばらくすると、海からクルーザーが6隻も来た。まさかアレ全部にクスリを積んでんのか？だとしたら凄い量だ。販売ルートの方もよく作れたな。その努力をもっと良い方向に使えばいいのと思わざるをえない。

「来たわね……………」

クルーザー6隻が停泊する。すると港にいた男の1人がクルーザーに近寄り、1隻のクルーザーから、男が出てきた。

クルーザーから出てきた男が指示し、6隻のクルーザーから荷物が運び出された。

それを見た瞬間、俺とカナに緊張が走る。

港にいた男がクルーザーから運ばれてきた荷物の中を確認し、手下に指示を出し始めた。

間違い無い…………アレはクスリだ。ソレがクルーザーからいくつも持ち出された。

「5秒後、行くわよ」

カナの言葉に俺は頷き、ブレン・テンの安全装置^{セーフティ}を外す。

クルーザーから次々と麻薬が運び出される光景を、俺は息を殺して見ていた。

あと、2秒………1………

……—0!

カナは拳銃^{ピストル}で、まずクルーザーを狙った。

不可視の銃弾の6連発により放たれた銃弾は、全てクルーザーに命中した。

ドガアアアン！！

6隻全てのクルーザーが爆発し、近くにいたヤクザ達が吹っ飛んだ。

武偵弾《DAL》……………。

それは、1発1発が多種多様な機能を秘めた、強化弾。銃弾職人バレイスタにしか作れないゆえに、1発数百万もする超一流の武偵しか手に入れない必殺兵器だ。リーサルウェポン

さっきクルーザーに撃ち込んだ弾丸は、間違い無くこの武偵弾だ。それも、炸裂弾。

初めて生で見たが、なんつう威力だ……………。人に当てたら間違いなく死ぬぞ。

混乱する武装ヤクザ達の中に颯爽と駆け出し、次々と拳銃や短機関サブマシンガンを

銃を破壊していく。銃口に銃弾を撃ち込んでるのだ。当たり前だが、俺にはこんな一瞬ではできない。

——俺も負けてられん。

カナの方に注意が行っている男の腕を掴み、関節を極めて肩を脱臼させる。そのすぐ後にブレン・テンで周りのヤツらの肩や腕を撃ち、肘鉄や蹴りで薙ぎ倒していく。

カナの方は、武器を破壊した後に足を撃っている。不可視の銃弾とクイックリロードの併用で、そのフラッシュは止む事が無い。

「遠山家の金一は化け物かよ……」

などと愚痴っている間も、ブレン・テンの残弾が尽きたので銃をH&P;K P46に切り替えて次々と相手を無力化していく。

10mmオート弾程の力はないが、4.6x30mm弾は着弾時に弾丸が体内で横を向く性質があるので、それにより効率的にダメージを与えられるのだ。

武装ヤクザは出費をケチって防弾アーマーしか着けていない事が多いので、脚は弱点になる。

後遺症は残らない箇所を狙っているので、病院で銃弾を取り出せば問題ない。ただかなり痛いだけで。法を犯した痛みってヤツだ。悪く思っなよ。

しかし．．．数が多すぎるな。持ってきた弾で足りるかどうか．．．。

俺が銃弾の心配をしていると、デザートイーグル DEを構えている武装ヤクザがいる事に気がついた。狙いは俺。おまけにアイツ、両手で構えて確実に俺に当てようとしてやがる。

DEは、女子供には扱えないイメージがあるが、実際はそうではない。正しい姿勢ならば女性や子供でも扱えない事は無い。間違った姿勢ならどんな屈強な男でも肩を壊してしまう。

回避すればその銃弾は避けられるだろうが、他のヤツらに袋叩きにされかねない。

どうする．．．？耐えるか．．．いや、たとえ耐えられたとしても、その後の動きが悪くなる。

第六感が突破口になる秘策を告げてきた。だが、ソレはあまりにも非常識でとんでもないモノだった。もちろん今までこんな事は一度も無い。初めての経験だ。しかし長年研磨してきたかのように、俺の脳裏には明確にソレが理解できた。

アレが・50A E弾か・44マグナム弾か、使う銃弾の種類は分からない。だが大型拳銃なのは間違いないので、失敗はできない。

「———— やって、やらあ！」

D Eから銃弾が放たれる前に、俺は右手をD Eの射線上に斜めになるよう構える。

そして放たれた銃弾は、真っ直ぐに俺の右手の甲……フィンガーレスグローブの、超硬合金で防御された場所に見事にヒットし、斜めになった手の甲にまるで弾かれる様に斜めに逸れた。

銃弾が耳の近くを通る時に聞こえる、ピュンツという音が聞こえ、背後のコンテナからキンという跳弾する音がほぼ同時に聞こえる。

やれた……『リベル銃弾弾き』……！

——手で銃弾を弾く技——！

何が起こったのか理解できていない、DEの男に、俺は左手のH&P46を3点バーストで撃ち、銃を弾いて脚を撃ち抜いた。

右手は少し痺れていて、銃を落とさないようにするので精一杯だ。

だが、左手が使えれば十分だ。銃弾弾きなら痺れててもできるからな。

15分の短いようで長い戦闘の末、多くの武装ヤクザを逮捕した。

数はなんと82名。その内の約7割はカナが無力化した。彼女の半径3メートル以内に武装ヤクザが侵入した形跡がなかったのはここだけの話だ。

俺は右手の打撲を負ってしまい、朝一番に武偵病院に向かった。銃弾弾きはこれだからあまり多用はしない方がいいかもしれない。

報酬の方だが、危険手当とかが考慮されているのかかなり多かった。これではばくは何もせずとも食っていけそうだ。

9月1日……武偵高は一応高等学校なのでもちろん2学期の始業式がある。

その時に来ていく服装は、世界初の武偵高だというローマ武偵高の制服を模した、『ディヴィーザ防弾制服・黒ネロ』と呼ばれる、その名の通り黒い防弾制服だ。これは国際的な慣例らしい。名札も付けねばならんしな。

本来、こういう集会に集まってくるのはジュリアみたいに真面目なヤツか、俺みたいにヒマなヤツか、単位が悪いヤツかのどれかと相場が決まっている。

同部屋の3人は、真面目な春樹とヒマな龍、成績の悪い戒と相場の3人が揃っている。面白い事もあるモンだ。

ちなみに今は俺の横にジュリアと志波、前に左から戒、春樹、龍となっている。銭形？知らん。

校長の緑松が、日本は日本のスタイルを貫かなければならない！と、海外の留学生を去年より減らすとか何とか言っていた気もするが、寝ていたからよく分かん。始業式後のセレモニーのマーチング・バンドさえ見れば俺はいいんだからな。

で、始業式はたっぷり寝てマーチング・バンドで目の保養をしたと思ったらジュリアに口を聞いてもらえなくなった。なんで？

その帰り、俺は5人と別れてちょっと装備科の柊さんに仕事を依頼して寮へ帰ろうかとしていた時……………。

バキッ ドカッ ゴキィ！

鈍い音がしたのでその音の方に行くと……………

……………3年をボコボコにしてる銭形がいた。

今日は水投げ（徒手であれば誰が誰に喧嘩を売っても良い日）だか

らな。大方先輩が喧嘩売って返り討ちにあつたんだろう。可哀想に。

「何見てんだよ響哉」

銭形がこつちに気づいたようだ。

「名前で呼ぶな。気持ち悪い」

「『朱葉』なんて珍しい苗字、なんとなく呼びたくない」
なんだその理論……。

「だったら俺も、お前があ銭形平次の先祖だつて思いたくないから銭形とは呼ばん」

「んだと teme、ケンカ売ってんのか!？」

「やるかコラア!」

まさに一触即発。やっぱコイツとは話すだけ時間の無駄だ!叩き潰してやる!

「teme エらあ!俺を無視すんじゃないエ!!」

まだ生きてたのかあの3年。拳銃取り出して俺と銭……じゃない平土のことすげえ狙ってるよ。

——— だかな先輩……………。

「「邪魔すんじゃないエ!!!」」

「ぶべらあ!!!?」

先輩の顔面に俺と平士のストレートが見事に決まった。先輩は弧を描き口から泡を吹いていた。

「つち！興が覚めた。今回はおあずけだ」

「ああ！？逃げんのかよ！」

帰ろうとする平士に俺が軽く挑発してやると……………

「逃げるんじゃない。先延ばしだ。右手怪我してて負けちゃいましたなんてつまらん言い訳されたくないだけだ」

そう言っただけで平士は去っていった。包帯は取ってあるんだが、やっぱり分かるヤツには分かるのかね。

「・・・あ、宿題やんの忘れてた」

TO BE CONTINUED・・・

物理の $\sin$ と $\cos$ は金魚すくいどころその真価を発揮するモノ（後書き）

始業式の日に宿題やってないのを思い出す主人公っていたい・・・

今回は武装ヤクザや裏港など、作者が思いついたオリジナルの用語もどきを出す事が出来ました。これから武装ヤクザはちよくちよく出てくるかもです。

響哉の技名ですが、寄せ付けないという意味の $repel$ を使いました。銃弾を手で弾くなんてバカげた技、どう考えても出来はしませんがね。まあ反動はありますが。キンジの銃弾逸らしよりは凡庸性は無いです。ライフル弾は威力が高すぎて弾けませんし、使用後に片手が痺れて銃が使えないという弱点もありますから。

10月の間に投稿したかったのですが間に合いませんでした。すいません。カナの活躍も微妙でしたし、最後までグダグダ・・・無意味に長くなってしまいました。

これからも応援してくれると嬉しいです。それでは11月もよろしくお願いします。

久しぶりに会った友達に彼女ができていると言われたらなんだか世の中が腐って

テストオワタ＼（＾o＾）／

そしていつの間にか20話です。特に何もやりません。

そして時間は飛びに飛んで文化祭にまで行きます。早く原作キャラを出さないと「これホントに緋アリかよ？」ってなカンジになってしまうので。カナは・・・なんとかなるはずです。

そんなカンジで戦闘が一切無い文化祭のお話です。

久しぶりに会った友達に彼女ができていと言われたらなんだか世の中が腐って

季節が移り変わるのは非常に速い。光陰矢のごとしとはよく言ったものだ。

現在、10月の中旬。気温は日中以外は20度を下回るのが当然で、すっかり秋というカンジだ。そろそろ栗が美味くなってくるんだよねあ……。

で、今月末には文化祭が行われる。正確には30日と31日。2日目はハロウィンなのだがソレは後で騒ぐそうだ。昨日金一さんが眠そうな顔で言っていた。

その文化祭、俺達1年はまず武偵高にある危険物を地下に隠さなくてはならない。

めんどい事は全部1年^{奴隷}に任せるからな。そついう学校だし。

で、俺は今日蘭豹に呼び出されて強襲科の別館前に呼ばれてるので、
一般教科が終ったすぐ後にそこに行行ってしばらく待っていると・・・
・
・

「ちゃんと来とるな、朱葉ア」

相変わらずでかいポニーテールをぶら下げて、豹柄のタンクトップを着た蘭豹がやってきた。

この別館は本来なら室内でのCQCの訓練とかに使われるのだが、昼休みの今は誰もいない。なんでこんなゴリラと2人で貴重な昼休みを潰されねばならん。責任者呼んでこい！あ、蘭豹か。

「6月はえらくシケた顔しっとったが・・・前よりはマシになったようやな」

「どっかの先生のお陰で、マシになりましたよ」

「ほお。一体どこの誰やるア。いつペン会つてみたいわ。きつと美人なセンコーなんやろーな」

ウザい事言いながら誤魔化してきた蘭豹だったが・・・・・・やっぱ、アレは偶然じゃなかったんだろうな。

あまりにも、話が上手すぎる気がしていた。平士が先輩に下勝ちするのはよくある事で、今まで蘭豹もその光景を何度も見てきたはずだ。それを、わざわざ誰かと闘わせようとしていた。最終的に対戦相手に俺を選んだのも蘭豹だ。

結果、俺は見事に復活し、今では普通に武偵をやっている。なにはともあれ、このゴリラ女に俺は救われた事になる。ひどく不本意だ

が。

だがま、不本意でも礼をしなけりや男が廃るってモンだ。

「じゃあその人に会ったら言っておいて下さい。『ありがとございました』って」

「ん。わかったわ。本当なら教師に伝言させるなんてありえへんけど、今回は大目に見といてやるわ」
「なにが大目にだよ。照れてんのバレバレだっつーの。」

「そついや、今日は一体何の用なんスか？」
マスターズ
教務科からの依頼なら、こんな遠い所じゃなくてもいいだろうに。

「いやな……再来週から、文化祭があるやろ？そん時1年共は校内の危険物全部、地下にしまっやん」

「まあ、そうですね」

「銭形が手伝うと思うか？」
「そついうことか。」

「全く思えませんね」

「やろ？」

アイツは、命令とかに絶対従わないからな。3年が「やれ」と言っても「お前がやれ」と言ってすぐ喧嘩するし。

「で、ウチもなにかと忙しい身やさかい、銭形と仲の工工お前がアイツの面倒見たってほしいんや」
おかしいな。幻聴が聞こえたぞ。

「……誰と誰が仲がいいって？」

「やから、お前と銭形やって言うてるんや」

「……ッハ。まさか」

俺は鼻で笑った。あんなハゲと仲がいいなんて、拳銃自殺モノだ。飛んでる飛行機からパラシュート無しで頭から落下した方が1000万倍マシだ！

「……？まあ何でも工工けど、銭形の事はお前に任すで」
そう言っただけで蘭豹はこの場から立ち去ろうと……って待てイ！

「ちょ、おま……なんで俺が！」

しかし世の中は無情かな。蘭豹はさっさと行ってしまい、別館の前には俺1人が寂しく立っているだけとなった。

それから10分後……。

「とゆーわけで、平士のお守りを任されてくれ」

「それでなんで私なの？」

現在、超能力捜査研究科^{SSR}の屋上。俺の前には1ヶ月前、俺のケータイを着信拒否にした時任ジュリア^{ときとう}がいる。彼女ならなんとかしてくれる！だって頭いいから！優等生だから！そう思ってわざわざこんな胡散臭い場所の屋上まで来たのだ。

「……私も、生徒会やSSRの企画で忙しい身なのよ。突然現れてそんな事を頼まれても困るわ」

「そこをなんとか！頼む、一生のお願いだ。あのハゲと一緒にいたら、こつちまで飛び火してきかねん！」

飛び火とはもちろん、先輩方による夜襲とか強襲とか夜襲とか味方^{フレンドリ}イフアイア

誤射とか流れ弾が飛んできたりとか夜襲とかだ。

「……で、では……文化祭、2人で一緒に回ってくれるのなら、考えてやっても、いいわよ？」

「なんだそんな事でいいのか。いいぜ」

ジュリアは「やったやった！」とびよんぴよん跳びはねており、普段の彼女らしさは皆無である。

ところで、俺はてつきり『卒業までずっとタダで依頼を受ける』とか『報酬金の半分を毎回よこせ』とか言われるのではないかと心配した。要らぬ心配だったかな。

「……不愉快な思考を感じ取ったんだけど？」

「俺の思考は視れないんじゃないかなかったのかよ」

「そつえばそうだったな」

あ……あぶねエ……。俺にはどういうわけか脳波計が効かないから忘れかけてたが……。コイツ、他人の思考が読めるんだった。たしか触れないと発動しないって言ってたけど、それでも油断できない。俺の第六感と同様に日々成長していくのかもしれないし。

「会長に頼んで出来るだけそちの作業に向かえるようにしてあげるわ。だから、約束を忘れないでね！」

そう言つてジュリアは行ってしまった。多分会長とやらの頼みに行くのだろつ。頼りにしてるぜジュリア。

だが、まだ安心はできない。あと1人か2人は人手が欲しい。

俺はケータイを取り出し、志波さんに電話をかけた。今の時間ならまだ大丈夫なはずだ。

『もしもし?』

「おう、志波。突然でなんだが、ちょっと頼まれてくれるか?」

さて、志波も手伝ってくれる事になったし、後は龍達にも頼めば完璧だ。イける。あのハゲがサボったら、俺達全員で文句言ってやればいくら平士と言えども言う事を聞くだろう。

・・・などと思っていたのだが。

文化祭の3日前。そろそろ武偵高は各学科のレイアウトの変更や大掃除のための準備期間に入る。
俺達1年は主にそれらのめんどくさい仕事や、危険物の撤去。さら

にはキーホルダーやストラップにして売り物にするという空薬莢を拾いまくる。1コ50円。コレが一般人に売れるんだって。

だが、その空薬莢を拾う1年の中に……ヤツがいた。

「……………なに見てんだ響哉。サボってないで仕事しろ」

平士だ……………。

「……………お前、普段命令聞かないクセになんで今日だけこんなに素直なんだよ」

「自分がすべき仕事はする。ただソレを押し付けられるのは理不尽だ」

「……………ふーん。思ったより真面目なヤツだな。ちょっと見なおした。」

「おーい、平土イ。薬莢集まったあ？」

入口から女性の声が聞こえた。平土の知り合いらしいな。

「おう。これくらいでいいか、秋奈」

平土は右手に持っていた空薬莢の大量に入ったポリ袋を掲げて見せた。

「十分だよ。それじゃあ、貰ってくね」

「おう」

平土から空薬莢を受け取ると、女子生徒は「・・・え、ええと・・・
」と何かを言いたそうにし始めた。蘭豹の半分ほどの長さのポニーテールが左右に揺れてこっちにいい匂いが漂ってくる。

「ぶ、文化祭・・・一緒に回ろう！」

なん・・・だと・・・!!?

「別に構わんが・・・いいのか？女子の友達とかと一緒にじゃなくて」

「い、いいの！ちょっと忙しくて都合合わないみたいだし！じゃ、じゃあ！約束だよ！忘れないでね！」

女子生徒は顔を真っ赤に染めて走って出ていった・・・。。

俺もジュリアに文化祭を回ろうと誘われたが、アイツの場合は友達が少ないからなあ。俺のこと誘うのも当然だよな。

それに何というか・・・さっきの娘、すげえ可愛いじゃん。顔とか、仕草とか。それに俺、実はポニーテール萌えだったのかもし

れん。

「平士……あの娘誰？」

「ああ？同じクラスの氷川秋奈ひかわあきなだよ」

「で、どうなんだよ。氷川さんは」

「？どうって……いいヤツだ。タダで車乗せてくれるし。……つか、なんでお前がそんなこと聞きたがるんだよ。関係無いだろ」

ああ、なぜだろう。今のコイツを見るとなんだかいつにも増してぶっ飛ばしたくなってきた。

「………平士………」

「……なんなんだよさつきから」

「もげる」

さつきから、コイツが一夏に見えて仕方ねエ………。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.

久しぶりに会った友達に彼女ができていると言われたらなんだか世の中が腐って

新キャラが平士に片思い中というまさかの展開です。

ISネタが分からない人には、最後のもげると一夏の意味が分からなかったと思いますね。すみません。

というわけでプロフィールです。需要があるかは分かりませんが。

氷川秋奈

東京武偵高1年C組 車両科Bランク

身長165cm

父親が飛行機の操縦士で、母親がCAという飛行機一家の長女（妹が1人いる）。そのせいかヘリコプターや飛行機なんかの操縦は手の物。もちろん車も運転できる。

中学時代に悪質なナンパから平士に助けてもらった事があり、それ以来平士に絶賛片思い中。

使用する銃はFN P90。

短いですね。「平士の事が好き」意外に特に書く事ありませんので。

地味によく出るようになるキャラですので、作者小説共々よろしく願います。

カップルは絶対にお化け屋敷でくつつく（前書き）

はい。文化祭です。特に準備の時は何も起こりませんでした。ついに21話となってしまったのですが・・・まだ半年しか進んでませんね。あと1年半しないと原作始まらないってことは、このペースだと原作開始が80話辺りからって事になりますね。無計画といっても限度があります。

出来るだけ時間跳躍を使っても・・・60話はかかりますね。きつと。

こんなカンジで進んでいくと思いますが、長い目で見守って下さい。

カップルは絶対にお化け屋敷でくつつく

文化祭の準備期間に入り、平土と軽く銃撃戦をした3日後……つまり、文化祭当日。

武偵高にはたくさんの一般人や報道陣^{マスコミ}も集まり、ちょっとした地方の伝統的祭りくらいの賑やかさを出していた。

今日明日は強襲科^{アサルト}や尋問科^{ダギョウ}も一般公開されるのだが、もちろん中の危険物は全て俺達1年が地下に隠した。とんでもない重労働だったよあれは。明日の夕方には外に出さねばならんし。

そんな事はどうでもいい。問題は、待ち合わせ時刻を30分も過ぎても一向に姿を現さないジユリアだ。自分から誘っておいて遅刻するとは、一体どういう見だ。それともアレか？ロシアでは集合時間の30分後から家を出るのか？道理でソ連は滅んだわけだよ。

そんな事を考えながらケータイで時間をちまちま確認していた時だった。

「ごめん響哉。アイロンかけてたら遅くなっちゃって」
「ようやく来たか。しかも遅れた理由がアイロンで。夜の内にしとけよ。」

「お前なア、遅れるんなら連絡くらいしろよ」
「いつ来るかわかんねえから、ずっとここで棒立ちする事になっちまったじゃねえか。」

「え……？ま、まさか……！そ、そうね！連絡しとかないと心配するもの！」

「なんで俺がお前の心配を……って聞いてんのか？」

「あははは……響哉が、私の事を心配してくれた……あは、あははは」

心ここにあらず。ジュリアは遠くを見ているような目でなにかをぶつぶつ言い始めた。お前最近キャラ壊れてんぞ。

「おい、ジュリア……」

「あはは、あはははは」
「……ダメだコイツ。早くなんとかしないと……」。

ちなみに、ジュリアが正気に戻ったのが15分後の事だった。俺は結局45分も同じ場所で立たされ続けられることとなった。

ようやく正気に戻ったジュリアと共に、俺は文化祭の出し物を一通り回ろうとしていた。

「きよ、響哉！あそこに行こう！あそこに！」

そう言っアシビュラスてジュリアが珍しく率先していきたる先は……
救護科レベアと鑑識科による、『ホラーハウス 死体安置所のなかまたち』
という、要するにお化け屋敷だった。

「てかここって……マジで死体安置所じゃねえか。不謹慎にも限度があるぞ」

「いいじゃない！たかが死体なんか臆するようでは武偵とは言えないし！」

「地味に正論言うなよ。わあつたよ。行きやいいんだろ行きや」
そう言つてジュリアと共にお化け屋敷に向かうと……

「……よし。まずは第1関門クリアーね」

「ん？なんだつて？」

はて、気のせいだろうか。一瞬ジュリアの周囲に黒い何かが見えたんだが……。

しばらく並んで、お化け屋敷の中に入り、しばらく歩くと……
ビビィー！なんかのブザーが鳴り、赤色灯が灯った。

「キヤア！」

軽くジュリアが跳びはねて尻もちをつきそうになった。何してんだコイツ。

「？お前、こんなのでびっくりするようなヤツだったっけ？」

「お、お化けとか、ゾンビとかが恐くない女はいないんだ！」

「……勉強になりました。あと、しばらくはお前ビビりっぱなしだと思っぞ」

「……？どういう事？」

ジュリアは立ち上がり、パンパンとスカートを払った。

「ほら、アレ」

俺は目の前のストレッチャーに置かれている、中身入りの死体袋を指差した。

すると、死体袋はバタバタと暴れ出し、ストレッチャーから落下。

「いったあ」とか言いながらチャックを開け、「グアアア」とか言いながらこつちに這いずって向かってきた。いや、今更誰も驚かねえよ。いったあって言つちまつたじゃねえか。その迫真の演技が台無しだよ。見てるこつちが恥ずかしい。

「きゃあああああ！！！」

ごめん。驚くヤツいたわ。俺の横に。

「ゾンビー！来るなア！」

ジュリアはガタガタ震えながら太股のホルスターからマカロフを・・・
ってオイ！

「やめるバカ！本当に死体袋に入っちゃまうじゃねえか！おい、アンタ！逃げろ！」

俺はジュリアを抑えながら、バンバン響く銃声の中ゾンビに伝える。
ゾンビは猛ダッシュで逃げだし、本当にゾンビにならずに済んだ。

「銃は預かっておく！」

「はい……」

脅かし役が仕事全うして殺されかけてたんじゃあまりにも報われな
い。危険は根本から抑えねば。

武器を失ったからか、ジュリアは俺の裾を摘まみながら、半泣きで
付いてきている。なんだかいじめたくなってくるが、そこは俺。ち
ゃんといじめてやるさ。

1階で多かったしばらく歩かせておいて音や光で脅かすという古典
的なネタにジュリアは全てビビりながらも、なんとか俺と共に2階
に着いた。そろそろだな。

「なあジュリア」

「な、なんだ？」

ギリギリで平静を保ちながら、ジュリアは泣きそうな目……と
いうか、泣いた後のような目でこっちを見た。もともと顔はいいの
だが、普段からツンツンしているのでこういう姿を見るとギャップ
ルールで可愛さ倍増だ。正直ヤバイ。普段からこんなならいいのに。

「さっきからさ気になってたんだけどさあ」

「う、うむ」

「お前、いつの間に子供背中に乗っけてんだ？」

「ぎゃああああ！！！」

今までで一番大きな悲鳴を上げ、ジュリアは1人で走りだし、その先の解剖室に入り込んだ瞬間、扉はバタンと閉じられ、可哀想に思えるほどの悲鳴が扉の向こうから響いてきた。中で一体何が起きているんだ？

キィィィと嫌な音を立てながら扉が開くと、中ではジュリアが気絶していた。失神してアレをナニしただけまだマシだが、普段あれだけクールなジュリアがこれほど取り乱すの周りにとっては予想外な光景だろう。俺もそうだ。

とりあえず俺はジュリアを担いで非常口から抜け出し、外に出て近くにあったベンチに寝かせてやった。しばらくすれば勝手に起きるだろう。余計な面倒かけさせやがって。

それから5分後、ようやくジュリアは目を覚ました。

「あ、あれ！？お化けは？ゾンビは？なんで外に？」

「なに寝ぼけてんだ。お前が気絶しちまったから俺がここまで担いで来てやったんだぞ。恐がりのクセにお化け屋敷なんて率先して入ろうとするんじゃないよ」

「ご」・・・ごめんなさい・・・」

しゅんとジュリアは俯いて、黙ってしまった。おい、やめる。なんか俺が悪人みたいな目で周りから見られてるだろうが。

「まあ、その、なんだ。俺もけっこう楽しかったし、元々俺がお前の事からかったのが悪かったんだし、それに・・・その、可愛かったし」

——あ、しまった。

「・・・え!？」

「いや!何でもない!今は忘れる!」

「さっき『可愛かった』って言ったよね!もう一回言って!」

「イヤだ!絶対言わん!」

「なんで!？」

「何でもだ!」

あーだこーだ言い合いして、結局落ち着いたのは20分もした後だった。これで俺今日だけで1時間以上無駄な時間過ごしちまった。

「ほら、そろそろ12時だ。何か奢ってやるから、好きなモン選べ」
古今東西、男はこういう祭りの時は女に奢るのが伝統だ。さっきの詫びも兼ねて、何か奢ってやらんと仏頂面のまま俺の横で歩き続けられるかもしれん。そんなビミョーな空気だけは勘弁だ。

「あら？今日はやけに親切なのね。熱でもあるの？」
すっかりいつもの調子に戻ったジュリアが、いつものように冷淡な喋り方で俺の顔を覗き込んだ。

「まあ、いいわ。それじゃあ行きましょ」

そう言っただけでジュリアは俺の手を取って歩き出した。俺もそれにつられて付いていくが、俺、顔赤くなってないよな？

「まいごあり〜」

近くにあった出店でお好み焼きを奢ってやった。思いの外高かったが仕方ない。ついでなので俺の分も買い、2人揃ってベンチに座ってお好み焼きを食っていた。味は……普通だ。

「全く……午前中だけで回ったの、あのホラーハウスだけじゃねえか。それも途中で抜け出して来ちまったし。なんであんなトコ行こうなんて言い出したんだよ」

「わ、私にもいろいろ考えがあつて……（隙あらば抱き着こうとしていたなんて死んでも言えん！）」

「何の考えだよ……まあ、いいや。それより、他に行きたい場所とかねえのか？」

俺は文化祭のパンフレットを広げて、ジュリアに見せた。

「……うーむ。これなんてどう？狙撃科スナイプのエアガン射的」

「なんで文化祭の時まで銃を使わねばならんのだ」
今も持つてるけどな。拳銃モノホン3丁を制服の下に。

「いいじゃない。響哉の銃の腕前を見ておきたいし」

「なんだよそれ……。まあいいけど」

まさか、文化祭まで銃を撃たされるとは思わなかったよ。

で、狙撃科地下の射撃レーンに来たわけだが……

「何でお前がここにいる？」

「それはこっちのセリフだ。氷川さんと仲良く文化祭回ってたんじやねえのかよ？」

そこにいたのは、7代目銭形こと……銭形平士と、車両科^{ロジ}の氷川さんだった……。

「その秋奈がここに来たと言って言ったんだ！お前こそ時任と一緒にだったんじやねえのかよ？」

「こっちもジュリアが行きたいって言うから来たんだよ！文句あんなのかコラ！！」

「ねえよ、ボケ！！」

「はあ……2人とも、少しは仲良く出来ないの？」
ジユリアが軽く頭を抑えながらそう言った。

「コイツなんて絶対ムリ!!」
俺と平土のセリフが被った。というか、ハモったぞ。なんでコイツ
なんかと……。吐き気がしてきた。

「本当は仲良いんじゃないの……。？氷川さん、だった？お互い、
苦労するわね」

「そうですね……」

で、俺と平土は周りからめちゃくちゃ嫌な視線を受けながらも10
分くらいお互いに罵詈雑言を浴びせ合わせた。その結果……

「よし、そこまで言うなら勝負だ」

平土は急に切り出した。

「勝負？」

「射的で、より取るのが難しそうな景品を取った方の勝ちだ。シン
プルでいいだろ？」

「なるほど……。シンプルだからこそ、純粹に実力差で勝負が

決まる。そういうワケか」

「バカの割には呑み込みが早いな。そういう事だ」
平土はニヤリと口元を歪ませた。

「バカは余計だ。いいぜ。受けてやるよ、その勝負！実力の違いを見せてやる！」

バンッ！

俺は参加費2000円を受付に叩くように置いた。

「ッハ！その台詞、そっくりそのまま帰してやるぜ！」

バンッ！

平土も俺の隣に2000円を叩きつける。

——ざわ、ざわわ

ギャラリー達がざわつき始めた。
そのざわめきは次第に拡大し、まさに当たれば7億のパチンコを見
守るかのように大きくなった。

「よくやるわね」

「ほんとうですね」

その荒れ狂う熱狂の中、静かに事態を見守る2人の女子生徒がいたのは言うまでも無い。

「吠え面搔かせてやる！」

「返り討ちだ！」

そして————今、決戦の火蓋が切って落とされた！

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.
.
.

カップルは絶対にお化け屋敷でくつつく（後書き）

前書きで早く原作追い付きたいとか書いといて、なに射的勝負とかやってんでしょね。ダメだこりゃ。

週間アクセスが遂に300越えを果たしたのは嬉しいんですが、昨日のテストが大惨事だったのであまり手放しでは喜べない作者です。さて、以前から載せる載せると書いておいて載せていなかった志波さんのプロフィールです。よかったら見て下さい。

志波 斗子

東京武偵高1年A組 狙撃科Aランク
身長157センチ

東京武偵高付属中出身。「狙撃手にはストイックな人が多い」とよく言われるが、性格は明るい。友人関係は広く、クラスの中心的存在。クラス代表も務めている。

狙撃の腕は非常に高く、1年でアドシアードの狙撃競技代表に抜擢されるほど。多くの先輩や教員から期待されている。しかしその陰で彼女を嫉妬している生徒も少ないながらおり、アドシアード当日に監禁されるなどの被害に遭っている。その際に自分を助けてくれた響哉と彩香、さらにアヤメ、ヒナに感謝しながら、今現在は何事も無かったかのように高校生活を謳歌している。

所持している銃はL118A1

それでは次回は今日中に仕上げたいと思います。

喧嘩するほど仲が良い2人（前書き）

射的勝負です。始めは3人称視点で台詞もありません。後半は普通にやりますが、あの2人も出てきます。

喧嘩するほど仲が良い2人

この射的勝負、『実力の差が出る』とは言ったものの、実際は拳銃の腕そのものよりも『何を狙うか』という目利きの方が実は重要である。

なぜならば射的とは目標を落とさなければ当たった事にならないので、大きなモノを狙ってもそれが落とせないのであればワザと外す事と同義なのである。

今回の勝負、双方共にそれは理解している。しかし、部は響哉の方にあつた。

平士は、この勝負の発案者である。つまりそれは、この勝負において絶対的勝利を確信した行為と見做みなされる。つまり、引き分けた時に彼の敗北が決定する。

一見すると公平な実力勝負ではあるが、その実態はあまりにも不公平である。

まず、先も述べたように平士には引き分けが許されない。逆に、響哉は引き分けでも勝ちという事だ。

次に、この勝負は先行が圧倒的不利になる。狙撃レーンは複数あるので同時に行えばいいのだが、先に動く事は自ら勝利から離れていく事となる。

先に目標を狙えば、相手はそれ以上の目標を狙ってはいけない事になる。お互い1発で標的を倒しても、最後に撃つのは後攻の方である事は火を見るより明らか。つまり、弾は残しておいた方が良く、先行はどうしても先に弾を使ってしまうので、先に残弾が少なくなってしまう可能性が非常に高い。

もう一度言おう。彼ら2人は双方共にその事実を理解している。

ここは焦らず、相手の出方を見て自分はそれより大きな標的を狙っていけば圧倒的に勝負を進められる。始めから大きすぎる不利を水から抱え込んだ平士でも、勝てる可能性はある。

もう一度言う。彼らはそれを、理解している。

——頭では。

「うおおおおおおお！！！！」

パンパンパンパンパンパンパン！！

レーンに着くや否や、彼らはこの射的の目玉であるプレ3の板をエアガンで乱射し始めた。

そして、2人のプレ3の板はパタンと倒れた。係の生徒が頭を抱えているが、そんなのは誰も気にしてはいない。ただ僅か2秒程度で倒された絶対に倒れない板が倒れた光景を見て啞然とするしかなかった。

倒れる瞬間を第六感で察知していた響哉は、無駄な弾を1発も使わずに次の狙いへと銃口を向ける。その動きには一瞬の迷いもなかった。

平土も無駄な弾を一切使わなかった。響哉のように第六感を持っているわけでもない彼は、なんと勘で倒れるだろうと予測していた。ある意味では彼は第六感よりも鋭い『勘』を持っているかもしれない。

い。

次に彼らが狙いをつけたのは、種類は違うが大きなぬいぐるみだった。響哉はペンギン。平土はライオンである。どちらもデフォルメされているが、その大きさはかるく1mを超える。

それが普通に立っているのだが、これは明らかに響哉……つまりペンギンが有利だった。

ペンギンは立っている。しかしライオンは寝そべっているために『倒す』行為が非常に難しい。

響哉は普通にペンギンの頭部を連射し、後方に倒してペンギンを取った。もし実弾だったならペンギンの額には風穴が空いているだろう。

平土はというと、寝そべったライオンの尾の付け根を狙った。するとライオンは後ろ脚が少しずつ後退していき、最終的に柵から脚が出て、そのまま撃たれた事により落下。取られてしまった。

ここまで一進一退。どちらも姑息な手など全く使わずに大きな標的を取りまくっている。ここまでの狙撃科の被害はゆうに7万円に上っている。なんと可哀想な事か。

しかしこの2人に巻き込まれたのが運の尽き。まだ残弾は10発以

上ある。そして残りの標的は小さな小物ばかり。どれも1発で落とそうと思えば落とす事の出来る代物ばかりだ。
しかし、それはまだ20個以上ある。2人の残弾ではコレを全て落とす事は不可能だと思われた。

だが、後に狙撃科最大の恐怖として後世に語り継がれるこの件は、そんな生易しいものではなかった。

パン！　コン　カァン！

2人は標的となる小物の端に弾を当て、その時に弾かれた弾で別の

標的を倒したのだ！

パン！ コン カァン キーン！

今度はその強化版。3つ当てバージョン。すでに受付の生徒は涙目だった。

僅か5分………たった、5分間の間に狙撃科が2人に渡した景品の総額………

・――7万4千と170円也。

「つくつそー！引き分けかア！」

「引き分け？何を言う。お前のような阿呆と引き分けなど、俺にとつては敗北に等しい！」

お互いに景品が多すぎて顔が見えないのだが、俺と平土は狙撃科を出ようと階段を上りながら言い争っていた。

「うつせえ！お前のライオンの方が取るの難かつたろうが！だから引き分けた！」

「だったら俺の勝ちでいいだろう！お前のペンギンは簡単に取れるモノだったんだからな！」

俺と平土が先を歩き、後ろからはジュリアと氷川さんがぬいぐるみを抱っこして雑談しながら付いてきている。

「調子に乗るなハゲ！本当なら勝負仕掛けておいて引き分けなんて負けにも劣るんだぞ！それを引き分けにしてやる俺の優しさに感謝しろ！さあ感謝しろ！今しろ！すぐにしろ！！！」

「んだとテメエ！人が下手にでりゃいい気になりやがって！あのペンギンみたいに脳天に風穴開けてやろうかア！！！」

「風穴なんぞ空くかボケエ！それと、1つ言わせてもらおう！！！」

「ああ？なんだよ」

平土は声のボリュームを落とし、景品の入った袋の先からこつちを覗くように見ている。

「——次は、ちゃんと勝つ！」

俺は片手で袋を担いでビシッと平土を指差した。

「・・・そりゃこっちのセリフだ。阿呆が」

平土はそっぽを向いてそう言った。

「あ、平土ニヤけてやんの」

氷川さんが平土の顔を見て、楽しそうに言った。

「やれやれ・・・あなた達は本当に仲が良いのか悪いのか。私にはよく分からないわ」

ジュリアはペンギンを両手で抱えながら呆れたように俺と平土を見ている。平土がなんでニヤけているのかも俺には分からんし、この光景を見てなんで俺と平土が仲が良いと言えるのかも分からんが。

「なんでコイツなんかと、仲が良いなんて思うんだよ」

お。今回は俺も平土と同意見だ。だが、今回限りでお願いしたいね。

「あなた気付いてないの？響哉も・・・気付いてないようね」

「こんなに仲良いのにね」

「・・・なんなんだよ2人して」

「女の考える事はよく分からん・・・」

結局2人は、俺と平土が何故仲良く思うのかを教えてくれなかった。

なにが「その内分かるよ」だ。分かりそうにないから訊いてるんじゃないか。

その後は4人で一緒になつて行動し、2年生の変装喫茶『リストランテ・マスケ』を見ていき、夕方になつて1日目が終了するまで遊び尽くした。たまに平士とケンカしたりしながらだが、かなり楽しかったって胸を張って言える。

そんな日の最後、一般の客が帰る中、俺達生徒はゴミ拾いやらなきゃをしなければならぬので帰る客の流れに逆らつて歩かなければならない所がある。今俺達4人がいる所がまさにソレだ。

「すいませーん。ちょっと道を開けて下さーい」

こういう時に逆走しては迷惑なので、係員専用通路などが設けられている。俺達はそこに行くために人の流れを横切つて行こうとしている最中だ。

「ヒナ、手を離しちゃダメよ。迷子になったら大変だから」

「……子供扱いするな、アヤメ」

ヒナはムスツとした顔でりんご飴を食べていた。

アヤメは、りんご飴を食べながら言われても説得力が無いと思った

が、それを口には出さなかった。言ったらまた拗ねてしまつて帰り道で物を壊しかねないからだ。

「それにしても、彩香さんも来たらよかつたのに。武偵高の文化祭」
アヤメは言いながら綿あめを食べる。その顔は満足そうだ。ただの女子高生の見せるソレに限りなく近い。

「あの人は死んだ事になつてゐるからな。死人が文化祭なんかに出てきたら、ちよつとした騒ぎになるだろ？」

「そついやそうだね」

そう言つてアヤメはもう一口綿あめを食べる。

「すいませーん。道を開けて下さーい」

少し先から女性の声が聞こえた。声の方を見ると、武偵高の制服を着た男女2組が揃つていた。

「……ふーん。アレも武偵なんだ」

さつきまでの女子高生のような雰囲気は一切無くなり、アヤメは僅かにではあるが目を細め、舐めるように4人の武偵高の生徒を観察していた。

「アヤメ。わかつてるな？」

「わかつてるわよ。よく、わかつてる。だからこうして、誰にも何もしてないじゃないの」

「…………行くよ」

「せっかちなあ、ヒナは」

そうして2人は武偵高から姿を消した。まるで、始めから来てなどいなかったかのよう——。

「……………?」

俺は足を止めて振り向いた。なぜだかは分からない。だが、身体が自然と振り向いてしまった。

「おい。なにこんな所で突っ立ってんだよ。邪魔になるだろ」

「あ、悪い……………」

なんと言つか、後ろ髪を引かれるような——そんな感じがしたような気がした。

この感覚が何だったのかは、今の俺には、解らなかった
——。

T O B E C O N T I N U E D

喧嘩するほど仲が良い2人（後書き）

アヤメ、ヒナ再登場。フツーに文化祭に来ています。

そして響哉と平土の仲がちょっと良くなったように思えます。射的勝負で景品を全部持つて行くのは、やりすぎだと思いますが・・・。

ちなみにプレ3は2人がそのまま貰いました。他にもぬいぐるみやコップ、コースターなども取ったのですが、ジュリアと秋奈にほとんどあげました。荷物運びは男の仕事という事でぬいぐるみ以外は持たされてはいましたが・・・。

金一さんについてですが、今は睡眠期に入っています。よって最後の文化祭は寝て過ごす事になってしまいました・・・。あの人が文化祭で後輩と絡む姿が想像できない作者に問題があります。はい2日目の話は省略でお願いしますが、金一さんも2日目と打上げにはちゃんと顔を出しました。響哉達はクラスの出し物でんやわんやだったので、特に書く事はありません。そしてハロウィンですが響哉はすっかり忘れていて白い布をかぶって「幽霊」と言い張ったみたいです。ちなみに平土は吸血鬼（ブラドじゃなくて、一般的なアレ）で、ジュリアはなぜかジェイソン。志波さんはゴルゴンで秋奈は「狼男」ならぬ「狼女」です。響哉曰く「どっかで見たことある」そうです。まあ、アレですね。

クリスマスは響哉はジュリアとどこか行って、大晦日と新年は自宅に帰って過ごしました！

はい！これで次からはキンジの入試が・・・始まりませんよ。ちゃんとやります。ちゃんと。

感想の方、お待ちしております。

日本のサラリーマンは12月を「厄月」と呼んでいるらしい（前書き）

タイトル通り、11月の初旬から一気に12月まで飛びます。今回はクリスマスの話です。

12月はクリスマスがあつて、それから1週間過ぎると新年と、本当に忙しい時ですが、プレゼントを買ってお年玉を渡すお父さん方は本当に大変ですよ。ボーナスが貰えるからって出費がでけりや意味無いでしょうに……。

まあそんな話はまだ学生の作者及び読者の方々には関係無いのでこの辺にしておいて、本編の方はクリスマスの少し前からになります。原作がまだそこまで行っていないのですが、武偵高ならやるだろうと勝手に妄想して書きあげます。特に何も無いので、番外編のような感覚で見ただけにとよろしいかと思えます。

では、どうぞ。

日本のサラリーマンは12月を「厄月」と呼んでいるらしい

12月・・・季節はもうすっかり冬となり、世界中のイベントに首を突っ込みまくるバカの吹き溜りこと東京武偵高はクリスマス一色となる。もっと他にやる事もあるだろうに、防弾仕様のサンタの格好やらトナカイのきぐるみやらを特殊捜査研究科《CVR》とかが持つてくる。ソレをクリスマスが待てないバカ丸出しの生徒が着込み、もうすぐクリスマスがやってくると伝えてくれる。そんなモンはカレンダー見たら誰だってわかるわ。

「で？響哉はどうするの？」

ジュリアがガルブツィーを食べるのを止めて訊いてきた。そういや

お前、いつもロシア料理頼んでるけどこの学食そんなに種類あったか？

「どうするって、何を？」

現在、俺とジュリアの他には、志波と、あと文化祭からよく一緒にいるようになった氷川さん、平土がいる。

「クリスマスパーティーよ！私は生徒会の仕事なのでそっちに行かないとダメなの。子も来るわ。あなたはどうするのってさつきから訊いてるのよ！！」

バンツと机を叩いてジュリアは言った。おい、うどんのつゆが零れただろうが。別にいつもの事だけど。

「ふーん。どうせ予定も無いし、俺も行ってみるか」

「なんだ？お前も来るのか。クリスマスまでお前の面を拝まねばならんとは、やはり今年は厄年だったな」

「もお。またそんな事言って……。ホントは響哉が来てうれしいクセに」

「なんで俺が嬉しがらねばならんだ！適当な事を言うのも大概にしろ！」

今度は平土が机を叩き、さっきの倍くらいのつゆが零れる。俺の周りだけびちゃびちゃなんだけど。もう怒る気にもなれん。

ああ……たまには静かに飯を食いてエ……。

——で、12月24日。クリスマスパーティー当日。

この強襲科アサルトの黒い体育館が平和利用されている事がとても現実とは思えない俺は、プレゼント交換に出すためのペンダント（千円）が入った小さな箱を忘れてきていないか一度確認して、防弾制服姿で体育館の中に入っていた。

9時半過ぎという遅い時間から俺は参加……いや参戦したわけだが、そこはすでに戦場と化していた。

まず、飯はバイキング方式で長い机に揃えられているのだが、そこにあつた七面鳥とかを取り合つて紙皿と紙コップ、フライドチキンの骨、空薬莢、野菜など……ありとあらゆる物が床に散乱していた。ってか、薬莢つて……。聖なる夜にまで拳銃^{チャカ}ぶつ放すなよ。

夕飯食つてから来てよかったぜ。

「あ。響哉あー！」

声のした方を見ると、氷川さんが手を振っていた。隣には平士と志波もいる。ジュリアは……。いないな。

「遅かったな。もう食えるモンは残つてねえぞ」

平士はフライドチキンで俺を指してからソレを喰つた。相変わらず嫌なヤローだ。

「こうなるだろうと思つて、もう飯は食つてきたんだよ。フライドチキンも食つた。ジュリアはどこだ？俺を誘つたのはアイツだぞ」

「ジュリアなら、もうすぐ戻つてくると……。あ、来た来た」

志波さんが指を指した方を見ると……。ミニスカサンの格好のジュリアがやって来た。

なぜだろう。すげー似合う。やっぱハーフだからか？外国人だからここまでそれっぽく見えるのか？

「きよ、響哉！？あなた、来てないんじゃないの！？」

ジュリアは急に顔を赤く染め、右手で胸元を抑えながら左手でスカートをギュッと握って下げようとした。

おいおい・・・そんな事したら余計に目が向いちゃうじゃねえか。胸が抑えられてラインがしっかり見えちまつてるし、なによりスカート伸びるぞ。

「俺を誘ったのはお前だろ。どうせこの学校に通ってるのは、食意地の汚いバカばかりだ。だから飯食ってから来たんだよ。遅れて悪かったな」

「う、ううん・・・それなら、いいわ。」

・・・そ、その・・・どう？この格好」

ジュリアはさつきと同じポーズでもじもじ身体を動かしながら上目使いで俺の顔を見てきた。

か・・・可愛すぎる・・・！！

「あ・・・ああ。いいんじゃないか？よ、よく似合ってるよ」

顔が赤くなってきそうだったので、俺は斜め上を向いて答えた。でもまあそこは健全な男子。ちらつと横目でジュリアの方を見てしまっただけ。

「・・・・・・か・・・かわ、いいか？」

いっそう身体を縮めて、小さな声でジュリアは訊いてきた。ヤベエ。鼻血でそう。

「・・・ああ。可愛いぞ。めちやくちや」

つくつそー。志波のヤツ、なにこつち見ながら氷川さんとニヤニヤしてんだよ。ヤメロ。なんかはずかしいだろ！

つてか俺、顔赤くなつてないよな？

「——はうああ！！」

ボタン。ジュリアはなんか知らんが頭からぶっ倒れてしまった。

「お、おい！大丈夫か！？」

頬をペシペシと叩きながら、意識があるかを確認するが、どうやら大丈夫のようだ。顔も幸せそのものだしな。

「やれやれ……ここまでくるともう病気の域ですね」
志波はふうーっと息を吐いてジュリアの髪を撫でた。

「病気なのか？ジュリアは」

「うーん……当たらずも遠からずって所ですね。少し寝かしつければすぐ良くなるから、アンビュラス救護科に連れてってあげてもらえますか」

「わかった」

俺は文化祭の時のように、ジュリアを担いで体育館を出た。

「あーあ。羨ましいなあ。私も平士にこうやって気絶させられたい・
・・・」

「……？なんなら今から総合格闘《CQC》の訓練をつけてやる
うか？」

「……はあゝ。当の本人はコレだもんねえ・……」

「……？」

この会話を俺は聞いてはいなかったが、聞いていたとしても氷川さんの言っていたことの意味は分からなかっただろう。

救護科のベッドにジュリアを寝かしつけてから10分後、ジュリアは目を覚ました。

電気が壊れていたのだが、病室は月の光で明るかった。たまに雲で隠れて暗くなるが、問題無かった。

「う、うゝん……。あれ？ここは？」

起き上がったジュリアは、さっきまで寝ていたので少し服が乱れていた。と言っても、肩のあたりがちよつとずれてる程度だが。

「文化祭の時と似たような事になっちまったな」

「響哉……。ここは、救護科の病室？」

「ああ。突然気絶したから焦ったぜ。体調悪いなら無理するなよ。心配したんだからな」

あと、俺に風邪移すなよ。絶対。

「…………フツ」

「なに笑ってんだよ。倒れた時に頭でもやったのか？」

「…………心配してくれたんだな。私のこと」

そう言ってジュリアは、微笑んだ。その笑顔は月明かりに照らされ、その美しさをさらに際立てていた。

「……………」ありがとう」

その微笑みを崩さず、月の光に照らされたままの彼女の言葉は、静かな病室に浸み込むように響き渡った。

ジュリアは、間違いなく可愛い。そのジュリアが、露出の高い服を少し乱しながら着て、こんな可愛い笑顔を見せられると……………
なんと言つか、ドキドキする。顔が熱くなる。

「……………」ぶ、武偵憲章1条だ！『仲間を信じ、仲間を助

けよ』！お、俺はそれを守っただけだ！！」

照れ隠しのつもり大声でそう叫んだ俺はの顔は、間違いなく真っ赤なんだろうな。月が雲に隠れてくれて助かった。

「——そう、よね。……それじゃあ体育館に戻るとしましょ」

「もういいのか？ムリしなくていいんだぞ」

「ムリなんか、してないわ。さあ、早く行かないとプレゼント交換が始まっちゃうわ」

そう言ってジュリアは病室を出ていった。何かが彼女の顔で光ったような気がしたが、それが何だったのかは俺にはわからなかった。

外に出ると、さっきよりも気温が下がっていた。やべえな。コート持ってくればよかった。

ジュリアはというと、露出の多いミニスカサンの格好で腕を抱かえて震えていた。

「寒いだろ、コレ着ろよ」

俺は上着を脱いでジュリアに渡した。これでもまだ足りないだろうが、何も無いよりはマシだろう。

「あ……コレ、いいの？響哉の方こそ、寒くないの？」

「お前の方が薄着だろう。俺の事は気にすんな。ほれ」
俺は渋るジュリアにむりやり上着を羽織らせた。

「火薬臭いかもしれんが、我慢しろよ」

「……………うん、そんな事はないわ。響哉の二オイと暖かさが伝わってくる」

「そりゃあ、さっきまで俺が着てたからな。当たり前だろ」

「そうじゃなくて」
なにが違っただよ。

結局、ジュリアは何も教えてくれなかった。女ってのはなんでこう物事を隠したがるんだろうな。

凍えるような寒さの夜道を歩きながら、俺とジュリアはそれ以上話す事無く体育館に着いた。

「お、戻ってきたな」

「遅かったですね。何かありましたか？」

「まさか誰もいない病室で響哉がジュリアに手を……………!？」
氷川さんが何か言いかけた瞬間、ジュリアはもの凄いスピードで氷

川さんの口を抑えた。お前、諜報科しほうかでも通用するんじゃないか、その動き。

「おい。遊んでる暇は無いぞ。もうすぐプレゼント交換なんだからな」

「あら、もうそんな時間？なら私は仕事があるので失礼するわ」

「何度も言うが、ムリすんなよ」

「わかってるわよ」

ジュリアは氷川さんを解放してステージの方に走っていった。

それから、すぐにプレゼント交換が行われた。その後は二次会に行くヤツ以外はお開きになるので、実質クリスマスパーティーは終わった事になる。

帰る前にプレゼントを見せ合いっこしようという志波の発案に乗った俺達3人は、プレゼントの入った箱を開けた。俺が貰ったのは銃弾の形のキーホルダーだった。

「あ、それジュリアがこの前購買で買ったヤツと一緒にです」
志波が俺のプレゼントを見てそう言った。

「ジュリアのか。またえらく近場のヤツのを貰ったな。氷川さんはなに貰ったんだ？」

「私はハンカチだったよ」
良かったじゃねえか。志波なんてひどいぞ。スタングレネード閃光手榴弾なんて武偵らしいプレゼントを貰ったからな。あの人狙撃科だから使い道なんてほとんどねえのに。

「平土は？」

「俺は………ツイスターケブラーTNKワイヤーだ………。誰だこんなの選んだヤツは」

………今回はかりは同情するよ。

「ごめんなさい。着替えていたら遅くなつて」
ジュリアがコスプレ姿からいつもの制服姿になって戻ってきた。

「お前はなに貰ったんだよ。プレゼント」

「私は・・・コレだ」

そう言ってジュリアがカバンから取り出したのは、ペンダントだった。俺が買ったヤツと同じ。

「あ、ソレ俺のだ」

「な、なに!!?」

「響哉の貰ったプレゼントも、ジュリアのだったよね」

「すごい偶然もあったもんだな。それじゃ、もう行くか」

平土の言葉を皮切りに、真っ赤になってるジュリアを放っておいて外に出ると・・・

「雪・・・?」

真っ白い雪が、空から舞い降りてきていた。

「ホワイトクリスマス、ね」

「お、ジュリア。もう大丈夫なのか?」

「う、うん。それはそうと、このペンダントは大事に着けさせても

らうわよ」

ジュリアはもうすでにペンダントを首から下げていた。行動速いな。

「おう。そんじゃ、もう行くか」

それから、しばらく5人で雪の降る夜道を歩いた。俺と平士はいつものようにケンカをしながら。その姿を見てジュリアと氷川さんが止めに入り、志波はケータイでその光景を撮っている。

今、俺は胸を張って楽しいと言える。これから先も辛い事はあつても、また同じように続いていくのだらうと勝手に思い込んでいた。

まさか、化け物みたいなヤツらとの
闘いに巻き込まれていくなんて、この時は誰も、思いもしなかった。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.
.

日本のサラリーマンは12月を「厄月」と呼んでいるらしい（後書き）

最後のはもちろん原作の話です。思いつきり巻き込まれます。主に響哉が。

さて、年末年始の話ですが……省略させていただきます。響哉が実家に帰ってゴロゴロするだけの話なので。要望があれば書きます。

次は卒業式の話をして、新章に入ろうと思います。

GRADUATION（前書き）

時間は飛んで卒業式です。このペースだと50話には原作が開始できそうです。

今回は結構前にちよっただけ書いた、あの装備が遂に登場します。

GRADUATION

季節は流れ・・・・・・・・3月になった。

多くの学校では卒業式シーズンを迎え、1年もの間学校を引っ張ってきた3年生たちは、長い間世話になった学び舎と、そこで出会った友人達に別れを告げ、各々の未来へと歩んでいく。

——それは、ここ東京武偵高も例外ではない。

武偵を養成する総合機関といっても、武偵高はあくまで高等学校。故に、卒業もある。

在校生は、笑って卒業生の旅立ちを見送る。それが、卒業式のルールだ。

——普通の学校では。

卒業式が終った。

校長の緑松の見送りともいえる言葉を最後に、卒業生はこの武偵高を卒業した。

とはいっても、まだまだ思いがあつて武偵高を去れない卒業生が大勢いる。「打上げだア！」と騒いでいるグループや、「最後にでけえ足跡を残してやる！」と、屋上から飛び降りて深い足跡を付けようとする頭の悪いヤツもいる。

そんな頭の悪いアホ共の学校こと武偵高の卒業式には、殉学した生徒達の名が初めに呼ばれる。校長の緑松が1人1人、その名を呼んでやり、卒業証書も後でお墓に添えられる。もちろん、彼らの分のイスも用意される。

武偵は、その任務もしくは訓練中に死亡する可能性がある。

警察官が捜査中に死亡すると『殉職』であるが、武偵高で亡くなった生徒は『殉学』と言われる。まだ未来ある若者が早くに亡くなってしまうため、武偵高は社会から批判的な目で見られることがある。それが拡大し、武偵自体が批判的に捉えられる世の中になってしまった。

だがしかし、すでに世の中に必要不可欠となつてしまった武偵を失

くすことは不可能。さらに全国に点在する武偵高自体も、活動を停止する事は武偵の生存率と絶対人工の低下が危惧されてできない。そんな仕方ないからという理由で、武偵高は成り立っているのだ。

俺は卒業式が終った後、^{アムト}装備科の柊先輩のB203作業室に訪れていた。

以前来た時にあった棚は全てなくなり、綺麗で広い空間になっている。

「柊先輩、9月に頼んだアレ、取りに来ました」

「ああ、アレね。ちょっと素材が届くの遅れちゃったけど、出来はいいハズよ」

そう言っつて柊先輩は引き出しから袋を取り出した。

俺はそれを受け取り、中身を確認する。

袋の中にあつたのは、C装備でお馴染みの^{フィンガダロス}FLGだった。

「手甲の部分はMWS超硬合金を窒化チタンでコーティングしたモノを使っているわ。私はこういう企業にはパイプ持っていないから、長くなっちゃったわね」

「いえ。作ってもらう立場なんですし、わがまま言ってもらえませんよ。それに、柊先輩に任せたら安心ですからね」

「言うようになったわね。それじゃあ、私は行くとするわ。あと、卒業した後も民間で武偵活動してるから、また私に依頼しに来てね」

「はい。これからもお願いします」

俺が軽く頭を下げると、柊先輩は「またね」と言って……武偵高から、去った。

柊先輩を見送った後、俺のケータイに金一さんからメールが届いた。

『本日午後5時、アサルト強襲科のコロッセオ闘技場に武装して来い』

メールには、それだけが書かれていた。

そして、夕方5時。

俺はメールで呼び出されたとおり、一度寮に戻ってブレン・テンと
H & a m p ; K P 4 6 2 丁を携え、スベアマガジン予備弾倉も満タンにして持っ
てきた。そして手には、卒業式が終った直後に柊先輩から貰ったば
かりのF L Gが装着してある。

闘技場に着くと、そこにはカナの姿があった。

その姿は制服姿ではない。漆黒のコートを着込み、手袋まで着けて
いる。いくらなんでも3月に着る服にしてはおかしい。何かあるの

だろうか。

俺はとりあえず闘技場に降り、カナと相對する。だが、その雰囲気はいつものものではない。もっと、殺気のようなものを滲ませている。

「……その格好は、一体何の冗談だ？」

「HSSは、脳髓に多大な負担をかけるの。だから、HSSに長時間なつた後は睡眠期に入つて、回復を待つよ。そして、その睡眠期が終つた直後は自律神経が狂つて体温調節ができないから、こんなに厚着しているということよ」

「へえ、HSSも無制限つてワケじゃないんだな。で？今日は一体何の用だ？また裏港で武装ヤクザでも捕まえに行くのか？」

「いいえ。今回は違つわ」

「じゃあ一体何なんだよ」

「――私と闘いなさい」

カナの衝撃的な一言に、俺は我が耳を疑った。

「…………オイツ！ とういうこ」――

――
バン！！

俺が言う前に、足元に銃弾が撃ち込まれた。

「不可視の銃弾……………！」
インザイジビレ

カナは……………本気だ。本気で俺と、闘う気だ――
！

ゾクッ

背中に、冷たい汗が流れた。

カナの背後からは、思わず竦んでしまいそうなほどの殺気を感じる。

「さあ。銃を抜きなさい。そして、この1年でどれほど成長したかを……見せてみなさい——」

TO BE CONTINUED……

GRADUATION（後書き）

響哉vsカナ！開戦！

ところで戦兄弟同士の闘いって、多そうですね。

アリアとあかりも最後は闘ったりするんでしょうか？気になる所です。

今日は宿題が有り得ないほど出ているのでもう投稿できませんが、明日の夜に投稿します。応援よろしくお願いします。

弟子の斃さなければならぬ敵の1人は師匠と相場が決まっている（前書き）

響哉vs力ナ、決着！の話です。

25話というキリのイイ数字で第2章が完結したのは偶然です。まさに奇跡。

では第2章最終話、温かい目で見えてやって下さい。

弟子の斃さなければならぬ敵の1人は師匠と相場が決まっている

「この1年でどれほど成長したかを……………」
見せてみなさい——！」

グア——！

カナの背後から、突風が吹いたような錯覚がした。

だが、ここは密閉された室内。風など入ってくるはずがない。じゃあさっきの正体は何か。答えは簡単だ。第六感に教えてもらうほどもない。

——ただの、『殺気』だ。

（有り得るのか？こんな事が………！）

格闘漫画とかに、殺気を当てて気絶させるとか、そういう描写がある。だが、実際に陥るのは気絶ではない。

——萎縮するのだ。蛇に睨まれた蛙のように、硬直し、ただ目の前の脅威が通り過ぎ、危機が去るのを待つ。

野生の生存本能が、最も死に直結する判断を下す。それは、俺も例外ではない。

恐い――。ただ、それしか思い浮かばない。

動け。そう命じているのに、動けない。

（これが、カナの……金一さんの本気――！）

ふと、思考が一瞬別の方向に走った。

『今、何秒経った――？』

カナは、まだ一步も動いていない。それは、まだ時間が進んでないのか、カナが俺を待っているのかのどちらかだ。体感では、もう10分以上ここに棒立ちしている気がする。

その時だった。

カナの指先が、動いた。この動きは、不可視の銃弾の前兆だ。
インウイジビレ シグナル

俺が不可視の銃弾を避けられるのは、目線、殺気、足の開きなんかから第六感で狙いを予測し、銃を構える前に射線から外れる事で初めて成立する。

だが、間に合わない。カナは今から銃を引き抜くのに対し、俺は今それを『視た』。つまり、その情報を今やつと脳に届けただけなのだ。

そこから身体の筋肉、つまり運動神経に命令しても、人間の神経伝達速度から考えて、その命令が筋肉に届く前に、銃弾が俺に当たる。

—— ちょっと待て。

だったら、何で俺はこんなに精密にカナの動きが視えてるんだ？

『視る』、つまり『観察』とは目から入った情報を脳が解析する事だ。それを、ここまで鮮明に、正確に理解するなんて、どういう事だ……？

—— その時、ピースメーカーから銃弾が放たれた。

ダメだ。

完全に、間に合わない。銃弾は真っ直ぐ俺に向かってくる。

——ヒュン、ビシィ！

弾丸は、俺の後ろの防弾ガラスに当たった。

バァン！

直後、銃声。

キーン

高い音がして、ピースメーカーが、カナの手から弾かれた。

——何が起こったのか、解らなかった。

気がついたら、俺は横向きに地面に倒れ、ブレン・テンをカナに向けていた。

ここで考えられる可能性が、2つある。

カナに殺気を当てられた時の命令が、今になってやっと届いたのか。

もう一つは、第六感が直接、俺の意志とは別に、無意識で運動神経を動かしたのか。

後者の可能性が最も高いだろう。

現に、俺は銃で反撃している。アサルト強襲科の授業でで何度も練習した動きだ。この動きは身体が覚えている。

タンッ

俺は、飛び出した。一瞬で、カナの懷に。

「——！！？」

カナは目を見開き、さっきまで銃を持っていた右手を抑えていた左手を、ガードに切り替える。

ドゴッ！

鈍い音を立て、俺の右肘がカナの左手首にヒットした。
エルボ

次の瞬間、俺は左手でカナの腹を殴っていた。

さらに回し蹴りも横腹に喰らわせ、カナの身体を吹っ飛ばす。

また、何が起こったのか全く理解できなかった。

だが、カナはまだ立っている。そんな事を今考えられる余裕はどこにもない。

「はあ、はあ・・・さっきの、打撃。アレは効いた・・・」
カナは腹を押さえながら言った。

——いや、アレはカナじゃない。金一さんだ！

雰囲気が、違う。カナの時よりももっと強い——でも、
苦しそうな、そんなカンジがする。

いやちよつと待て。それより……打撃が、効いた？ほとんどゴムの塊みたいなコートを着ていて、人のパンチが痛い？

「冗談は強さだけにして下さいよ。油断させようたつてそうはいかねえっスよ」

「……本当、だ。加速器ブーストの付いた鈍器で……殴られたような感覚だった。お陰で左手は、使えそうにな、い……」
金一さんはそう言つて左腕を上げた。その先の手は、力無くぶら下がっていた。

——骨折している。間違いない。

だが、いつ骨折した？肘打程度でカナの腕が骨折するのか？だが、エルボー現実金一さんは骨折していて手首は青くなっているし、ダメージを与えたのもあれだけだ。

(可能なのか？一撃で防弾服の上から、あの人の骨を折るなんて・・・！！)

それに、と金一さんは続けた。

「腹の方も、酷い事になっている・・・。あと一発、攻撃が入っていたら・・・間違はなく内蔵が破裂していた。一体どうやったこんな短期間でここまで強くなるのか、気になるところだ・・・」

「・・・俺も、同じ事を聞きたいですよ」

会話はしていても、俺と金一さんは緊張を解かない。俺はじりじりと金一さんに近付く。

「・・・だが、油断するとはまだまだ甘いな――」

ヒュッとその場で回転し、その長い後ろ髪をまるで振っように回し

た。

一瞬、キラッと髪の中で何かが光った。

反射的に俺はバックステップしていた。その瞬間、さっきまで俺がいた場所に何かがブーンという音を立てて通り過ぎた。

「なんだ……今のは……!？」

「……『サソリの尾《スコルピオ》を避けたのは、お前が初めてだ……」

そう言って金一さんは、その長い髪の中から巨大な鎌を取り出した。

その姿は、まさに『死神』だった。

「……その頭、四次元ポケットか何かですか？」

「残念。ハズレだ」

（まったく、最後の最後にとんでもない暗器を使ってきたぜ。第六感が無かったら首飛んでたんじゃないか？）

だが、金一さんの顔は非常に悪い。もう立っているのも限界といった様子だ。しかしそのオーラはカナの状態よりも、さらに強い。

しかし、さっきとは違って俺は気絶していない。これはチャンスだ。今、金一さんはフラフラだ。先手を取って一気に制圧できるかもしれない――！

俺はブレン・テンを構えようとした。

だがその時――全身の筋肉が、まるで高圧電流が流れたかのような痛みに襲われた。

「ぐあああああ！！？」

俺は立っていられなくなり、膝から倒れた。

一瞬、金一さんのトラップか何かかと思ったが、違う。この人はこんな事しないし、第一金一さんは何が起こったのか解らないように見える。

「響哉——!?」

大鎌を捨て、俺に駆け寄った金一さんは心配そうに俺を見つめていた。

「全身が痙攣している……!?とにかく、アンビュラス救護科に——」

金一さんはケータイで誰かに連絡を入れた。俺はそのすぐ後、全身を襲う痛みに耐えられずに意識を闇に手放した……。

「全身が、酷い肉離れを起こしています」
医者からそう告げられた。

現在俺は、またもや武偵病院のベッドの上にいる。あの後金一さんに呼ばれた救護科の生徒に、武偵病院に搬送されたらしい。

今この個室には、俺と医者と、あと左手にギプスをはめた金一さんがいた。

「有り得るんですか。全身が肉離れを起こすなんて」
金一さんがそう言うと、医者は「私も、初めて見ました」とだけ答えた。

「一体、全身にどれだけの負荷を掛けたんですか？」

「……解りません」

「まあでも、無事で良かった。後遺症は残らないし、二週間も安静にしておけば今まで通り動けるでしょう」

医者言葉に救われた、という表現があるが、今の俺がまさにそれだった。

どこからともなく現れた、胡散臭いタイの針治療師に治療してもらわなくてもいいのだからな。

「では、他の患者がいるので」

医者は、そう言っって病室を出ていった。

「……で、響哉。なんで急に肉離れなんかを起こしたんだ」

「多分、不可視の銃弾を避けて、その後飛びかかった時に全身に負荷が掛かったんじゃないかと」

アレは多分、第六感の暴走に近い現象だ。

今までの第六感は『視る↓理解する↓警告↓判断↓行動』の合計5

つのステップから成り立っていた。
それが今回の『視る↓理解↓行動』の3つにショートカットされたのだ。

その『理解』も脳の奥深く、無意識のうちにしてしまったので、高速判断ができたが意識的に理解できてはいなかったというわけだ。

さらに警告、判断もなされなかった為に、俺は自分が何をしたのか解らなかった。

そして、それは自分の意志ではない為かどうかは知らんが、脳がリミッターを掛け損ねた。それによりあそこまでのパワーが出て、その分の反動、つまりツケが後から回ってきたのだ。

多分だが、カナの殺気を浴びせられた時に第六感が狂ったか、進化したのだろう。火事場の馬鹿力というヤツだ。

その事を金一さんに説明すると、

「成程。そう言う事なら説明が着くな」

普通に納得してくれた。俺はてつきり、「ならばそれにも耐えられるように鍛えておけ！」とか言い出すんじゃないかと不安だった。

「金一さんは、進路はどうしたんですか」

「かなり前から武偵庁に決まっていた。だから、しばらくは忙しくなりそうだ。」

ああ、それと……今年から俺の弟が東京武偵高《この学校》に入学してくる。それでなんだが……俺の代わりにソイツの面倒見てやってもらいたい」

「弟がいるなんて初耳なんですけど……」

「そうだったか？」

「はぁ……本当なら断りたいんですけど……もう諦めました。乗りかかった船ですし、いいですよ」

「すまない。では、俺はもう行く。鍛練は怠るなよ」

「へいへい」

金一さんは病室から出ていった。

病室には、俺1人となった。

「まったく……面倒事はつか押しつけてきやがって」

この瞬間、俺は彼ら^{アイツ}の戦争に巻き込まれる事が確定した事を、俺は知る由もなかった。

——いや、そもそも俺は、巻き込まれる事が元々決まっていたのかもしれない。

GO
FOR
THE
NEXT
—
!

弟子の斃さなければならぬ敵の1人は師匠と相場が決まっている（後書き）

第2章完結です。かなり予想外な終り方をしてしまいました。

暴走状態の響哉の打撃を受けた時、金一さんはHSS状態から死に際の

ヒステリアモード……つまり、ヒステリア・アゴニザンデの状態になっています。あのまま響哉が闘っていたら、間違いなくやれていました。

響哉のいう『暴走』ですが、これは本気のカナの殺気に当てられた事で第六感が生きるためにすべき行動を無意識で判断し、行動に移したという事です。響哉の仮説もあながち間違っではありません。

めだかボックスの高千穂仕種の『反射神経＋判断力』を攻防一体にしてさらに自爆技にしたような感覚です。

第3章は響哉達が2年になり……遂に、遂にキンジ達が入学してきます！さらにインターンでAAメンバーも入ってきて、進行スピードはさらに亀化が加速するでしょう！最後にはどうなるのか、作者も全く分かりませんが、応援よろしくお願いします！

Rランク？なにそれ美味しいの？（前書き）

まだキンジ達は出てきません。今回は退院直前の響哉のベッドからスタートです。

それから、3章からブレン・テンをB・Tと略します。ご了承ください。

Rランク？なにそれ美味しいの？

ヒマだ。

金一さんとの全力の闘いで全身肉離れを起こして全治2週間を宣告された俺は、退院の日を明後日に控えていた。

現在の時刻は午前2時半。真夜中だ。

なんでそんな時間に起きているのかというと・・・・・・・・・・単に眠れないから。

「朝の内に寝過ぎたかもしれんなあ・・・・・・・・」

こんな時間では、誰も見舞いになんぞ来てはくれない。そんなヒマがあるんだったら寝た方が身のためだ。

個室なのだが、テレビは無い。コレは俺にとって死活問題なのだが、そんなことを病院側はこれっぽっちも理解してはくれない。ああ可哀想な俺。

そんな自分の事を悲劇の主人公みたいに言う可哀想な俺は、春樹に頼んで寮にある漫画やライトノベルなんかを持ってきてもらった。龍や戒なんかに頼んだら、穴空けて持ってくるに決まっているので、春樹に頼んだのだ。

俺がISを読み返して「なんで1巻では自由参加だった学年別個人トーナメントが、2巻の頭には全員参加になっているのだろう」と真剣に考えていた時、扉の向こうに人の気配を感じた。

俺は念の為B・Tを手に取り、ベッドの中に隠した。

コンコン

ノックの音が俺だけしかない病室の中に響いた。

「・・・・・・・・どうぞ」

俺が入室を許可すると、病室の引き戸が静かに開けられ、黒服でサングラスを掛けた男2人が入ってきた。

「夜分遅くに失礼。朱葉響哉様とお見受けします」

「・・・・・・・・あなた方は？」

一応、B・Tの銃口をこっそり2人に向けておく。

「度重なる失礼、お詫び申し上げます。私達は武偵庁からの使いの者です」

「武偵庁・・・・・・・・？」

俺なんかに武偵庁が一体何の用だ？

「……まさか、彩香の事じゃないだろうな……」

「先日の遠山金一氏との私闘、大変見事でありました」

「!!!?」

「驚く事はありません。我々は以前から響哉様の事をマークしておりました。先日の私闘は、その調査の過程でしかありません」

「ますます分かん。なんで武偵庁が俺なんかに目を付けるんだ？もつと他にやることがあるだろ。去年の春に起こった連続殺人事件の調査とかいろいろ。」

「あれか？その年度の予算使わないと来年から少なくなるからか？冗談の通じる相手ではなさそうだが、前から一度役人さんに言ってみたかったんだよこの台詞。」

「いえいえ。これは立派な調査です。それに元々武偵庁に回ってくる予算は、全省庁の中でも最も少ないですよ。ですので、少ない予算で装備や給料を支払わなければならないので無駄遣いなんてする余裕はどこにもありません。他の省庁はどうか分かりませんが」

「……なんか、すいません」

「いえいえ。よく言われる事ですょ」

よく言われるのかよ。大変だな役人も。

「先日の私闘は、闘技場^{コロシアム}に設置された監視カメラの映像を拝見させていただきました。そこで我々は、響哉様にある依頼^{クエスト}をお持ちいたしました」

「依頼……?」

「その通りです。こちらが、詳細となります」

左の男が革の鞆から、漫画化や小説家が原稿を入れるようなあの袋を取り出し、中に入っていた紙を俺に見せた。

その瞬間、俺は………

ババァァン!

隠したB・Tで、2人の男の肩を撃った。

「ぐわあああ!」

「んなっ・・・なにを・・・!!?」

男は鞆を落とし、肩を押さえて膝を付いた。B・Tの10mmオートは身体に当たった時、.357マグナム弾並の衝撃だからな。不意打ちで撃たれたらこうなる。

「ばあか。そんなワザとらしく足開いてたら、誰だって拳銃撃ってくるって解るに決まってるんだろ!」

俺はガバツと布団を払い除け、B・Tの銃口を手前にいた男に向ける。

「・・・合格です」

「なに?」

「あなたは、合格したのです。その突出した危機察知能力によって」

「何を言っている!?!合格ってなんだ!?!答える!」

俺が声を荒らげて訊くと、男はその表情を僅かに笑みに変え――

「Sランクから、RANK・ROYAL……つまり、Rランクへの昇格に相応しいということですよ」

男は、静かにそう言った。

「Rランク……？聞いたこと無いぞ、そんなの」

「……我が国にも、すでに1名いらつしやるのですが、やはりまだ一般には知られていないようですね。簡単に説明いたしますと、Sランクは特殊部隊の一個中隊に匹敵する実力を所持していると考えられているというのは御存じですね？」

「まあ、常識だな」

「それがRランクでは、特殊部隊一個大隊分の戦闘力を保持している事と同義とされています」

「……おいおい。今更この人達が何言いだそうが全く驚くつもりはなかったが、さすがに今は驚いたよ。一個中隊分の戦闘力すらあるかどうか怪しいのに、一個大隊分だなんて、逆に想像しにくいぞ。」

「そしてなにより……その数は世界でたった7人しかいなかったということです」

「たった、7人……!？」

Sランク武偵でも、世界に700人とちょっとしかないのに……

「ですので……響哉様は世界で『8人目』のRランク武偵という事になります」

ですが、と男は続ける。

「その戦闘力自体は現在の段階ではまだまだ他のRランク武偵どこ

るか多くのSランク武偵にすら及びません。しかし、響哉様にはとてつもない伸びしろがあります。その伸びしろを考慮して合格しました。先程の依頼をお渡しますので、期日までに目を通してお願いして下さい」

「お、おい！」

「世界で8人目、日本で2人目のRランク武偵として。そして何より、1人の武偵として精進して下さい。それでは失礼します」

黒服の男2人は、それだけ言い残して病室を去っていった。

正直、あの2人は完全には信用できない。

だが、依頼を置いていったので一応ソレに目を通すと……………

「……………マジ、かよ……………」

そこには、先日先送りにされた日米首脳会談での、野田総理の身辺
ボデー
警護の依頼だった。

報酬は・・・3000万。さらに前金で500万振り込ま
れる。

ちゃんと総理大臣とかのでかいハンコも押されている。間違いなく
本物だ。

・・・さすがに税金ドロボーは、懐が広いな。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.
.

Rランク？なにそれ美味しいの？（後書き）

3章の頭からこんな話ですいません。

彩香の強さがジーサードと同等なので、響哉もそれに匹敵させるくらい強くしないと話にムリが出てくると思った次第です。

ですが、まだまだ響哉は未熟なのでこれからさらに強くなっていきます。武偵庁の方が仰ったとおり、『伸びしろを考慮して』のRランクです。

そしてついに次回からは原作キャラ達が少しずつ登場します。今度こそ本当です。27話目から原作主人公が登場する2次創作なんて少ないと思いますが、これからもよろしく願います。 m（――）

m

遠山家のキンジはとんでもないToo loveるメーカーである（前書き）

昨日は更新できずに申し訳ありませんでした。

次の土曜にバレーの試合があるので練習で忙しくなり、更新スピードが低下する恐れがあります。ご容赦ください。

27話目にして原作主人公がやっと登場します。これで少しは話が進むのではないでしょうか。

ちなみにサブタイは思いつきです。

現在の第六感の限界は、目線だけで相手の動作を察知する事ができません。

あと、気配で隠れた狙撃手が感知できます。場所までは不可能ですが。

こんなのほぼチートですが、ヒステリアモードも相当なチートな問題無いと思いました。これぐらいできないとどうやってあの超人たちと渡り合っていけるのか……。

そんなカンジでお願いします。

遠山家のキンジはとんでもないT o l o v e るメーカーである

俺が金一さんとはじめて闘ってから1年と大体2ヶ月が経った。

つまり、今は4月。あの金一さんによる突然の戦兄弟宣言から、もう1年も経ったのだ。

俺も晴れて2年・・・先輩と呼ばれる立場になった。

・・・のはいいのだが、残念な事が1つある。

それは、俺が退院した少し後の事だ……。

突如一尋問科《ダギユラ　の綴に教務科^{マスタース}に來いと呼び出された俺は、
そこでいつものように煙草を吸ってラリっている綴に「4月にある
新入生の身体測定やれ」と拒否したら何されるか解らないような雰
囲気で言われ、1年の身体測定をやらされる羽目になった。

4月末にはアメリカさんの都合で急に早まった日米首脳会談もある
のによオ…………。

で、今日はその身体測定の日。

俺はさつさと終らせたかったのだが、世界の出した答えはどうやら
違ったらしい。俺の受け持つヤツらは最終組の方で、始まりが午後
2時からだった。武偵高は生徒が何人いるのか分からないほどで
い学校だからな。X組なんて何人いるのか分かったモンじゃない。
箱庭学園じゃないんだから、そんなクラス作んなよ。

で、そいつらまとめて身体測定するから必然的に始まる時間が早い
組と遅い組ができるってわけだ。

いい具合に早ければ、一般の授業を単位を落とさずにサボれたんだがなあ。

で、そのサボれたかもしれない一般教科の時間は睡眠タイムと化し、昼休みにハンバーガーを喰って、しばらくしてから強襲科アサルトで最低限のトレーニングをしてから、救護科アンビュラスの前でそろそろスマホに変えようかと悩んでいると……

「おい不知火！あの人じゃないか！？」

「そうだね。先生の言ってた特徴と一致するし、何よりここには彼救護科前以外の生徒は見当たらない」

「普通に訊けばよくねえか？

あの、すみません。俺達の身体測定をしてくれる2年生ですか？」

「……なんかネクラそうなのと、やたらでかいのと、すげえイケメンがやって来たな。」

「ああ。多分そうだ。そんじゃ時間ねえからさっさと本人かどうか確認させてもらうぞ。……武藤剛気！」

「はい!!!!」

身長^{タツバ}だけじゃなく声もでけえな……。キーンとするんだけど。

「……近いんだからもっと声のボリューム下げる。次……。不知火亮！」

「はい！」

不知火は普通に大きいくらいだな。これくらいだと丁度いいんだよ。世話のかからなそうな1年だな。

「よし、いい返事だ。次は……。遠山!？」

「……。あの、なにか変な事しましたか？俺」

「……。1つ確認したいんだが……。お前、武偵庁に3つ上の兄貴がいるか？」

「……。？いますけど、それが身体測定に関係あるんですか？」

「ない……。いや、最後に関係してくるかもしれんが……。その兄貴の名前って『金一』

『じゃないよな……。？』

大丈夫だ。遠山なんてよくある苗字だろ？武偵高に入学して来たつつつても、もう1人か2人くらいはいるだろ。金一さんと同じ年の

兄貴持った遠山くらい、いる………と信じたい。

目の前の遠山がもし！仮に！金一さんの弟だったとしたら！俺はまず間違いなく最後の室内CQCで負ける！それも、女装なんかしたヤツにだ！ソレ！先輩の面子丸潰れの方程式が成り立つちまう！頼む！頼むからそうだと言わないでくれ遠山その？イイ！！！

「そうですけど………兄さんの知り合いなんですか？」

——詰んだ。バッドエンド確定だ。被害妄想が俺の頭の中でどんどん展開していく。

強襲科のヤツらにバカにされ、下級生に舐められ、なんか他にもいろいろされる妄想が俺の頭の中を埋め尽くしていく………。

「………遠山、金次………」

「………は、はい？」

「………今から身体測定始めるから、体操服に着替える。女装はすんなよ」

——そうだよ。女装させなきゃいいんじゃないか！ナイス！ナイス俺！の無意識！さすがここぞって時に活躍してくれる

ぜ！

そつと解れば苦勞は無い！やった！俺は威厳を守ったんだ！

俺が歡喜の渦に吞まれている時、後ろでは……

「なあ、あの先輩さぁ……突然落ち込んだり浮かれ上がった
りしてるけど、大丈夫なのか？」

「……ポピュラーじゃない事ではあるけど、大丈夫じゃないか
な？」

「不知火。それフォローになってるかどうか微妙だぞ」

俺は先輩としてどこるか人としての尊厳すら守れていなかったのだ
った。

まあそれからフツに身体測定して（視力検査は狙撃科スナイプの射撃レーンでスコップ越しに行く。聴力検査は通信科コネクトで足音から人数を割り出すという意味不明なもの。さらになぜか三半規管の検査まで謀報レザ科で行う）、ついに最後の鬼門。2年のストレス発散とか言われている強襲科別館での『室内での戦闘を想定した格闘戦《CCC》』を残すのみとなった。

だが、俺にとっては悩みの種でしかない。本当なら3人まとめて相手をして、さっさと終わらそうと考えていたのだが、そうは問屋が卸してくれないらしい。

「初めに言ったが、キンジ。女装はするな」
俺は遠山その？をキンジと呼んでいる。遠山だと金一さんと被るんだよなあ。あの人の事はちょっとしたトラウマになってるし。主に拳銃で撃たれまくった事に関して。

「キンジ……まさかお前、そんな趣味が……!!」

「武藤！俺にそんな趣味は無い！先輩も適当な事ばっか言わないで下さい！」

「安心していいよ、遠山君。誰にだって他人に言えない隠し事くらいあるんだから」

「なに解ったような顔でとんでもない勘違いしてんだよ不知火！」

まあさつきからこんな調子なわけで。俺はキンジが女装してHSSにならない事に安心していた。

さつきの測定で分かった事は……武藤は三半規管が強い。車両^ジ科のヤツらは大体強いけど、コイツの場合はさらにもう一段くらい強い。当人曰く『どんな乗り物でも運転できる』そうだ。原潜とか戦闘機でも操縦できるんだろうか。

不知火は……欠点が無い。視力も良いし、足音で人数も把握できている。三半規管も弱い方じゃない。全能力が平均以上のバランス型だ。武偵では珍しいが、できないよりできる方が良いからな。その点で見れば将来が気になる新人だよ。

問題は……キンジだ。

人を超えた化け物

あの金一さんの弟であるはずのコイツの成績が、他のSランクやAランクと比べるとあまり芳しくない。

資料には教官を全員斃してSランクだと書いてあるのだが、今のところそれらしい結果は出ていない。

まあ、俺も去年測った時は視力以外大したことなかったし、戦闘がやたら強いんなら納得なんだが……。

俺達4人がテストを行う部屋に向かっていると、キンジがトイレに行かせてくれと言いだすので、部屋の場所をキンジに教えて俺達は先に部屋に行くことにした。

行く途中、さっきまで測定していた女子の組とすれ違った。

「あ、星伽さん！」

武藤だ。なんかさっきまでと違ってやたら笑顔になったぞ。

「あ、武藤君……だったっけ。キンちゃんも一緒じゃないの？」
うわーお。すげえ美人だよ星伽さん。今は珍しいというか絶滅した大和撫子のオーラが出まくってるよ。

「キンジならトイレに行きましたよ。すぐ戻ってくると思うんですけど・・・・・・・・」

すると、向こうの班の引率の2年がオホンッとワザとらしく大きな咳をして

「おい1年！向こうの組はまだ測定が終ってないんだ。邪魔をしたら悪いだろう」

いや、ここで横槍を刺す方が武藤にとっては悪いように見えるんだが・・・・・・・・。

「あ、そうですね！すいませんでした。・・・それじゃあまたね、武藤君」

そう言って星伽さんを含む女子ズは俺達とは反対方向へ歩いていった。

「・・・・・・・・」

「・・・気にするな。まだチャンスはあるさ」

「先輩・・・・・・・・！」

武藤のヤツ、半泣きになってるぞ。不知火も苦笑いだし。何だこの画。

それから階段を上って4階の端っこの部屋に着いた俺と不知火と武藤は、キンジがトイレから戻ってくるのを女子っぱい部屋で待っていた。

「おせえなあ、キンジ。大の方か」

「それにしても遅すぎるね。また何かトラブルでも起こしてなければいいんだけど」

「なんだ？キンジはトラブルメーカーなのか？」

「はい。入試の時もさっきの星伽さんとぶつかって、押し倒すような形になって大変だったそうです」
「なんだそのT o l o v e るは。」

「がちゃ」

扉が開いた。

その先には………なんかさっきと目付きの違うキンジがいた。

「すみません。さっきそこで白雪とぶつかってしまって遅くなりました」

ぶつかって・・・・・・・・どうなったんだ？

っつーかこの感じ、間違いなくHSSだぞ。あれって女装しないと
ならないんじゃないかってたつげ。

いや、第六感が違うと言っている気がする。思い出せ。去年カナカ
ら聞いたはずだ。

ええっと・・・・・・・・たしか、『血中のβエンドルフィンが一定
以上になる・・・・・・・・つまり、性的興奮状態に陥ると、常人の約
30倍の量の神経伝達物質を媒介し、大脳、小脳、脊髄といった中
枢神経系の活動を・・・・・・・・』ストップだ！これ以上はダメだ！俺
の脳みそが溶けちまう！

思いだすのは前半だけでいいんだよ。えっと・・・・・・・・『血中のβエ
ンドルフィンが一定以上になる・・・・・・・・つまり、性的興奮状態
に陥ると・・・・・・・・』そうだコレだ！

HSSには、絶対に女装する必要があるわけじゃない。ただ自分が
性的興奮状態になればHSSになれる。

つまり、キンジはさっきそういう事をしたって事だ。この短時間の

間に何やってんだお前は。

「……トイレで何してやがった」

「なんの事ですか？」

とぼけている……。ようには視えないな。となると、コイツは一体どこで……？

『——さっき白雪とぶつかって……。』

ソレだアアアア!!!

TO BE CONTINUED……

遠山家のキンジはとんでもないTool overメーカーである（後書き）

キンジ、白雪、武藤、不知火、の4人が登場！レキ、理子、中空知はもう少し先です。特に中空知は出番があるのか微妙ですが。

キンジ、武藤、不知火の身長とかそこら辺はよく分からなかったの
で、身体測定のをほとんどを省きました。最後のCCCだけちゃんと
やります。

あと、本編であつた響哉から見たキンジ達の結果ですが、完全に捏
造です。武藤は乗り物に酔わないだろうとか、不知火は全部良さ
そうだなとか、キンジ通常モードはそこまで大したことないだろ
うとか、そんなカンジです。

そして響哉ですが・・・次回、ヒステリアモードのキンジと闘う
事になります！

果して響哉はキンジに勝てるのか。それとも下負けしてしまうのか。
そして普通の戦闘描写もままならない作者に格闘戦の描写が描ける
のか。答えは次回で明らかになります。

ヒステリアモードはいつ見てもチート（前書き）

タイトルはそのままの意味です。

響哉はヒスキン（ヒステリアモードのキンジ）を斃す事ができるのか？さらに作者は戦闘描写を上手く書けるのか？

ヒステリアモードはいつ見てもチート

決して広いとは言えない強襲科別館^{アサルトベック}の一室で、俺は目の前の男に驚愕していた。

さっきまでと違う、威圧的な雰囲気。全てを見通すかのような眼光。

明らかに別人だ。俺にはそう見える。だが他の2人は全く気付いてないようだ。なんで気付かないんだ。

たしか、HSS中は全能力が30倍になるんだっただよな。反射神経や胴体視力、瞬間判断力も30倍だ。ふざけんじゃねえ。ただの間がそんな化け物みたいなヤツと闘えるわけがねえ。こっちは第六感がある分幾らかマシだが、それでも根本的に勝てやしねえ。

第六感^{サード・センス}は相手の動きを予測する後天的な技術だ。それに対し向こうは相手の動きを見てから動いても間に合う、遺伝的な能力。筋力^{パワー}、速さ《スピード》、技術^{テクニック}といったハアハア三兄弟でお馴染みのスぺ

ツクも、ただの鍛えた人間である俺には到底敵いつこない。

だったら勝機はゼロか？そんなことはない。

こちららバカみたいな強さの父親に2年もの間、毎日扱シゴかれてきたんだ。その過程で会得した第六感と、鍛えられた身体ボデーを侮るな。

ちらつと時計を見ると、もう3時45分だった。この身体測定は武偵高のあらゆる学科に歩いて行くので移動に時間がかかってしまう。よって、5つ6つしかない検査でもこんなに遅くなってしまう。

「この別館が使用できるのは4時までだ。あと15分しかない。よって最後の運動神経測定は、3人同時に相手してやる」
俺がそう言つと、まず武藤が声を上げた。

「先輩！いくらなんでもムリっすよ！」

「武藤君の言う通りです。それに、いくら時間が無いからと言ってもそれでは測定になりません」

不知火も武藤に続くように言った。

しかし、その中で彼らに同意しない者が俺以外にいた。

「いいんじゃないか、2人とも」

キンジだ。いつもより低い声で2人の前に立って説得しようとしている。

「でもよおキンジ。いくら年上だからって俺ら3人をまとめて相手するのは、ちょっと無理があるんじゃないかねえのか？」

「その通り。これは僕たち自身にとっても重要な事なんだ。時間が無いからという理由で適当にやらされたら困るのは僕たち自身だ」

「——誰が適当にやるつつた、1年？」

不知火の言葉が少し癪に障ったので、俺は普段より低く凄味をきかせて言い放った。

「お前ら1年の実力測シのに、わざわざ1対1タイムはる必要は無えつつてんだよ。とつとかかって来いよ、オラ。ビビってんのか？」
そう言って俺は中指を立てた。これくらい言えばヤル気になるだろう。

「——どうなっても知りませんよ！」

まず動いたのは不知火だった。俺は武藤かと思ったんだが……あの野郎《武藤》、胸ポケットに手エ突っ込んでやがる。

不知火はナイフを取り出して俺と闘り合うつもりらしいが……

「連携が成ってねエ!!」

俺は足の裏で不知火が取り出そうとしたナイフの柄頭の部分を抑え、そのまま武藤の方に押し返す。

「うわっ!」

武藤は押し飛ばされた不知火を避け、拳銃——コルト・パイソンを俺の方に向けるが……

「この狭い部屋でパイソンなんて使うな!」

俺はすでに武藤の懐に入り込んでいた。

「っな!? いつの間に——!」

俺は踏込みの加速を利用して双掌打を武藤の胸部に叩き込んだ。その衝撃で武藤のでかい身体が一瞬宙に浮き、肺から大量の空気が吐き出された。

その直後に胸のホルスターからB・Tを抜き、
ブレン・テン

「戦闘の最中に相手から目を逸らすな」

バン キーン！

不知火の^{レーザー・エーミング}L・A・M・《・モジュール》付きH&a m p・K M A
R K 2 3を弾いた。

「っっ——！！！」

「判断は良いが……まだ甘いな。^{レーザー照準}L・A・M・があるんならも
っと速く撃て」

「うおおおおお！！！」

武藤が、叫びながら殴りかかって来た。

まだ動けたのか。だがその表情はまだ1分も経っていないのにすでに全力疾走した後の様だった。

大振りで飛んでくる巨大な拳を、受け止めるのではなく受け流す様に当て、横から後に行く途中でB・Tのグリップで首を殴った。

「——がつ……」

ドサア

武藤は気を失い、床に倒れ伏した。

「で？いつまで様子見してるつもりだ、キンジ」

俺は今になってからフィレオザローフFLGを取り出し、手に着け始めた。

「……いつまでも何も、もう俺しか残ってないじゃないですか」

キンジはベレッタM92Fを右手に持ちながら、キンジは静かに答えた。

「そっぴやそうだな。なら、さっさとかかって来いよ」

「——言われるまでも無い！」

ダダダダダアン

突如としてフルオートで横薙ぎに5連射されたキンジの銃弾が、
2
発俺に当たるように飛んでくる。

それを先読みしていた俺は右脚を出してしゃがむようにしてかわし、しゃがみながら左足を軸にして走り込んできたキンジの膝を蹴った。

「——！！？」

俺はそこから左足だけで跳躍するような形で、左掌打をキンジの顎に叩き込もうとした。

が、キンジはそれを身体を逸らす様にして、まるでマトリックスのように避けた。

——ベレッタの銃口を、俺に向けるおまけ付きで。

Bannon!

銃声。しかし俺には銃弾は当たっていない。さっきの銃弾は床にめり込んでいる。

俺はキンジのベレッタの銃口の向きを、B・Tの銃身を当てる事で射線をずらし、狙いをずらした。

本来ならここでB・Tを使って肩から下を撃ち抜きたいのだが、今回は身体測定なのでそういうワケにはいかない。本当なら拳銃使うのだって危ういんだ。

結局そこからは何もせずに、俺とキンジは1メートルちょっとで向かい合った。

この距離で拳銃は使えない。よって近接格闘しか出来ないわけなの

だが、キンジは反射神経が通常の30倍なので俺に勝ち目はない。だが向こうから動けば俺が攻撃の瞬間か直後の一瞬の隙にカウンタ―を決められる。多分キンジもそれを解っている。だから自分から動く事が出来ない。

まさに、『先に動いた方が負ける』という少年漫画でよくあるシチュエーションだった。

——
だが、俺はその定説が正しいとは思わない！

俺はキンジの右肩に手刀を振り下ろすように左手を出した。

キンジはそれに反応し、右手でガード姿勢を作った。

反対の左手では、ポケットから——
緋色のバタフ

ライ・ナイフを取り出し、一瞬でその刃を出していた。

（金一さんも使ってたヤツと同じだな。合格祝いか何かだろうか。後で訊いておこう）

一見したら絶望的なこの状況の中、俺は戦闘とは全く関係の無い事を考えていた。

なぜなら――

シャツ――！

俺の左の袖の中から、H & a m p・K P 4 6 がスリーブガンの要領で飛び出した！

ガツツという堅い音がして、キンジの右手の甲にH & a m p・K P 4 6 のグリップが叩き込まれた。

「――！！？」

突然の激痛に、キンジは顔を顰^{しか}めた。

コイツの意識は左手のナイフと、俺の身体の方にしか向いてなかった。

たから、この不意打ちはHSSによって跳ねあがった反射神経でも避けられなかったってわけだ。

その瞬間、キンジの動きが一瞬だが止まった。

その瞬間を、俺の第六感は正確に予測していた。

キンジのナイフを持っている左手首を捻り、力任せに関節を極める。いくらHSSと言えど、関節は人体の弱点だ。効かないはずはない。おまけにキンジは右手のベレッタを落としている。武器は残っていない。

「まあ何にせよお前はよくやったよ。さすがはSランク武偵だ。それから……………」

ドオンッ！

俺が言いかけた瞬間、大きな銃声が部屋に響いた。

——ギインッ！

俺は左手を背後に伸ばし、飛来してきた・357マグナム弾を銃弾^{ベル}で弾いた。

角度がいつもと違ったので、・357マグナム弾の衝撃をうまく流せなかったが、それでも十分弾く事ができた。ノールックで背後から飛んでくる銃弾を狙って弾くなんて芸当、自分でもよくできたと思うよ。また第六感に救われたな。

とりあえずキンジの手を離して、痺れている左手を擦る。こりや痺になつてゐるかもしれんな。

「な・・・嘘だろ——！！？」

武藤は目を見開いてカタカタとパイソンの銃口を震わせている。

「狙いは良かったんだけどなあ・・・。。キンジに関節極める時、偶然目に入ったんだよ。どうする？まだ続けるか？」

「……いえ。もう結構です」

キンジは左手首を抑えてそう言った。ちょっと変な極まり方させちまったかな？

「2人は？」

俺は後ろを振り返って武藤と不知火を見る。

「……これ以上は、キツ過ぎますって……」

「……僕も、2人と同意見です……」

心底疲れたといった風に、2人も降参した。

キン コーン カーン コーン

「やべ、時間！お前ら、部屋はこのままでいいからさっさと出るぞ！閉じ込められたら明日まで出れねえからな！」

「……は、はい！」「」

まあそれから手すりを滑って1階まで降り、4人そろって無事に脱出する事に成功した。武藤が盛大にコケて頭から落ちてきたのは驚いたが、すぐに立ち上がったのでなんともなかったようだ。これで気絶していたらこのデカいのを背負って行かねばならないので、本当に助かった。

その後、俺達は最後の測定で掻いた汗を流しに強襲科アサルトのプールが併設されている男子浴場に来ていた。

先に終わった組がすでに来ていて、結構混んではいたが入れないほどではなかった。

「はあゝ。なんかとんでもない先輩が引率だったなアゝ」
頭の上にタオルを乗せた武藤が、キンジと不知火と話していた。

「その通りだったね。それにまさか3対1で負けるとは思わなかったよ。何者なんだろう」

「そういえばあの、兄さんと知り合いみたいだったな」

「遠山君のお兄さんって、たしか武偵庁直属の武偵だったよね。ポピュラーな話だからよく耳にするよ」

「そんな人とどこで知り合ったんだ？まさか変な関係じゃないよな」

「兄さんに限ってそんなこと………なければいいけど」

「マジで!？」

ザバツと武藤が湯船から飛び上がった。

「んなワケあるかア!!!!」

ガツン!

俺は武藤の頭を思いつきり殴った。浴場の底が床より低いので、俺でも190近い武藤の頭を叩ける設計になっている。設計者ナイス。

「いつてえ〜!」

「あ、先輩。いつからいたんですか？」

「武藤が『とんでもない先輩が〜』って言い始めた頃からだよ」

「つまり最初からいたんですね」

「そういう事だ。人を勝手にホモにするな」

俺は言いながら湯船に浸かった。あゝやっぱりでかい風呂は気持ちいいわ。

「先輩、俺の兄さんとどこで知り合っただんですか？」

「入試だよ。俺が受験生で、金一さんが試験官。その時ボツコボコにされて、入学した後は戦兄弟関係アミカかんけいだった。あと、自己紹介が遅れたが俺は朱葉響哉だ。好きに呼べ。俺は上下関係とかあんまり気にしないから」

「は、はい・・・」

なんか変なカンジだな。やっぱり先輩後輩だからか。

まあそれからは普通に俺が去年されていた金一さんの訓練の話や、武偵高の教師たちのヤバい話とかをしていた。

浴場から出た後、3人と別れて俺は寮の部屋に戻った。

その日の夕方6時半ごろ。

俺は晩飯を買いに男子寮近くのコンビニに来ていた。焼き肉弁当かフライ弁当か迷うが、今日は焼き肉弁当にしようと決めてレジに行こうとした時だった。

「キンジ……？」

目の前に、俺の元・戦兄アミコの金一さんの実弟である、キンジが突っ立っていた。

「朱葉先輩、お願いがあります」

「金なら貸さんぞ」

「違います！」

おや、財布を忘れたんじゃないかったのか。

そついや、去年も似たようなことなかったっけ。たしか、説明会が終った後にこうやって金一さんが待ってて……。

……。

「俺と、アミカけいやく戦兄弟契約して下さい!」

キングはそう言って頭を下げた。

「……やっぱ、兄弟だね。やってること一緒だもん。」

TO BE CONTINUED……

ヒステリアモードはいつ見てもチート（後書き）

やっぱり少し微妙。だが諦めはしません！

最後のキンジの戦弟化は正直迷いましたが、やっぱり原作に深く係わっていくならこうしないとダメかなと思いました。

Rランクの依頼やキンジとの長期に渡る潜入調査等によりほとんど訓練する描写が無いと思いますが、訓練している事において下さい。

キンジの強さですが、原作と大して変わりません。作者の頭の中では強くなっていますが、それでも銃弾斬りや銃弾逸らしや鏡撃ちなんかのキンジの技は原作のタイミングで覚えます。よって大差ありません。むしろ魔改造されるのはイ・ウーメンバーの方になると思います。

そんなカンジで進めていくので、これからお願い申し上げます m

（——） m

夜桜吹雪の舞う下で（前書き）

更新が遅れに遅れて深夜になってしまいました。申し訳ありません。
今回はふつキンが大活躍！？の話です。序盤は響哉視点で、終盤は
第3者視点になっています。

夜桜吹雪の舞う下で

「俺と、戦兄弟契約して下さい!!」

突然のキンジの言葉に、俺は思わず焼肉弁当を落つこととしてしまいそうになった。

「つか、なんでコイツに戦兄弟が必要なんだ？HSS状態なら俺でも勝てるかどうか危ういのに。」
確かに金一さんに弟の^{キンジ}ことを頼んだって言われたが、だからと言って戦兄弟契約まで結ぶ気はさらさら無かったぞ。

「とりあえず、焼肉^{コレ}弁当買ってくるから外で待ってる」

まあこれで少しは時間が稼げるな。

それから10分後。

俺とキンジは男2人で人気の少ない男子寮屋上に来ていた。俺は焼肉弁当を食っていて、キンジは弁当食ってる俺をガン見している。ケンカ売ってんのかコイツは！

「で、なんで俺に戦兄アミコになつてほしいんだよ。十分強いじゃねえか。そんなヤツは教えてもらうんじゃない、教えてやるのが筋つてモンだろ？」

俺が言えた立場じゃないんだけどな。俺、Sランクのクセに金一さんの戦弟になつてたワケだし。

「……兄さんに、少しでも追いつきたいんです。あのすごく強くて優しくて格好良い、正義の味方みたいな兄さんに。」

——俺、今日までヒステリアモードは最強の能力だと思ってました。でも今日先輩と闘って、自分の弱さを思い知らされたんです。だから、お願いします！」

なるほどねえ……。俺はてつきり、金一さんに提案されたからとかつまんねえこと想像してたけど、思いの外しっかりしてんじゃないかねえか。

「――なら、今から戦兄弟試験勝負やるか？」
アミコ チャンスマッチ

戦兄弟試験勝負とは、要するに戦兄弟もしくは戦姉妹契約を行う前に、その後輩が自分の戦弟、戦妹にするのに相応しいかどうかを見定める試験のようなものだ。強襲科ではその推奨内容が『エンブレム』と呼ばれる試験になる事が多い。

「い、今からですか……。！？」

「嫌ならいいんだぞ。その代わりお前とは今後絶対に戦兄弟契約を結ばないけどな」

「……。わかりました。やります！」

静かな夜空の下、キンジの決意の籠った声が響いた。

「よし。いい返事だ。試験形式はエンブレムだ。30分以内に俺からエンブレムを奪ってみろ。
ただし、HSSになった時点で試験は強制終了だ。通常の状態で挑んでこい」

「・・・わ、わかりました」

「早くしろよ。もう制限時間タイム・リミットは減っているぞ」
俺はそう言っけケータイのタイマーを見せた。

「つく・・・！うおおおお——！！！！」

キンジは素手で俺の左胸に付けたエンブレムめがけてその手を伸ばした。

「——甘い！」

俺はキンジの右手を掴み、それをそのまま重心移動で床に叩きつけた。

「痛っつ——！？」

「おいおい。今時この程度の護身術、女子高生でも出来るぞ。ベレッタでもナイフでも、何でも使え。殺す気で来ないと一生俺からエンブレムなんて取れないぞ」

俺はそう言っけ屋上から飛び降りた。

そして、落下中にワイヤーのフックをベランダの手すりに引っ掛け、

落下スピードを落としてから地面に着地した。

「そんな!!?」

屋上に取り残されたキンジは慌てて階段を駆け降りてここに来るのを待ち、キンジの姿を確認してから俺は走り出した。

遠山キンジは、15年と少しという短いようで長い人生の中で今、最も焦っていたと言えよう。

彼は、実兄である遠山金一武偵に『崇拜』と言っていいほどの信頼を寄せている。

そして何より、その兄の隣で共に闘いたいとも思っている。

その願いを叶えるために、彼は朱葉響哉に戦兄弟契約を申し込んだ。
そして今、彼によるチャレンジマッチ試験勝負に挑んでいる。

その勝負を受けた瞬間、彼はもう響哉と戦兄弟契約をし終えたような安心感に襲われた。

——だが今は、その勝負を受けた事がいかに無謀だったかを思い知らされた。

相手《響哉》は、ヒステリアモードになった自分キンジでさえ敵わなかった、自分キンジにとって兄《金一》以外で初めての相手である。

その響哉を相手に、通常状態の自分キンジが何も出来る訳が無いと気付くべきだったのだ。

だが、前述したようにキンジは浮かっていた。思い上がっていた。その思い上がりが自らの未来を押し潰してしまう事になってしまった現実を、キンジは悔やんだ。

——せめてヒステリアモードになっても良かったなら、不意だが幼馴染の星伽白雪ほしぎしらゆきに（規則違反かどうかギリギリだが）協力してもらい、ヒステリアモードの瞬発力と瞬間判断力で響哉の持つエンブレムを奪う事は簡単だった。

だが、そのヒステリアモードになった瞬間に失格扱いとなる。

試験開始前に、そこだけでも了承してもらうべきだった。

キンジは、階段を駆け降りている時にそう思わざるを得なかった。

キンジが階段を下り1階に着くと、外に響哉の姿が見えた。だが、彼はすぐに走り出してしまった。

キンジも、その後を追いかけた。今の彼にはそれしか選択肢が無かった。とにかく、追って、追って、挑み続ける事しか……出来なかった。

試験開始からすでに28分が経った。

今、響哉とキンジがいるのは一般教科棟の正面にある、桜の木が立ち並ぶ場所だった。

それは響哉が誘導したのか、それともただの偶然か、キンジの実兄である金一と、彼の戦弟であった響哉が、戦兄弟契約を結んだ場所だった。

「残り、2分か。どうする？まだ続けるのか？」

「……はあ……はあ……当たり前、前です……!!」

散り始めた夜桜の中平然と立つ響哉とは対照的に、キンジの呼吸は荒かった。

だが、キンジには秘策があった。

「はあ．．．はあ．．．．．これが、最後です．．．．．！」

呼吸を整え、キンジは右手を引いた。

すでにベレッタの1弾倉^{マガジン}は使いきってしまった。走りながら新しい弾倉^{リロード}を装填しようとしたら、予備の弾倉は無くなっていた。最初にキンジが響哉に倒された時、響哉はキンジの予備弾倉^{スペアマガジン}をくすねていたのだ。

故にキンジはほとんどベレッタを使う事ができなかった。

兄から貰った緋色の珍しいバタフライ・ナイフも、あるにはあるがここでは使わない。

だが、キンジにはナイフ以外に、まだ彼自身の『身体』が残されている。『希望』も残っている。そして何より――兄の隣で闘いたいという強い『意志』も。

「まだ何か隠してんのか。まあ、俺もそろそろ鬼ごっこに飽きてたところだ。来いよ。正面から受けてやる」

響哉はまるで挑発するように、その左胸のエンブレムを無防備に曝け出した。

今からキンジが放つ技は、ヒステリアモードの驚異的な瞬発力を利
用した回避不能の大技である。

だが、それを通常モードで試した事は一度も無かった。だが・・・

（——試した事が無くても、やるしかないんだ——

——！！！！）

キンジは深呼吸をして呼吸を落ち着かせ、その場から響哉に向かっ
て全速力で駆け出した。

——試験終了まで、残り30秒。

「——この桜吹雪——散らせるものならッ！」

キンジの放った技は、爪先、膝、腰と背、肩と肘、さらに手首と全身で一点を急加速させ、真っ直ぐに響哉の左胸に向かって伸びていった。

「——！！」

「散らして、みやがれッ——」

——バシィィィ

!!!!!!

キンジが放った技は、その名を『桜花』と言う。

中学時代の後輩の風魔陽菜の忍法を元にして考案した、自爆技である。

ヒステリアモードで使うと、時速1236kmの超音速の一撃になるのだが、通常時に使う事など想定していなかった為、おそらくタイミングは少しずずれているだろう。よってその一撃は音速に至らず、ただの速い突きになったのだが、それはそれで良かった。

これでエンブレムが奪えるなら、何でもやってやる。そんな気持ちで、キンジはこの桜花を放った。

—
だ
が
—

「おー、こわいこわい。モロに当たってたら危なかったぜ」

そこにはさっきと変わらずに平全と立つ響哉の姿があった。

その左胸のエンブレムは、盗られてはいない。

「
．．．．．そ、そんな．．．．．」

キングジの右手は、響哉の右手によって掴まれ、止まっていた。

・・・・・・・・・・

タイム・リミット
制限時間を知らせるアラームが、非情にもキンジの敗北を告げた。

「試験終了だ」

響哉がキンジの手を離すと、キンジは両腕を力無くぶら下げ、そして膝を地に着けた。

切札である桜花を、あっさりと受け止め、最後の抵抗も虚しく、キンジは響哉に圧倒的に負けた。

「合格だ」

響哉の一言が、静かすぎる桜並木の中に轟いた。

「・・・・・・・・えっ？」

キンジは、何がなんだか分からないといった顔をしていた。

「だから、合格だつて言つてんだよ。お前は今日・・・・・・・・は提出が間に合わないから、明日から俺の戦弟だ」

「で、でも・・・・・・・・！俺は、先輩のエンブレムを奪えなかったじゃ・・・・・・・・！」

「当たり前だ。HSSでもないお前が、俺から物を奪えると思っただのか？」

キンジは今バカにされているのだが、事実なので言い返す事ができなかった。

「初めから、お前がちゃんと俺に着いてくるかを試してたんだよ。いくら通常状態だからってこれくらい着いてこられねえと、論外だからな。最後の攻撃が通っていても、お前とは戦兄弟契約しなかった。普通の時でそれだけ強ければ、俺が教える事なんぞ何も無いからな」

「・・・・・・・・」

「つーわけだ。そろそろ寮に戻るぞ。戦兄弟申請は俺がやっというやるよ」

響哉はそう言って、男子寮の方向に向かって歩き出した。

「あのッ！」

「ん？まだなんか用か？」

「——ありがとうございます！！」

キンジはスクツと立ち上がり、深い礼をして叫んだ。「ここら辺は校舎が立ち並んでいるので、その声はよく反響していた。」

「でけえ声出すなよ。マスターズ教務科に怒られるぞ」

「あ、すいません」

「ほら、行くぞ。バスは無いから、徒歩だな」

桜の花びらが飛び交う夜の闇の中、1組の兄弟が生まれた。

——その誕生が、彼らと、そしてその周囲の者の
運命を大きく変えた瞬間だった。

TO BE CONTINUED

夜桜吹雪の舞う下で（後書き）

キンジって通常時に桜花出来るんですかね。超音速にはならなさそうですね。

キンジが桜花を編み出したのは、中学時代と勝手に決め付けて書きました。風魔との出会いも中学時代だったらしいですね。多分そうだと思います。

そんなカンジで、遂にキンジが響哉の戦弟となりました。次はRランク任務でアメリカに行くのでキンジ達の出番はありませんが、あのキャラが出てきます。その後はアドシールドや原作でもあった依頼にキンジと共に行く……ってアドシールドどうしよう。ネタが全く無いです。

アドシールドⅡ事件の方程式を崩すべきか否か……悩むところですね。

友情には人種も国籍も関係無いが、言語の壁は絶対に越えられない（前書き）

気が付けばもう30話。そろそろ原作キャラを一気に出したいのに今回はオリジナルの話です。

ところで前々回の身体測定勝負ですが、本当はキンジにトドメを刺すのは武藤のはずでした。響哉とキンジが向かい合ってる所に、武藤がパイソンで響哉の背中を撃ち、それを響哉が避けてキンジに当たってそのまま戦闘不能に……。という予定だったんですが、それだと「武藤があまりにも報われない」と思ったので響哉無双になっちゃいました。

友情には人種も国籍も関係無いが、言語の壁は絶対に越えられない

4月末のある日・・・・・・・・俺はアメリカの大地に足を着けていた。

ちょっと前に日本の総理大臣が変わったので、日米首脳会談が行われる事になったのだが、向こうの都合で本来の予定より早く日時が決まったのだ。

そこで、日米の新しいトップ同士の意見交換や挨拶などを兼ねた首脳会談の護衛として、俺は総理大臣と共にアメリカにやって来たというワケである。

だが、正直言って1年に1、2回も変わる日本の総理大臣なんて、

誰も狙ってなどいない。放っておいたら勝手に不適切な発言を自分か大臣か議員が言うのだから、わざわざ金を払って殺したいと思う人間はほぼゼロだ。だからこんな護衛なんて、本来は必要無い。前金含め3500万も使うくらいなら、災害復興予算にソレを組み込んだ方がまだマシだ。

まあ、金くれるのはありがたい話なので、俺も素直にその依頼クエストを受けたのだ。金の魔力には逆らえなかった。諭吉の威光は凄まじい。

俺を含め、野田総理と一緒に来た人物は、同じホテルに宿泊し、翌日にホワイトハウスに行く事になっている。その宿泊するホテルは超一流のホテルで、すでに米国の武偵が部屋の中を調べ尽くしてあるので盗聴や盗撮、殺人罠キルトラップなんかの危険は無い。

その翌日、つまりは会談当日。俺は要人警護のために眠れなかったのだが、移動中の時間にぐっすり寝た。移動する時に乗ったリムジンは完全防弾仕様で、米国武偵の精鋭も何人か同乗していたので、俺が寝ていても問題ない。銃撃戦ドンパチになったら流石に起きるし。

で、ホワイトハウスに着いてから両国のトップが話し合いをしている間、俺は部屋の外で見張りをしていた。

近年のアメリカの凶悪犯罪発生率を考慮し、その国の代表以外は部屋に入れないようになっていた。来るとしたら外部からなので、俺達警護団も外部を見張る事になっていた。中はちゃんと百何十人も武偵が入り込んで調べ尽くしてある上に、外に不審な電波が出ていないかも調べているので時限爆弾などの危険も皆無だ。部屋の中にはカメラがあつて、中の様子はリアルタイムで全警備員に確認されている。俺もちゃんと中の様子を確認しながら、ロケットランチャーやミサイルや戦闘機なんかが飛んで来ないか見張っている。いつだったか戦車が主砲撃しながら突っ込んで来た事があつたが、今日はそんな事にならないでほしいと心から祈っている。

で、昼下がりの眠い時間帯になって俺がうとうとしかけていた時・・・。

「おい」

突然アメリカ大統領の護衛が声をかけてきた。

今にも寝むってしまいそうだったので、その突然の行為に俺は思わず「うおッ！！？」とすつとんきような声を出してしまった。

「俺は寝てなんていないぞ！」
しまった、墓穴を掘った。

だが向こうは寝そうな俺に喝を入れに来たわけではなさそうで、首を傾げて「何言ってるんだ？」といったような顔をしていた。

「日本の武偵、朱葉響哉だな」

そう言ったのは、なんかアフリカの原住民族がしてそうなフェイス
ペインティングをした男だった。その目の辺りはHMDで隠されて
いる。
ヘッドマウントディスプレイ

「そうだけど・・・アンタ、アメリカに雇われた護衛だろ？こんなところでサボってて良いのかよ。っつーか、日本語上手いな」

この場にいるという事は、俺と同じRランクなんだろうか。だとし

たら仲良くなっておきたいな。ピンチの時とかに助けに来てくれるかもしれないし。まあ俺がやられた時に敵討くらいには来てほしいな。

「俺は20カ国語を完璧に覚えている。日本語も、その1つだ。それと、どこのどんなテロリストが襲って来ようと、俺の前には全て平等にゴミ以下だ」

おいおい。テロリストだって頑張ってたんだよ。間違った方向でだが。

あと、俺なんて世界公用語の英語すらほとんど出来ねえのに、20カ国語ってどんだけだよ。

それに20も。語って言えないと思うぞ。精々10ちょっとしか知らん。

「で、俺になんか用でもあるのか」

「少し話がしたい。こんなクズどもの警護など、放っておいてここに行きたいが、仕事だからな。ここに居なければならん。まあ、単なる暇潰しだ」

バレたら職務怠慢で罰せられるってレベルじゃねえよな。今回だと。

「ま、俺も寝そうになってたし、別にいいけどよ。ところで、そのバイザーみたいなのは何なんだ？」

なんかエヴァンゲリオンにこんなカンジのバイザー着けてたヤツがいたよな。最後は皆と同じくオレンジジューズになっちゃったけど。

「これは『The Tella Net Assist System』。通称『テラナ』の試作型だ。プロトモデル簡単に言えば、使用者の脳波を読み取り、思考すると同時にそのアシストを自動で行う高次インターフェイスだ。インターネットやGPS、軍事無線も可能だ」

「……よく分からない。」

まあ、アレか。RPGとかによくあるアドバイスシステムってところか。

それ以上考えると俺の脳ミソはメルトダウンしてしまいそうなので俺は考える事を諦める。

「どこで売ってた？そんなのがあるなんて聞いたこと無いぞ」

「非売品だ。おまけに試作機だからな。コレ一個で4〜5百万ドルはする」

「……円をお願いします」

「日本円だと……1ドル80円とすると、3億2千万から4億だな。ペンタゴンとロスアラモスが作った物だが、まだ評価機にすらなっていないからな」

「……」

た、高エ……。『強欲で謙虚な壺』の事を『札束』とか言つてた自分が恥ずかしく感じるよ。

「ところでお前、3丁拳銃らしいな。着いた2つ名が『三銃使^{トライガン}』か。バイザーからフィィインという音が聞こえる。今使っているのだろつ。そんな下らない事のためにわざわざ。

つてか、2つ名なんてあったのか。知らなかったぞ。自分の事なのに。

「そうなるな。2つ名は今初めて知った」

俺がそう言つと、向こうの雰囲気が一瞬にして変わった。

「——強いのか、お前？」

——「なにか、殺気に似た、だが決してそれではない『何か』。そんな『何か』が突風のように俺を襲った。」

思わずB・Tを抜きそうになるほど、その『何か』は恐ろしいモノだった。

俺はB・Tに伸ばしかけた手を戻し、平静を装った。

「……お前もRランクなんだろうが、俺は間違いなく他の7人より弱い。それは解る」

「……卒業式の時、カナと闘って慣れてなかったら、俺は一体どうなっていただろうか。考えるだけで背筋が冷たくなる。」

「……なら、もっと強くなったら俺のところに来い。続きはそれからだ」

続きって……このタイミングだと1つしかないよなあ……。

——コイツは、バトルマニアだ。それも重度の、末期に近い。

バトルマニアとは『自分より強いヤツと闘いたい』という、サイヤ人じみた思考を持っているヤツだ。

「……そうだ。日本に強いヤツはいるか？」

「いるよ。数はどうか知らんが、化け物みたいなヤツなら、何人か

知ってる」

俺は即答した。どういうワケか俺の周りはおかしいほど強いヤツがいるからな。父さんもそうだし、金一さん、つまりカナもその1人だ。キンジもその中に入るかな。嬉しい事なのか悲しい事なのか。俺には後者にしか思えないが。

「——そう、か。楽しみだな」

遠くを向いてニヤけながら、コイツは物騒な事を呟いた。

「頼むから問題だけは起こすなよ。後処理が大変なんだからな。・
・・・・・そっぴゃお前、名前なんて言うんだ？」

そっぴゃコイツの名前訊いて無かったよ。今までよく普通に話してたな。

「俺は、^{ジーサード}G?だ」

「コードネームじゃなくて、お前の名前だよ」

プロダクトネーム
「製品名が、俺の識別コードだ」

「……………」

なんだよ、そのプロなんとかって。日本語で言えよ。

つか、ジーサードって英語読みだとカッコいいけど、日本語読みだと『じーさん』だぞ。

カッコ悪いこと山のごとしだ。

「サードでいいか？」

「お前の好きにしろ。そろそろ俺は持ち場に戻る」

「おう。また会おうぜ、サード」

サードは振り返らずに腕だけ挙げて答えた。

1
年
半
後
だ
っ
た。

俺が次にサードに会ったのは、それから

今の俺には、あんな形で彼と再開するなんて、夢にも思わなかった。
・
・
・
・
・

T O B E C O N T I N U E D

友情には人種も国籍も関係無いが、言語の壁は絶対に越えられない（後書き）

ジーサード登場！原作10巻を読んでない人にはほとんど分からないでしょうが、そこは許して下さい。

最後の方に力尽きた感が漂ってますが、温かい目で見てやって下さい。宿題が多すぎて眠れてないんです。

次はアドシアードの話でもしようかと考えてます。今日中に書けるかどうかは謎ですが。

NTR要素はハマると強い↑本編と全く関係無し（前書き）

30話ですが、そのうち書き直すと思います。

とりあえず今は話を進める事に専念します！うちの高校の数学と同じ理論ですw

ところで、オリキャラのヒナの名前が風魔と被っている事に昨日気付きました。何やってんだかホント……。

とりあえず、ヒナはあだ名という事で大丈夫……か？

NTR要素はハマると強い↑本編と全く関係無し

アメリカから帰ってきて数週間後、すぐにアドシアードの季節になった。

去年は志波が監禁されて、大変な目に会ったのだが（主に志波が）、今年は何事もなければいいなとジュリアと志波と平土と氷川さんの計5人で昼飯を食っていた。

「志波は今年も出るんだろ。アドシアード」

「はい。今年も1年生から1人出場するんです。すごいmですよ、その娘」

へー。1年で出場するようなヤツがいるのか。今年の1年は曲者が多いな。

「たしか、Sランクなんでしょ？その1年は」
どうやらジュリアも興味を持ったらしい。氷川さんも気になるといったカンジで志波の方を注目している。

平士は……普通に茶を啜ってるな。

「実力はすごいんだけど……性格がちょっと、ね」
志波の顔が苦笑いに変わった。

「狙撃科にお前みたいにまともな性格をしたヤツなんて、滅多にいないぞ。絶滅危惧種並だ」
スナイプ

「それはそうだけど……その娘のあだ名、知ってますか？」

「いや。知らん」

「ロボットって言われるくらい、感情を表に出さないんですよ」

それはまた、すごいあだ名だな。

「それで、響哉は今年は代表になったの？」

最近和食も食べるようになったジュリアが、綺麗に持った箸で俺を指した。

「誘いは来たけど、断った」

「俺もだ」

ほう。平士の方にも来たのか。

「2人とも、なんで断ったのよ。絶対に良い成績残せるのに」

「俺はあんな遊びのために銃の訓練をしているんじゃない」

氷川さんの質問に、平士は少しイラついた風に答えた。どんだけアドシード嫌いなんだよお前。

「俺はいろいろやりたい事があるからな。練習する時間が無いんだよ」

「そういえば、戦弟^{アミコ}を作ったそうね。アメリカに行く前にジュリアが思い出したようにそう言った。

「土産くらい買ってこい」

平士よ。他のヤツらには買ってきても、お前にはやらん。それに護衛の仕事は飛行機の中もやってるんだ。土産なんて買っているヒマは、これっぽっちも無い。

「で、その戦弟は同じ強襲科^{アサルト}のSランクの1年で、入試で教官を含めた全員をあとという間に斃し、さらに響哉の戦兄だった遠山先輩の弟さんだそうよ」

「……ジュリア。お前どつからそんな情報仕入れて来るんだ？」

「私にも戦妹^{アミカ}ができたのよ。あなたがアメリカに行った直後に。その娘に響哉の戦弟の詳しい事を聞いたの」

ジュリアに戦妹ねエ……。口の悪さがうつらなけりゃ良いが。

「誰なんだよ、そいつ。超能力捜査研究科《SSR》だろ？」

「そうよ。名前は星伽白雪。青森にある星伽神社の巫女らしいわ。なぜかは知らないけど、執拗に戦姉妹契約を結んでくださいと頼まれたのよ」

「……アイツか。」

身体測定の時、キンジをHSS（キンジはヒステリアモードと呼んでいるらしい）にした張本人で、そのキンジの幼馴染らしい。

ロシア人のハーフのジュリアと、純日本人で大和撫子の星伽が並んでいるのを想像すると、日本のグローバル化が進んでいる事が良く分かる。

「はぁ……お前らも、戦弟^{アミコ}や戦妹^{アミカ}を作ったのか」
なぜか平士が溜息を付きながらそう呟いた。

「なんだ平士。お前も誰かと契約したのか？」

「いや……俺は嫌なんだが……」

平土が頭を軽く押さえた時だった。

「——とっつぁん！ りりりんがやってきたよぉー！！」

「おい、理子。もう少し静かにしろ」

「……………なんかフリフリに改造された制服を着たちっこい女の子とキンジが揃ってこっち来たんだけど、今どいう状況なんだ？」

「ックソ！もう見つかったか！俺は先に行くぞ！」

そう言っつて平土は高速で荷物をまとめて、目にもとまらぬスピードで走り去っていった。

「あーあ、またとっつぁんに逃げられちゃった。追う側なのに」

「あ、響哉さん」

キンジが俺がいる事に気づいたようだ。

「キンジ。このちっこいのは誰なんだ？あの平土^{ハゲ}がその娘を見た途

端に血相変えて逃げちまったんだが」

「コイツは――」

ちつこいヤツを指差して、キンジが言おうとした時……………。

「探偵科Aランクのりこりんです！現在銭形先輩ことつつあん先輩に戦妹申請を頼み込んでいるのです！」

「…………峰理子です」

なんで自己紹介の後にキンジがこの子の名前を言っただろうね。

「頼み込んど言えるのか、アレは」

ジュリアは平土がさっきまで座っていた場所を眺めながらそう呟いた。その視線の先には無残にも倒れているイスが申し訳なさそうに転がっている。

「りこりんの事はりこりんをお願いします。あ、先輩ってキーくん
の戦兄ですかあ？」

キーくんってキンジの事でいいんだよな。

「ん？ああ。そうだよ。強襲科の朱葉響哉だ」

「じゃあキヨン先輩だ！」

「そのあだ名を付けてくれた事は感激だが、できれば別のあだ名に
してくれ」

なぜかは分らんが、とてもマズイ気がするから。

「じゃあきょーやん先輩で」

「考えるの速ッ！」

「おー！ナイスツッコミ！」

理子は右手の親指を立てて心底楽しそうな顔をしている。

「いやー。キーくんはこんなノリの良い戦兄がいて羨ましいなあ。とつつあんもきょーやん先輩くらいノってくれたら楽しいのになあ。では、理子とはとつつあんを追って強襲科にいつてきまーす！びゅーん！」

そう言つて理子は翼だか羽だかに見立てているのか、両腕を広げて平土を捜しに行つてしまった。

「はあ………すいません。騒がしいヤツを連れてきてしまつて」

キンジがさっきの平土みたいに頭を抑えて言った。どうやらこんな2人みたいなタイプのヤツは、理子といると頭痛がするようだ。俺はそんなこと無いけどな。

「いや、俺は女嫌いだつて言つていたお前があんな可愛い子連れてきた事に驚きだよ」

アメリカに行く前、キンジにどれくらいHSSを使いこなしているのかを訊いたのだが、キンジはHSSを嫌っているらしい。

中学の時に、一部の女子にHSSの事がバレて、いいようにコキ使われたらしい。それ以来、キンジは女性恐怖症気味になってしまったそうだ。HSS自体も完全に制御できていないらしく、言動が変わったり、女性のことを最優先で考えるようになるんだとか。そりや嫌いにもなるわ。

だが、それもいつかは制御できるようになるらしい。金一さんやキンジ達の親父さんもそうだったと言っていた。

そのキンジが、女子と一緒にいるだなんて、思ってもいなかった。ネクラそうだから武藤と不知火と星伽しか友達がいなかったのかと心配すらした。

「……好きで一緒にいたんじゃないやありませんよ。偶然そこで会っただけです」

「あだ名で呼ばれてたじゃねえか。キーくん？」

「……クラスが同じで、席も近いからですよ！」

それからしばらくの間、キンジは理子との関係について必死に弁解したのだが、そんな姿を見ていじめたくなってきた俺は思うがままに理子とのネタで弄^{イジ}ってやった。

それから数日後のこと。

「おい、くつつくな！歩きにくいだろ！」

「えー？戦兄妹に必要なのはスキンシップですよ。それを養った
めの行為なのでま問題無しーもんたい！」

「……なぜこんなことに……」
平土と理子がくつついて歩いているのを目撃した俺は、背後から来る氷川さんの存在に気が付かなかった！

冗談はこれくらいにして、平士よ。それは俺のセリフだ………
・！

「……………」

「…………あのー、氷川さん？俺そろそろキングジの訓練に行きた
いんですけど……………」

ギンツ！！

「なんでもありませんです」

もし視線に物理的な破壊力があつたならば、今のは間違いなく核に
匹敵するエネルギーを誇っているだろう。

「轢いてやる轢いてやる轢いてやる轢いてやる……………」

やべえ…………さつさところから逃げないと、なんでか知らんが俺
が轢かれるかもしれん。

俺はそーっと逃げ出そうとしたが・・・。

グイッ！

「——ちょっと着いてきて」

そう言う氷川さんの目は、光が灯っていなかった。微妙に微笑んでいるのも俺の恐怖心を湧きあがらせるのに一役買っていたのは言うまでも無い。

数十分後。

ブロロロロロ！

「・・・・・・・・アッ・・・・・・・・!!」

車^{ロシ}両科の方で、俺の短い叫びが響き渡った。

——アドン・アドン、あーっ。っ。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.

NTR要素はハマると強い↑本編と全く関係無し（後書き）

遂に理子登場ー！レキも微妙に出てきています。やっと緋弾のリアッぽくなってきました。本当にやっとな。

次からはアドシードやって、キンジと任務をするところまでのイメージはできています。どこまでいけるのかはその時次第ですが。

今週末にはISの短編も書くつもりなので、よければ見て下さい。

アドシールドは事件のフラグ（前書き）

今日は本当に寒かったです。そろそろ手袋が欲しくなってきました。

響哉の2つ名の「三銃使」は、テレビで三銃士のCMを見ていた時に思いつきました。

アドシールドは事件のフラグ

5月末……アドシールド当日となった。

10日前に氷川さんに、全身を拘束された状態で四駆^{サファリ}で体当たりされて、武偵病院に一週間入院していた。

その時医者に、「また君かね」と言われてしまった。俺だって好きで入院してるんじゃないんだよ。

で、氷川さんはその事をふかーく反省しており、もうこんなバカな事はしないと誓ってくれた。その誓いが何時間持つのかは俺にはまだ解らんが。

去年のアドシードは志波が監禁されて大変だったのだが、今年はちゃんといる。代表になった1年のヤツと一緒に自分たちの順番を待っている。

「志波の出番はまだか？」

「まだ2時間はあるわ。あくまで予定だから、参考にしなければならないけど」

今年も俺はジュリアと一緒に志波の応援に来ている。あと、キンジと星伽、武藤、不知火も。どうやら1年の代表と知り合いらしい。にしてもまだ2時間もあるのか。道理で平土と氷川さんが来てないと思ったよ。

「あー、キンジ。悪いんだがちょっと席取っててくれ。すぐ戻ってくるから」

「いいですけど……何か用でもあるんですか？」

「ああ……。ちょっと、な」

「……？」

「どうでもいいけど、早く戻って来てね」

「おう」

ジュリアに短く返事をし、俺は早足である場所に向かった。

その途中のこと。

目の前に氷川さんと理子と、あと誰か知らん小っさいヤツを侍らせている平士がいた。

「おーおー。また平士が新しい女を侍らせてるよ。リア充爆発しろ」

「ならお前は塵になれ。それが生ごみとして処理される今すぐにだ」
「！」

「んだとテメエ！」

「闘んのかコラ！」

俺は平士の口を引っ張り、平士は俺の耳を引っ張る。拳銃を抜かないのは一般人が大勢いるからだ。

どうでもいいけど、なんかこのやり取りを久しぶりにやった気がするな。

「おおー！！負けるなとつつぁーん！立て！立つんだアー！！」

理子が周りでキヤイキヤイ騒いでいる。あと、俺も平士もずっと立ってるからな。誰も倒れてなんかいないぞ。

「お姉様が応援するなら、麒麟も応援しますですよ！」
なんか理子みたいなフリフリのちっこい制服着たヤツも騒ぎだしたぞ。

お前ら、今すぐ鎮まれ！^{ギャラシー}観客が集まってくるだろうが！

「2人とも！そんな騒いだら他の人に迷惑でしょ！」

おお。先日俺を轢こうとした人と同一人物が言ったとは思えないそのお言葉。もつと言ってやれ！

「ほら！平士達も！元はと言えばあなたたちが悪いのよ！」

「おー！アツキーナがお説教モードに入ったあー！」

また理子が騒ぎだした。お前どれだけ騒ぐの好きなんだよ。別の場所ですてこい。

「っし。ひゃあへえ。おわへほひひはへんへほはひやはれ（っち。しゃあねえ。お前もいい加減手を離しやがれ）」

「お前が耳引つ張んの止めたら、離してやるよ」

「はわ、いひ、ひほはんれへほはほふ（なら、1、2の3で手を離そう）」

なんとなく言いたい事は分かった。

「1・・・2の・・・3！」

ぎゅううううううううー！！

「痛たたたたたたー！！」

「ひゃあああああ（ぎゃあああああ）ー！！」

俺と平士は、お互い手を離す事は無かった。むしろ、思いっきり引

CVRとは、正式には特殊捜査研究科と言い、諜報科レサドでも手に負えないような輩を相手に、ハニートラップなんかを仕掛けて制圧する専門技術を磨く学科だ。絶世の美女しか入れないらしく、体力テストの時は日焼け跡から学生とバレないようにハイレグで反復横とびとかやってたから、目のやり場に困ったものだ。

「ってか、お前《理子》1年のクセして戦姉あねなのか？」

「うん。そだよ」

コイツもコイツで、とんでもないヤツだな……。たしか探偵インケ科スタのAランクだったか。なんで強襲科アサルトの平士に戦妹契約したんだ？

まあ、理子には理子の事情があるんだろう。根掘り葉掘り訊く必要もない。

平土達と別れた後、俺は車両科の立体駐車場に向かった。

そして、エレベーターで最下層……地下7階に降りた。

——ここは去年、志波を捜しに来た時に、死んだと思われていた彩香と再び会った場所だ。

なぜか、俺はここに来ていた。

また彩香と会える気がしたと言えば、そうなのかもしれない。

でも、本当は俺は、俺が彩香ともう一度会いたかったから、勝手に

妄想して、また自己満足で地下倉庫^{コロ}に訪れていただけなのだろう。

十数分ほどか、俺はこの赤色灯の中、何もせずに座っていた。

——だが、そこには俺以外誰も来なかった。

当たり前だ。こんな危険な場所に、誰が好き好んで来ようか。それに、彩香は今、死んではいないが行方不明なんだ。そんな人間が、毎年ココに来るはずが無い。

そういえば、あの時彩香は「『イ・ウー』においで」と言っていた。ということは、彩香は今、その『イ・ウー』という組織、それが企業にいるのだろうか。それとも、イ・ウーとは場所や地域を指しているのだろうか。とにかく、情報が少なすぎる。

あれから俺は、そのイ・ウーとやらに行くべきか悩んだことがあった。

そこに行けば、彩香と一緒にいられる。そう考えると、答えは一つしか無かった。

彩香は「おいで」と言った。だが、俺にはどうやってそのイ・ウーという所に行けばいいのか分からない。向こうから使いでも寄越してくれれば楽なんだがな。

俺はエレベーターで、地上^{うえ}に上がった。

そして位置的に誰も来ていない車両科の立体駐車場に出た時、俺の目の前に1人のスーツ姿の欧州人風の男が立っていた。

「朱葉、響哉様ですね？」

スーツ姿の男が、にこにこ顔で訪ねてきた。

「そうですけど……そちらは？」

俺は念の為、袖の中に仕込んであるH&A m p・K P 4 6をすぐに抜けるように、右肘を少し引いた。

「これは失礼。ジェームズと申します。今日は朱葉様に、素敵なお知らせがあつて参りました」
ジェームズと名乗った男は紳士的に一礼し、その笑顔を少しも崩さずにそう言った。

「素敵な、お知らせ……？」

「ええ。あなたにとって、とても有益で、尚且つあなたが望んでいたコトです」

「……俺が望んだこと？なんだ、それは」

俺が訊き返すと、ジエームスは「ふふふ……」と不気味な笑い
声を出し、答えた。

「朱葉様、あなたを『イ・ウー』に招待します

」

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.

アドシールドは事件のフラグ（後書き）

次回から遂に、響哉がイ・ウーと深く関わっていきます！

ところで、理子の台詞が非常に難しいです。麒麟も同じく。あだ名も付けなきゃならんし……。一番書いてて楽しいキャラでもあるんですけどね。なかなか理子のはっちゃけたキャラが引き出せないダメ作者でごめんなさい。

あとは……。レキですかね。書くのがムズいキャラは。無口だけどたまに喋るのが難しいと思います。

前回、秋奈がヤンデレキャラになってしまった気がします。ちょっとキャラ崩壊が始まってきているのか……？

そんなカンジで徐々にボ口が出てきてますが、今後ともよろしくお願ひします。

「教養が無いモンでね」（前書き）

前回、ジエームズと名乗る男にイ・ウーに招待されると言われた響哉はどうするのか！？そんなカンジの第33話です！やっと思きたかった話の1つを乗せられます！

ちなみにジエームズの口調はフリーザ様を意識しています。キエエエエ！とか言わせたい。

「教養が無いモンでね」

目の前のスーツ姿の男——ジェームズの放った言葉に、俺は驚きを隠せなかった。

「——朱葉様、あなたを『イ・ウー』に招待します——」

それは、俺にとって願ってもない知らせだった。

今、正に、俺は………イ・ウーに行くにはどうすればいいかを、考えていたところだった。

俺は無宗教で、神なんて偶像は信じる事は無かった。だが、今回だけは、俺は神に感謝した。

「――どうしますか？私と共にイ・ウーに来ますか？それとも……」

ジェームズが訊いてきたが、俺はすぐに答えた。

「ッハ！答えなんて、1年前から決まっている――！」

俺は、ジェームズの方に歩いて行こうとした。

——だが、1歩踏み込んだ瞬間、俺の脳裏に、今までこの東京武偵高で一緒に過ごしてきた……共に笑ってきた、みんなの姿が過った。

——教師たちにボコボコにされた俺を、なんだかんだ言いながら俺を救護科まで運んでくれた、アンビュラス時任ジュリア。

——俺といつもいがみ合いながら、何かにつけて殴り合いをする、銭形平士。

——2年になっても席が近くて、よく休み時間に昨日のテレビの話とかしている、志波^{しはい}_{いこ}^い_子。

——10日前、俺を轢いて3度目の入院させたが、普段はすごいヤツの、氷川秋奈。

—— 去年、俺にいろんなことを教えてくれて、鍛えてくれた戦^あ兄、遠山金一。

—— その金一さんの弟で、俺の戦弟^{おとうと}になった、遠山キンジ。

—— 他にも、同居人の龍、春樹、戒。そして、最近知り合った1年生、星伽白雪、峰理子、島麒麟、武藤剛毅に不知火亮。他にも鬼畜な教師共、蘭豹^{らんひょう}、綴^{つづり}、南郷、チャン・ウー、矢常呂……。

—— そして、俺を育ててくれて、鍛えてくれた……
父さん。

—— 俺を産んでくれて、でも今はもう、死んでしまった母さん。

たった1歩進んだだけで、20人以上との思い出が、俺の足を掴んだかのように、俺は歩を止めた。

「・・・・・・・・？どうか、なされましたか？」

ジェームズが不審に思ったのだろう。そのにこにこ顔が少し曇った。

「・・・・・・・・いや。何でもない」

そつだ。俺は今まで、彩香に会いたかったんだ。躊躇^{ためら}う事は何も無い。
い。

・・・・そうさ。戸惑う事なんて・・・考える事なんて無いんだ。

ただ真っ直ぐに、ジエームズに着いて行って、イ・ウーとやらで彩香ともう一度――！

――ふと、ジュリアの顔が、また頭の中を過った。

その顔は……とても、哀しそうだった。

……なんで、ここでお前の顔が出てくるんだよ………！

……なんで、そんな哀しそうな表情カオしてるんだよ………！

俺は、いつの間にか、前に歩いていたはずの足を止めていた。

「
——ッ
クソ！」

バキッ！

俺は、自分の顔を殴った。

「………悪い、ジエームズさんよ。どうやら俺は………」

伊・ウーそっち側に行けないらしい」

「……………そうですか。それは残念です……………」

そもそも俺は、彩香を死なせてしまった、弱い自分が嫌になって強くなったんだ。それが、残された者の自己満足だっことは承知の上で。

彩香に会うために強くなったんじゃない。守れる命を救えるようになるために、俺は強くなったんだ———！

だから、俺は彩香を——
救い出す!!

イ・ウーという悪夢から、彩香の目を覚まさせるんだ！

「・・・私は、朱葉様がイ・ウーに来るのを断った場合のみ、命じられている事があります」

不意に、ジェームズが口を開いた。

「もし、朱葉様が誘いを断られた場合・・・」

……— 殺してもかまわない、と」

——ゾクッ……!!

思わず、竦んでしまうような殺気がした。

だが、この程度の殺気では、カナやサードのソレの足元にも及ばない。

なんだかんだで、俺もおかしくなってきたるのかもしれないな。

「・・・私は、今までに49人の人を殺してきました」
ジエームズはスーツのボタンを外し、その中から大量のナイフを宙に投げた。

だが、そのナイフは地に落ちる事無く、重力に反して中に漂ったままだった。

——そして、その全ての刃先が俺に向けられていた。

「『武偵は超偵に勝てない』という言葉を知っていますか？」

「残念ながら、教養ブレン・テンが無いモンでね」
俺は言いながら、B・Tセーフティを抜き、安全装置を外した。

「では、教えてさしあげましょう——！！」

無数のナイフが、俺に向かって飛んできた――！

T O B E C O N T I N U E D . . .

「教養が無いモンでね」（後書き）

ジエームズは実は超能力者でした！

この小説では、原作通り超能力の種類を？種？？種の分類で分けま
す。

？種はジエームズのような念動力を使う、典型的な超能力者です。

？種は錬金術師・・・つまり、物質の等価交換を無条件で出来る
超能力者を指します。

？種は魔法使いです。白雪やジャンヌなんかが代表的ですね。

？種は上記以外の能力を使う超能力者で行こうと思います。ジュリ
アがコレに当てはまりますね。

原作で明らかになっているのが？種超能力者だけなのですが、明ら
かになり次第ソレに合わせていきます。

「貴様に次は無い」（前書き）

遂に響哉vsジエームズ戦が終了します。

そして、久しぶりにあのキャラが登場しますよー！

更新が遅れてしまって申し訳ありませんが、どうか温かい目で見てください。

「貴様に次は無い」

「では、教えてさしあげましょう——！！」

無数のナイフが、俺に向かって飛んできた——！

「————ッチ！！」

俺は舌打ちしながら横に飛び退いて降り注ぐナイフを回避しつつ反撃を試みる。

俺はB・Tを抜き、フレン・テンすぐさま銃口をジェームズに向けた。

「————！！？」

だが、俺は目の前のジェームズの前に並ぶ、宙に漂ったナイフが俺に向けてその先端を向けている事に気付き、四シーフ駆の陰に逃げる。

——そして、さっきまで俺がいた場所を無数のナイフが通り過ぎて行った。

「フッフ………どうしましたか？顔色が悪いですよ？」

一方、ジェームズの表情は涼しいものだ。その男性にしてはかなり高い声が俺のイラつきを加速させる。

「——ックソー！」

バババァン！

B・Tを3点バーストで放ち、ダメージを与えられるか試してみるのが、

「その程度ですか!？」

ナイフが集まって壁を形成し、向こう側のジェームズまで弾丸が届かない。

「今度はこちらの番ですよ!」

シャキインというナイフが擦れる音がして、ジェームズの周囲のナイフの一部が俺の方を向いた。

「——はア!!」

ジェームズのかけ声と共に、7本のナイフが俺に向けて真っ直ぐに飛んでくる。

俺はそれをさっきと同じように横に飛んで避ける。

「同じ手が二度も通じると思つかア!!」

真っ直ぐ飛んできたハズのナイフは、7本のうち3本が俺の後を追

うように軌道を変え、その全てが首に向かってきた。

ドスドスドス！

「・・・・・・・・っ痛う・・・・・・・・！」

「ほう・・・・・・・・中々やるではありませんか。そうでなければ面白味に欠けますね」

ジェームズの余裕な声に、俺は若干の苛立ちを覚えた。

俺は、急所に当たる事を絶対に避けるために、両腕を交差させ、その腕にナイフを突き刺して止めた。

っつーか、こんなに簡単に服を貫通するモンなのかよナイフって。さっきもコンクリートの床に突き刺さったりしてたけどよ。

「このナイフは私の超能力ステルスを纏わせることによって、通常の数十倍の斬れ味を得られるんですよ！どうですか！？素晴らしいでしょう

「!!」

「………^{やかま}喧しいんだよ、クズ野郎が………」

俺は突き刺さったナイフを抜き、ジェームズを睨む。

にしても……厄介だな。第六感が全然反応しない。せめてアイツの視線を確認できれば、攻撃してくる場所を予測する事は出来るんだが……。

「ハン！負け惜しみを！」

頭上から大量のナイフが降ってくるのを足下の影で察知できた俺は、また横に飛び退き、B・Tの引金^{トリガー}を2回引く。
だが、その2発の銃弾も、ジェームズには届かない。あのナイフの壁に阻まれる。

あの防御がある限り、俺の攻撃は全て落とされてしまう。おまけに銃弾一発でナイフ一本が落ちる訳ではないので、フルオートにした H & a m p ; K P 4 6 の二丁拳銃でも、効かないだろう。

普通に撃てば。

『武偵は超偵に勝てない』……か。確かに、その通りかもしれない。

だが本当は違う。その前に『普通に戦えば』が付く。

俺はB・Tを捨てて、ジェームズに向かって走り出す。

「……見せてやるよ、ジェームズ。特殊部隊一個大隊分の戦闘力ってヤツを——！」

そう言いながら、俺はスリーブガンで袖の中に仕込まれたH & a m p・K P 4 6を2丁抜く。

「終りだアアアア！！！」

ジェームズの叫びと共に、俺の左側と前方からナイフが飛来してくるのが視える。右側には四駆ジープが停まっていて、前に走っている俺には後ろや横に回避する事は一見できないように見える。

だが俺は、右側に停車していた四駆の車体下を通ることだナイフを避ける。

そしてそのまま、ジェームズに向かって走り込む。

「なめるなアアアア！！！」

ジェームズは周囲のナイフの向きを全て俺に向け、迎撃態勢を作り始めた。背後では、さっきのナイフがまた、今度は俺の周囲を囲むように漂い始める。

「死ねエエエエエエ！！！！」

「うおおおおおー！！」

360度全方位から飛来するナイフに、俺は構いもせずただ突き進む。

——そして、スライディングする様にして前方から迫りくるナイフを潜り抜けた。

空中でぶつかり合ったナイフが、キイイイインという高い音を立てながら地面に落ちる。

第六感が、今になって発動しやがった。ジェームズの能力は、初めに命令した軌道にしか動かない。

だから俺は、ヤツがどう攻撃するかを予測し、それに合わせた回避をいつも通りにやってのけた。

「お前のやることは、解りやすいんだよ!」

このタイミングではナイフの壁を形成しようにも間に合わない。俺はH & a m p ; K P 4 6をジェームズの身体に照準を合わせ、フルオートで乱射した。

バリバリバリバリバリ——!!!!

「ぐほおおアアア!!?」

今、初めてジエームズの顔が苦痛の色に染まった。

すると、周囲に浮いていたナイフが、まるで糸が切れたかのように地面に落ちた。

「……………どうやら、集中力が切れると超能力も使えなくなるみたいだな。」

「ここまでだ。今すぐイ・ウーアサルトに戻って伝える。俺はイ・ウーそっちには行かない。俺は東京武偵高強襲科2年、朱葉響哉だつてな」
俺はH & a m p ; K P 4 6を袖の中に仕舞い、悶えるジエームズを見下しながら言った。

「……………ふ……………ふ……………ふ……………」

ふざけるなアア……」

ジェームズは叫ぶと同時に右手をかざし、その手を下に振り下ろした。

俺は、ターンするようなステップで今立っていた場所から横に動い

た。

ドスッ！

俺の背後から飛んできた一本のナイフが、ジェームズの右胸に突き刺さった。

「……………か、はぁ……………！ば……………バカな……………！！」
「？」

「さっきも言っただろ。解りやすいんだよ、お前の攻撃は。そんな少年漫画の必殺技みたいなモーション取ってたら、何かしてくるのが

バレバレなんだよ」

「……く、くそお……」

ジェームズは胸を押さえながら、俺の眼下に跪いた。

「もう一度言う。さっさとイ・ウーのヤツらに伝えな。俺はイ・ウーには、行かない」

「……その言葉、後悔する事になるぞ……!」

ジェームズは捨て台詞を吐き、ロシ車両科の立体駐車場からよろよろと去っていった。

ジェームズとの戦闘の後、俺はいったん救護科アンビュラスに行き、腕の傷の手当てをして制服を着替えてから射撃科棟スナイプとうの競技レーンに向かった。

「遅かったわね。いつたい何をしていたの？」

「個人的な用事だ。お前には関係ない」

「腕にそんな大怪我を負うような用なら、最初から行かなければいいのに」

俺の腕には包帯が巻きつけてあるのだが、制服で隠れているはずなのになんで解ったんだろうか。

「俺にもいろいろ事情があんだよ。もう例の1年は終わったのか？」

「そうよ。もう少しで世界記録達成の好記録だったわ」
ワールドレコード

「それホントに1年かよ……。とんでもない新生だな」

見たかったな、その1年。ジェームズが邪魔しなけりゃフツーに間に合ったんじゃないか？

「別名、狙撃科の麒麟児だそうね。名前は……。レキだったかしら」

「ふーん……そういやキンジ達はどこ行っただよ」

「あの子たちなら射撃競技の方を見に行くと言っていたわ」
ガンシューティング

「なら、志波の応援は俺とお前の2人だけか」

俺が何気なくそう言つと、ジュリアはハツとしたように肩をびくつかせ、赤面し始めた。

「きよ、響哉！あなた、なにを恥ずかしい事を言っているの！！？
周りには人がいるのよ！！」

「……？何を言ってるんだ、コイツは……」

「そりゃ、競技なんだから観客もいるだろ」
ギャラリー

「あ、あなた……まさかそんな趣味が……！？で、でも……
響哉がどうしても言うならば……私はイヤだけど……
してあげても……」

「あ、志波が出てきた。おい、志波ー！」

俺が志波に手を振ると、ジュリアはズルツとずっこけて、赤面しながら涙目になっていた。

「……お前、体調悪いなら帰った方が良くないんじゃないか？」

「……うー、恥ずかしい……」

ジュリアが何か呟いていたが、俺には聞こえなかった。

その日の夜、俺達いつもの5人（俺、ジュリア、志波、平土、氷川さん）は、打上げ兼志波の3位入賞を記念して学園島唯一のファミレス、ロキシーで騒いでいたら、キンジ達4人（キンジ、星伽、理子、あとレキとかいうあの1年）とばったり会い、そのまま流れで一緒に打上げ兼祝勝会をやった。（武藤と不知火は知らん）

キンジの話によると、レキはキンジのクラスメイトで、アドシアー

ドの射撃競技で優勝したレキに、「祝ってあげよう！」と理子が騒ぎ出したので仕方なく着いてきたそうである。星伽はキンジが来たからソレに着いてきたそうだ。

で、その射撃競技で活躍した志波とレキの2人をそっちのけにして、俺と平土とキンジによる、男3人の炭酸一気飲み大会が序盤に理子によって企画され、最終的には俺と平土のデッドヒートとなり引き分けに終わった。

その挙句、俺と平土は炭酸で腹いっぱいとなって飯を何も食えなかった。それなのに割り勘で酷過ぎる仕打ちではないか理子よ。

「ほらほらとつつあん！ケーキあるよケーキ！りこりんがあーんしてあげる！」

「それお前が食う事になるじゃねえか！」

「なら私がケーキを食べさせたげる！」

一角では、平土、氷川さん、理子の3人がコントをやっていて、

「響哉、平気か？」

「……気持ち悪い……」

メロンソーダの飲み過ぎで、グロッキーになっている俺をジュリアが心配してくれて、

「キンちゃんは大丈夫？」

「ああ。俺はそこまで飲んでなかったからな」

キンジと星伽は恋人ゴツコの的なカンジではいあーんなんてやってたり、

「レキも何か食べる？」

「……はい……」

……無口なレキに何とかコミュニケーションを取ろうとする志波がいたり。

そんなカンジで、ロキシの隅にあるボックス席で、俺達9人は思い思いに騒ぎまくり、他の客がいなかったために怒られなかったことを幸運に感じつつ、閉店時間まで居座っていた。

—— 同時刻、某所にて……………。

街の煌びやかに輝くネオンの光が届かないような暗い路地の壁に、ジェームスはもたれかかっていた。

「……………はあ……………はあ……………話が、違っじゃねえか……………！畜生……………！」

ジェームズは胸のナイフを引き抜いたせいで、その傷口からはすでに大量の血が流れている。

胸のポケットに入れていた手帳のお陰で、急所は免れたようだ。

そして彼はあの後、万が一のために用意しておいた逃走ルートを使用して、学園島から脱出していた。

「……………とりあえず、まずはヤツらに見つからないように隠れて、傷を塞がねえと……………！」

「——誰に見つかからないようにだって？」

「——ひ、雛乃様——！！？」

暗い路地の向こうからやって来たのは、彩香と共にいた2人のうちの1人……背が低い、『ヒナ』と呼ばれていた女だった。

ジェームズは、彼女を見た瞬間、全身をガタガタに震えあがらせ、まるで今にも失神してしまいそうである。

「お、お許しを……！今回は……油断！そう、油断しただけです！次こそは、必ず……」
ジェームズは跪き、まるで神に祈るかのように彼女に懇願した。だが、

「貴様に次は無い」

——ドスッ！！

ヒナのその身長に似合わない巨大な機械腕マシンアームによる突きは、ジェームズの下腹に深く突き刺さっていた。

「——お、お願いです！——命だけは！！」

大粒の涙を零しながら、ジェームズは吐くように、そして祈るように叫んだ。

「五月蠅い」

——バガアアアン——！！

ヒナがそう言った直後………ジェームズの身体が、小さな肉片と変わり果てた。

その直後・・・・・・・・ごろん、とジェームズの頭部が、ヒナの足下に転がった。

「ただか人を49人を殺してきた程度で、イ・ウーに入れると思うなよ」

——グボシャアア——

！

。――生々しい音が、夜の街の闇に溶けていった……

――GO FOR THE NEXT!

「貴様に次は無い」（後書き）

超偵との戦闘描写が難し過ぎる……。

ジエームズとの戦闘は、平士達が集まって、皆の力を合わせて最後に勝つ！という展開にしようかどうか迷いましたが、この程度の敵を退けられないでは何がRランクか！と言う事で、多少無理矢理ですが響哉1人で斃しました。

戦闘の終わらせ方は、お分かりの方も多いと思いますが、ドラゴンボールのフリーザ戦です。あの終り方が作者にとって衝撃的で、なにより一番好きなシーンでもあるからです。次回作があればそれでも使うと思います。敵キャラが自分の攻撃で負けるっていう。

ヒナの本名が明らかになり、そろそろ彩香とアヤメも含めたプロファイルを載せようかと考えています。実は、ヒナとアヤメのプロファイルはすごくしっかり作っており、まとめるのが大変になっています。他の二次創作で使われる可能性が非常に高いので、早めに出したいんですけどねエ。ネタバレになるんですよ。

そんなカンジで、これから出来るだけたくさん更新していきます。応援、感想等もお待ちしております！

留年しそうでも良いじゃない 人間だもの（前書き）

今回は原作でも書かれていた任務の話をアレンジしたモノになります。詳しくは3巻を。

留年しそうでも良いじゃない 人間だもの

—— 6月中旬の日曜。

あの悪夢のようなアドシールドから、2週間が経った。

俺の腕の傷もそれなりに回復し、今まで通り普通に^{クエスト}依頼をこなしている。

梅雨もそろそろ明けようかと言いつのに、今日は生憎の天気である。
ジュリアが以前置いて行った紫陽花^{あじさい}が、妙に風流さをかもし出していた。

・・・ピンポーン

「ほーい」

インターホンが聞こえたので、俺は歩いて玄関まで行く。今日は同居人3人は私用で出ているので、今ここにいるのは俺だけだった。

がちゃっとドアを開けると、外にはどういうワケかキンジが制服姿で突っ立っていた。そのズボンの裾は濡れている。この雨の中どこかに行つて、その帰りにここに立ち寄ったというところだろうか。

「お前が第2男子寮こうちに来るなんて珍しいな。とりあえず上がれや」

「おじゃまします」

キンジは玄関で靴をきちんと揃え、裾をまくり上げて床が汚れないようにしていた。うわー。すげえ几帳面だ。

「ほれ、飲みモン」

俺はリビングで座っているキンジに冷蔵庫から取り出したばかりの

缶ジュースを投げた。

「わつとと……ありがとうございます」

キンジはあたふたしながらもジュースをキャッチし、パシユツという小気味の良い音を立ててプルタブを開けてジュースを飲み始めた。

「で？なんでわざわざ俺のところに来たんだよ。あと、なんで制服着てんだ？」

「……さつき、マスターズ教務科に呼びだされて依頼を受けさせられたんですよ……」

ああ。それで制服なのな。納得だ。

「で、その依頼がコレなんですけど……」
キンジはクリアファイルに入れられたA4の藁半紙を取り出して、俺に広げて見せた。

「なになに……」
「転校生として潜り込み、生徒内の人間クライアント関係の問題が無いか調査せよ」……依頼主は……龍栄治学院……」

またとんでもない依頼が舞い込んで来たな。

「良かったじゃねえか。こんな簡単な任務でテストが免除されるんだからな」

「どこがですか！よく見て下さいよ！行き先が龍栄治学院ですよ！キンジのヤツも知っていたか。」

龍栄治学院とは……近年、練馬区に新設された小中高一貫の巨大学校機関だ。

だがその実態は酷いものであり、小中高それぞれの校長や教頭は天降り議員などで、それ自体が国会議員や企業の寄付金などで作られている、私立学校機関だ。

そして問題なのはその生徒たちだ。その生徒は全員が全員、どこかの企業の御曹司だったり、政治家やスポーツ選手の2世3世やらしか入学できないと噂されている。

この噂が実は本当で、実際その生徒たちは良い家柄の人間ばかりなのだ。

ついでに言うと、授業料が日本一高い学校になっている。さらにPTA会費という名目で、毎月多額の金が学校側に流れ込んでいるのは武偵業界どころか一般人でも知っている人が多い有名な話だ。

そんな悪徳な学校が、なぜ存在し続けられるのかと言うと……

そこに武偵庁や武偵局の長官とか警視庁のお偉いさんの息子や娘が通っているのだ。おかげで下っ端の武偵は指を咥えて見ているしかないのが現状だ。そんな事しているからいつまでたっても武偵のイメージが上がらないのだという事にそろそろ気付いても良いんじゃないのか？

金一さん曰く、「義の信念を欠片も持ち合わせていない、腐った学校」らしい。それは流石に言いすぎだと俺は思う。

まあでもそこは金持ち学校。日本でも指折りの教育を受けさせているらしく、その卒業生はきちんと公務員になったり、政治家になったりしている。国を引つ張っていく教育をさせているらしい。天のりの仕方とかは教えてませんよと校長が笑いながらテレビでインタビューに答えていた。

そういう金持ちの学校は、イジメとかで生徒に自殺されると非常に困る。なので武偵に生徒の中に紛れ込んで内部調査をもらうというケースは稀にある。今回もソレだろう。

「その潜入捜査に、響哉さんも来てほしいんですよ」

「寝言は寝て言え」

「寝言じゃありません！大真面目です、俺は！ここに最低2人って書いてあるじゃないですか！」

そう言つてキンジはプリントの右下の方を指差す。そこには確かに『最低2人。歳は違う方が好ましい』と記載されている。

「なんでお前の任務の手伝いをせねばならんだ！」

「いいじゃないですか！俺の戦兄あにでしょ！？」

「都合の悪い時だけ戦弟おとうとぶるんじゃないやねえ！」

そんなカンジでキンジと言い合っていると、俺のケータイにメールが来た。

メールはなぜか綴からだった。どこで俺のアドレスを知ったんだ？

俺はそれを確認すると、直後に脱力して頭をガラステーブルに打ちつけた。

そのメールの内容は『お前は一般教科の授業の態度と成績と意欲が無いので、このまま行くと単位不足で留年になるぞ』。1年の遠山に手軽に大量の単位がもらえる依頼を持たせてやったから、ありがたく思え』だった。

俺、このままだと留年かよ……。一般教科の授業はほとんど全部寝てるのがまずかったか？それとも提出物を一回も出してないからか？テスト開始5分でいつも寝ているのがダメだったか？

……。全部だな。。。

「……………キンジ、その依頼、やつぱ受ける」

「え？さっきまで受けないって言ってたじゃないですか。何だったんですか、さっきのメール」

「お前には関係無いだろ！いいからさっさと提出して来い！俺の名前書いて！」

「は、はあ……………」

それから数日後、梅雨が完全に明けたくらいの時期に、俺の元に荷物が送られてきた。

その中身は、龍栄治学院高等部の制服と生徒手帳その他もろもろだった。なぜか男性用香水と一緒に送られてきたのだが、硝煙の匂いを誤魔化すには丁度良かったと言っておこう。

一応定石通り、サイズが合っているか確認してから、俺はまたその制服を段ボールに仕舞った。

それからさらに数日後、遂にその日がやって来た。

キンジと共に行く初めての任務となるこの潜入捜査は、思いもよらない結末を迎える事になるのだが、そんな事はこの時の俺には全く知る由も無かった。

TO BE CONTINUED . . .

留年しそうでも良いじゃない 人間だもの（後書き）

3巻で書いてあった、「金持ちの子息子女しか入学できない学校」という設定から、オリジナルの高校を作りました。

名前は作者の古典の先生の出身大学である龍谷大学と、以前たまたまテレビの大学野球特集で見かけた明治大学を合わせてもじりました。

かなり悪い学校みたいに書かれていますが、龍谷と明治の方々、大変申し訳ありません。実際はそこまで悪くはありません。ただちょっと内部勢力抗争とかがある程度です。

ちなみにこの学校の設定を考えるのに、ここ数日の授業の時間の大半を使用しました。あーでもないこーでもないという具合に。

それでこの程度とあと少しの設定しか思いつかないのは、自分がダメな作者だという証拠であると自覚しております。

響哉が一般授業を大体寝て過ごしているという設定は、実はこの話のために作った物でもあります。

Rランクなのに単位不足っていうのも不自然な気がしますが、民間からの依頼で加算された単位を考えないで通知表を付けるとすれば、響哉は体育など、実技教科以外は全て5です。

5段階評定の5ではなく、点数が5です。ちなみに赤点は30以下です。それより何か1個でも下だと留年します。作者の友人に赤点が6つあるヤツがいるのですが、そいつより酷い響哉君です。

こんなアホな主人公ですみません。

こんなカンジの話がしばらく続くと思います。ですが、どうか温かい目で見てやって下さい。

感想お待ちしております！m (——) m

人と会う時はその格好をよく見るべし（前書き）

響哉が響哉じゃないみたいなお話ですw。

今回は都合上、相当短くなってしまいました。話も全く進んでいないので、深夜にもう1話投稿できるよう頑張ります。

人と会う時はその格好をよく見るべし

俺とキンジは今、龍栄治学院高等部の理事長室にいる。

今日は理事長と直に話し合って、俺達にどういった調査をしてもらいたいのかを覗う。

一応、俺達はもうすぐ一時的にだがこの学校の生徒となるので、武偵高の防弾制服ではなく龍栄治学院の制服を着用して来ている。

ここに来る途中で通った校長室の前には、まだ発足して間もないのに、スポーツや文化系の大会などの賞状や楯がズラリと並んでいた。この学院は、ありとあらゆる分野の元、もしくは現役プロの講師がたくさん雇われていて、近年様々な分野でダークホースとなっている。

ちなみに、この学校は一部から『リアル白皇学院』と呼ばれている

のはそこからだ。

来客用のソファで俺とキンジが寛いでいると、遂に理事長が姿を現した。

スーツをビシッと着こなし、髪をオールバックにしたその姿はまさしく『やり手の企業家』という風貌だった。

「ようこそお出で下さいました。私が理事長の龍栄治りゅうえいじげんだい殿です」
そう言つて龍栄治理事長は右手を差し出してきた。

「東京武偵高の朱葉響哉と遠山キンジです」
俺はソファから立ち、龍栄治理事長の手を握った。キンジも同じくソファから立ち上がり、一礼した。

「こちらこそ、よろしく願います。どうぞ腰を掛けて下さい」
俺とキンジが再度ソファに座ると、理事長は俺達の向かい側に腰を掛けた。

「早速ですが、今回はどういったご用件で依頼を？」

「ご存知かと思いますが……以前、生徒間の虐めが原因で日本中の教育機関で生徒が自らの命を絶つてしまわれる事件が多発しました」

「一教育者としては、心の痛む問題だったと存じております」

「まさにその通りです……。本校では、そのような事態はあってはならないと常日頃から教員、生徒全員に教えているのですが……幾分か、不安もあるのです」

ちらつ。

理事長は左手の腕時計を横目で一瞬見た。

「心中、お察しします」

「そこで、捜査のプロである武偵高の生徒に我が龍栄治学院に一時的に仮入学していただき、生徒同士の関係に問題が無いかを調査してもらいたいのです」

「事情は把握しました。期限は夏季休業までということによろしいですか？」

「はい。その間の調査報告書を私に提出していただければ、それで

結構です。

「……それと、万が一問題があった場合は……」

「解決に進むよう、尽力します」

「それは助かります！では、私は仕事があるので失礼させていただきます。では、また」

理事長はそう言って、部屋から出ていった。

「……ふいふ。やっと楽になった」

俺はネクタイを緩め、ソファにがに股でもたれかかった。

「響哉さんがあんな丁寧な言葉を話すなんて、正直意外でした」

「バカ！依頼主相手に言葉選ばなかったら武偵のイメージが悪くなるだろうが！そうなりや依頼数も減って、死活問題になるんだよ！」

「は……はあ……」

「んじゃ、帰るぞ」

俺とキンジは理事長室から出て、そのまま真っ直ぐ家路に着いた。

「キンジ。あの理事長の言葉、信じるなよ」

「わかってますよ。明らかに教育者ではありませんからね、あの男」

どうやら、キンジにも解っているみたいだな。

あの龍栄治理事長の服やズボン、靴には塵や汚れなどが一切付いていなかった。それに、あのネクタイとピン、腕時計は間違いなく超高級ブランド品だ。多分、スーツも。

さらに、腕時計をちら見した回数は2回。壁に立てかけてある方を見たのは4回。あの短いやり取りの間で、計6回も時計を見ていた。これはビジネスマンによく見られる仕種の1つだ。

つまりあの男……龍栄治蔵人は、教育をビジネスとして捉えている人なのだろう。

だが、それが間違っているとは決して言えない。

今の世の中、根性論や精神論では何も出来ない。そういう人間は『人として立派』なのではなく『ただの世間知らず』なだけだ。

まあでも、そうやって稼いでいいって良い講師を連れてきて、生徒を有名大学に進学させたり名のある選手に育て上げたりしていったら、それはその生徒にとっても良い事なんだろうし、文句は言えないんだよな。俺がそういうのが好きじゃないってだけで。

ま、何事もなければそれでいいさ。

俺はいつも通り、ただ任務を完遂するだけだ。

T O B E C O N T I N U E D

人と会う時はその格好をよく見るべし（後書き）

改めて読むと、話が全く進んでないですね……。これはヒドイ……。

理事長の娘は友達が少ない（前書き）

今回はオリキャラ登場の回です。どこにも伏線などありませんでしたし、当初の予定には全くありませんでした。ただ単に作者がはがないを見て出しくなっただけです。

タイトルは完全にネタです。

理事長の娘は友達が少ない

ふと、俺は龍栄治学院の正門の前に立った時に思った。

「真面目に授業を受けた方が単位貰えるんじゃないか？」と。

だが、俺は先生の話の聞くと眠くなってしまうので、やはり真面目に授業を受けるのは不可能だと気づき、諦めてこの任務を^{ミッション}キンジと共に完遂しようと決意した。

同日8時30分。

この学院では月に一度の全校朝礼がある時以外、10分間のホームルームがある。その時間にその日の予定や連絡を生徒に伝達するのだ。思ったより普通の学校だったのに俺は驚いた。まあ、これのすぐ後に授業があるのはどうかと思うがな。

「今日はみんなに転入生を紹介する！」

なんかやたらと図体がでかくて筋肉質な風体の男が、俺の潜入するクラスの担任である尾畑（妻子持ち）だ。

「紺野響哉こんのきょうやです。よろしくお願いします」

一応言っておくが………潜入捜査では偽名を使う事がほとんどだ。顔と名前を覚えられるのは武偵にとってマズイからな。

捜査の都合上、俺とキンジは兄弟という事になっている。実際に戦ア兄弟ミミなんだからあながち間違いでもないだろう。

「つか、なんなんだこのクラスは。なんで誰一人として何もリアクションを取ろうとしないんだよ。無関心は良くないと思うぞ。」

「はっはっは。では、紺野の席はあそこでいいな！」

そう言っただけで尾畑（二児の父）は窓際の一番後ろの席を指さした。

「ナイス、尾畑（29歳）！あそこならバレずに眠ってられる………
………じゃない。クラスの監視が出来る！」

俺は尾畑（26歳の妻持ち）に言われた席に座った。途中で誰かが

足をかけてくるかと思ったが、何もされなかった。ちなみに武偵高では足はかけられないが発砲される可能性がある。転入直後に命に関わる事も間々あるのだ。

それから数分後、1限目の授業が始まった。教科は数学。

本来なら爆睡し始めるところだが、今回俺が来ているのは調査のためだ。仕事はちゃんとする。

だが……本当に何も無いな。みんな真面目に授業を受けてるし、特に誰かが何かする雰囲気も無い。

それからしばらく、授業の姿を眺めていたが……やはり、何も無かった。どうやらそれはキンジの方も同じらしく、誰も話しかけてこなかったらしい。

俺の方は………1人、いた。正直こんなヤツなら即帰ってもらいたいのだが。

そして昼休み。

「ねえ、ちょっと」

前の席の女子が、イスの背凭れに前のりに寄り掛かって俺の方を向いた。

「……なんだよ」

この女子……名前を龍栄治齋りゅうえいじなすなという。お察しの通り、げんだい蔵理事長の娘だ。私立の学校でよくあるという、『理事長の娘』ポジシヨンの女子だ（自分で説明してきた）。母親はとある大企業の美人女社長。金とかには困りそうにないな。顔も良いし。

一体誰が落とすんだろうね。オレンジのバンダナを着けたサッカー少年やくすんだ金髪をしたヤンキーみたいな顔の少年に惚れるのだろうか。俺は金髪でもヤンキーでもサッカー少年でもないがな。ところで、あのバンダナ君と結婚するなんて俺は正直驚いたぞ。よくバンダナ君もアイツを選んだな。毎日の食事とか大変だろう。早死にするな、きつと。

「どうせ、1人なんでしょ？私がこの学校の事教えてあげてもいい

わよ。フフン」

「……初対面でいきなり『下僕になれ』とか言い放ってきたヤツに、教えてもらっ事なんて無い」

そう……。この理事長の娘、ナズナは1限目の後の休み時間、俺がキンジと連絡を取っていた時に、「私の下僕になりなさい」とか言ってきた。その時の俺の対応は「なめんなよカス」だ。俺にそんな属性は無い。

「む！……強がり言ってもダメよ。あなた、どうせ食堂の場所も解ってないでしょ？」

ナズナは勝ち誇ったようにそう言った。うわあ。すげえム力つく。

「地図がある」

俺はポケットから生徒手帳を取り出し、学院内の地図を開いて見せた。

だがナズナは俺の手からソレをかすめ取り、地図のページを破って紙吹雪に……。って待て！

「デメエ！何してくれてんだ！まだ転入初日なんだぞ！たった1日で生徒手帳再発行しに行く事がどんなに恥ずかしいか知ってんのか！？」

「知らないわよそんな事！いいから着いてきなさいよ！」
ナズナは言いが否や、スタスタと歩き始めた。

地図を失ってしまった俺は、仕方なくナズナに着いて行くしかなかった。

食堂に着いて昼飯を注文すると、俺はナズナと離れた席に座った。

「ちょっと！なんで私と一緒にのテーブルに着かないのよ！」

「誰がお前なんかと食事を共になどするか！そんなに誰かと食いた
いなら別のヤツを誘え！」

俺が言い返すとナズナは何も言い返さなくなった。え？なにこの俺
が悪いみたいな空気。

「お前……まさか友達いないのか？」
まんま『はがない』の『肉^{アイツ}』じゃねえか……。

ナズナはギクツと分かりやす過ぎる反応をして、俺の向かいの席に
座った。

「・・・・・・なによ。文句あんの・・・・・・」
「やっぱそうだったんかいイイイイ!!!!」

「文句がどうこう以前にだな・・・・・・理事長の娘っていうのは、
どうして友達ができないんだ？流行ってんのか、今」

「流行ってるってなによ・・・・・・。・・・・・・まあ確かにそ
うかもね。ここの生徒はみんな、『自分以外は全て敵』みたいに思
ってるのかもしれないし」

「どういう事だ、そりゃ」

「なんかとんでもない事をさらっと言いやがったな。」

「言った通りよ。ここは、いろんな企業や政治家の息子子女が集ま
ってくる場所よ。ライバル会社の手先かもしれない相手と誰が仲良
くなりたいなんて思うの？将来同級生と覇権争いを繰り広げる事
になるのは解ってるんだから、仲良くなんかより弱みを握った方が良
いのは明らか。だからみんな、仲良くなろうとする前に知られたく
ない情報を掴もうとするわ。あなたの情報も専属の武偵とかを使っ
て調べ尽くしているはずよ」

「・・・・・・とんでもない学校だな。ここは・・・・・・」

ナズナはうつんと首を横に振った。

「ここは学校なんて楽しい場所じゃない。・・・・・・ただの、地獄
よ・・・・・・」

「・・・・・・・・え？」

なんだ・・・・・・・・この、嫌な違和感は・・・・・・・・。なにか、俺の知らない所で・・・・・・・・。取り返しのつかない何かが起こっているような・・・・・・・・。

「・・・・・・・・ほら！さっさとご飯食べましょう！昼休みもあと30分しか無いんだから！」

・・・・・・・・・・・・・・・・30分もあれば余裕なのではないか？

そんな俺の些細な疑問は、誰の耳にも入る事は無かった。

その日の放課後、俺はキンジと武偵高の学園島に帰ろうと、モノレールに乗っていた。

「なにか分かった事はあるか？」

「いえ……。あそこの生徒、どういうわけか誰も俺と話をしようとしてないんですよ。こっちから話しかけても無視されることだってありました」

「……キンジのトコもそんなところか。」

「響哉さんの方はどうですか？向こうの生徒と一緒に食堂で昼飯食べたでしょ？」

「見てたのか。……ソイツとちよつと話をしたんだが……。……どうやらあの学校、俺達が思ってるよりよっぽどタチが悪そうだな。生徒たちがお互いの弱みを握り合ってるらしいからな。報告書になんて書くか……。……」

「何事も無ければ、良いんですけどね」

「もつともだ……。……」

夕陽が車窓から入り込む、俺達しかいないモノレールの車両の中、俺とキンジは溜息をつくようにそう言い合った。

——この時俺は、すでに確信していたのかもしれない。
い。

龍あそこ栄治学院にもうすぐ、とんでもない事態が起こってしまう事を・
・・・。

ただ俺は・・・・・その現実を認めたくなかっただけで——
。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.

理事長の娘は友達が少ない（後書き）

とゆーわけで、理事長の娘こと龍栄治齋の登場です！ナズナは漢字だと読みにくいのでカタカナ表記です。ミスではありません。

今回はキンジが大活躍！……する予定はありません。主に響哉がちよろちよろしまくる話です。

ナズナのプロフィールを掲載しておきます。

龍栄治齋

私立龍栄治学院高等部2年C組

身長161cm

父親は文部科学省の元職員。今は学院の理事長。母親はとある大企業の敏腕女性社長という恵まれた家庭で育ち、成績は学年で10番以内に毎回入っている。

運動も得意でスタイルも良いので、まさに『才色兼備』。ただし勉強とスポーツについては小さい頃からの英才教育プログラムを受けてきたからであって、先天的才能ではなく後天的努力によって得られた。顔は母親譲り。

友達がいないのではなく、友達を作り合おうとしない環境にいます。

だが本人は普通の高校生のように友達を作りたいと思っている。響哉に『下僕になりなさい』と言ったのも、どうやったら友達ができるか分からないのでネットで質問したところ、間違った答を真に受けてしまった、実はとんでもなく純粋な娘。

以上です。完全にヒナギクと星奈の合体みたいなキャラになってしまいました……。どっちも作者が好きなキャラなんですよね……。

それと、話は変わりますがISの短編小説を書きました。よかったら見てやって下さい。短編と言いつ割に長いですがw

友達とは、いつの間にかそうなっているモノ（前書き）

ちょっと暗くなってしまった話です。

友達とは、いつの間にかそうなっているモノ

俺とキンジが龍栄治学院に潜入し始めてから、1週間が経った。

だが特に何か問題を発見したわけでもなく、ただ単に生徒の出身の問題でコミュニケーションが取れないだけという事しか解っていない。

その唯一の情報も、唯一俺に絡んできた理事長の娘、龍栄治ナズナによるものだ。

ナズナは普通の漫画とかを読んで普通の高校生に憧れ、友達をたくさん作って高校生活を楽しく過ごしたいらしい。

だから、新入生の俺に絡んできたそうだ。その絡み方はケンカの売り方に等しかったがな。

で。俺はいつの間にかナズナと仲良くなっちまって、今ではよく一緒に飯を食ったりしている。

———そんなある日の事。

俺とナズナとキンジは今では当たり前のようになつた3人で昼飯を食っている時だった。

「ねえ。響哉とキンジってなんでどこの部活にも入ってないの？ 体育の成績だけはすごいじゃん」

「ナズナには関係ないだろ」

俺は『龍栄治』という苗字が長すぎるのと、理事長と被るからという理由でナズナと呼んでいる。別に、他意はない。

「なんで学年が違う俺の成績まで知ってるんですか……」

「私を誰だと思ってるの？ 理事長の娘よ」

だからなんなんだ。守秘義務とかあるだろう。あのオッサンに見せてもらってるんだったら、もうすぐあの人捕まったりするんじゃないだろうな。そうなつては俺の進級に関わるんだが。

「ねえねえ！ 今度3人でどっかに遊びに行こうよ！ もうすぐ上野の緋川神社で七夕祭りもある事だしさ！」

今日の日付は7月1日。時間が経つのは早いものだ。

ちなみに、武偵高の夏休みは7月7日という分かりやすい日から始まる。これは俺のように単位が不足している生徒が受ける『緊急任務』の都合に合わせるためののだが、普通は大体20日から25日の間だ。龍栄治学院は23日から始まる。つまり、俺達は22日をもってこの潜入捜査を終える。

もしその時が来たら、ナズナはきっと、また1人ぼっちになっちまうんじゃないだろうか………？

俺の脳裏に、そんな考えがよぎった。だが、それは潜入作戦では最大のタブーだ。余計な私情は、仕事に肩入れさせるべきではない。

心を、鬼にするんだ。俺よ。

「……ああ。じゃあ、行こうぜ。七夕祭に」

「やったあ！約束だよ！忘れちゃダメだからねー！」
ナズナは跳びはねながらその喜びを表していた。

心が痛んだ。

俺は、コイツのこんな純粹さを、利用してしまっている………

。
その事を、ナズナは知らない。

。――ヤメロ。考えるな。考えれば、辛くなる……。

俺はキンジと別れてナズナと共に教室に戻り、次の授業の準備……
した。

「響哉ってさ……寝るために授業受けてんの？教科書積んで
枕にしてるじゃない」

ナズナの言う通り、俺の机左側の上には常に教科書やノートが積んであつて、授業中はそこに左腕を乗せて寝ている。この姿勢だと寝やすいのだ。

「なんでもいいだろ、そんな事は」
俺はナズナの指摘をなあなあで誤魔化した時、授業が始まる予鈴が鳴った。

その日の放課後。

普段なら寝ている俺をナズナが起こしてくれるのだが、今日はどういうワケか起こしてくれなかった。

いつもなら、ナズナと一緒に教室を出て、昇降口でキンジと合流してモノレールの駅まで3人で帰るのだが。

ナズナは理事長の娘だが、学院の土地の中に龍栄治家は無い。

学院から少し離れた所に、大きな家があるらしい。ナズナはそこから通学しているらしいのだ。ここには寮が無いからな。理事長は住み込みみたいになってるらしいが。さすがにたくさんの仕事があるのだろう。

「……………帰るか」

違和感を感じつつも、俺は帰り支度をして教室から出た。昇降口にはキンジが待っていてくれた。

「わりいキンジ。寝過ぎしまった」

「いや、それはいいんだけど……………ナズナ先輩はどうしたんですか？」

「それが先に帰っちまったらしいんだよ……………あと、キンジ。学院内では弟として振る舞え。怪しまれたら終いだぞ」

最後の方だけをキンジにしか聞こえないように耳打ちして、俺は忠告しておいた。

「すみません……………。周りに誰もいなかったから、つい……………」

「まあ、解ってるならいいんだが……………キンジは先に帰っててくれ」

「いいですけど、なにか用で……………用なのか？」

キンジはまだ慣れてないみたいだな。お前には兄貴^{金一さん}が居ただろうに。

「ああ……………。ちょっと、気になってな」

キンジと別れた後、俺はナズナの下駄箱を調べた。

靴がある……。まだ校舎内にいるのか。

俺は嫌な予感がして、校舎内を駆け回った。

そして、文化系の専門教室がある第3棟の2階で……。ナズナを見つけた。

「ナズナ！」

俺はナズナの肩を持って、階段を降りようとした彼女を引き止めた。

「響哉！？」

驚いたのかナズナは――階段から落っこちそうになった。

「危ねッ！！」

俺は即座にナズナの手を取り、その手を引っ張ってナズナの身体を両手で抱えた。

「――！！？ば、バカ！！何やってんのよ！！」

ナズナは顔を紅くして、俺から離れるように胸を押す。

「それはこっちが言いたい台詞だ！なに一人でどっか行って、勝手に階段から落ちそうになってんだよ！お前が居なくちゃ、誰が俺を起こしてくれるんだ！！」

「・・・は、はア！？何言ってるのよ、もう・・・」

ナズナは少し黙った後、なんかすごいダメ男な発言を真顔で言ってしまった俺に、クススッと笑いだした。

「響哉って・・・やっぱり面白いわ」

「それは不名誉な意味でか？」

「・・・よかった。いつものナズナだ。何にも言わずにどっかに行っちゃうから、何かあったのかと心配しちゃった。」

大方、先生とかに呼び出されたんだろう。3階には生徒指導室もあるし。

俺とナズナは並んで階段を下りていたのだが、ナズナが途中で忘れ物をした事に気付いた。

「響哉、先に行つて。私もすぐに追い付くから」

「おう」

俺は短い返事をした後、昇降口で靴を履いていると……………

「紺野響哉君だよな？」

聞き覚えの無い声が、俺の後ろから聞こえた。

「……………そつちから名乗るのが礼儀つてヤツじゃねえのかよ」

「これは失礼。紺野……………いや、朱葉君」

「……………！？なんでコイツ、俺の名前を知ってたんだ――

！？

「僕の名前は楠原直人。くすはらなおと以後よろしくね」

「……………俺に何の用だ……………？」

コイツが……………楠原がなぜ、俺の本名を知っているのかは分からないが……………良いヤツじゃないのは一目瞭然だ。――

――そういう雰囲気を、纏っている。

楠原は、ニヤアッと気味の悪い笑みを浮かべながら……………

「君、僕の専属武偵になってくれない？」

「そう、俺に言い放った」。

TO BE CONTINUED . . .

友達とは、いつの間にかそうなっているモノ（後書き）

黒幕キャラも登場し、いよいよ本格的に話が進み始めます！これを4章にしておけば良かったか？

ひょっとしたら急に4章ができてるかも知れません。そうになったら
ゴメンなさいm(_____)m

楠原のプロフィールは、ネタバレになるのでもうちょっと後です。
誰も待ってなどいないでしょうしねw

姑息な男と武偵憲章（前書き）

すこし無理矢理なカンジがと思いますが、39話目です。

姑息な男と武偵憲章

「僕の専属武偵になってくれない？」

楠原と名のつた生徒の言葉に、俺は――

「断る」

――即答した。

「待遇は安心してくれ。僕は楠原グループの御曹司だ。何でも欲しいモノがあればすぐに用意させよう。給料もはずむ」

「断る」

さすがに二度目となると、楠原は顔をしか顰め、

「……強情だな。じゃあ一体何が望みなんだい？」

「何も望んじやいねエ。強いて言うならお前と話したくないと思ってる」

俺がそう言つと、楠原は少し黙ってしまった。

「……今はそう言えるだろうけど、そのうち君は僕の所に来るさ。そう、決められているのだから。この、僕に」

楠原よ。寝言は寝て言うから許されるんだぞ。お前はその過大妄想癖を直すべきだ。

俺が心の中で呟いた時、楠原は黙って俺の目の前から去ってくれた。このまま二度と現れないでくれ。

「あれ、響哉？先行ったんじゃないの？」
タイミング良く、ナズナが下りてきた。

「……お前を待ってたんだよ」

「えっ！？ホント！！」
もちろん事実とは違うのだが……ナズナは喜んでるんだし、
良いか。

それから、俺とナズナは2人で駅まで歩いた。だが、どういうワケ
かナズナは一切俺と喋ろうとはしなかった。

——この時、俺は気付くべきだった。

なぜ、ナズナが第3棟にいたのか。そして、楠原が最後に言った言
葉の真意を。

翌日。俺とキンジは遅刻ギリギリで登校し、俺は駆け込むように教室に入った。

だが席に着いた時、俺はその違和感にすぐ気が付いた。

ナズナが、いなかった。

普段なら遅刻しそうだった俺をからかったりするはずのナズナが、席に着いていないのだ。鞆も無い。つまり、まだ来ていないという事だ。

「アイツが遅刻なんて珍しい事もあるモンだ」
俺はその時、そんな軽い考えしか出来なかった。

「おいみんなー！席に着けー！HRを始めるぞー！」
相変わらずむさ苦しい尾畑担任（結婚したのは22歳）の声が聞こえたなと思って、俺は一応前を見る。

「それじゃあ出席を取るぞー」

そういつものように出席を取る、尾畑の額には・・・・・・・・包帯が巻かれ、右目は眼帯によって隠されていた。

「尾畑先生！」

俺はHRが終つてすぐ、席を飛び出して尾畑に駆け寄った。

「どうしたんですか、その怪我！」

「ああ……昨日陸上部の生徒と走り込みをしていたら、鉄アレイが落ちてきてな」

「鉄アレイ！？」

「大方、誰かが文化棟でトレーニングしてて、謝ってソレが落ちてきたんだろ。それに頭ぶつけて……何だったかな……。病名は忘れたが、目の中で内出血して、頭からも血が出たんだよ。なに、心配するな！先生はこの通り、いつでも元気100%だ！」
尾畑はアッハツハと大声で笑い始め、心配無いとアピールしてきた。

「ほら！もう授業の時間だ！早く席に着け！古典の先生に怒られるぞ！」

「は、はい……」

――俺はもちろん、納得がいかなかった。

空から鉄アレイが降ってくるなんて、ありえない！誰かが故意にやった事に間違いない！

尾畑は確かにむさ苦しくて暑苦しいヤツだが、それでも良いヤツだ！武偵高の教師共に、爪の垢を煎じて飲ませてやりたい程の。

なぜそんな教師が、一歩間違えれば命の危険もあつた事態に晒されなきゃいけないんだ。

「――遅れてすみません」

授業が始まって20分くらいしてから、ナズナが登校してきた。

「よう。遅かったな。寝坊か？」
珍しく起きていた俺が、ナズナにそう訊くと、

「・・・うん。そんなトコ」
ナズナは小声で、それだけ言った。

・・・その様子が、俺にはなんだか変に思えた。

いつもならここは「響哉が起きてるなんて、地球が逆回転する前兆

かしら？」的なセリフを吐くのに。

昨日からナズナの調子がおかしい……。

そういえば、なんで昨日コイツは文化棟（第3棟）にいたんだ？成績も優秀だし、模範生しかいないこの学院の、さらにその模範となってる生徒だ。生徒指導室に呼ばれる理由が無い。

そういえば、尾畑はその文化棟の近くを走っていて、怪我したって言うってたな。

——まさか、な。

俺の第六感が、最悪の仮説を結び出してきた。しかし俺は、その仮説を信じようとはしなかった。

その日の昼休み。

いつものように3人で昼飯を食おうと思ってナズナを誘ったのだが、

「ゴメン、私は今日パス。ちょっと用事あるんだ」

これまた珍しい。いつもなら俺を拉致するかのように引つ張って食堂に行くナズナが、俺から誘っても来ないとは。

「そうか」

「…………ふと、俺は気になった事があったのでナズナに訊いてみる事にした。」

「ナズナ。昨日の放課後……………なんで文化棟なんかにいたんだ？」

俺が何気なくそう尋ねると、ナズナは――

「アンタには関係無いでしょ——」！！」

バンツ！と立ち上がりながら机を叩いて、俺の目を見て睨んだ。

「お、おい……。まさか——」！

「……………！どいて——！」
ナズナは俺を突き飛ばし、走って教室から飛び出していった。

——その現実が、俺の仮説が事実だった事を確認付けた。

それから俺は、キンジと2人で昼飯を食べに食堂に来ていた。

「———やあ。また会ったね」

楠原が俺とキンジが座っていたテーブルの横に立った。

「君が遠山キンジ君か……初めまして。僕は楠原直人だ」

「……………アンタ、なんで俺の名前を———！！？」

「よせ、キンジ」

キンジの事も調べてやがったか。抜け目ねえな、コイツ。

「……………何の用だ？二度と話しかけてくるなと言ったはずなんだが」

「おやおや……………随分嫌われちゃったみたいだね。でも、いいのかな。そんな事言って」

「……………？どういう事だ」

すると楠原はニヤアっとその気色の悪い笑みを浮かべ、制服のポケットからケータイを取り出し、その画面を俺達に見せた。

「……………そういう、事だったのか……………！この外道がア！
」

俺はイスが倒れるほど勢いよく立ち上がり、楠原の胸倉を掴み上げる。その時楠原はケータイを落とした。

「響哉さん！」

「キンジは黙ってる！」

ざわ…わざ…………

周りにいた生徒が、何事かと騒ぎ始めた。

「…………ツチ！」

俺は舌打ちして投げ捨てるように楠原を離れた。

楠原が、落としてしまったケータイを拾い上げる。そのケータイの画面には……………

・ ・ ・ ナズナの父親、龍栄治蔵岱のものと思われる、過去にした不正、隠蔽の事実が事細かに記されていた――

「ここじゃあ人が多すぎる。場所を移すぞ」

俺はキンジと楠原を連れ出し、人気の無い体育館裏に移動した。

「どうやらやっと解ってくれたようだね。そう。君たちのお友達の龍栄治さんは、この『弱み』を僕に握られている。この『弱み』を僕が持っている限り、彼女は僕の言う事には逆らえない」

コイツは――楠原直人は・ ・ ・ ・ ・

——ナズナをその『弱み』でゆすつて、尾畑に怪我をさせたんだ！

ナズナはコイツに命令され、仕方なしに鉄アレイを2階か3階から投げ落とした。

そしてその行動からすぐ、ナズナは帰ろうとしたところを俺に見つかった。

そして、あの時間帯にコイツがまだ校舎内に居たのは、ナズナがちゃんと命令通りに行動するかを監視するため。

俺とキンジの事を調べたのも、最近ナズナと俺達が親しくなったからだ。計画が破綻すると踏んだコイツは、俺達に『弱み』が無いか調べたつてところか。

「どこまでも・・・外道なヤツだな、テメエはよオ！！」

「ッハ！外道？何を言う！これはれっきとした『戦術』だ！相手の弱点を突く事は、勝負においての鉄則！自分が傷つかないように相手を傷つけるのは必勝の法則！コレを人間は『卑怯』とは言わない！『良策』と言うんだよ！！」

楠原は勝ち誇ったようにそう言った。

「……残念ながら、君たちの『弱み』と呼べるほどの情報は手に入れられなかった。だから僕は作戦を変える事にした」

……？

「——君たちが僕の言う事を聞いてくれなければ、僕はこの画像をネット上に拡散する！！」

……ネチネチと、姑息な野郎だな……。

「まあ僕も鬼じゃない。金曜の放課後まで返事は待っておいであげるよ。精々感謝するんだな。……まあもともと、返事は決まっているようなものか！アーハッハッハ！！」

楠原は、笑いながら去っていった。

「響哉さん。本当なら、こういう時はほつとくのが定石です。元々セオリ潜入先の人間と親しくなるのだって、タブーなんですから」
キンジの言っている事は正しい。

潜入先で無意味に親しくなり過ぎると、その人物に情が湧き、正しい判断ができなくなる可能性がある。だから、潜入先ではなるべく

人と関わらずに情報を得なければならないのだ。

キンジはそのまま続けた。

「……でも、俺……ナズナ先輩の事が放っておけません。このまま楠原みたいなヤツを野放しにしておいて、兄さんの言っている『正義』が護れるとは、思えないんです!!」

「キンジ……お前の言っている事は、ただの感情論だ。情に流されていては、本質を見失う」

俺の言葉に、キンジは俯いてその拳を強く握った。

俺はポケットからケータイを取り出し、電話帳を開く。

「
——
だがな、キンジ。」

「……友達^{ダチ}がやられても黙ってられるヤツは、人間ですらねエ！！」

俺はケータイの決定ボタンを押し、電話をかけた。

「東京武偵高強襲科^{アサルト}2年の朱葉だ！今すぐに楠原直人というヤツのケータイとパソコンにハッキングして、内部データ^{データ}を全て消去してくれ！」

まずは通信科^{コネクト}のクラスメイトに電話し、楠原のデータ消去を依頼する。

その後、人望の厚い俺の同居人、春樹に電話をかける。

「春樹！俺だ！情報科^{インフォルマ}に楠原グループの事を調べるよう依頼してくれ！報酬ははずむ！」

『どうしたの？急に』

「理由は今度話す！だから今は黙って俺の言う事を聞いてくれ！！」

『・・・わかった。情報科の友達に依頼してくるよ。その代わり、今度学食のステーキ奢ってね！』

「ああ！楽しみにしてる！」

俺は電話を切ってポケットにしまった。

「キンジ。武偵憲章8条を言ってみろ」

俺が言うと、キンジは意表を突かれたのかビクツとして気を付けの姿勢になった。

「は、はいッ！武偵憲章8条！『任務は、その裏の裏まで完遂すべし』」

「じゃあ、武偵憲章3条は」

「『強くあれ。但し、その前に正しくあれ』・・・！！」

「最後だ！武偵憲章1条！」

「『仲間を信じ、仲間を助けよ』——！」

「そうだ！この任務の裏は、この学院の腐ったヤツを成敗する事！そして俺達は武偵として、そして金一さんの意志を継ぐ者として、正義を貫き、悪を下す！なにより……ナズナは、俺達の仲間だ！」

「——はい——！！！」

俺とキングジの叫びは青い空の下に溶けていった——。

……この学院で知り合った、仲間^{ナズナ}を、助けるために……。

・・・・なんでナズナの事になると、俺はこんなに必死な
てしまうんだろうか。

・・・・俺はまだ、その答を見出してはいなかった
――

TO BE CONTINUED.....

姑息な男と武偵憲章（後書き）

書いてて思った事。武偵を敵に回したら終りw

最後の方がかなり無理矢理で、セリフだけになってしまいました・
・。申し訳ありません。

ですが、武偵憲章の素晴らしさが表現できればそれで良いと思っています。元々は原作者の赤松中学先生の母校にあった校訓だったそうです、そっちの方も気になります。

響哉がナズナにこだわる理由は、すぐに明らかになると 생각합니다。活字では分かりにくいというか分からないんですけどね。

他にもこの話は、響哉にもカッコイイシーンがあっても良いじゃないか、と考え↓だったら武偵憲章だ！という結論に達し、このような構成にしました。

今日はこれ以上書けないと思いますが、これからも緋弾のアリア
UNITYをよろしくお願いします！m（――）m

バレなければ何をやっても良いと多くの政治家は思っている（前書き）

前回調子に乗りすぎたと自覚している作者です。

4章のコンセプトは、『直接は闘わない敵との闘い』です。つまり、楠原ですね。そんな相手にも武偵は圧倒的に勝つという話を書きたかっただけです。作者の頭の中の武偵は、『強靱・無敵・最強！』ですからw

今回は原作でお馴染みのあのキャラと、これからよく出てきそうなオリキャラが登場します！

バレなければ何をやっても良いと多くの政治家は思っている

翌日・・・つまり水曜の夜、俺は春樹から楠原グループの『弱み』が記された冊子を受け取った。

だが、まだコレを楠原に見せるのは早い。このタイミングだと『情報交換』とか言ってまた同じことを繰り返す気だ。俺の目が届かない所で。

だからまずやるべきは、楠原のパソコンとケータイにある情報の全^{データ}てを消去し、完膚なきまでに絶望を与えてやらなければならない。

だが、昨日連絡した通信科のクラスメイトこと西沢皋月にしざわさつきによれば、楠原がデータをさらに2つくらいに分散して持っている可能性が高いと言われた。

なので俺は、コンピュータウイルスが入ったUSBを即興で作ってもらい、ソレを使って楠原のパソコンをウイルスで犯し、完全に再起不能にしてやろうと考えた。

その次の日の深夜というか、日付が変わってすぐの頃……俺は楠原邸敷地内に侵入した。

不法侵入だって？バレなきゃ犯罪じゃないんだよ。

ちなみに、今回は通信科の生徒2人に後方援護してもらった。クラスメイトの皐月と1年の中空知という女子生徒だ。面識は無いが、皐月と仲の良い後輩らしい。

皐月の話によれば、中空知は耳が良いらしく、音響捜査で3キロ圏内の会話をほぼ全て聞きとれるらしい。さらに音だけでいろいろ解るんだと。何が解るのは知らんが、人間が寝ているかどうかも解るそうなので、今回参加させてもらった。オペレーターが2人なのに対して実働が1人っていうのも珍しいな。

にしても、でかい家だな。一体何坪あるんだよ。

もちろん、警備は厳重で忍び込むのも大変だったが……民間でできる防犯設備なら、大体は突破できる。

おまけに、俺は今回金品を盗みに侵入してはいない。こういう防犯設備は高価な物に近ければ近いほど強化される様になっている。

逆に言えば、金目の物が置いていない場所ほど、警備は行き届いていないことが多い。

俺は音も無く邸内に忍び込み、防犯カメラに映らないように・・・
・というか、防犯カメラは作用してなどいない。

皐月にシステムを奪わせてもらっているのだ。どんな技術を教えているんだろうね通信科って。

で、警備会社の方からはさっきまで映っていた映像が静止画みたいな感じで映ったまんまだから絶対にバレないらしい。保障までしてくれた。

そんな事は解ってはいるんだが、どうにもカメラが気になって仕方ない。すぐに慣れると思うが。

それからすぐに楠原の部屋を見つけ出し、楠原が寝ている事を小型無線で中空知に確認してもらってから掛けてあった鍵を解錠して侵入

入。

見ると、パソコンが2台ある。デスクトップと、ノート。

足音を全く立てずに固定型パソコンの前に行き、起動させる。

起動しきったら、USBを差し込んでウイルスデータをダウンロードする。

ダウンロード完了まで・・・・・・・・1分か。長いな。

まあウイルス自体がちょっと特殊なヤツだし、仕方ないと言えば仕方ないかな。

で、1分後。ダウンロードが完了したので俺はUSBを引っ抜き、ノートの方もやってから、ちゃんと鍵を掛けて楠原邸から退却。この間僅か5分。我ながら手早かったと思うよ。

「ミッションコンプリート任務完了。皐月、もういいぞ」

『了解。システム、正常に戻します。3・・・2・・・1・・・コンプリート・・・終了』

無線から皐月の声が聞こえた。コイツやっぱ仕事速いよな。

「中空知・・・だっけか？悪いな、こんな深夜に」

俺は中空知にそう言った。先輩としてはないが、激励の1つでも送ってやらないと可哀想だしな。

『問題ありません。また用があればご連絡下さい』

中空知はNHKのアナウンサーみたいに発音良くそう返してきた。

声だけしか知らないけど、きっと人当たりが良くてシャキツとして
いる女性ヒトなんだろう。

7月4日、金曜日の放課後。なんか知らんが楠原が俺とキンジを文
化棟屋上に呼び出してきた。

「やあ楠原君。どうしたんだい、こんな所に呼び出したりなんかし
て」

「・・・どうしたじゃないだろう。今日は君たちが僕の――」

「ああ、その話な。誰がそんな指図受けるかよカスが」
楠原が言い切る前に、俺は口を挟んだ。

「・・・!ど、どうやら状況が解ってないみたいだね。君たち
が断れば、あの書類をネット上にばらまくよ!」

「あんのかよ。そのデータ」

俺が勝ち誇ったようにそう言うと、楠原は目を見開き、

「……お、お前達がやったのか！犯罪だぞ！今すぐ訴えてやる
！」

「……ガキか、コイツは。」

「訴えられるのはそっちだろ？コイツを見てみるよ」
俺は一昨日の夜、春樹から受け取った書類の1枚目を見せてやった。

「———そ、それは！！？」

「お察しの通り、コイツはお前の親父がやってきた数々の不正が書かれて
いる。さらに、お前のパソコンとケータイのデータは全て消えてるはずだ。
あと、ついでにiPodも」

———あのウイルスは、感染した媒体に接続した場合、
その接続した媒体のデータも全て消し去ってしまう。

楠原はおそらく、パソコンがウイルスに感染している事に気付かず
に、ケータイを接続したんだろう。

いや。ひょっとしたらウイルスによってパソコンのデータが消えているのに気づき、バックアップを取ろうとどっちかのパソコンに繋いだんだろう。

で、あの慌てようからケータイもめでたくだの箱になっちまったってところか。

「なぜそれを……！！!?」

「武偵舐めてんじゃねえよ。これくらい、情報科なら1年でもできるぜ」

「ちなみに言っておくが、この書類をバラされなくなったら2度とこんなマネをするな。アンタに決定権は無い」

「……わ、わかった。要求をのむ。だからお願いだ……
！ソレを俺に……！！！」

楠原は膝をつき、土下座するようになって懇願した。さっきと態度が全然違うな。

「もうナズナに――」

——
バダンッ！

「響哉！キンジ！」

「もうナズナに近寄るな！」的な事を命令しようと思った瞬間、階段への扉が勢いよく開けられ、そこには肩で息をしている——
——ナズナが、いた。

「……………いったい、どういうこと——！？」

今の状況は、俺とキンジの前に跪いてる楠原がいる。それを今さっきここに來たナズナが見たらどうなるか。

あれ・・・？これ終ったんじゃね？

「ナズナ！これはだな・・・」

「響哉さ・・・兄さんは！ナズナ先輩のためにやっただんです！」
キンジがナズナに向かって叫ぶと、ナズナは「えっ！？」と驚いた
ような声を出した。

そして、つかつかとこっちに歩いて近づいた。そして、俺と楠原か
ら3メートル、キンジから4メートルといったところで足を止めた。

「響哉・・・ありがとう。でも、ごめん」

ナズナは制服の中に手を入れた。

「・・・ナズナ？」

俺が不審に思っ^てナズナの名前を呼ぶ。

だが、ナズナは何も言わなかった。そして、さっき制服の中に入れ

た手を出した。

「「「――！！？」」」

俺とキンジ、さらには楠原までもが驚愕した。

「楠原は、私が終らす――！」

姿を見せたナズナの手には・・・

・・・
拳銃が握られていた

！

TO BE CONTINUED・・・

バレなければ何をやっても良いと多くの政治家は思っている（後書き）

キンジと響哉は、兄弟という設定で潜入しているので、響哉の事を「兄さん」と呼んでいるんです。別に金一さんが出てきたわけじゃないですね。

ところで、番外編をしたら『1 響哉と彩香の入試の話』『2 響哉が父親にどういった特訓をされてきたのか』『3 銭形平一の憂鬱』『4 そろそろアヤメとヒナの過去話でもやろうか』『5 それ以外』この中から選んで下さい。期限は特に設けません。

本編は毎日更新するので、安心して下さい。もうすぐ修学旅行？、文化祭、修学旅行？といった行事がありますが、案外あっさり終らして行きます。修学旅行？どうしようか……。現在考案中。本当に行き当たりばったりな作者ですみませんm（――）m

そして、響哉とキンジはナズナを本当の意味で助ける事ができるのでしょうか？そして、楠原は生還できるのでしょうか？

決意と勇気 罪と罰

「楠原は、私が終らす——！」

ナズナは、その手に『SIG SAUER P239』を構えながら、何かを決意したかのようにその銃口を楠原に向けた。

「やめろナズナ！銃を下ろせ！」

俺は説得を試みるが………

「退いて響哉！お願い……！」

そう叫んだナズナの声は、僅かに霞んでいた。

——そして、その瞳から一筋の涙が零れた。

「楠原！アンタを生かせてはおけない！アンタは生きている事が罪なのよ！！」

「——ふ、ふざけるな！罪を負っているのは龍栄治、お前の方だ！尾畑に怪我させたのは、おま……………」

「言わないで！！」

楠原が言おうとした時、ナズナは一際大きな声で叫んだ。

「……………」

「ナズナ先輩……………」

俺とキンジは、今の彼女にどんな言葉をかけてやるべきなのか……
・解らなかった。

武偵とは言っても、まだ俺達は15、6の人生経験の乏しい子供だ。

こういう時、金一さんや父さんなら……いや、大人だったら誰でも、言葉をかけてやるくらいはできるのかもしれない。

「……………尾畑先生は……………私がやった。——でもそれはそこにいる楠原が脅してきたせいで、仕方が無かったのよ！まさか本当に当たるなんて思わなかった！当たらないようにちゃんと狙いは外してたのに！」

ナズナは涙ながらにそう訴えた。

「そこにいる楠原は！中学の時と同じ手口で生徒や教師たちに怪我を負わせてきた！中には後遺症を患ってしまった人もいる！そんな悪魔を、私は許さない——！」

ナズナの構えは、しっかりしていた。過去に射撃訓練でもやっていたのだろうか。その構え方はとても素人のモノとは思えなかった。

そして、ナズナのトリガーを掛ける指に、力が籠っているのが第六感が感知した。

瞬間、俺は跳んだ。ナズナの構える拳銃ではなく、
その射線に向かって………！

S
I
G
P
2
3
9

バンッ！

1発の銃声が、曇り空の下に響き渡る………。

「――！？」

「う、うわぁ！！？」

楠原の情けない声が聞こえる。

ああ。ナズナに背中向けるんじゃない無かったな。

「響哉さん！！！」

キンジが慌てて俺の方に駆け寄ってくるのが分かる。バカだなあ。
防弾制服着ていて死ぬかよ。

あ。忘れてた。

この制服、龍栄治学院から借りた物で………

——いつもの防弾制服じゃ、ないんだった。

「イヤアアアアアア——！！！！！！」

ナズナの悲鳴が屋上に響く。

だが、それが解するという事は、どうやら俺はまだ死んではいないらしい。偶然銃弾が急所を外したのか。

「・・・・・・・・ゲフッ！」

ビシャシャッ

俺は喀血し、楠原の制服にその血が少し付着した。

「・・・・・・・・ああ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・ナズナ！よく聞け！確かに楠原は・・・・・・・・クズ野郎かも、しれねエ！でもなア・・・・・・・・どんなクズ野郎でも、これから先イ、更正するかもしれない・・・・・・・・可能性を、奪っちまったら・・・・・・・・ダメなんだよ・・・・・・・・！」

やべ・・・・・・・・目が、霞んできやがった・・・・・・・・意識も・・・・

でも、まだだ！もうちょっとでいい！堪えてくれ！

「だからよオ、拳銃そんなモン使わねエで……悩んだり、困ってたりしたら……俺とか、キンジとかを……頼ってくれよなア？」

「響哉さん！これ以上喋らないで下さい！」

キンジが俺の頭を抱えて、そう叫んでいるのが解る。

そんなに酷いのか？俺の傷は。

……そういや、楠原のヤツ気絶してんな。こんな時に死ぬほどどうでもいい事に気が付いちまったよ。

「……ば、バカ！頼る前に死んじゃったら……頼れないじゃない……！」

「ああ……そつか。そりや、そうだ……」

俺は最後の力を振り絞り、なんとかその場から起き上がる。

「待って下さい！今さっき救護科アンビュラスに連絡しました！もう少しここで待っていて下さい……！」

「バカ言つな……。こんな所に武偵なんかが来てみる。面倒な騒ぎになる……。まずは学院から……。出るぞ。肩貸せキンジ」

俺はキンジに肩を借りて、歩き出す。その足取りはあまりにもゆつくりだ。

「……。あなた達……。本当は何者なのよ……。!？」
縋るように、ナズナが問いかけてきた。

「――俺達は……。ただの武偵だ」

そして、ナズナだけを置いて、今にも雨が降ってきそうな空の下から校舎の中に入ろうとした。

「ナズナ……」

これが本当に、最後の力だったと思う。

「・・・七夕祭り、楽しみにしてるぞ」

ソレがナズナに聞こえているかどうかは解らなかったが、俺の意識はここで途切れた。

T O B E C O N T I N U E D . . .

決意と勇気 罪と罰（後書き）

まだまだ4章は続きます。

武偵の仕事

——懐かしい夢を見た。

。——俺がまだ小4だったころの、七夕の日……

俺と彩香は……どこだったかは忘れちゃったが、星空が綺麗に見える、すごく静かな山にキャンプに行った。

今、俺の近くには彩香しかない。本当は父さんや、この頃はまだ生きてた母さんも、彩香の両親と一緒に来ていた。だが、2人だけで話したい事があると言って彩香が俺を連れていったんだっとな。たしか。

「響哉つてさ、将来の夢って考えてる？」

地面にシートを敷き、寝転がって天の川を眺めながら、彩香が話しかけてきた。

「うーん……彩香はあるの？そういうの」

パツと答が浮かんでこなかったので、俺は彩香に訊き返した。

「私はね……」——武偵。お父さんたちみたいなの、正義の味方になりたいな」

「だったら僕も武偵になる！彩香と一緒に——！」

……懐かしいな。たしか、この後だったか。彩香とあの約束をするのは。

「じゃあ、2人一緒に武偵になったら、パートナーになって！約束だよ！」

「うん！約束するよ！僕は絶対武偵になって、彩香のパートナーになるよ——！」

俺と彩香は指切りして、約束した。結局、俺はその約束を守る事はできなかった。

——ここで、俺は夢から目が覚めた。

もう何度目になるのか、武偵病院の天井が冷たく俺を見下している気がした。

窓の外には夕焼け空が広がっている。何度見てもあの日の事を思い出してしまう、緋色の茜空。

……どうして7年前の約束が今になって夢に出たのだろうか。

その答は、すぐに見つかった。

病室の扉が勢いよく開けられた。一瞬ジュリアかと思ったが、病室への来訪者は俺にとって意外な人物だった。

「・・・ナズナ・・・？」

——そう。俺の病室に入ってきたのは、潜入捜査先の学院で知り合った、龍栄治ナズナ、その人だった。

「・・・よかった・・・よかったよあ・・・！！」
ペタンとその場に座り込み、ナズナは突然泣き始めた。

「お、おい！なに泣いてんだよ！？」

「だって・・・だって・・・うえええん！！」

「あー！とりあえずこっち来い！」
これ以上泣き喚かれると、「他校の女子を泣かせた」とかあらぬ疑いをかけられんな。

ナズナはコクンと頷いて、ゆっくり俺の寝ているベッドに近づいて隣に立ててあったパイプ椅子を開いて腰をかけた。

「……で？何か用か？」

「用かって……響哉が入院する事になったの、私のせいだし……」

ああ、その事か。

「お前は気にしないでいい。ただもう2度とあんな真似しないって約束してくればな」

「で、でも——」

「『でも』じゃない！」

俺はナズナの言葉を遮るように叫ぶと、ナズナはビクツと怯んだ。

「俺はな、丈夫なんだよ。撃たれた程度で死んだりするもんかよ。今だって元気だろうが。」

それに武偵の仕事は……ただ犯罪者を逮捕するだけじゃねえんだよ。

——— 今のお前みたいに泣いてるヤツを、1人でも多く減らす
のだって仕事なんだ」

「.....」

ナズナは、黙ってしまった。俺も、どういつワケか何も言葉を切り
出せなかった。

しばらくの沈黙が続いて、ナズナが口を開いた。

「響哉とキンジはさ……武偵なんだよね」

「ああ。そうだ。お前の親父に依頼されて、そっちに潜入捜査に行
つてたんだ」

俺が言うと、ナズナは哀しそうな顔になり……

「だったら……私に近づいたのは、捜査のためなの
——？」

「違う!!」

——俺は、即答で叫んでいた。

「捜査とか、そんな事関係無しに……俺は、お前と仲良くなって良かったと思ってる。嘘じゃない。俺の、心からの本心だ」

「……ありがとう、響哉……」

ナズナの頬を、一筋の涙が通った。

——だがその表情は、さっきとは違い……
……微笑^{わい}っていた。

今のナズナは、思わずドキッとしてしまうほどに……可愛ら

しかつた。

「……ってバカ。そんなこと考えてんじゃねえ。」

「私が初めて………が、響哉でよかった………」

不意に、ナズナが呟いた。

「なんだって？」

「なんでもないよ！」

「……？変なヤツだな。あ、俺の周りには変人しかいないか。」

「そういえば、七夕には退院できるの？」

「ああ。そこは大丈夫だ。7日に退院だから、ピッタリだな」

「なら、夜7時に上野駅のジャイアントパンダ前で待ち合わせね！
忘れちゃダメだよ！」

ナズナはそれだけ言って病室を飛び出てしまった。病院内で走るんじゃないよ。

はあゝ。まったく・・・・・・・・。

静かになった病室で1人になった俺は、ベッドに背中を着けて楽な姿勢になり、少し寝ようと思った。

あ、
そうか
。

なんでナズナの事になると、放っておけなくなるのか。

なんで7年前の七夕の夢を見たのか。

「似てるんだよな。微笑^{わら}い方が」

ナズナと、彩香は。

響哉がその事実気付いた頃、ナズナは武偵病院を出ていた。

彼女は、響哉に向けて拳銃を撃ってしまったことに、鬱になるほどに悔やんでいた。

だが、彼女は会いに行った。自分が本当に会いに行っても良いのか？自分にそんな資格があるのだろうか？様々なマイナスの思いが、彼女の行く足を阻んだ。

だが、彼女は会いに行った。そして、話をする事ができた。

「今のお前みたいに泣いてるヤツを、1人でも多く減らすのだって仕事なんだ」

「捜査とか、そんな事関係無しに……俺は、お前と仲良くなつて良かったと思つてる。嘘じゃない。俺の、心からの本心だ」

——その言葉が、彼女の負い目をまるで初めから無かったかのように消し去っていった。

そして、その直後から彼女の胸の鼓動は速くなる。息が詰まり、苦しくなる。

それでも、今の彼女にはそれがとても嬉しく、そしてなにより・・・
・ ・ 幸せだった。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.
.

武偵の仕事（後書き）

と言うわけで、大方の予想通りの展開となってしまいました。

『ナズナと彩香の微笑い方が似ている』というのは、顔が似ているとか髪型が同じとかそういうのではないということだけ書いておきます。

星への願い（前書き）

七夕祭りの話です。4巻の話を参考にしました。

星への願い

外が夕焼け色に染まり始めた頃、俺はだらだらと爪を切っていた。
龍達3人は緊急任務で校外に出ているので、クエスト・ブーストただっ広い部屋に1人
だった。

『次のニュースです』

夕方6時半過ぎ、俺は寮の自室で何気なくテレビを観ていた。

『……東京都港区に住んでいた桐嶋きりしま親子が北朝鮮に拉致されて

から、今年で10年となりました――」

ブツンッ！

俺はテレビを消して、新調された龍栄治学院の制服に身を包み、寮を出た。

今日は7月7日……世間一般で言う『七夕』の日だ。

この日、俺は学院の理事長である龍栄治蔵^{おとしく}の娘、龍栄治ナズナと俺の戦弟である遠山キンジと共に上野の緋川神社で行われる七夕祭りに行く。

先日、ジュリアと一緒に行こうと誘われたのだがナズナとの約束が先だったので断った。ジュリアとナズナは面識が無いから、いろいろと疲れるかもしれんからな。

しかし、キンジは今日来ないらしい。理子に捕まったとメールで知らせてきた。

ご愁傷様だな、キンジよ。

で、俺は1人でモノレールに乗って上野駅まで行って、時間よりずっと早く着いちゃったんだが、高さが3m以上もあるジャイアントパンダのぬいぐるみの前には浴衣姿のナズナの姿が見えた。

「・・・よう。待ったか？」

ナズナを待たせたことにちよつと罪悪感を抱きながら、俺は声をかけた。

「ううん。私も今来たの。そんな事より早く行こ！もうお祭り始まつてるよ！」

言うが否や、ナズナは俺の手を取って早足で歩き始めた。

緋川神社には、すでに大勢の人が押し寄せていた。

「うわぁ・・・すげえ数だ。はぐれないようにこのまま手握ってるよ」

この人混みの中ではぐれちまったら、探し出すのが面倒だからな。

「ふえ！！？う、うん！分かった！」

・・・？なんか変な声が聞こえたんだが、気のせいだろうか。

「大丈夫かお前。顔赤いぞ？」

「だ、大丈夫大丈夫！あは、あははは」

・・・やっぱ、俺の周りには変人しかいないな。

俺とナズナは短冊を買って、願い事を書き笹に吊るした。

まあこうなったらやる事は1つだよな。

「なんて書いたんだよ」

「ナイシヨ。響哉には教えてあげないよーだ」

ナズナはアツカンベーした……ってガキかよ。

「響哉はなんて書いたの？」

「このタイミングで教えてもらえと思うか？」

「冗談だよ！さ、早く早く！もうそこまでお神輿来てるよ！」

「お、おう……」

なんか、完全に主導権を握られているな。

「ほれ、なんか奢ってやるよ」

こういう祭りごとの時は、男が女に奢ってやるのが常識だと、よくラノベであるからな。

「ホント！？じゃあわたあめ買って！」

「ほいほい」

俺はビニールでできた屋台ののれんをくぐった。

「すみません。わたあめ1つ下さい」

「あいよ。わたあめ1つね」

おじさんは手慣れた手つきでわたあめを作り、俺に手渡してくれた。にしても、めちやくちゃ作るの速いな。なにかコツでもあるのだろうか。

「兄ちゃんの彼女、かわいいからオマケだ」

そう言つてニヤツと白い歯を見せながらおじさんは笑った。

「か、かの！？」

「彼女じゃないですよ。ただの友達です。・・・ほら、持てよ」
なぜかナズナの機嫌が悪そうだったのだが、俺はわたあめを渡してやった。

——ドオンッ！

「お、花火か」

「……むう。来い響哉！ここは人が多すぎる！」
そう言つてナズナは俺の手を引っ張つて本殿の方へつかつかと早足で歩いて行つた。

「——あ、響哉」

聞き覚えのある声が聞こえたので振り返ると……

「氷川さん！？」

「俺もいるぞ阿呆が」

この神社と名前が似ている……というか読みは同じの氷川さんと、

平士がいた。

「響哉、この人達は？」

「武偵高でよくツルんでる平士と氷川さんだ」

「ふーん。あ、私は龍栄治ナズナです」
そう言つてナズナはぺこつとお辞儀した。

「銭形平士だ。よろしく」

「氷川秋奈よ。こつちもよろしくね。ところで、響哉とはどういう関係なの？」

まったく、女子は何でもかんでもすぐにそっち系の話にしたがるな。

「え、ええつと……………」

「友達だよ。向こうのな」

俺が援護射撃してやると、ナズナはまた機嫌を損ねたようにムスツとしてしまった。なんで？

「ははあん…………ジュリアと同じか。それじゃあ私たちはもう行くね」

「まだ早くないか？」

「いいのよ。ほら、平士！行こ！」

「ん？おお」

氷川さんは平士を引っ張って人混みの中に紛れて行った。

「・・・なんだっただ？」

「きつと響哉には一生分かんないよ。ほら、本殿の裏なら人少ないよ！」

結局、俺はナズナに言われるがままに連れて行かれ、本殿の裏の縁側みたいになつてゐる所に座って花火を見上げていた。

7年前に見た天の川は見えなかったけど、その代わりとしても十分なほどの色取り取りの花火だったと思う。

いつか、彩香と一緒にこの花火を見られる日が来ると良いな。

そんな事を考えながら、俺は残りの七夕祭りをナズナと楽しんだ。

その時は、みんなも誘って……ワイワイ騒ぎながら楽しめたらいいな。

彩香と……ジュリアと、ナズナと……志波、平土に氷川さん、キンジ達も誘おうか。

楽しい祭りになるかは解らんが、とりあえず、騒がしい祭りにはなるだろうな。

『彩香が、帰ってきますすねっ!』

—
。

TO BE CONTINUED . . .

星への願い（後書き）

氷川と緋川で被ってるw

どんだけ考え無しに作ってんだって思います。

まだもうちょっと4章は続きます。明日か明後日には完結して、番外編やって5章へ突入します！（予定）

最初で最後の言葉（前書き）

タイトルは最後まで読めばすぐにわかります。

最初で最後の言葉

7月22日……このなんとも言えない中途半端な時期に、私立龍栄治学院は夏休みに突入する。

そして、俺とキンジも今日その日を持って潜入捜査を終了し、理事長にレポートを提出する。

どうせ隠蔽するのは解りきっているので、俺はレポートにナズナが楠原に向けて銃を向けたなどとは書かない。楠原の件は別だが。

我ながら調子が良すぎると思うが、楠原にはこれくらいしないと効果が無いだろう。どうせこっちも金の力で隠されちまうんだろっけどな。

だが、ナズナに撃たれそうになったのが相当堪えたらしく、最近彼は学校を休んでいる。アイツは復学してもこの調子だろうな、きつ

と。

で、午前中に終業式を終えて昼からは完全にフリーになった生徒達が各々自宅に帰ったり寄り道したりする中、俺とキンジは理事長室に足を運んだ。

「龍栄治理事長、こちらが今回の捜査の結果です」

俺はテーブルの上に何枚か重ねられたレポート用紙を理事長に差し出した。

「おお！ありがとうございます！」

理事長はソレを手に取り、ペラペラと速いペースでレポートを見た。

「……たしかに、受け取りました。このレポートは今後の学院の運用に利用させていただきます」

「では、我々はこれで失礼します」

俺とキンジは立ち上がって、帰ろうとした。

「少しお待ちになって下さい。娘があなた方に少々お話があるそうなんです」

「ナズナが？」

無視して帰ってもいいのだが、俺とキンジは一度目を合わせてまた来客用のソファに腰掛けた。

「入ってきなさい」

理事長が呼び掛けると、ドアの向こうからナズナが入ってきた。

そして、俺達の向かい側にいる理事長の横に座った。

「響哉……私ね、決めたの」

「何をだよ」

「私、武偵になる！」

「バカ言うな」

俺はこれ以上ないほど冷静にそう返した。

「ちよつと！なんでそんな事言うのよ!？」

「お前なア、武偵なんてなろうと思つてすぐになれるモンじゃねえんだよ。それに今は2年の夏休み……参加できるのは2学期になってからだ。そんな中途半端な時期に入学なんて、出来るワケが無い」

「ちつちつち。それができるんだなー」

ナズナは舌を鳴らしながら右手の人差し指を振りながら言った。

正直……ウゼエ。

「娘は昔、アメリカに住んでいたことがありまして……拳銃などの扱いは心得ておるのですよ」

いや理事長！あんた賛成派なのかよ!!

俺はてつきり「娘が変な事言い始めるから止めてくれ」的な事だと思つてたぞ。

「……いいんですか？武偵なんていつ死んじまってもおかしくない職業なんですよ。大事な娘さんが突然ぼっくり逝っちゃうかもしれないんですよ？」

「大丈夫よ、インケスタ探偵科だし」

「武偵ナメてんのか！そこでも死んじまったりする事もあんだよ！俺は強く言い聞かせたのだが……」

「自分の身くらい、自分で守れる！助けられてばかりじゃイヤなの！！」

さらに強く、ナズナに言い返された。

ああ、コンチクショウが……………。

第六感で解っちまう。コイツは、絶対にこれだけは譲らない。

——— だっ たら俺は、ナズナが決めた人生を応援してや
った方が 良いのかもしれない。

「……勝手にしろ！行くぞ、キンジ！」

「あ、待って下さい！」

俺とキンジは理事長室を出て行った。

——響哉とキンジが去った直後の理事長室。

「よかったのか？これで」

巖岱はナズナの方を向かずに、受け取ったレポートをトントンと机

に叩いて整えた。

「……うん。この学校は、私にはちよつと……大人し過ぎるよ」

そう言うナズナの表情は、どこか寂しげな雰囲気を出していた。

「そう、か……」

私の知人は武偵だったが、殉職したよ。できればお前をそんな危ない場所に行かせたくないんだが……お前がそうしたいのなら、仕方がないな」

「——うん！ありがとう、お父さん」

「だが、後悔だけはするな。後悔する暇があるのなら、その間に打開策を考えるんだ。私が親として言えるのは、これくらいだ」

龍栄治夫妻は……家族を守るという事を、稼ぐという手段でしかできなかった。

ゆえに、愛する娘との時間をほとんど作ってあげられなかったのだ。

娘に英才教育を受けさせ、アメリカに長期留学させて……
他人が見たら羨ましがするような生活をさせてきた。

だが、それが愛情ではなくただの自己満足だと気付いた時には遅すぎた。

自分達の過ちを悟った夫婦は、後悔するしかなかった。その後悔する時間を、もつと有効に使えていたらとさらに後悔し続け、特に親子で話す事も無く過ぎて行く時間。そして仕事に追われる毎日が、少しずつ彼の心をすり減らしていった。

そんな中、急に娘の顔が明るくなった。

自らが雇った武偵2人が、学院に潜入捜査に来た頃からだ。

娘は、毎日楽しそうに彼らの話をする。その姿を見て、娘の居場所はこのことは違つどこかなのだと思わざるを得なかった。

——そして、愛娘の東京武偵高転入を受け入れた。

「・・・・・・・・本当は、親と呼ばれる資格など、私には無いのだがな・・・・・・・・」

巖岱は去り際に思わず、ボソツと声に出した。

「そんな事ないよ」

不意に、ナズナが口を開いたので巖岱は思わず振り返ってしまった。

「私、解ってるよ。お父さんとお母さんがどんなに私の事を心配してくれてたのか」

——ただ、どういう風に伝えればいいのか解らな
かっただけで。

ナズナはソレを言葉にはしなかったが、巖岱には確かに、その言葉が伝わっていた。

「……家の事は、心配するな。お前は自分のやりたいように頑張きなさい」

巖岱は、理事長室を去った。

これが、巖岱 ナズナ彼がその娘に、父として言えた最初で最後の言葉だった。

— GO FOR THE NEXT! —

最初で最後の言葉（後書き）

以上で、4章は完結となります。

ナズナが強引に武偵高に転入という進行になりましたが、彼女自身が過去に留学していたアメリカでは自衛目的で一般校でも拳銃の扱いやナイフ術、体術なども教えているという事でお願ひします。

では、次回は番外編となります。どれになるかはまだ未定ですが。

番外編 ― 銭形平士の憂鬱 ― (前書き)

まずは響哉が潜入捜査で校外に出ていた時の平士達の話です。

番外編 ― 銭形平士の憂鬱 ― ?

6月の中旬、銭形平士はいつものように寮から学校までの道のりをバスで通っていた。

だが、何か違和感があった。そしてその正体はすぐに見つかる事となる。

彼が一目を置く同級生、朱葉響哉がバスに乗っていなかった。

―― 彼……銭形平士は、銭形平次の7代目に当たる子孫である。そして何より、ICPOの捜査官であった伯父によ

り、その技術を圧倒的なものになっている。

推理術、射撃術、犯人逮捕術、変装術など……彼の2つ名である『天武』の通り、まさに天才武偵と言われる人物である。

そんな彼が注目せざるを得ない男である朱葉響哉とは、一体どれほどまでに凄まじいのだろうか？

彼を知る人に尋ねてみると、その答はいつも決まっている。

『解らない』

そう。解らないのだ。解らないからこそ、注目しなければ恐ろしい。見張っていないければ、観察していないければ落ち着けない。

そんな存在だと、口を揃えて言う。

そんな響哉相手に、真っ向から挑んでいったのは彼と、響哉の戦兄あにである遠山金一武偵と、金一の実弟にして響哉の戦弟おとうとでもある遠山キンジしかない。

裏の人間も含めるとまだまだいるのだが、一般的に知られているのはこの3人だけである。

いや、挑んでいつてまともに闘えるのは、キンジを除いた2人だけだ。

あの蘭豹でさえ、響哉とは闘いたくないと言っている。

『アイツは、動く前に動いとるでなア』

響哉は相手が動くより速く動きを予測し、それに合わせて対応してくる。ゆえに、誰も正面からは立ち向かおうとしないのだ。

そして、さらにこう言う者もいる。

『響哉には、人を惹く魅力がある』と。

あながち間違っではないだろう、と初めて聞いた時に平土は思った。

自分も、その魅力に惹かれた1人なのかもしれない。

……いっちちムカつくヤツであるとも思っているが。

6月末。

ある日の昼休み、俺は秋奈と2人で食堂に来ていた。

「……おい、ジュリア。そんなところで何をやっている？」

俺の視界に飛び込んできたのは、いつも響哉の近くにいる女子生徒・
・・・時任ジュリアがテーブルにうつ伏せになっているのを、彼女の
の親友である狙撃科の志波^{スナイプ}斗子が慰めている光景だった。

「……平土か。悪いけど今は放っておいて。もう世界なんて消えてしまえばいいのよ」

さらっとんでもない事を漏らしたジュリアに若干引きながらも、
志波に状況の説明を要求するあたり俺は立派な武偵^{末期}だと思う。

「ええと……響哉君が戦弟の遠山君と一緒に、しばらくの間
どこかの私立^{スリップ}高校に潜入捜査に行ってるんだけど……」

「それに誘われなかった事をいつまでも拗ねている、と」

グサッ！

何かがジュリアに突き刺さったような音がした。

「響哉君はレポート書かなきゃいけないみたいで、帰ってきてからもずっと寮に閉じこもってるから、ジュリアはここ数日響哉君に会ってないんですよ」

「つまり、潜入捜査先で響哉がその女子とつき合わないか心配なワケだ」

グサッ！

秋奈がそう言うと、ジュリアはえぐえぐと泣き始めた。

「どうせ私なんか・・・ひつく」

「あゝ！ごめんジュリア！悪気は無かったんだって！」

秋奈は泣きじゃぐるジュリアの髪を撫でながらあやす。傍から見たら面白いことこの上ないだろう。

「大丈夫だよ。響哉君がジュリアを裏切るなんて絶対ない・・・」
と思うよ

「そこは言い切るところではないのか？」

「あ、復活した」

・・・気持ちの浮き沈みが激しいヤツだな。

俺達は4人で、同じテーブルに座って昼飯を食べることにした。

「平土君、秋奈さん、この依頼手伝ってくれない？響哉君がいないから、前衛フロントがいなくて困ってるんです」
そう言つて志波が俺と秋奈に見せたのは、武器密輸組織の現場を強襲する依頼だった。

「……わかった。秋奈はどうする？」

「私も受ける！」

秋奈がどこから取り出したペンで、俺のも一緒にサインし始めた。

「秋奈、私の名前も書いておいて」

「えっ!？」

秋奈が驚くのも無理は無い。参加の意志を示したのがジュリアなのだから。

「お前の超能力ステルスは戦闘系ではなかったんじゃないのか？」

「戦妹アミカの星伽から鬼道術を享受してもらったの。私も前線で闘える

わ

「……そつち系の話は俺には解らんが、要するに闘えるんだっただ文句は無い。」

「志波、そいつをマスターズ教務科に提出しておいてくれ。俺は強襲科アサルトに行く」

俺は席を立ち、食堂を出て強襲科の体育館に向かった。

「この心を開いた孔のようなものを、少しでも埋めるために。」

「とつつあゝん!!」

今一番会いたくなかったヤツに会ってしまった……。

「……何してんだ、理子。お前は探偵科インケスタだろう。ここは強襲科だ」

今俺と理子がいるのは強襲科の黒塗りされた体育館の前だ。本来なら危険区域指定区のこんな場所に探偵科の生徒が来る事は無い。

「いやあゝ。とつつあんもそろそろりこりんに会いたくなってきたんじゃないかと思ひまして」

「安心しろ。そんな事を考えた事は過去に1度も無い」

「それちよつと酷過ぎるよ!!?」

ガンという音が聞こえた気がしたが、気のせいだと信じたい。

「あれ?きょーやん先輩は?」

さっきまでのやり取りが無かったかのように、理子が話題を変えて

きた。

「アイツは今、^{スリッ}潜入捜査で校外に出ている。7月末まで出てこない
そうだ」

「えー。せっかく遊ぼうと思ったのにィ」

理子はプクーっとフグのように顔を膨らませ、小石を蹴った。その
小石が俺の脛に当たった。

「……わざとか？」

「うん」

俺は理子の頭を鷲掴みにし、ギリギリという音がするほどに握りつ
ぶす。

「あいたたたた！！ギブっ！ギブですとっつぁん！！！」

本格的に涙目になってきたところで、俺は理子を解放して体育館の
中に入った。

「……………はあー。退屈だ」

いつもなら、あの阿呆と一緒^{續戦}に騒ぎながら訓練するんだがな……………。

——今日は、静かすぎてどうにもつまんねエ。

TO BE CONTINUED……………

番外編 ― 銭形平士の憂鬱 ― (後書き)

もうちょっとだけ続きます。多分?か?まで。

他の話は、その後という事でよろしくお願いします。――<

番外編 ― 銭形平士の憂鬱 ―

今日は7月7日だ。俗に言う七夕ってヤツだな。

織姫と彦星が、1年に1度会う事を神様だっただかに許されたいらしいこの特別な日に、上野の緋川神社でそのお祭りが催されるそうだ。

それに秋奈から誘われた俺は、特に断る理由も無かったので一緒に行くことにした。

元々、武偵は警備のためにこういう祭りごとに自主的に参加するベ
キだと教務科からマスターズ言われている。

故に、羽目を外しきることはしない。あくまで警備目的で俺は祭りに参加する。

——だが、秋奈のこの浮かれようはなんだ？

キヤイキヤイはしゃぎながらりんご飴やらチョコバナナやらを食べ歩いたり、短冊を買って願い事を書いたりなど……本
当に楽しそうに遊んでる。

「秋奈、あまり浮かれすぎるな。俺達は武偵なんだ」

「まあまあ。せっかくのお祭りなんだし、楽しむ時は思いっきり楽しんでゃわないと！」

秋奈は俺の言う事など全く耳を貸さずにありとあらゆる屋台を覗いている。

……ま、楽しければそれはそれで良いんだが。

武偵は、ストレスが溜まる仕事だ。特に秋奈は女子だから、普通の女子高生がやってるような事に興味もあるだろう。それを『武偵だから』という理由で押し留めているのだ。たまにはこういう風に遊んだ方が良いのだろう。

俺はそんな事ないから、よく分からんがな。

「・・・今日ただぞ、思い切り遊ぶのは。ほら、俺が何か奢つてやる」

「えっ！平士が！？」

「他に誰が金出すんだよ」

通行人の一般人に銃ちらつかせて払わすのか？それだとただの性質タチの悪い恐喝だ。

「えーっと、じゃあコレがいい！」

そう言つて秋奈が指差したのは、銀のペンダントだった。

「こんなのでいいのか？一個500円だぞ」

「いいの！でも、2つ買つてね」

「・・・？」

俺は意味が分からないままに、安物そうなプレートが取り付けられたペンダントを2つ買つて秋奈に渡した。

「はい。こっちが平士ね」

秋奈は俺が渡したペンダントの1つを俺に押し付けた。

「……俺はこんなものは――」

俺が『着けないぞ』と言おうとした時、秋奈が「あっ！」と声を出した。

「響哉ー！」

秋奈の視線の先には、知らない浴衣姿の女子と一緒にいる響哉阿呆の姿があった。

「氷川さん！？」

俺の事は無視か。

「俺もいるぞ阿呆が」

無視された事がなんとなく腹が立ち、俺は苛立った声でそう言った。

「響哉、この人達は？」

浴衣の女子が響哉阿呆に訊いた。

「武偵高でよくツルンでる平土と氷川さんだ」

「ふーん。あ、私は龍栄治ナズナです」

そう言つてナズナと名のつた女子は軽くお辞儀した。

「銭形平士だ。よろしく」

「氷川秋奈よ。こつちもよろしくね。ところで、響哉とはどういう関係なの？」

秋奈がナズナに駆け寄り、ワザと俺達に聞こえるような音量で耳打ちした。これを耳打ちと呼んでいいのかは甚だ疑問ではあるが。

「え、ええつと……」

ナズナは手をもじもじしながら、ちらつと響哉の方を見た。

「友達だよ。向こうのな」

響哉が秋奈に言つた直後、ナズナの顔が不機嫌そのものになりムスツとしてしまった。

「……本当、女って生物はよく分かんねエ。

「……じゃあ私たちはもう行くね」

「まだ早くないか？」

響哉の言う通り、俺たちは来てまだ1時間半も経ってないだろう。

「いいのよ。ほら、平士！行こ！」

「ん？おお」

秋奈は俺の手を取って人混みの中を掻き進み、鳥居の下まで歩いた。

「いいのかよ。まだ花火も続いてるぞ」

「……別にいいよ。平士の顔も明るくなったし」

「どういう事だ、そりゃ」

年中お通夜みたいな仏頂面提げてるって言いたいのか？

「——だって、最近の平士ずーっと機嫌悪そうだったんだもん。響哉が行っちゃった後くらいから」

「……俺が？」

自覚は………無かったと言えば嘘になる。

確かに俺は、あの阿呆が潜入捜査^{スリッパ}で武偵高を出ている間、退屈で仕方^{スリッパ}が無かった。

極力顔に出さないように心がけてたんだが………秋奈は、

そんな俺の事を元気づけるためにこの祭りに誘ってくれて、大袈裟に楽しんでいるように見せていたのだろう。

「……すまん、変な心配かけて」

「いいのよ。私も平士の楽しそうな顔が久しぶりに見れて嬉しかったもん。私的にはもう満足かな」

「楽しんでたか？俺」

これに関しては自覚が無いぞ。

「楽しそうだったよ。響哉と会ったとき。相変わらず仏頂面だったけどね」

「……？」

そうだったか？つか、仏頂面だったのに楽しそうってどういう事だ？矛盾してるぞ。

ドオンッ——…………

最後の花火が打ち上がり、辺りがさつきよりも静かになる。

「花火、終っちゃったね……」

「そうだな。この後はどうするんだ？」

「臨海公園行こうよ！今なら向こうは人いないだろうし」
こっちに流れ込んでくるからな。その点は俺も納得がいった。

「ああ。ならさっさと行こうぜ。……あと、お前いつまで
手握ってるつもりだ？」

「ふえ？」

俺がそう言つと、秋奈は右手の先を見つめ、そして俺の顔に目を向け、また手の先を見つめる。

「キヤアアアア……！」

秋奈は顔を真っ赤にして、バックステップで後退して鳥居の裏に隠れた。

周りからは「なんだなんだ？」という声と共に視線が集まってくる。

「何変な声出してんだよ！誤解されちまうだろうが……！」

「だ、だって……！ずっと、平土と手……握るなんて……
……ごによごによ」

秋奈はしゃがみこんでぶつぶつ何か呟いている。

これ以上は好奇の視線を集めるだけなので、俺は秋奈の手首を掴んで強引にその場から脱出した。

俺達の足は、そのまま臨海公園に向かっていった。

「もう！びつくりするじゃない！」
秋奈はそう言って、フンッとそっぽを向いた。

「……………一体なにに驚いたんだ？」

「平士には教えてあげないよーだ！」

なんだよそれ……………。

——やっぱ、女っていうのは難しいな………。

TO BE CONTINUED……

7月の中旬、俺は秋奈、ジュリア、志波の3人と共に学園島で唯一のファミレス『ロキシ』のボックス席に足を運んでいた。

「では、3日後に武器の中国から密輸が行われると密告のあった裏港を監視する際の位置取りを確認しよう」
ジュリアが不機嫌そうな声でそう言つと、俺を含む他の3人は若干引きながら頷いた。

「ねえジュリア。響哉君が他の女の子と2人で七夕祭りに行つてたからって、もうそろそろ許してあげても良いんじゃない？」
志波が意を決してジュリアに言った。

「今、私は響哉の事など聞きたくも無いの」

一体何にそこまで怒ってるんだ、この生徒会長様は。

「平士のせいだよ。ジュリアに本当のこと言うから」

「俺は何も悪い事はしていない」

ただ単に「響哉は何してるんだろっ」とぼーとしていたジュリアに、「七夕祭りの時に向こうの女子と遊んでたぞ」と教えてやっただけだ。親切心でな。

「はあ……もういいよ。平士に期待した私が馬鹿だった」

「馬鹿にしているのか？」

「うん」

これがあの響哉あほうだったら、間違いなく殴り合いだな。

「……で？私はボートで海から行くとして、3人はどこに隠れるの？」

秋奈がアイスコーヒーストローで飲みながら訊いた。

「私は狙撃手スナイパーだから、倉庫の屋根の上ですね」

志波は倉庫が建ち並ぶ区域を指した。

「私は秋奈と共に海上から強襲するよ。その方が運転に専念しやすいだろうしね」

「そうしてくれると助かるわ。じゃあ、ヨロシクね」
ジュリアと秋奈は海からか……。俺はどうするかな。

「俺はこつち側の倉庫の上に隠れる。それでいいか？」
俺は志波が潜む所から離れた場所を指した。

「じゃあ、この三方向から強襲しましょう。亘子の狙撃を合図に平士が飛び出て、最後に私たちが海から向かう。何か異論はある？」

なんで依頼持^{クエスト}ってきた志波ではなく、お前が仕切っているのかがもの凄く気になるのだが、また何か文句を言われると面倒なので俺は何も言わない。

そして、結局他に意見は出ずに解散となった。

3日後の夜。

俺と志波は密輸が行われる裏港の側にある倉庫の屋根の上に隠れていた。

密告通り、武装ヤクザと思われる連中が大型トレーラーを引連れてやって来た。

俺は無線のインカムで、秋奈とジュリアに標的ターゲットが来た事を伝える。

そしてしばらくすると、それなりの大きさの貨物船が港に碇泊した。持ち出すときによく検問に引っかからなかったな。

そして、その貨物船からいくつもの段ボールが出てきた。アレが中国から密輸したという銃火器だろう。

大方、ヤクザの方々が勢力拡大に用意した物だろう。傍迷惑な話だ。

——
ダァンッ！

志波の隠れている方から銃声が響く。

「・・・・・・・・さて、始めるか」

俺は屋根の上から飛び降りた。

「武偵だ！銃刀法、関税法、外国為替及び外国貿易法違反の現行犯で全員逮捕する！！」

中国から拳銃を密輸しようとしていたヤクザ達は、突然の狙撃と銃声により、一瞬であるが硬直していた。

その直後、屋根の上からの来訪者によりその硬直は恐怖へと変わる。

「武偵だ！銃刀法、関税法、外国為替及び外国貿易法違反の現行犯で全員逮捕する！！」

その男……銭形平士の登場に、彼らはまず闘うことではなくこの場から逃げることを考えてしまった。

——それがいかに愚かな事だったかを、すぐに後悔するとも知らずに。

平士は男たちの無防備な瞬間を見逃さなかった。

すぐさま懐からニッケル手錠を取り出し、1人の手首に掛ける。

「うわぁッ!!?」

手錠を掛けられた男は、平士の剛腕によって引っ張られ、彼の前に倒れ込む。

ドガッ!

平士は足下に跪いた男の後頭部を先祖代々伝わる十手で殴り、気絶させる。

そして、右手に伯父から受け継いだガバメントを持ち、左手には黒色のアルミ合金製手錠が握られている。

バババァンッ!!

3発の銃声が轟き、ヤクザの男3人の手から拳銃が弾かれる。

そしてその3人の右側の男に向けて、手錠を投げる。

その手錠には縄ではなく、T N Kワイヤーを編んだ物が付いている。

このT N Kワイヤーは、彼が昨年のクリスマスの時に貰ったプレゼントだ。それを装備科アムドの生徒に依頼し、わざわざ組紐で編んでもらったのだ。

日本の伝統工芸であり耐久性も高いこの編み方は、今の平土のような使い方をする時に大変使い勝手が良い。

そして、その手錠は男の横を通り、平土が腕を引いて調整する事で大きく左に曲がる。

そのまま手錠は左の男の後ろから手首に掛かり、平土がワイヤーを引く事で男3人は前のめりに倒れ込む。

——
バアンツ！

今度は屋根の上から銃声が響いた。その直後、平土の背後にいた男の手から拳銃が落とされた。

タアンッ！

さっきまでの銃声よりは軽い音が響く。男の手から弾かれた拳銃が、暴発したのだ。

「ぎゃあああ！！？」

別の男が悲鳴を上げて脚を押さえた。暴発した銃弾が脚に当たったのだ。

その瞬間、武装ヤクザ達に戸惑いの波紋が一瞬にして広がった。

平士はその瞬間、上空に向けて発砲し、ボールのようなものを足下に落とした。

——カッ——！！

眩い閃光が辺りを覆った。

………今、平土が使ったのは閃光手榴弾だ。スタングレネード強烈な閃光で相手の視力を奪い、硬直させる武器である。特殊部隊がよく使う無殺傷兵器の1つである。

ヤクザの男たちはその多くが平土の方を向いていた。ゆえに、多くの男たちがその視力を一時的にだが失った。

平土は駆け出し、1人の顎に溜め無しの完璧なフックを放つ。それを受けた男は脳震盪を起こし気絶した。

すぐにその男が戦闘不能と判断した平土は次の標的に飛びかかり、左腕を使っでまるでラリアットするようにして男を仰向けに倒した。

志波の援護射撃もあり、すでに武装ヤクザの戦力の大半は戦闘不能に陥っていた。

だが残った男たちは貨物船に乗って逃げだそうとする。そうになってしまつては平土と志波にはどうする事も出来ない。

——この2人には。

ブオオオオオオオ!!

モーター音を響かせ、海上から一隻の中型モーターボートが突っ込んでくる。

ガガガガガガガガガガガガ!!!!

圧倒的なまでの乱射音が、夜の港に響き渡る。

被弾した貨物船には無数の弾痕が付き、穴が開き始めた。

ジュリアが今使っている機関銃は、『ブローニングM2重機関銃』である。

第二次世界大戦以来、現在でも各国の軍隊で使用されている著名な重機関銃で、製作されて70年以上経つが、費用を考慮しての、基本構造・性能トータル面でこの機関銃を凌駕するものは、現在においても現れていない歴史に残る名機関銃だ。

M2重機関銃の12・7x99mm NATO弾によって貨物船の燃料タンクが撃ち抜かれ、貨物船は停止した。

『武偵だ！全員投降するならばこれ以上の攻撃はしない！』

秋奈がボートに取り付けられた拡声器を使い、残党に投降を促すと、代表者と思われる男が両手を挙げながら出てきた。これ以上の抵抗は、無意味だと悟ったのだ。

「ミッションコンプリート
任務、完了」

平土はガバメントをホルスターに収め、平土は無線で任務の終了を3人に告げた。

「……………やっぱ、アイツ響哉がいねえとつまねえな——

「——」

平土は誰に言つでもなく、そう静かに呟いた。

— GO FOR THE NEXT!

番外編 ― 銭形平士の憂鬱 ― (後書き)

これにて番外編?、『銭形平士の憂鬱』は終了です。

読んでいただき、誠にありがとうございました! m ((m

——— いつの時代にも、『お受験』というのは存在するものだ。

小学校や中学校・・・法的にまだ『義務教育』と呼ばれる教育をする学校機関の中でも、レベルが格段に違ったり他の学校とは違う特別な校風があったりする小中学校に入学する時は、まだ幼い子供であつても勉学に勤しみ、狭き門を通り抜けねばならない。

最近はごく普通の私立中学でも、倍率が4倍を超えてしまう現象が見られるが、それとはまた違う中学を、俺達は受験する。

「うおお・・・。緊張してきたあ・・・。」

目の前にそびえる壁に彫られた『東京武偵高校付属中学』という文字の前に、緊張癖のある俺は顔を悪くしていた。

「もう響哉ったら……。そこまで緊張する事ないでしょ？」

俺の隣にいる女の子……秋山彩香が、俺の顔を苦笑いしながら覗き込んできた。

「緊張するのに理由なんて無いんだっ！」

「はいはい。わかりましたよーっ」と

彩香は若干俺のことを茶化しながら、武偵中高区内へと入って行く。

「待ってくれ！俺を置いて行くな！」

俺は慌てて彩香の背中を追いかけた。

俺と彩香が受験する東京武偵高校付属中学、通称『東京武偵中』は『武偵』という国家資格を得るための専門機関と中学校を混ぜ合わせた『一応』ではあるが教育機関だ。

なぜ一応が付くのかというと……教師から習うことの中に『普通じゃない』科目がある。

その科目とは、『学科』にもよるが俺達が今から受ける『強襲科』だと『戦闘』。

武偵の中で最も平和で安全な学科と呼ばれることの多い『探偵科』は『捜査』。

他にも『装備科』なら『銃火器の構造』なんかを教わり、『救護科』なら『医療術』を習う。

高校に上がるとそこからさらに専門的な学科に枝分かれするのだが、中学校ではこの程度だ。

もちろん、中学校なので文科省の定める学習指導要領は守る。それに加えて専門の技術を学ぶのだ。

試験官の代表らしい先生による強襲科の試験の説明を終え、遂に俺と彩香の人生初の受験が幕を上げた。

受験の内容は『10人程度の受験生を一度に闘わせ、その戦闘内容で評価する』というものだった。言ってみればバトルロワイヤルだな。

俺と彩香は、自分たちの番を控室で待っていた。緊張で手が汗ばんで気持ち悪い。

『受験番号31から40の受験生。試験を開始する』
端的な放送が流れる。

俺の受験番号は73番で彩香の番号は38番だ。つまり、今から彩香は行かなければならない。

「彩香の番だな」

「うん。ちょっと不安かな」

そう言う彩香の顔色は、いつもより少し暗かった。

「大丈夫だ！彩香なら絶対合格するって！」

俺が励ましてやると、彩香は微笑^{わら}った。

「ありがとう、響哉」

彩香はそれだけ言って、控室から出て行った。

すでに試験が終った受験生は、別の部屋で全ての受験が終るまで待たされる。

よって、ここから俺は1人だった。

そして1時間半・・・・・・・・遂に俺の番が来た。

俺は人が少なくなった控室を出て、会場へと歩を進める。

かなり広い舞台の上には、格闘技の試合のように審判と見られる先生が何人もいる。

舞台の上にいる受験生は俺を除いて9人か……。

この受験、おそらく先生が見ているのは受験生の實力だけではなく、初めに誰を狙うかという合理的判断能力も見ていると考えていいだろう。そうでなければ、多少時間はかかるが1人ずつ教師たちと闘わせていけば良いだけなのだから。

——そしてこの受験……共闘もありだ。

例えば、誰かが1対1で闘っているとする。そこに第3者が介入して、弱い方を助ければ強い方を斃せるかもしれないし、普通に強い方に味方してポイントを稼ぐことも許されるということだ。

まあ初めはとりあえず、あそこにいる見るからに弱そうなヤツ……
・71番を斃しに行くか。

俺はわりと長身な方だからな。初めに狙われる事は無いだろう。

——それよりも気を付けるべきは……『アイツ』だ。

『アイツ』は……79番は俺よりも身長タツバがあつて、なんとなく雰囲気^{タツバ}が他のヤツと違う。この試験の本質を、多分俺よりもよく解っている。できるだけ距離を取って、なるべく近くで闘わないようにしよう。

俺は『ソイツ』から離れた場所で、尚且つ目を付けた弱そうなヤツの近くに移動した。

「では……試験を始めてください——！」

審判の先生がそう告げると同時に、俺は目を付けたヤツに向かって拳を振り下ろそうとする——！

——だが、俺は殴れなかった。以外過ぎる相手の
介入によって。

さっき俺が危険視して距離を取った、79番がまるでライダーキックをするように俺と71番の間に割って入った。アイツも71番を狙ってたのか？

だが俺の予想とは裏腹に、79番は俺に向かって攻撃を仕掛けてくる。

（コイツの狙いは、俺——！！？）

ドンツと、俺は壁に背中をぶつける。

気付いたとしてももう手遅れだ。俺は逃げようと後退していく内に、その逃げ場……背後も失ってしまった。

殴り返しても簡単に避けられ、カウンターを浴びせられる。この圧倒的な屈辱に、俺はただ嵐が過ぎ去るのを待つだけの人のように、耐え忍ぶしかないのだろうか？

認めない。

俺はこの時、自分が弱者だと思い知らされた。だが、このままではただの弱者だ。

俺は、そんな弱いヤツになりたくはなかった。

「うつるアアアアア！！！！！」

父さんから教わった掌低を79番の顔面に加減無く本気でぶつける。

父さんからは「できれば使うな。使ったとしても加減をしろ」と言い付けられていたが、今の俺はそんな事を完全に忘れていた。

これで、終わった・・・・・・。

そう思うほどに、俺の掌底は完璧に決まっていた。

バキッ！

俺の顔面に、さっきのお返しと言わんばかりの拳が飛んできた。

俺の意識は、そこで途切れた。

そして数日後、俺の家に武偵中の入試結果が届いた。

結果は――不合格。

1人も戦闘不能にさせられなかったのが大きいらしい。あの最後の抵抗も、外したと思われるようだ。現実には完璧だったのだが、79番が人外なほどに打たれ強くて場馴れしていただけなのだが。

一緒に受験した彩香の方は、合格だった。別に羨ましいとは思わなかった。

「運が悪かったただだよ！響哉はホントは強いんだし！」

「でもなあ……負けちまったし。次受験する時は高校の時か」

「え！？一般からでも編入はできるよ！！？」

「いや。そんな中途半端な事は、したくない。それに……」

「それに？」

俺は彩香の方を見て、笑顔を作った。

「次会う時は、お前がビックリするくらい強くなってみせる！それで、俺を負かしたヤツに絶対リベンジする！！」

「じゃあ、私も響哉に負けないくらい強くなってるよ！それで、高校生になったら……」

「コンビを組む、だろ？約束な」

俺は、彩香が言い切る前にそう言った。

「うん！約束ね！！」

それから3年後、2人は強くなり、そして
て再会した。

。…………だがこの時の約束は、未だに叶ってはいない――

――GO FOR THE NEXT!

番外編 — EXAMINATION 0 — (後書き)

以上で番外編は全て終了です。次回からは第5章が始まります！

あと、響哉は格闘技が強いです。おそらく平士のはるか上を行っています。

ですが父親からは『禁じ手』とされており、高校入学以来1回も使ってません。

あとは剣術もできますが、これ以上はこれからの本編で明らかになっていきます。

かなり作者独自の解釈が目立つと思いますが、これからもどうか宜しくお願いいたしますm()m

修学旅行の前って興奮して眠れないよね（前書き）

今回から第5章です！

修学旅行の前って興奮して眠れないよね

9月1日。

それは、防災の日・・・・・・・・かの関東大震災が起こった日である。

そしてなにより、日本では3学期制の学校が2学期を迎える日だ。

健全な学生たるこの俺は、別に行かなくてもいいのに始業式に参加する。

ちなみに言っておこう。俺は留年しなかった！キンジの持ってきたクエスト
依頼・・・・私立龍栄治学院への潜入捜査スリッパのお陰で、見事単位が揃ったというワケだ。

校長の緑松が武偵の国際協力に関して『今年から緊張感のある環境で育った海外の武偵を留学生として積極的に迎え入れる』とか何とか言っていた。去年と言っている事が真逆な気がするが、気のせいではないだろう。

で、俺は始業式の後に毎年あるマーケティング・バンドを見てさっさと寮に帰ろうとした。

今日は水投げの日ということでよくケン力を売られたりするのだ。

拳銃や刀剣などの武器を使えないので、俺はこの日はできるだけ人に会いたくない。

「おーい、響哉ー!!」

会いたくないと思ったとたんにコレだ。

「あー、そっぴゃお前も武偵高こうちに来たんだったな……」

「なによその顔は！せっかく久しぶりに会えたんじゃない、喜ばさいよ！」

喜ぶ？嘆くの間違いだろ。

——今俺と会話している女子……龍栄治ナズナは、高2の2学期という例をみないほどの中途半端な時期に武偵高に編入しようとした変人だ。

本当に来れるとは思わなかったが、武偵高の防弾制服を着ているのでちゃんと編入してきたようだ。

「編入試験って思ったより簡単だったわ。探偵科インケスタだったからかしら？」

どの学科でも、編入試験はそれなりにレベル高いハズなんだが……

「ちなみに訊いておこう。ランクはなんだ？」

大方、DかEだろう。下手したら普通は付かないFランクを付けられたかもしれん。

「Aランクだって」

ほらみる。Aランクだ。ポツと出の素人が、いきなりAランクなん

て取れるなんて……………

「……………」——「ってAランクだアアア!!?」

「そだよ」

ナズナは「はい」と言って1枚の紙を見せた。

そこには確かに、『龍栄治ナズナ 探偵科 - Aランク』と書いてあった。

——「神様って、なんだろうな。」

親の権力を行使しようにも、武偵高は武偵庁直属の国家機関だ。それに賄賂なんて手段を使ったら、公安0課の人間に存在を消される事になる。

ゆえに武偵は日本で一番信頼される法務執行機関なのである。

「私が天才なのはアンタがよく知ってるでしょ？」

「知るかよそんな事……」

自分を天才とか、よく言えるな……。それだけ自信があるって事なんだろうけど。

「まあ、アレだ。ランクなんて飾りみたいなモンだ。慢心はよくないぞ」

「別に慢心なんてしてませんよーだ」

ナズナとそんなカンジで話している時だった。

「ここにいたのね、響哉。搜したわ……………この女は誰？」

ジュリアがなんか知らんがもの凄い怖いオーラを醸し出しながら俺に詰め寄って来た。

「あ、ああ。コイツは依頼先の高校で知り合ったナズナだ」

「なぜ一般人が武偵高にいるの？」

「へ、編入してきたんだよ。探偵科に」

「ふうん」

……………なんだろう。このお先真っ暗みたいな雰囲気は。

ナズナもどいうワケかジュリアと睨みあってるし。バチバチって。

「時任ジュリアよ。夜路死苦ね、ナズナさん」

ジュリアはそう言って手を差し伸べた。

おかしいな。普通に見れば女子同士が初対面で仲良くなる瞬間のようなのに、『よろしく』が別の意味に聞こえてくるせいか恐いものになってやがる。

「龍栄治ナズナよ。こっちこそ夜路死苦ね、ジュリアさん」

こ、恐すぎる……………。

俺はこの場から逃げ出したい衝動に駆られたが、脚が竦んで動けなかった。

その翌週のこと。

—— 修学旅行というものを、すっかり忘れていた。

武偵高では、2年次に2回の修学旅行がある。その1回目……
『キャンパス・ワン 修学旅行？』は、名目上では普通の修学旅行なのだが、実際は生徒間でのチーム編成の最終調整をするための行事だ。

チーム編成というのは、武偵高の生徒は2年になると9月末までに2〜8人のチームを組んで学校側に登録しなければならない。
そしてなにより、その登録したチームは国際武偵連盟にも登録される、重要なものだ。

よって、チームを作る時は誰とチームを組むかいろいろ考えねばな

らない。

——
のだが。

「チームはこの6人で良いよね」
氷川さんがそう言うと、ジュリア、ナズナ、志波の3人は揃って首を縦に振った。

「ちょっと待て」

「なんでこの阿呆と同じチームなんだ」

「誰が阿呆だカス野郎」

「五月蠅いぞ阿呆」

「まあまあ2人とも落ち着いて……」
「……2人だけだが、反論の意志を示す者がいた。仲は悪いがな。志波が仲裁に入って来なかったらリアルファイト突入だ。」

「なかなかいいチームじゃない。秋奈が運転し、あなた達が前衛で暴れまわり、中子が援護する。不本意だけど私と一緒にこの女が残りを探討する。完璧な人選ね」

「不本意ってなによ!!?」

ジュリアの言葉にナズナが文句を垂れた。

「あなたはついこの間武偵になったばかりなのに、情報収集も信頼ができ、銃の扱いも手慣れていると聞いたわ。民間からの依頼もこの短い間にこなしているそうだし。不本意というのはなぜあなたがそこまで武偵活動ができるのかという事よ」

「ふふん！私は天才だから、その程度の事なんてすぐできるようになったわ。人脈もあるし」

「自分の事を天才と呼ぶなんて……なんて残念な女」

「んなつ！誰が残念女よ！！」

「…………お前ら、もうちょっと仲良くできんのか」
はあ、と俺は溜息をつく事しかできない。

「俺達のケンカも、傍から見ればこんなモノなのか？」
ふと思ったことを呟いて現実逃避しようとしてみた。

「やめろ阿呆。考えるだけで頭が痛くなる……………」

平土は俯いて頭を抑えている。俺も頭痛がしてきそうだよ。

——かくして、俺達6人はこのメンバーで修学旅行？を一緒に行く事となった。

……大丈夫だろうか、ジュリアとナズナは……。

「アンタ響哉と平土も問題よ」

氷川さんの言う通りだな……。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.

修学旅行の前って興奮して眠れないよね（後書き）

Q・いつから響哉たちは隣人部を作ったんですか？

A・今回からです。

冗談はさておき、未だに響哉たちのチームの名前をどうするか考えてないんですね。最終的にはどう落ち着くことやら。

そうだ 京都に行こう（前書き）

何気に番外編の話を絡めてあります。

そうだ 京都に行こう

9月の半ば・・・俺、ジュリア、ナズナ、志波、氷川さん、平士の6人は新幹線に乗って大阪駅まで来ていた。

どうでもいい話なのだが、新幹線の座席は座席が3人分あるA↘C列と2人分あるD・E列がある。

なぜかという、2人の時はD・E列に座れて、3人の時はA↘C列に座れる。4人の時はD・E列の座席の1つを反転させればいいし、5人の時はA↘E列を向かい合わせればいい。6人の時はA↘C列の1つを反転させればOK・・・つまり、大人数で行っても誰も余らないのだ。

座席は俺がB列でA列がジュリア。C列がナズナだ。その前の座席には志波、平士、氷川さんという配置だ。

・・・行きは俺を挟んでの毒舌合戦だった。帰りもこ
うなるのだったら俺はストレスで死んじゃうかもしれない。

大阪駅について、まずは京都に移動する。

「ていうか、なんで修学旅行のしおりが紙1枚なのよ・・・」
ナズナの言う通り、しおりは本当に本に挟むしおりになっている。

書いてあるのは『場所 京阪神（現地集合 現地解散） 1日
目京都にて社寺見学（最低3ヶ所見学し、後ほどレポート提出の
事） 2日目・3日目 自由行動（大阪か神戸の市街地を見学
しておくこと）』だけだ。

「引率の先生もいないぞ」

「PTAとかになんて説明するんだよ……」
わりと本気で気になるぞ。

「さあな。それよりさっさと見回っちまおうぜ」

「そだね。じゃあまずは金閣でいつか」

俺達は頷いて、ナズナの言う通り鹿苑寺に向かった。

知っている人も多いかと思うが、金閣寺という寺は存在しない。正
確には『金閣』だ。

と言うのも、金閣という建物自体が鹿苑寺と言う寺の中にあるのだ。

もちろん武偵高の教師共はそんな豆知識を知っているはずもなく、
鹿苑寺と金閣を分けて書いても問題無い。本当にアホな連中だ。

で、セットで銀閣寺も見に行つてレポートに書く寺は全て行ったこと
になる。本当に楽だな。（ニヤリ）

あ、ちなみに銀閣は慈照寺観音殿の通称だ。慈照寺は「銀閣寺」と
も呼ばれることで有名だ。

午前中でやらなきゃいけない事を全て終わらせた俺達一行は、湯豆
腐を食べに行った。

冬に食べる物としても有名だが、別に残暑厳しい9月の半ばに食べてはいけないという法律はない。それに一度食べておきたかったしな。

初めは氷川さんも暑い時に熱い鍋料理を食べることに躊躇っていたが、いざ食べてみるとなると一番食べていたのは彼女である。やはり使っている水が違うのだろう。美味すぎる。普通に作ってもこうはならないだろう。

湯豆腐を堪能した俺達は、その後も京都を観光していた。

かつて、弁慶が腰をかけたとかいう石やら京都タワーやらと観光名所を一通り見回った後、京都の旅館で泊まることにした。

つか、男子女子で部屋を分けると平土と同部屋になるんだが・・・。

だがまあ女子と同じ部屋になるのは常識的にどうかということだ、ここはこれで落ち着くしかない。平土もそこは理解しているようだ。

その日の夜。

時刻は午前1時。そろそろ本格的に眠くなってくる時間だ。

「おい、響哉。起きてるか？」

電気を消して布団の中にいる俺に、平士が声をかけてきた。

「ああ。枕が変わると寝られなくなるタイプなんだな。最近低血圧気味なのによオ……………」

朝起きたら死ぬぞ。このままだと。

「ツハ！三銃使トライガンがその程度で負けんなよ」

「知ってんのか、ソレ。校内のヤツに言われたのは、お前が1人目だ」

「結構みんな知ってるぞ。2つ名」

そうなのか。それは知らなかった。

「ところで、お前に1つ訊きたい事があるんだが」

「珍しいな。こういう時はアレか？好きな女子がいるかとか訊くのか？」

「阿呆が。そんな事、訊いてどうする」

……………ああ、そうだった。今話してるのは冗談の通じない子
こと銭形平士だった。

「お前、なんで徒手格闘をしないんだ？ナイフも使った事ないだろ
う」

「・・・・・・・・・・」

——平土の間に、俺は答えることを躊躇った。

「・・・・別に。苦手だからやらないだけだ」

「嘘をつくな。4年前のとき、お前の掌低は俺の鼻の骨にヒビを入れた。そんな技を持つてるヤツがなんで格闘戦をしないんだと訊いている」

腐ってもSランク武偵だな、平土は。そこまで見抜かれているなん

て、思いもしなかった。

「——危ないからだ。本気で使つと、内臓を壊すかもしれないからな。武偵法9条は破りたくない」

「だったら加減して打てばいいだけだろう」

平土はさも当たり前のようにそう言った。

「……………そうだな。加減できれば、いいのにな」

「お前……………」

だから俺は、父さんから徒手格闘で教わった武術、剣術を使うことを禁じられている。

——人を、殺めないために。

「俺はもう寝るぞ」

「おう」

こうして京都の夜は更けていった……。

T O B E C O N T I N U E D

そうだ 京都に行こう（後書き）

響哉は『格闘術、剣術を使わないために銃だけを使う』というのは、じつは初めからありました。伏線として活かせなかっただけで。流派までは決めてませんでした。・・・。

今はもう決まっています。

あと、響哉は歴史上の偉人の子孫ではありません。彩香、アヤメは知っている人も多い人の子孫ですが。

アヤメは苗字が出てきてないですし、彩香も苗字は関係ないですからね。まだ誰にも解らないと思います。

彩香は旧日本軍のある名将の子孫で、アヤメは幕末の攘夷志士の子孫です。

とはいっても、彩香のご先祖様は教科書にも載っているかどうか微妙で、アヤメに至っては名前すら知られてない事が多いですからね。作中で判明しても、『誰コイツ』となるのが関の山かと・・・。

人殺しとかで解る人もいるかもしれませんがどね。

修学旅行は行く前が一番楽しい

京都の旅館での目覚めは、案の定最悪だったと言っておこう。

頭はガンガンするし意識も朦朧とする。やはり朝はだめだ。もう少し寝たい衝動に駆られる。

だが集団行動を旨とする武偵にとって、こんな一個人の我侘など無に等しい。俺はそこら辺を理解しているので何も文句は言わない。

俺たちは朝の9時に旅館を出て、最寄りの駅から神戸に向かう。足取りが重いのは俺だけだった。

で、神戸で俺たちは三ノ宮へ行ったり神戸牛を堪能したり、神戸武偵高を覗きに行ったり100万ドルの夜景を見に行ったりと中々普通の観光をして2日目を終えた。

そして3日目。俺たちは大阪に足を運んだ。

大阪に着いたら俺はまず西の秋葉原と比喻される日本橋に行きたいのだが、今俺たちはそことは逆の道頓堀にいる。カーネルサンダースが捨てられた川として有名な道頓堀川があり、グリコのアレな看板が非常によく目立つ。

「なあナズナ、アレって大丈夫なのか？著作権とか」

俺は目の前のボウリング場の看板を指さしてナズナに訊いた。

その先には、『ドラゴンボウル』と書かれた看板が何の躊躇も無く設置されている。

「大丈夫じゃない？『ボール』じゃなくて『ボウル』だし」

その後、観光地だからと半ば強引に日本橋に他のみんなを連れて行き、アニメイトやら螺子の専門店やらイヤホンの専門店やらをハシゴし、ここだけで3万はスツた俺は銀行で金を下ろしに行った。

俺がATMの前で並んでいると、覆面を被った3人の男たちが銀行に入ってきた。

「全員動くなア!!」

バアンツと男の手のハンドガンが火を噴いた。その銃声に銀行員の女性は悲鳴を上げ、その混乱は他の銀行員、さらには偶然居合わせていた利用者にまで瞬く間に広がって行った。

「ここにある金を全てコレに詰めるんだ!早くしろッ!」

男の1人がそう言うと、銀行員の女性はコクコクと青ざめた表情でポストンバッグを持って奥へと向かった。

やれやれ……ここは東京じゃないが、俺も一応武偵だしな。

3人の陣形は、1人が銀行員が不審な動きをしないかと監視の目を見張らせている。もう1人は中央で民間人がケータイか何かで外部と連絡を取り合わないようになっている。最後の1人は入口から銀行

内全体を見渡すと同時に防火用シャッターを下ろし、武偵やSATによる強襲を防ぐ役か。事前に打ち合わせしてきたな、コイツら。

だがまあここに武偵がすでにいるというのは計算外だったようだ。

俺は今、ATMの機械の陰に隠れている。まだアイツらには見つかっていない。

平士達は外に待たせてるしな……俺1人でなんとかするか。

できるだけ拳銃は使わない方がいいが、俺はB・Tの安全装置セーフティを外し、念のためにFLGも装着する。

——そして、まず入口の所にいる男に向かって駆け出した。

Bannon!

B・Tを使って男の短機関銃を弾く。男は突然のことに判断が遅れ、大きな隙が生じた。

俺はソイツの腕を掴み、床に押し倒して手錠を掛ける。そして束縛した後に、中央にいる男に予備弾倉スベアマガジンを投擲した。

ソレは男の眉間に直撃し、一瞬だが目を瞑った。その瞬間に俺はグーパンでその男を殴りつける。さらに左でアップパーカットも決め、中央の男は気絶した。弱すぎるだろ……。

「ひ、ヒイイイイ!!」

3人目の男は狼狽しながら、ハンドガンの銃口を震えさせながら俺に向ける。

ダアンッ!!

3人目の男は目を瞑りながら俺に向かって発砲した。

その銃弾は、奇跡的に真っ直ぐな軌道で俺の方に飛んでくる。

——
キンッ！

左手の甲をかざすようにし、俺は久しぶりに『銃弾^{リペル}弾き』でガードした。銃弾は俺の頭上を通り抜け、天井にめり込んだ。

覆面の上からでもわかるほどに口を大きく開けたその？は、追撃する事を忘れているらしく何も仕掛けてこない。

なので俺は、スタスタとその？の前まで歩み寄ってガツンツとB・Tのグリップで頭を殴った。

？は氣絶してしまい、これにて一見落着となった。

大阪府警に銀行強盗未遂の現行犯で3人を引き渡し、俺は約30分ぶりのジュリア達との再会を果たした。

「1人で強盗3人を逮捕するだなんて、お手柄じゃない」

「未遂だけだな。どっちにしても素人の集まりだったから、すぐに捕まっただと思っぜ」

動きがギクシャクしてたしな。

「そうなのか。まあ何にしても響哉にケガが無くてよかった」

「あんな三下にケガ負わされてちゃ、これから先やって行けねえよ」俺はジュリアにそう返した。

ま、これから先もこんな普通の相手や、ジエームズみたいな化物と闘っていかねばならんのだが、今はそんな事考えずに観光しますか。

と言う事で俺たちは大阪武偵高や通天閣に行き、USJにも行った。お好み焼きとたこ焼きは本場だけあって美味かったな。

とまあそんなカンジで修学旅行も終りを迎え、最終の新幹線で俺たちは東京に帰った。

.....俺はまたジュリアとナズナの板挟みの状態で。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.

修学旅行は行く前が一番楽しい（後書き）

あっさりしすぎる修学旅行？でした。だって藍帮のココと闘うわけでもないですし、そこそ星伽神社のシーン抜いたらこんなモンじゃないですか？・・・こんなモンじゃないですね。ハイ。

特にオチも無くヤマも無く・・・ただ単に終わってしまうのもなんだという事で、ISの4巻で登場したカンジの強盗さんに登場してもらいました。セリフは「全員動くなア！！」「ここにある金を全てコレに詰めるんだ！早くしろッ！」「ひ、ヒイヒイヒイ！！」の3種類のみ。書いてて哀れ過ぎると思いました。

ちなみにドラゴンボウルですが、マジであります。日本橋の螺子専門店やイヤホン専門店も実在します。

もし日本橋や道頓堀に行くことがあれば、搜してみてもいいかもしれません。ご存知の方も大勢いらっしゃるかと思いますが。

チーム登録

キャンパス・ワン
修学旅行？から東京に帰ってきてしばらく経ったある日。俺たちメンバー6人は例によって例のごとく、学食のテーブルを2つ囲んでいつものように昼飯を食べていた。

「ところで、チーム編成は誰が申請をしに行ったんだ？^{マスターズ}教務科からの電話がいつまで経ってもこないんだが」

俺が何気なくそう言うと、5人は「えっ!？」とシンクロ率200パーセントで俺の顔を振り返った。

・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？なにかまずい事言った？

「・・・・・・・・・・響哉がリーダーでしょ？なら、あなたが申請に行く

のが筋と言つものよ」

ジュリアが箸で俺を指しながら若干呆れたようにそう言った。

「なんで俺がリーダーを任せねばならん。平士でいいだろう」

「俺では役不足だ」

「……は！？今何て言つた！！？」

普段の平士なら絶対そんな事言わねえぞ。熱でもあるのだろうか。

いや。コイツは風邪なんか一生こじらせそうにない。病原体すら尻尾を巻いて逃げ出すような男だ。

「ここにいる連中は、ほとんどがお前と関わってここにいる。俺も、そうだ」

「だからって……」

「あーもう！男がウジウジしない！これ、『ジャスト直前申請』の申請用紙だから、ちゃんと責任持つて教務科に提出して来てね！」

俺は氷川さんにむりやり申請用紙を押し付けられた。

「響哉君。それはここにいるみんなが、響哉君だから着いていっても大丈夫だっと思ってる証拠なんですよ」

「志波……」

「中子の言う通りよ。あなたが先頭に立って道を切り拓いてくれるから、私たちは安心してその背中を追っていけるの」

「まあしかし、この阿呆には務まらんかもしれんというのも事実だ……平士、このタイミングでそんな事言うか普通。」

「——だが、1人ではどうしても辛くなった時は、俺が加勢してやる」

「その時は、私たちみんなで行くけどね」

「平士……氷川さん……」

——なにこの最終回が近い時によく見る少年漫画的な展開は。やめてくれ、涙が出てくる。

「あーあ。言いたい事全部言われちゃった。……でも、私もみんなと同じ気持ちだよ。今度は、私の番だから」

「――グハア――！」

K・Oというアナウンスと共に、ゴングの音が聞こえたような気がした。

ナズナの言葉によってトドメを刺された俺は、なし崩し的にはあるがリーダーに選ばれたのだた。

「ん？チーム名が書いてないぞ」

「そういえば、まだ決めてなかったな」

お前ら……リーダー押し付けるんだったらチーム名くらい考えておけよ。

「じゃあ、アレね。辞書とかでそれっぽい単語を英訳して使っちゃいましょ」

ナズナのトンデモ発言に、俺は頭をテーブルに打った。

「…………それはまずいんじゃないか？」

「別にいいんじゃない？それに早く決めないといけないし」

「ん？ジュリア、どういう事だ？」

「知らないの？直前申請は明日の昼12時までなのよ」

……………まじで？

「なんでそんなギリギリまで黙ってたんだよ！？」

「私たちはもう響哉が作ってるんだとばかり思ってたわ」

他力本願どころか完全に俺に依存してやがるコイツら！！

「ねえ、これなんてチームとしてピッタリじゃない？意味は一致団結とか、連合って意味よ」

ナズナがケータイの辞書アプリで調べた単語をジュリア達に見せた。

「……………あなたにはなかなかのものを見つけてきたわね」

「私はいと思いますよ。力を合わせるって意味もありますし」

「平士もいいよね?」

「俺はなんだっていい」

「お、おい！俺にも見せてくれよ！」

俺はナズナのケータイを覗き見ると、そこに映されていたのは1つの単語だった。

『union 意味：（）（形式）（結合，連合，（州・国家などの）併合，連合，一致団結，融合 in union力を合わせて』

「……………うにおん?」

スパアンツ！

俺はナズナに頭を叩かれた。

「バツカ！うにおんじゃなくて、ユニオンよ！」

ユニオン・・・ああ、遊戯王でモンスターに装備できるモンスターか。ドラグニティは強いけど金がかかるんだよなあ。DT回しまくらないやらんし。

「つーことは、『チームユニオン』か」

「そついうことね」

俺は申請用紙のチーム名欄にさらさらと文字を書いた。

完成だ。後は明日、これを持って防弾制服・黒を着こみ、探偵科の屋上に行けばそれでよしだ。

そして翌日の昼前。今日は秋分の日で学校自体は休みになっているのだが、俺たちはチーム登録の直前申請のためにわざわざ登校してきていた。

俺達6人は防弾制服・黒をちゃんと着こなし、直前申請の会場である探偵科棟屋上に来ているのだが……。

「数が多すぎるだろ……」

確認できるだけで軽く30人は超えてる。面倒臭がり屋の武偵高生徒たちだから、仕方ないと言えば仕方ないのだろうが。

間に合うのかどうかとても不安だったのだが、俺たちはなんとか時間内に申請用紙を提出し、床のビニールテープに囲まれた所定位置に並ぶ。

——この時、俺たち被写体は真っ直ぐにカメラの方を向いたりしない。

真っ直ぐ向くとその写真のせいでその人物に変装されたり、いろいろと良くない事が起こる可能性があるためにそういう習わしが武偵高にはある。

「9月23日11時37分、チーム・ユニオン^{UNION}——承認・登録!」

・・・・・・その後、蘭豹によつて撮られた写真を見てみると、手ブレがひどくて全員の顔がぼやけてしまっていた。まあ、そっちの方が好都合なのだが。

その日、「なんとも締まらない話だ」と俺たちは笑いながら帰って行った。

チーム・ユニオン^{UNION}

- ・ 朱葉響哉（強襲科）
- ・ 銭形平士（強襲科）
- ・ 時任ジュリア（超能力捜査研究科）
- ・ 龍栄治薺（探偵科）
- ・ 志波茸子（狙撃科）
- ・ 氷川秋奈（車両科）

チーム・ユニオン

登録完了！

TO BE CONTINUED.....

チーム登録（後書き）

散々悩んだ挙句このチーム名です。やはりちゃんと考えてから作るべきだったですね。

今回は何もありませんでしたが、次回からは原作でもあった事件や、あの敵との対決も……あればいいですね。

武偵高の学校行事は終盤に集中している気がする

チーム登録が終ってから何日か経った。

今日は3限目にLHRがあり、その時間を使って俺たち2年生がする『リストランテスケ変装喫茶』の衣装決めに体育館で行う。

この変装喫茶というのは言ってしまうえばコスプレ喫茶なのだが、そのコスプレが本当に文字通り命懸けなのだ。

外部の人間に生徒の変装技術がどれほど高いかという事を見せつけねばならないので、真面目にやらないと教員総出でフルボッコにされる。

なので、できるだけ楽な役を引いたらよし。規則とかが非常に多い役を引いたらドンマイというか悲惨な結果になる。

俺は変装術は大したことないので、できるだけ楽な仕事を引かないと今年こそ留年してしまうかもしれないし、なにより文化祭の次の

日から土の中で永久に眠らなければならないかもしれないのだ。

「各チームごとに集まって待機してろ……。げほっごほ！」

綴、むせるくらいならその煙草吸うな。

「っさと並べやオラァー!!」

ドウツと天井に向けてM500による威嚇射撃(?)をしたのは当たり前だが蘭豹だ。また天井に穴が開いたんじゃないか？

で、チーム・ユニオンの面子で箱が来るのを待つこと10分。やつと俺たちのチームに箱が来た。

その箱を持ってきたのは、意外な人物だった。

「響哉さん、箱持ってきました。こっちが男子の箱です」

「こっちが女子の箱ですっ!!」

「げえっ」

平士が変な声を上げたのはともかく、箱を持ってきたのはキンジと理子だった。

「平士、先に引け。俺は後でいい」

「……ああ」

いつもなら反抗してくる平士だが、理子の前ではどういつワケかいつも頭を押さえて溜息ばかりついている。最近より一層頭痛が酷くなっているらしく、理子に会うだけでこのザマだ。

「……『医者』、か」

まあまあの引きだな。アレも結構面倒そうだけど。

「引き直しは1回だけ許されてますけど、どうしますか？」

「チェンジだ。もう1回引く」

そう言っつて平士はキンジが制止しようとお構いなしに箱の中に手を突っ込む。

そして取り出したのは……『刑事』。

「……ハマリ役じゃん」

お前の伯父さん、元刑事だったんだろ。良い引きしてるな。歴代遊戯王の主人公並だ。

「じゃあ、次は響哉さんの番ですよ」

「ん？ああ」

俺はキンジが持っている箱に手を入れ、ガサゴソと漁ってから1枚を選び、取り出した。

引いたのは……『女子制服（武偵高）』……つまり、女装だった。

「——っぶ！」

平士が吹いた。殺してやろうかコイツは……！！！！

「きよ、響哉さん……どうしますか？」

「チェンジに決まってるだろ！」

俺は女子制服（武偵高）と書かれたクジを力任せに箱の中に入れ直し、適当に指にかかったクジを引いた。

ある意味、最初にコレを引いておいてラッキーだったかもしれない。さすがに2度も同じクジを引くことはないだろうからな。女装以外で楽なら何でもいい。

引いたクジは・・・・・・・・・・・・・・・・『女子制服（武偵高）』

「いや待ておかしいだろコレEEEE!!」

俺は女子制服（武偵高）と書かれたクジを力いっぱい体育館の床に

叩きつけた。

「つか、こんなものにか作爲的なモノを感じるぞ！なんで数あるクジの中から俺がさつき引いて戻したクジを再度引かねばならんのだ！！？」

「響哉、うるさい！少しは静かにできないの！！？」
すでにクジを引き終えた女子組が俺の周りを取り囲んで逃げ道を塞ぎやがった。何してくれてんだコイツら……………！」

「響哉は何引いたの……………つぶぶ！」
ナズナが口元を隠して俺に背を向けた。

「ん？これね……………つちよ！女装つて……………！！！」

「い、言つなアアア！！！」

氷川さんが言った直後、俺の周囲にいた7人は腹を抱えて笑いだした。キンジよ。後で後悔するぞ。

本当に拳銃自殺しようかと考えていたが、まだ俺は何もやっていないのでそれはできないと気付いたので、俺はこの『女装』というあまりにも高く険しい山に挑むことを決意する。

なぜならば、俺は女装の天才と知り合いだからな。なんとかなるだろうと希望を持てた。

——あくまでごく僅かな希望だけだな。

それよりも、俺は女装という行為をしてしまう事自体に抵抗と嫌悪感を感じる。だがコレやらないと単位が……ねえ。

なので、俺が女装を受け入れたのは仕方なくだということだけ言っておこう。

はあ・・・・・・憂鬱だ・・・。

TO BE CONTINUED・・・

武偵高の学校行事は終盤に集中している気がする（後書き）

『ドロー、モンスターカード！』的なカンジで女装のクジを見事に2回引いてしまった可哀想な主人公w

ですが強力なバックアップにより・・・目覚めたりはしません。それだけは解っています。それ以外は・・・どうなることやら。

気がついたらお気に入り登録数が22件に増えてました！ありがとうございます！m（――）m

可哀想な男の娘

金一さんに電話して、「上手に女装するにはどうすればいいですか？」ときちんと理由も教えて訊いてみたら、電話の向こうで笑われたがちゃんと教えてくれた。

なんでも、香水を首にふって声を変えればいいらしい。それはアンタの顔が美形だったからそれだけで良かったんだろうけど、残念ながら俺はそうじゃないんだ。

一応、声の変え方だけは教わったけどな。それと香水くらいしか教わってない。

想像より役に立たんかったぞ。俺の最後の希望が。

このままだと・・・まずいな。本格的に命が危なくなってくる。そして俺の貞操というか評価も。

どうしたものかと考えていても、現状は一向に好転しないのでとりあえず行動という事で事務室に行って予備の防弾制服（女子用）を借りてくる。

ケブラー繊維で作られた防弾布などは、一度でも銃弾が命中すると命中した場所の周囲が激しく劣化するため、近い場所に二発以上命中すると繊維が裂けて貫通するので一度でも被弾したボディーアーマーは交換する必要がある。

武偵高の生徒は拳銃で撃たれることが多いので、防弾制服を用意できない場合も考慮して事務室で何着かの予備を保管してある。

事務の先生に「っぷ・・・」と笑われながら、俺は女子制服を受け取り、寮の自室に戻って試着してみる。他のヤツらはC研で販売しているやたら高い衣装を買ったり、自分で布切れから作ったりしているの、その点を考慮するとこの女装は楽でいい。ただ当日が地獄というだけで。

とりあえず、脚を隠さねえとな。男と解ってしまうのは脚、腕、首、そして顔だ。

腕は長袖の制服で隠れるからいいとして、首はどうするかな。脚はニーソ履いておけばなんとか隠せそうだし、顔は薄化粧とかつらで誤魔化すか。

・・・・今気付いたけど、女装って安上がりだな。別に俺
は金欠じゃないから金かかってても問題無いんだが。

まあ、いいや。さっさとニーソ買いに行こ・・・

・・・・今、俺はとんでもない事を思い出した。

・
この変装喫茶の女装は・・・完全に女子生徒になりきらな
ければならない。つまり、どついうことか。それは・・・

・・・・——下着まで女物じゃなければならぬ——

。

「もういつそ殺してくれお願いだから！！！」

——昔、秦だったかの時代に死刑よりも重い宮刑という処罰があったらしい。

今の俺は、その宮刑を言いわたされた被告人のような気分だった・・・。

次の日の放課後。

「——もう、どうなってもいいや——」

抑揚のない平坦な声で、俺は遠くを見ながら死んだ魚のような目をしてそう言った。

フツーに女性物の下着とパットとニーソを買ってきてもらって（ジュリアに頼んだ）、俺はかつらを捜して東京中を走り回った。いくつか候補として購入したのだが、やはり服装とかも本番と同様にした方がいいと思い、俺は龍達が『仕上げ会』に行っていていない間に黒いニーソックスと超ミニスカートを履き、シャツの上から女子用の防弾制服を着て買ってきたかつらを頭に乗せる。

その中で、赤っぱい茶髪のショートカットのかつらが妙に俺の顔の

輪郭と合っていたのでソレに決めた。

苗字と被ってるだつて？かつらだけに上手い事言つな。偶然だ、偶然。
然。

——翌日、まだジュリアと志波と氷川さんが衣装の準備をできていないという事で、チームリーダである俺は『仕上げ会』に行く羽目となった。

この仕上げ会とは、×切日に衣装が完成していないと武偵高名物、蘭豹の撰関↓綴の拷問↓我那覇の人体実験の『体罰フルコース』をさせられるので、若くして命を落としたくない生徒が×切をなんとか間に合わせようと夜の9時から教室で徹夜して仕上げをするのだ。

で、俺がついた頃にはもう4チームくらいが床にシートを敷いて作業をしていた。その中にはもちろん我が『チーム・ユニオン』の俺以外の5人が集まって作業していた。

「リーダーが一番来るのが遅いとは、どういう事だ？」

「お前の格好がどういう事だ」
来て早々俺に文句を垂れたジュリアの格好は………巫女だった。

「し、仕方ないだろう！2度目に引いたクジだったのだ！」
ジュリアはそっぽを向いてそう弁解した。

「つかよオ、ハーフのジュリアが巫女さんって言うのは、俺的にはアリだが学校側としてはどうなんだ？いないだろ、そんな巫女さんなんて。俺の偏見かもしれんけど。」

で、周りを見てみればベージュのトレンチコートにそれと同色のソフト帽を被った、刑事っぽい雰囲気を出している平土や、メイド服を着たナズナが座っている。巫女に刑事にメイドが揃うってどんな絵面だよ。

その隣では、志波がC Aの制服にリアリティを出すためにせつせとシワを付けていたり、氷川さんがどこから持ってきたのかギターに弦を張っていた。

「氷川さんは一体何に変装するんですか？」
「すげー気になるんだけど。ギターって何？」

「ああ、響哉か。私は『バンドメンバー』の『ギター担当』だ」

「あ、そう……」

「………。ただで限定的なんだよ。しかも衣装とかメンバ
ーなら同じっつーか私服だろ。」

俺は氷川さんがギターケースを担いでいる姿を想像してみた。

ポニーテールにギターって……まんまガルデモのひさ子さ
んじゃねえか……。

「はあ。お前たちはいいよな。声とか口調とか変えなくていいんだから」

「そんなことはありません。現にこうしてメイドらしい口調で話さな

ければなりませんゆえ」

うおッ、びっくりした。ナズナがこんな話し方するなんて、変な物でも拾い食いしたのかと思った。

「私もなにかしなければいかんのだが……巫女の喋り方というのはいったいどういうモノなのだ？」

「俺に訊くなよ。なんでもいいだろそんなの」
口の悪い巫女さんも、いない事はないだろうし。

「ところで、お前はいつになったら着替えるのだ？」
ジュリアがニヤアと悪役的な笑みを含んだ顔でそう言った。

「……い、いいだろ。俺の自由だ」

「マスタース教務科からは教室に入ったら最低1時間はその役になりきらなければならぬと言われている事を忘れたか？」

うっ。まさかコイツら、俺の女装姿を見て笑うために仕上げ会に誘ったな。

よく考えてみれば、ジュリアのは見たまんま完成してるし、氷川さんのギターも弦を張るだけだからすぐに出来る。志波のシワ付けもすぐにできるレベルの簡単なものだ。

「はめやがったなデメエ!!」

「ええい！男が二言を言うな！！」

「開き直る気か！！？」

それから10分近く討論した末、志波に「でももう教室入ってるし」と言われて、俺は諦めざるを得なくなった。

——そして、「着替え中の姿を見るのもなんだから」という事でほとんど使用した形跡のない男子用更衣スペースで……俺は涙目になりながら女装し、下着も替えてかつらを被る。そして襟を正し、わざわざ太股に付けるホルスターにB・Tを入れる。2丁のH&K P46はいつものように袖の中に仕込んでおく。

あ、一つ言っておくとスパッツはちゃんと履いている。お陰で脚の露出面積を限りなく減らす事に成功した。サンキュースパッツ！

で。着替え終わった俺がちゃんと薄く化粧と香水をして更衣スペースから出てくると、5人は大富豪をしていた。なめてんのかコイツら……！！

「なに大富豪やってんだよ！」

俺が若干キレ気味にそう言つと、5人は一斉に俺の方を向いた。

「・・・誰？」

ジュリアが言つと、他の4人も「誰か知ってる？」的な会話を呟き始めた。

「俺だよ、俺！響哉だ！」

見るに堪えなくなつた俺は、かつらを取ってジュリアに詰め寄つた。

「そんな・・・うそ!!？」

「言われるまで気付かなかつた!!！」

「俺を馬鹿にするなアアア!!!!！」

俺の悲痛な叫びは、夜の教室だけにとどまらず、廊下まで響き渡った。

TO BE CONTINUED

可哀想な男の娘（後書き）

一つ、勘違いされないように補足しておきます。響哉は女顔ではありません。

ただ単にかつらを被って化粧をしたら「クラスに1人はいるような普通の女子」のように見えるだけです。180近くある長身ですが、そこは気合いで乗り切りました。

文化祭以降は多分ですが女装しません。

変装×女装×後輩Ⅱ大恥

10月30日。

今日は武偵高の文化祭の初日だ。寮から出るとすぐ、学園島の道路が歩行者で埋め尽くされているのが見えた。

道路の脇には出店が並び、普通の学校よりも祭っぽい雰囲気を出しまくっている。

俺は専門校区を抜けて、そこら中に貼られた文化祭ポスターを眺めながら食堂に向かった。

普段武偵高の生徒たちが食い散らかしている学食も相当念入りに掃除され、今日と明日は2年による『変装喫茶』として大いに賑わうと予想されている。

俺が学食に着いたときには、すでに何人が並んでいる人がいた。手にはカメラを持っているが、ここでは撮影が禁止されている。もちろん、外から撮るのも厳禁だ。

「申し訳ありません。武偵活動に支障が出る恐れがあるので、撮影の方はご遠慮ください」

並んでいた客に撮影禁止の看板を指さしながら、俺は丁寧な口調で写真を撮ることをやめさせようとした。

「すみません。知らなかったもので」

そう言って客の男はカメラを鞆の中にしまおうとした。

「失礼ですが、そちらのカメラの画像を確認させてもらって宜しいですか？そちらのお客様も」

武偵の写真を外部に漏らす事は、一般人が思っているよりもマズい。まず、C研の女子は顔が割れたら終りなので、もし写真なんかを撮られてそれがネットに流出したら即転科か退学だ。

他にも探偵科やインゲスタ謀報科レザドも、謀報活動が難しくなる恐れがあるため過去に何人が写真を撮られただけで転科していったヤツらがいると昔父さんが言っていた。

並んでいた客たちのカメラを全て確認し、何枚かの画像を消去させてもらった。

案外事情を話せば素直に理解してくれるようで、多くの人はそれ以降写真を撮ったりしないのだが……………

……………解ってくれない人もいるのが現実だ。

内装の準備は昨日の間にほとんど終わらせてあり、今日はテーブルを拭いたりして客が来る準備をするだけなのだが、その準備中にまた写真を撮っているヤツがいた。その男は、さっき俺が注意したヤツの1人だった。

「お客様。またですか」

そろそろキレルぞ、この野郎。

「ええやないか。減るモンやなし」

関西弁で男はそう言った。さっきの説明を聞いてなかったのかコイツは。

「武偵としての活動に、影響が出る可能性が高いのでやめて下さいとさっきも言ったでしょう」

俺はさっきよりも強めに言い放った。

「だったら、どうゆうふうに影響が出るんか言うてみい！」

「ですからッ！ 諜報活動などで武偵という職業を秘匿して犯罪者や一般人に接触する場合がありますので、撮影はご遠慮下さいとさっきも言ったでしょう……」

「そんなん関係あるか！ ネットやツイッターなんかに上げやんかったらエエだけやろ！ それともワイの事を信用できん言うのか、ああ！？」

今さっき顔見ただけの人間の事を信用できるとしたら、ソイツは本当におめでたい頭をした大バカ者だよ、と言ってやりたかったが、さすがに客相手にそんな事は言えないので心の中に留めておく。

「とにかく、そういう事情があつて学園島内は撮影禁止となつておりますッ！」

「何をしている、阿呆が」

俺が関西弁の男と口論していると、刑事に変装した平土が痺れを切らしたのか学食から出てきた。

「中までお前の煩い声が届いてくる。もっと静かに場を收拾しろ」

「ああ？なんや自分は」

関西弁の男は平士に向かつてものすごいガン垂れている。勇気あるな！。

「他のお客様の迷惑になりますので、場所を変えて話しましょう」

「望むところや！」

そう言つて関西弁の男は学食の奥に連れて行かれた。

——間違いなく、死んだな。

あの男は勇者ではなかった。バカの勇者だった。武偵にケンカ売ることの愚かさを知らない、大バカ者の鏡だった。

「あの、あちらの方は……………」

「知らない方が良い事もありますよ……………」

それから20分後の10時ジャストに、俺たち2年による変装喫茶が始まった。

まだ始まったばかりだというのに、学食のテーブル席はいっぱいになり、庭にまでテーブルを並べてオープンカフェのようになっている。

結局、首下はタートルネックで隠してその下に香水をふっっておいた。手と顔以外全部隠れてる。

てゆーか、俺自分の女装姿を1回も見えてないんだけど。ジュリアとナズナが部屋の鏡まで全部外しちまうし、俺の部屋は窓も無いし。寝室でこんな恰好するわけにもいかねえし。

なんでだつて訊くと「お前に変な趣味を持たせないため」って・・・お前ら、俺をなんだと思ってるんだ。仮にもリーダーだぞ。

そんな俺は哀しい事かな女装姿で接客しているというのに、違和感を持たれる場所が他のヤツらとは違う。

『君はコスプレしてないの？』

・・・ああ、死にたい。

なんてプレイだよコレ！！なんで1人顔真っ赤にしながら『これがコスプレです』って言わねばならんだ！！

一部の男性客からは『男の娘だああ！！』とかガッツポーズとつて言われるし、開始10分後にはもう既に涙目だよ！

さらにそんな泣きかけの俺に追討ちをかけるがごとく、学食に今最も来てほしくなかった3人が現れた。

「遠山君、武藤君、こっちの席が空いてるよ」

「ホントだ！早く行かねえと取られちまうな」

「不知火、よく見つけたな」

3人の1年……キンジ、武藤、不知火が来た……。

「響哉、向こうのテーブルに注文に行つて」

「な、ナズナ！頼む！あそこだけは行きたくないんだ！」
パンツと手を合わせて俺はナズナに頭を下げた。

「ダメに決まってるでしょ！私も注文があって忙しいのよ！それじゃ、頼んだわよ」

そう言つてナズナはラーメンとウーロン茶を乗せたトレイを運んで行つてしまった。裏切り者め！！

待たせるわけにもいかないので、俺はキンジ達のテーブルに注文を取りに行く。

「ご、ご注文はなんですか？」
女声で俺は言つた。

「えーと・・・ラーメンと炒飯。どっちも大盛りで。あとウーロン茶」

「ナポリタン、お願いします」

「俺は・・・カツ丼とウーロン茶で」

「かしこまりました。ラーメンとチャーハンの大盛り、ナポリタン、カツ丼とドリンクがウーロン茶2つですね。少々お待ち下さい」

武藤、お前は少し食い過ぎだ。ウェイトコントロール 体重調整をもつと心掛ける。

俺が注文を取って厨房に渡した時、「ええ!!?マジかそれ!!!」という武藤のバカでかい声が聞こえた。大方キンジがバラしたんだろ。文化祭が終わったらしごいてやる。

で、俺が料理を持って行くと武藤が「せ、先輩。お疲れ様です」と妙にペコペコしながら接してきた。キンジ、お前は武藤に何を吹きこんだ。

「似合ってますよ、響哉さん。不知火が変装してないのに気付いてなかったら誰だか解りませんでした」

「それは褒めているとは言えないぞ……」
俺は女声でそう言うしかなかった。

——しばらくして、面倒な事が起きた。

「おい女^{アマ}ア！ぶつかつといてなんも無しか、ああ！！？」
ガラの悪そうな男2人と、3人の制服姿の女子と口論になっていた。
……あの制服は、中等部^{インターン}のヤツだな。一般人相手に何やってんだ。

「——だから、さつきからあかりちゃんも謝ってるじゃないですか！」
長い黒髪の女子が、声を荒らげて男に詰め寄った。それを見た周りは何事かと集まってきている。こりゃ騒ぎになる前にとっとと終らせた方がいいな。

「どけ、志乃！こんなヤツ私が——！」
金髪のポニーテールの女子が袖をまくり上げた。アイツ殴りかかる気か！？

——パシッ！

俺はソイツが振りかぶった時、手首を後ろから掴んでその握りしめた拳を止めた。

「——！？誰ですか、離して下さい！！」
俺が武偵高の生徒……つまり、先輩だとすぐに解ったのか、彼女の言葉は敬語だった。

「……冷静な判断ができるんだったら、もっとマシな解決法を模索しなさい」

こういう時でも女声の女口調で話さなきゃいけないのは、非常に辛い。ここで内申を下げられては、今回こそ本当に留年してしまうかもしれないからな。

俺は彼女の手首を振り払うように離し、男との間に入った。

「なんや嬢ちゃん。自分、コイツらの姉貴かなんかか？」

「……ホントさあ、俺今どんな顔なんだ？真顔だぞこのおっさん。ここで「俺、男ですけど」とか言ったら絶対面倒臭くなるし……・そう言う事でいいか。」

「違います。ですが、あまり騒ぎになるようでしたら学園島からお

引き取り願わなければなりません。この娘たちにも非があると思いますが、ここはどうか穏便に済ませてもらえると、こちらとしても余計な仕事が減って良いのですが」

「……っち、しゃあないな。おい、嬢ちゃん達。これからは
氣イつけろや」

おっさんはそう言い残して学食から出て行った。何事も無くて良かったよ。

関西弁の男は別室送りになるなんて変なジंकウス立てられたら、大阪の男が可哀想だ。

「あなたも、一般人に手を挙げちゃダメよ。武偵は『一般人を護る』
のが仕事なんだから」

俺が軽く説教じみた事を言うと、金髪はよっぽどショックだったのか、力無く「……はい」としか言わなかった。

「はぁ……それにあなたも、公共の場ではもうちょっと落ち
着きなさい。はやる気持ちはわからない事はないけど、場をわきま
えましょう」

溜息交じりにちっこいヤツにも指導してやると、3人揃って「ごめ
んなさい」と頭を下げた。

「気を付けてね。あんまり先輩たちの仕事、増やしちゃダメよ」

俺はめんどくさそうに言いながら、そろそろ交代の時間なので控室に戻ろうと3人に背を向けると、

「あ、あの！先輩の名前を教えてくださいッ！」

金髪がそれなりに大きな声で言うので、俺は足を止めざるを得ない。

「名乗る程じゃないわ」

俺的にはさつさとこんな恥ずかしい格好で人目の付く場所にいたくはないので、適当に流して奥に引っ込んだ。

「——憧れるなあ……ああいう、可愛くて強い女の子って……」

金髪の……火野ライカの呟きは、往来する人の声と足音によって彼女のすぐ近くにいた親友、間宮あかりと佐々木志乃にしか届きはしなかった。

——こうして、文化祭の初日は俺が大恥を掻いた
こと以外何事も無く終った。

TO BE CONTINUED

変装×女装×後輩Ⅱ大恥（後書き）

ちよつとだけ後悔の残る第55話、変装喫茶編でした。

そして登場AAメンバー！

あかりが一般中から転入してきたのが中3の2学期なので、9月からという事になります。ナズナと同じですね。

そして志乃があかりと出会ったのは、原作の年の4月から半年前になるので10月の半ばという事になります。

よって、10月末の文化祭には親友になっているという独自解釈です。

ライカもあかりとは転入してきてすぐに知り合ったという事でお願います。

さて、AAメンバー3人も登場してきたわけですが、次回はちよくちよく名前だけ出てきたあの男が登場します！多分。

再戦と再会（前書き）

大変申し訳ありません！

昨日は編集作業等で力尽きてしまい、投稿できませんでした。

おまけに、新キャラを出す予定が次回か次々回に持ち越しという判断となってしまうました。

再戦と再会

昨日いろいろと大恥を掻いたハズの俺は、めんどいなと思いながらも文化祭の2日目も行かなければならない。

なぜか。答は簡単だ。

昨日の変装喫茶が終った時、精神的な疲労がピークに達していた俺に追討ちをかけるがごとくジュリアとナズナが口論になっていた。それだけならいつもの光景なので放っておいて帰るのだが、どういふ事かは知らんがその口論の議題が『どっちが俺と文化祭を回るか』というモノだったので放っておくわけにもいかなかった。

で、俺が仲裁に入って30分にわたる議論の結果、どういふワケか途中から入ってきた志波も含め、4人で一緒に回る事となった。平土は氷川さんと一緒だ。羨ましい事この上ない。

俺の場合は、3人ともただの友達だからな。アイツらから見たら『気の許せる男の友達』程度にしか見られてないだろう。みんな顔とかスタイルはいいから、そんな女子3人と揃って歩いてたら気分は悪くないんだけど。

ま、現実はいつだって悲惨で凄惨なものと言うし、仕方ないか。

と言うわけで、俺は男子生徒用の防弾制服を着て朝8時半という眠い時間に寮を出て、俺は待ち合わせ場所の強襲科アサルトの別館前に向かった。

そこに着くと、すでに3人は揃って俺を待っていた。

まだ待ち合せの時間には10分以上あるハズなんだが………俺、間違えたかな？

「悪い！待ち合わせの時間、9時だと勘違いしちゃった！」俺は頭を下げ、両掌をパンツと頭上で合わせて3人に謝った。

「響哉君、時間はそれで合ってますよ」志波は苦笑いでそう言った。

「……え？じゃあお前ら何時からここにいたんだよ。ひよっとしてさっき来たばかりか？」
「だしたらこれも恥ずかしい。謝る事ないのに男が簡単に頭を下げるだなんて。」

「私はいつも、約束の時間の30分前には来てますから」
「おおっふ………すげえな志波は。俺なんてよくすっぱかす事

もあるぞ。今日だって早めに行こうとか思ってた10分前に着くように出たからな。」

「お前らは何時に来たんだ？」

「わ、私たちは・・・・・・・・6時から
・・・・・・・・はい？」

「ジュリア、お前は2回目だろ。武偵高の文化祭。何がそんなに楽しみだったんだよ」

「きよ、響哉にはどうだっていいでしょ！女性の私生活を根掘り葉掘り聞かないでくれる！？」

俺そんな詳しく訊いた覚えないし、お前らの私生活なんてほとんど興味ないんだが・・・・・・・・。

「で？ナズナも6時組みか？」

さつきジュリアが『私たち』って言ってたからな。コイツも一緒に来たんだろう。仲が良いのか悪いのか。

「そ、そうよ！文句ある！？」

「ねえよ、んなモン・・・・・・・・。ほら、さっさと行くぞ」

俺がそう言って先に行くと、3人は慌てて俺の後を着いてきた。西遊記かよコレ・・・・・・・・。

「私、あそこ行きたい！」

ナズナが嬉々として指さしたのは、去年ジュリアが気絶したホラ
ーハウスだった。なんで毎年同じことするんだよと思いながらも、
やはりそこは武偵高。めんどくさがり屋の集まりなのかと諦めるし
かなかった。

「ナズナはそう言っているが……ジュリアはどうする？」

「わ、私をいつまでも過去のままだと思ったら大間違いよ！」
意味分かん。誰もそんな事訊いてねえよ。

「志波は大丈夫か？」

「私は平気ですよ」
そりゃ助かる。もしかたジュリアが気絶したら3人がかりで運べ
るからな。

―― 10 分後。

「キヤアアアアアア！！！」

「お前ら、俺の首を絞めるな……！」

まだ入って少ししか経ってないというのに、例によってジュリアと自分から行きたいと言ったナズナがまだそこまで怖くないのに俺の首に両腕を絡ませて窒息するくらい強く締めてきた。

このままだと窒息死ではなく首の骨が折れると感じた俺は、強引に2人の腕を引き剥がしなんとか生還する。死体安置所の仲間たちに入らなくて良かったよ。

去年と同じように奥に進んでいくと、分断トラップによって廊下

に俺と志波、手術室にジュリアとナズナという具合に分かれてしまった。大丈夫かあの2人。

「こりやさつさを見つけ出さねえと、死人が出るかもな」

「どうしてですか？」

「……去年、ジュリアがここでお化け役にマカロフを向けようとした」

「……大変でしたね」

はぁ……考えただけで頭痛がする。

新聞に『東京武偵高生徒、脅かし役の下級生に発砲！』とかいう一面で、『恐かったんです』と少女のコメントが載るなんて洒落にならねえ。

「でも、私は響哉君と2人きりになれて嬉しいです」

志波が小さな声でボソツと何か呟いたような気がした。

「志波、何か言ったか？聞こえなかったんだが」

「いいえ。ただの独り言ですよ」

俺を見上げるような形で、志波は笑顔でそう言った。

「それはそうと、さっきから悲鳴とかが聞こえてこない気がするんですが……」

志波の言葉に、俺はハツとした。

体当たりで扉を叩き壊してでも入ろうかと思つたまさにその時、
ゆつくりと手術室の扉が開かれた。その向こうには……

「………来年は、ここに来るのはやめるか」

「そうですね………」

白目向いてるジュリアとナズナが仰向けで倒れていた……。

「結局、こうなるのか……」

俺はジュリアとナズナの2人を担いでホラーハウスから出て去年と同じベンチに寝かせてやった。

志波にナズナをおぶってもらっても良かったのだが、ナズナの体重が思ったほど重くなかったので2人まとめて俺が運んでやった。感謝してほしいものだよホント。

「う、うーん……」

「やっと目が覚めたか」

俺は目が覚めればと思い、買ってきておいたコーラの缶をジュリアの頬に付けた。

「ひゃあ!!?」

ジュリアが可愛い悲鳴を上げた。

「まったく、今年も俺に運ばせやがって。来年は行くなよ」

「ご、ごめんなさい……」

しゅん……

ジュリアはベンチに座り直し、弱々しく俯いてそう言った。

——ドキッ！

ヤベエ。今のジュリアマジで可愛い。思わずドキッとしてしまうほど…………。

「響哉、大丈夫？」

「あ、ああ。大丈夫だ。それよりナズナを起こすぞ！」

顔が赤くなっているのがバレないように、俺はナズナの頬に缶コ
ーラを付ける。

「ふみやあ！！？」

猫みたいな声を出して、ナズナが目覚めた。よし。これから寝て
るヤツはこうやって起こそう。面白いから。

「あらあら。相変わらず面白い事やってるわね」

背後から、聞いたことのある女性の声が聞こえた。

俺が振り返ると、そこに立っていたのは……………

「柊、先輩……!？」

俺の2丁のH&K P46を仕入れ、改造してくれた東
京武偵高OGの、柊先輩がいた。

「久しぶりね、朱葉君」

T O B E C O N T I N U E D

再戦と再会（後書き）

代わりに登場したのが誰もが忘れていたであろう柊先輩。

本編では全く書かれていないはずの伏線を使う時が解らなかったの
で今更の登場です。申し訳ない・・・。

持つべきものは気のいい先輩

「響哉、この女性は何？」

ジュリアが柊先輩を向いて俺に訊いてきた。そういえばこの中で先輩の事知ってるの俺だけだったか。

「この人は武偵高のOGの柊先輩だ」

「よろしくね」

「「こ、こちらこそ・・・」」

ジュリアとナズナと志波は軽くお辞儀をした。

「こんな所で合うなんて、奇遇ね」

「そうですね。どうですか、卒業した後の文化祭ってヤツは」

「思ったより新鮮感がないものね。もうちょっと何か変化があると思っただけ」

柊先輩は苦笑いしながらそう言った。

「「いつの時は、景気はどうですかって訊くのが普通なんですかね？」」

「多分そうだと思うわ。私の方はちゃんと黒字よ」
クライアント
依頼人を選ぶような人間が、どうやったら利益を上げられるのかが
気になるのだが、深く掘り下げるのはやめておこう。

「ところで、柊先輩はどこで働いてるんですか？」

「埼玉の実家よ。あんまり広くはないけど、作業室もあるわ」
やっぱりあるんだな、作業室。アレって維持費とか機材の整備費と
かいろいろ金掛かりそうだけど、そこまで儲けているのだろうか。

「あ、そうそう。朱葉君に聞いてほしい話があるんだけど……」
「

「なんですか、急に」

「着いてくればわかるわ」
そう言っって先輩は先に行ってしまうので、俺たちはその背中を追っ
た。

先輩に連れてこられたのは、車両科^{ロツ}の格納庫だった。

先輩は格納庫の厳重なロックをカードキーで開け、ボタンを押してシャッターを上げた。キャラキャラというきしむ音が聞こえる。

そして、シャッター扉の奥に格納されていた物体に、俺たちは声を失った。

「……なんでこんなモンが武偵高にあるんですか？」
軽く頭痛がするくらいの非現実さに呆れ、俺は頭を軽く押さえながら先輩に訊いた。

俺たちの眼前に存在するのは、ヘリコプター。

それも、最新の設備を導入した『軍用』ヘリコプター、『UH-1 Y ヴェノム』だ。

そして何より俺が呆れかえったのが、ハイドラ70ロケット弾用ステーションが2つ確認できたからである。

このステーションから発射されるM255もしくはM255E1弾頭は、フレシエット（ダーツ状の、爆発時に飛散する小さな金属片）を内包している。

つまり何が言いたいかというと、ショットガンと同じように『人を殺さないように撃てない』という事だ。

武偵法9条より、俺達武偵は絶対に人を殺してはならない。人を殺すための凶器を持つ事を許される対価として、そう決められている。

「ちょっと趣味でヘリコプターの改造をしてたのをこの間まで忘れてたのよ。今の私の作業室じゃ狭すぎるから、朱葉君に貰ってくれないかと思って」

何やってんだこの人……。てか、装備科アムトもよくこんなの持ってたな。最新型だぞ。ハイドラもどこから持ってきたんだ？

「とにかく、ハイドラだけ処分して下さい！」

「別に私は構わないけど……。お金取るわよ？」

出たよ。それなりに親しい武偵同士でなにか頼む時の常套句だ。だが先輩。俺にはまだ2800万近くの貯金があるのだよ！

「とりあえず、このくらいかしら」
先輩がケータイの電卓機能を使って見せた金額に、俺は絶句するしかなかった。

「見せてもらえますか……ええっ!!?」
志波が覗きに來たのを皮切りに、ジュリアとナズナも画面を覗き見
ては驚愕の声を上げた。

——その金額とは、1000万。

「危険手当と機材の料金、あとは処理代金と人件費もろもろ含め、
お得意様割引でこの値段よ」

「……これで割引きついてるんですか？割増しの間違いでしょ・
……」

絶対に盛ってるな。だが、この人の言値だから仕方ない。払うか。

「あと、武偵法違反になるかもだから追加料金が発生するわ」

なん・・・だと・・・？

「追加で1500万つてところね」

「ジュリア、氷川さん呼んでくれ」

この人には、一生頭が上がらないんだろうなと思った瞬間だった。

TO BE CONTINUED.....

持つべきものは気のいい先輩（後書き）

Q・柊先輩が出した金額は、『円』ですか？

A・『ウォン』です。

そして物語は廻り始める（前書き）

響「で？よくまあ おめおめと戻ってこれたもんだな」

「仕方ねえよ。今日からテストだし」

響「本当は？」

「FNOっていうオンラインゲームを、学校の友達3人とやってましたです」

響「……………遺言は？」

「ネトゲサイコー＼（＾o＾）／」

ダアンツ！

そして物語は廻り始める

季節は流れ、12月になろうとしていた。

本格的に外は寒くなっていき、朝と夜は普通に息が白くなる。武偵高の生徒も全員防弾性のコートを羽織り、あまりの寒さに耐えられずチャリ通のヤツらもバスを利用する今日この頃、嫌なニュースが飛び込んできた。

『武偵庁直属の武偵の……さんが、死亡しました——』

『

このニュースが、ここ数日間ずっと報道されている。なぜかと言うと、その殺され方に問題があるのだ。

殺された武偵は帰宅中、いつも通っている道で短機関銃の付いたラジコンヘリに襲われ、乗り合わせたバイクにもプラスチック爆弾を付けられ、民間人を危険にさらさないよう、自ら海に落ちた。

この事件は歴史に残る残虐非道なものとして、現在警視庁と武偵庁が共同捜査を行っている。

が、その全力の調査も虚しく、未だに犯人に繋がる手掛かりは無い。それどころか、すでに2件目も発生してしまった。殺害されたのは同じく武偵庁の武偵。今度はバイクではなく車に爆弾が仕掛けられていた。

『武偵を狙う殺人犯』という、今までに例を見ない事件に、当事者である俺達武偵は、ただ身を守る事しか出来なかった。そしていつの日か、その犯罪者に『武偵殺し』というコードネームが付いた。

俺達武偵高の生徒にも、周知メールで模倣犯や3件目に用心しろと来ていた。

まったく、物騒な時代に生まれてきちまったモンだぜ。

そしてさらに数日が経ち・・・・・・・・クリスマスとなった。

――俺は生涯、今年のクリスマスだけは絶対に忘れな
いだろう。

ジュリアが生徒会長なので、俺たちいつもの6人は半ば強制的に生徒会企画のクリスマスパーティーに行くのだが、今年はインフルエンザが大流行してしまい、力仕事関係の人員が不足してしまったので飾り付けなんかを俺たちも手伝う事となった。

俺は例によって成績が残念すぎたので、こうして手伝いに来て少しでも内申を良くしてもらうために来ている。他のヤツらは俺の手伝いだ。悪いのは俺だけ。哀しいかなこれが現実だ。

そして4時半過ぎごろ……ようやくこのだだっ広い体育館をクリスマス一色に染めることができた。

「これで終りか？」

「そうね……。後は料理を運ぶだけだから、響哉たちは休んでてもいいわ」

「そりや助かる。……にしても、今日はやけに寒いな」

今日の天気は、まさに青天の霹靂と言った具合の雲一つ無い真つ青な空が延々と続いていく程の晴れだった。何が言いたかったのかというと、空が高い……。つまり、今日は寒いつてことだ。

「確かにそうね……。響哉、平土。ちょっと事務室から大型のストーブを持ってきてくれないかしら」

「あいよ」

「わかった」

そんなこんなで、事務室から台車とストーブを借りてきて、体育館に戻ろうとした時だった。

「とつつあゝん先輩、きょーやん先輩！こんな所でなにしてるんですかあ？」

「げえっ！？」

金髪のツーサイドアップテールをなびかせながら、平士の苦手な女子ダントツ1位の理子がやって来た。相変わらずのハイテンションだな、コイツは。

「先輩、コレなんですか？」

「業務用の大型ストーブだ。今日の夜はクリパがあるから、体育館の中を温めるのに使うんだ」

「じゃあ2人とも、今日は忙しいって事ですかあ？」

「そうだ。だからお前と遊んでやれるヒマはない。遊ぶんならお前の戦妹いもうとの島とやってろ」

平士が理子にそう言い聞かせると、理子は「ラジャーッ！」と敬礼をして早足で去って行った。何がしたかったんだ、アイツは……。

「おい、寒いんだからさっさと運ぶぞ」

「お、おお……」

俺は平士に急かされ、さっさと体育館にこの重たいストーブを運ぶのだった。

ちょうど同じころ……伊・Uにて――。

「あの子、ちゃんと彼を仲間に引き入れてくれるのかな？」

薄暗い聖堂のような部屋の隅に、椅子にもたれかかり足を前の椅子に乗せたアヤメが上を見上げながらそう訊いた。

その訊いた相手は……響哉の幼馴染にして彼女たちのリーダー、秋山彩香だ。

「大丈夫よ。教授の推理に間違いないって有り得ないわ」
プロフェッショナル

でも……と、彩香は続けた。

「『本当の』仲間になるかどうかは、また別の話しなだけで」
彩香は、含み笑いをしながらそう答えた。

「どういう意味なのか、助教授リーダーのお言葉は私には難し過ぎてよく分かりませんね」

「そうかしら。簡単に言ったつもりだったんだけど、やっぱり教授のように上手に説明できないわね。……そういえば、ヒナが見当たらないわね」

「ああ、ヒナだったら多分身体の整備してるんじゃないですか」
アヤメはフアアッとあくびをしながらそう言った。

「私達じゃダメなものね。ツアオツアオがいてくれれば助かったんだけど」

「向こうにも向こうの都合があるんでしょう。契約期間はちゃんとこっちに転校してきたんですから、文句は言えませんよ」

「それもそうね。過ぎた事は気にしても仕方ないし、私はヒナの身体を洗いに行くけど、アヤメはどうする？」

ヒナは身体の一部が機械になっていることから風呂に入れない身体なので、毎日彩香やアヤメが身体を拭いてあげている。たまに他のメンバーもするが、ヒナ自身は彩香にやってもらうのが一番だと思っている。

「私は遠慮しておきます。そろそろ眠いですし」

「不規則な生活が続くと、身体に悪いわよ？」

「気を付けますよ」

そう言ってアヤメは、聖堂から出ていった。

「もうちょっとしたら、また響哉を誘いに行かなきゃね」

彩香の言葉が、聖堂に響き、そして溶けていった……。

同日 20時10分ごろ……俺たちが武偵高でバカ騒ぎしていた時間に、浦賀湾沖を航行していたクルージング船、『アンベリール号』が……沈没した。

大勢の乗客が無傷で助かった中、1人の武偵が行方不明となった。

——その武偵とは、俺の一元戦兄にしてキングの最も
尊敬する実兄・・・・・・・・遠山金一武偵だった。

——GO FOR THE NEXT！

そして物語は廻り始める（後書き）

というわけで、短めの第5章完結！もうちょっと文化祭をやっても良かったんですが、あんまり長いと来年度のネタが尽きる上に飽きられる可能性が高いので、中途半端な形ですが12月に進めさせてもらいました。

前書きでも述べたように、最近ネトゲにハマってしまつて……、お陰でストックは消しちゃうわ、友達に置いてかれないようにレベル上げを頑張るわで更新が遅れに遅れてしまいました……。

さらに今日からテストとあつて、勉強もしないといけないし……まさか、これがリア充か！？

ただの廃人ですね。わかつてますよ、ちゃんと。

これからはビミョーに不定期更新になるかと思いますが、週1は絶対に更新するので応援の方よろしく願います。

あと、助教授つてアシスタントプロフェッサーって読むんですけど、イギリスの方ではリーダーと言う場合もあるそうなんですよ。だからリーダーと付けたんですが……間違つてたりしたら教えてください。作者の英語の成績は1です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9197x/>

緋弾のアリア UNITY

2011年11月29日23時45分発行